魔法少女リリカルなのはStrikers～自称一般局員の少年～

ウェルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～自称一般局員の少年～

【Ｎコード】
Ｎ５０１９Ｕ

【作者名】
ウェルト

【あらすじ】
八年前の雪の日に高町なのはを庇った少年がいた。その少年は庇った代償として、自らの能力を扱えなくなる。
それから時は流れ、少年は異動命令を出された。
八神はやての設立した部隊、機動六課へと。

そして、再び始まる。物語は。

※注意、この小説は原作ブレイクやキャラ崩壊などありますので、

そういったことが嫌いな人は読まないことを推奨します。
それとすみません、タイトルを元に戻しました。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

初めましての方は初めまして。
そうでない方はお久しぶりです。ウェルトです。

まぁ、前書きでグダグダ書くのは気が進まないので、とりあえず本編どーぞ。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

Ｓｉｄｅ？

昔から、僕は一つの疑問を持っていた。

世界には色々な出来事がある。でも、それは大雑把に二つに分けることが可能だ。

一つは幸福な出来事、もう一つは不幸な出来事に。

人間はより多くの幸福を得る為に必死になる。

しかし、幸福になることで自分の大切な人が不幸になると知った時、人はどうする？

その大切な人を切り捨てるか、もしくは幸福を諦めるのか。

それとも別のことをするのか。

別にまったく知らない者の不幸であれば、自分の幸福を選んでいただろう。それが人間というものだ。

しかし、人間は“大切”という言葉を重要なものと思い込み、それを価値のあるものと判断する。

幸福もまた、価値のあるもののひとつであると言えるだろう。

そして、幸福の方が“大切”に比べて価値が高いと思われている。

だからこそ、そんな選択を選ばなければならない時、人はどんな選択をするのだろうか。

切り捨てるか、諦めるのか。別のことをするのか。

そんな疑問を生まれた時からずっと持っていた。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ――――

瞳を閉じながら、歩いている少年がいた。
瞳は閉じているのに、まるで目で見て歩いているようなバランス感覚。それに加え、少年は曲がり角も見ずにそのまま曲がった。
すると、その先にある一つの部屋にたどり着く。
この少年を知らない者から見てみれば、少年の行動は驚くべきものだろう。

少年の目の前にある扉。その扉に書かれている“部隊長”という文字があるのだが、少年は何の緊張感も持たず入った。

「シュレン・ガルディン三等空尉。到着した」

とは言え、彼が部隊長という訳ではない。彼はこの部隊の隊員の一人だ。
そして、この言葉に反応した男がシュレンの存在に気づく。

「お、ようやく来たようだな」

「僕は呼ばれてから二分以内で来たつもりだ。それなのに“ようやく”という言葉は可笑しいぞ。緊急時というのであれば違ってくるが」

男のその言葉にシュレンはそう切り返す。すると、男は少しだけ苦笑いをして、同意する。
今更ながらに、シュレンの容姿を説明しておくとしよう。

シュレンの容姿は前髪が目にかかる程度の長さで全体的に少しだけ髪は長く、所々癖毛。健康そうな肌に小さく整った顔。そして、朱色の瞳。
物柔らかそうな朱色の瞳がシュレンのイメージを優しそうな男と決めつけそうだ。
しかし、ボーイフィッシュな女の子に見えない事も無い。事実として、過去に性別を間違えられたこともあった。

「それで、僕を呼んだ理由は何だ？　いつもと同じなら、わざわざ僕を呼ぶな」

「それは分かってる。だから、いつもとは違うからお前を呼んだん

だ」

そんな性別を間違えられる原因の一つである朱色の瞳。
その朱色の瞳からは困惑……というより、嫌な予感が顔を過ぎっているとでも言った方が良いのだろうか。
とにかく、今の彼はそんな表情をしている。

「突然で悪いが、お前には部隊を異動してもらう」

「……何か失敗したか？」

シュレンの表情が僅かではあるが、曇った。
何故なら、異動という言葉にあまり良いイメージを持っていないからだ。その為、もしかして仕事で失敗してしまったのだろうか。
そんな考えが出てくる。

「いやいや、お前は失敗してねぇよ。だから、仕事で失敗したということは無いから安心しろ。つーか、お前が仕事で失敗することなんて有り得ないだろ」

「有り得ないことなんて有り得ない、という言葉もこの世界にある。だから、不安になるのは当たり前のことだ」

「そうかい。でも、本当にお前に原因は無いから安心しろ」

「……ならどうして、僕が異動しなければいけないのですか？」

疲れ切ったような口調に加え、ジト目で男性のことを見ながらそう言った。
階級的には男性の方が上の位置にいるので、敬語を使うのは普通なのだが、シュレンから出た敬語に男性は顔を顰めた。
先程までは普通に話していたというのに、敬語で話されたからだ。
それに加え、少年は普段の会話、即ちプライベートなどでは、少年は男に対して敬語を使わない。いや、プライベートの時以外でも少年は普通に話す。
だからこそ、男は顔を顰めたのだ。

「どうしてって言われてもな……そうだな、俺の後輩で八神はやてっていうのがいるんだが、今度新しく部隊を立ち上げるんだよ。それでソイツが人手が欲しいって言ってたからお前を推薦。
その部隊のメンバーをざっと見たんだが、どうやらお前の知り合いもいるようだし、丁度良いと思ったんだ」

そして、シュレンと会話をしている男。名前はレルデ・ローラルド。
シュレンとは違い、レルデは性別を間違えられることなど有り得そうもない顔の造り。短く切り揃えた髪を上げ、眼鏡をかけている。
そして、眼鏡越しでも分かる鋭い目つきがレルデの印象をクールなものにさせる。
ハッキリ言って、イケメンである。
それと、どうでもいいことではあるが、眼鏡は伊達眼鏡である。

「……成程。珍しく筋の通っている話で驚いた」

「シュレン、それはどういう意味だ。その言い方だと俺が普段真面目に仕事をやっていない奴みたいに思っているだろ？俺はお前の思っているより、仕事はしているんだぞ」

その言葉にシュレンと呼ばれた少年は溜息を吐く。

（一体、どの口がそんなことを言うんだ？）

シュレンが思っているようにレルデは仕事をしない。それどころか、シュレンに仕事を押し付けるような行為もする。だからこそシュレンはそう思い、呆れるのである。

しかし、シュレンはできる限り無表情を貫き通す。

（疲れているような表情を見せたら、からかわれるだけだ）

そんな考えがあって、シュレンは無表情を貫き通していた。幸いにもシュレンはポーカーフェイスが得意だ。その為、最初の溜め息以外では負の感情を顔には出さなかった。

「それで、一体いつから配属ですか？」

「今日」

「……ハァ」

シュレンは今日異動すると聞いて完全に呆れ、大きな溜息を吐く。
こういう連絡に関しては前もって知らせておくべきで、余裕を持たせるのが普通だからである。
とは言え、シュレンは前々からこうなることを予想していたため、実は溜め息を吐く程ではないのだ。
しかし、シュレンは結果的には溜め息を吐いた。

「それと言っておくが、向こうの集合時間は今日の午後一時だ」

そう聞いて。シュレンはこの部屋に置かれた時計を確認する。
現在、時計が表している時刻は午後二時。それに加え、ここから機動六課に着くまでかかる時間は早くても二時間。
普通に大遅刻である。

「……それはどうも。では、これより僕は機動六課に向かいます。休暇の時などはこちらの方にも顔を見せますので、その時はよろしくお願いします」

「お前が敬語を使うな。何か違和感があり過ぎて気持ち悪い」

「上司と部下という関係ですから。問題は無い筈ですよレルデ少将」

その言葉を言いながらシュレンは笑みを浮かべる。
シュレンにとってはこれ以上ない笑みだと思っているのだが、それはあくまでもシュレン自身が思っている訳で、レルデは違う。

「キモッ！？　お前がそんな笑みを浮かべるな！　気持ち悪い！」

「酷いですね。せっかく、僕の出来る限界の渾身の笑みを浮かべたというのに。それの感想が気持ち悪いって……。
まぁ、普段からあまり笑わないことは自覚してますけど、そこまで思われるとは思わなかったです」

「俺は事実に基づいて正しい事を言っただけなのだよ。シュレン君」

「キャラを変えないでください。僕にとってそっちの方が不気味で気持ち悪い」

「そうっすか」

気持ちの入っていない言葉にシュレンは肩をすくめる。
言っている事はシュレンとレルデはまったく同じなのに、その言葉の受け止め方が二人とも違うのだ。
シュレンの場合は自覚がある分まだ良い。
しかし、レルデはの場合は自分にはどんなキャラでも似合っていると思っているので、気持ち悪いと言われても適当に流す。
シュレンにとってそれがとてもとても不思議だ。

「さて、話が逸れたから戻そう。
とりあえず、僕は機動六課だったか？　……とにかく、今度新しく設立される部隊の人事不足を八神はやて二等陸佐から聞いて僕を推薦。その部隊には僕の知り合いもいるということで丁度良いと思った……要点をまとめるとこんな感じか？」

「そう言うことだ。まぁ、もう1つ理由があるが、それはお前には言わん」

「……了解した。なら、今から僕は行く」

「頑張れー。期待してるよシュレン・ガルディン三等空尉？」

内心ではそう思って無いなと思いつつも、シュレンは敬礼してから身体を半回転させ、扉の方へと向かう。
その途中で身体の向きは扉の方を向いたままだが、視線だけはレルデを捉え、先程と同じような笑みを浮かべた。その笑みを継続しながら、シュレンは扉から廊下へと出て、レルデの視界から消える。

「……寒気がするな」

一人残されたレルデはそう言う。

レルデにとって、シュレンの笑みというのはどこまでも不器用な笑みで、まったくと言っても良いほどに、その場の雰囲気が和やかにはならない。
だから、レルデはシュレンの笑みが好きではない。

しかし、だからと言って嫌いにはなれない。

何故ならシュレンにとって、あの笑みは彼に出来る最高の笑みなのだから。それを否定してしまったら、それはどれ程残酷な出来事なのだろうか。

だから、レルデは嫌いにはなれないのだ。

あの笑みを。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ　シュレン・ガルディン

僕は前もってまとめていた自分の荷物を取りに行く為、自室へと向かっている。

それにしても良かった。

アイツが最近、妙な動きをするものだから可能性が低いとはいえ、荷物をまとめておいて正解だった。

とは言え、できれば異動しないというのが僕にとって最も嬉しい

ことではあることに変わりは無い。

（まぁ、文句を言っても何も変わらないか）

自由奔放なレルデに何を言っても変わることは無いだろう。まったく、少しは人の事を考えて行動してほしいものだ。

しかし、レルデが人のことを考えて行動したとしても、それはそれで止めて欲しい。

正直に言うと怖い。何かを企んでいそうでとても怖い。

まぁ、普段から人の事を考えているというのなら話は変わってくるが。

さて、まとめた荷物を取りに行く為、自室に向かっていたわけだが、その途中で自室に無断で入っている馬鹿がいるのに気づく。

……失礼。この言い方だと少し誤解が生じてしまうな。

正確には、折角まとめた荷物を荒らしてる馬鹿がいるのに気付く、というのが正しい。

何故なら自室と言っているが一人部屋では無く二人部屋なので、相方（馬鹿）がいても不思議ではない。

寧ろ、それは当然と言える。

そして、僕が部屋に入ると、無残にもまとめていた荷物が荒らされていた。

「折角まとめた荷物を荒らすなよ。迷惑だから」

「まぁまぁ、そう怒ることは無かろう？」

「うるさい黙れ……僕としては今すぐにでも行きたかったんだが、セレンのせいでそれができなくなった」

「それは悪かったの」

表情では申し訳なさそうに言っているように見えるが、間違いなくコイツは内心ではニタァと笑っているのに違いない。

目の前にいる女はセレン。容姿とかは面倒なので省略する。わざわざ言う必要はない。

「おい、そこは素直に妾の容姿を丁寧に説明するのが通りだと思うぞ」

「地の文を読むな。僕は君の容姿を説明する気なんて無い。面倒くさい」

「つれないの。まぁ、そんなところもお主らしくて良いか」

何が良いのかまったく理解できない。

長い時間、セレンとは行動を共にした仲だが、たまに理解できない事を言う。一体、先程の言葉のどこに『良い点』というのがあったのだろうか？

……セレンが荒らした荷物を数分でまとめ直し、少し散らかっている部屋を片づける。ちなみに、セレンは片づけを手伝わない。本人曰く、面倒だそうだ。

本当は片づけなくてもいいのだけど、次に入ってくる時に部屋が散らかっていると快く思わないと思うので片づける。
しかし、正直に言うと面倒だ。
それに加えて、どうせここで片づけたとしてもセレンが散らかす事だろう。

「やはり先程の言葉から考えて、どこかの部隊に異動になったのか？」

不意にセレンが聞いてくる。

「その通り。レルデの後輩にあたる八神はやて二等陸佐が新しく部隊を立ち上げるに当たって人手が欲しいとのこと。
それで、レルデは僕を推薦したという訳だ」

「なるほどの。じゃが、今回の件で妾（わらわ）は呼ばれておらんぞ」

「……そうなのか？」

僕とセレンは、僕が小さい時から常に行動を共にしている。
男と女、すなわち性別の違いはあるものの行動を共にしている。だから、同じ部隊で同じ部屋だ。しかし、今回のように僕とセレンが別行動をするというのはとても珍しい。
レルデが仕組んだことであることは予想できるが、だからと言って僕とセレンを引き離さないで欲しいものだ。

僕はセレンがいて、ようやく一人前の魔導師なのだから。

（……弱いからな）

しかし、こんな言い方をしてしまってはセレンの方も僕がいてこそ一人前だと思われてしまいそうだが、実際はセレンだけで一人前だ。

理由は色々あるのだが、やはり一番の理由はレルデと共にいるというのが挙げられる。

僕もレルデと一緒にいるにはいるのだが、どうしても自分自身に自信を持つことができない。

「……そうなってしまうと、しばらくの間は寂しくなるものじゃな」

「それには同意する」

先程言ったように僕達は僕が小さい時から共に行動を共にしてきた。言うならば、それは僕にとっての幼馴染というやつで、僕にとっての大切な人である。

だから、そんな人と会えなくなるというのは寂しくなるものだ。

別に通信などを使えば会話は出来るだろう。しかし、僕達はそんな手段を使って会話はしない。

僕達は約束を交わしている。

その約束とは、”僕達が会話をするならば、その時は直接会って会話をしよう”というものだ。

「まぁ、寂しい気持ちもするのじゃが、たまにはこうやって、妾(わらわ)とお主が別行動を取るというのも悪くはないのかもしれん」

「セレンからそんな言葉を聞くとは思わなかった」

「どうせ、こんな思いをするのは一時的にじゃ。それならば我慢しなければなかろう。妾(わらわ)は子供だと思われたくないのじゃからな」

その台詞を言っている時点で子供だと思われるぞ。

僕はそうは言えず、その言葉に黙って肯定した。それにセレンが思っていることは僕も感じている。

だから、もしセレンを子供と言ってしまったら、それは僕自身も子供と言っていることと同じになってしまう。

だから、思うだけに留(とど)めた。

「僕としては約束なんか破って、念話などで会話してもいいと思うが？」

「まぁ、そう言うでない。妾(わらわ)にとって、お主と交わしたいくつかの約束は凄く重要なことなのじゃなからな」

「それは、前にも聞いたことがある」

約束なんて馬鹿らしいと思う人も世界にはいるだろう。

しかし、彼女にとって約束とはとても大切なことだ。その理由は

教えてはくれないが、彼女にとってとても重要なことらしい。
いくつかの約束を交わして、僕は彼女との行動を制限する。
そして、交わした約束は絶対に破ってはいけない。破るとしたら、それは僕かセレンが死ぬ時だけだ。

「ところで、シュレンと話をしていてすっかり忘れておったが、急いでいるのではなかったのか？」

「……忘れていた」

真面目な考えになっていたので、突然の話題に付いていくことができなかったが、その言葉のおかげである一つのことを思い出した。
僕は遅刻して――まぁ、正確には遅刻にさせられてだが――、急いでいたのだった。
それなのに、僕は忘れてしまっていた。

「すぐに行く」

その一言と同時に、先程まとめ直した荷物を持ち部屋から出る。

「……うむ」

その一言だけ。
その一言だけで、僕は部屋から出た。別れの挨拶などはせず、た

だそんな一言で。
先程の話を戻すという訳ではないが、これも約束の一つで、僕達の間では“別れの挨拶”はしないというものがある。
だから、僕は一言だけで部屋を出た。
それ以外にも“さよなら”や“行ってくる”などの言葉は言わない。

（少し急ぐか……）

荷物を片手で持ち、僕は走り始めた。
その途中でも僕は“約束”のことを考える。そしてその度に、約束を交わした日のことを思い出すのだ。
あの時のセレン表情とあの時の光景を。
今思い出しても、何故約束など交わしたのか不思議に思えてくる。

（……今はこのことを考えなくてもいいか。今はいかに上手い言い訳を言えるか考えよう）

本当は、詳しく回想したいところなのだが、僕には時間がない。
いや、時間がないどころか、既にその時間は過ぎてしまっているのだが、それはこの際無視することにしよう。
そうでもしなければ、これから起きる出来事を対処できないのだ。

人間、諦め時というのは持っている方が良い。これは今まで生きてきた人生で感じたことだ。
そんなことを考えながら僕は向かった。

新しき部隊、機動六課へ。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

と、言う訳でｐｒｏｌｏｇｕｅでした。

正直に言えば、書くことがないですね。

まだｐｒｏｌｏｇｕｅですし……。

まぁ、これは置いておいて。

更新速度は最低でも一週間に一回ぐらいはしたいと思っています。

でも、連日投稿は恐らく無理です。

そんな訳で亀更新になると思いますが、これからよろしくお願いします。

この小説に対するメッセージや感想などありましたら、遠慮（容赦）無くください

では。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　１　（前書き）

本日二度目の投稿。
とは言っても、これは本編というより、サブタイにもあるようにＳｉｄｅ　ｓｔｏｒｙのようなものです。
なので本編と比べて、半分という長さです。

……いや、半分以下か。
時系列はｐｒｏｌｏｇｕｅの数日前のお話です。

では『Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　１』始まります。

Side story 1

Side――

紙コップに入ったコーヒーを飲みながら、レルデ・ローラルドは八神はやてと会話をしていた。

はやてから新しい部隊について話したいと言われたので、こうして直接会っているのだ。

会話の内容は立ち上げる部隊――機動六課――の人手に関するものである。

立ち上げる部隊の人数が全然足りていないという訳ではない。しかし、初めて立ち上げる部隊。人手が多いほうが安心できるのである。

で、現在、レルデははやてから渡された書類に目を通している。

「お、美少女揃いじゃねーか！　よし、俺が人手不足を補ってやろう」

「いや、結構です。というより、レルデ先輩も自分の部隊をほっぽらかして私の部隊に来ちゃ駄目です」

「だが、そこは俺だから何とかなる」

その滅茶苦茶な考えに一瞬だけ納得しそうになってしまうはやて。
しかし、よく考えてみれば、レルデを部隊に引き入れる＝部隊の壊滅という方程式が成り立っているので、そんなことをしてしまったら駄目だろうと考えた。
失礼な考えかもしれないが、実際にその通りなので仕方がない。
いやまぁ、レルデの部隊は壊滅していないが……。

「それに先輩が来たら、余計な仕事が増えるじゃないですか」

「そんなに褒めるな」

「褒めてません」

「照れなくていいぜ」

「照れてもいません」

……何というか、この二人の会話はボケとツッコミで成り立っているように思えてままならない。
これが関西人の性というやつなのだろうか。
とは言え、一人は関西人はおろか日本人ですらない奴がいるが、この際はおいておこう。

「さて、冗談はここまでにしておくか……」

「冗談の割には悔しそうな表情をするんですね」

「細けぇことを気にすんなよ。そんなんだと、一生独身だぜ？」

「……余計な心遣い感謝しまっす！」

はやてはレルデの足を――ヒールで――踏み付ける。

「っ！？　痛いな、オイ」

「余計なことを言うからです」

「だが、事実を――……はい、すみませんでした。だから、拳握るの止めてもらえません？」

「……っち」

舌打ちしたはやてを何故か可愛らしいと思うレルデだが、さすがにこれ以上ふざけていたら次は何をされるのか分からないので、本題に移る。

「俺の部隊で一人かなり優秀な魔導師がいるんだが、欲しいか？」

「……先輩が人を褒めるのって珍しいことですね」

「それ程までに優秀ということだ。まぁ、ソイツは自分のことを過小評価しているがな」

その優秀な魔導師というのはシュレン・ガルディンのことである。
彼の階級は三等空尉となっているが、管理局の中でもトップクラスの人間と関係を持っている。
レルデが会談を行う際に、シュレンも連れていくからだ。
その為に、シュレンと他の少将達とは――大した会話などはしていないが――　一応、関わりをもっているのである。

「教導官の資格だって持っているし、デバイスマイスターの資格も持っているから、ロングアーチの方でも使える筈だ」

「へぇ。それは確かに優秀ですね」

レルデの言葉通り、シュレンは教導官とデバイスマイスター、二つの資格を持っている。
これは彼が持っていた方が良いと判断したから持っている資格だ。
そして、この二つの資格を両方とも持っている者はあまりいない。
理由としては、教導官とデバイスマイスターの道は互いに異なっているからだ。
教導官は戦闘。デバイスマイスターは支援と言ったように、道が違う。

「そういう面では見習いたいぐらいだぜ」

だがたまに、その別々の道を両立させて進める者がいる。
今回の場合はシュレンがそれに当たる。殆どの者は両立させよう

と思っても、中々難しいことなのだ。

はやてはシュレンのことを聞き、少しではあるが興味を持つ。

その様子を見たレルデは満足そうに頷くが、途端に表情が険しくなる。

「だが、一つだけ忠告しておいてやる」

久しぶりに見るレルデの真面目な顔つきに珍しいなと思いつつも、レルデの言葉を待つはやて。

今の話を聞いた限りでは、忠告されるようなことは話していない。

それならば、これもその優秀な魔導師についてなのだろう。

はやてはそう考える。

「ソイツ……シュレン・ガルディンには必要以上に関わろうとするな」

そして出てきたその言葉に疑問を持つ。

その言葉から考えて、一優秀な魔導師≪シュレン・ガルディン≫は他人嫌いな性格なのだろうか。

それとも、別の理由で関わってはいけないのだろうか。

そんなことを考えている間に、レルデが言葉の訂正をする。

「悪い。この言い方だと、シュレンが他人嫌いな性格って思うな」

「……違うんですか？」

「まぁ、少しだけ違うな。シュレンは自分自身のことを知られるのが嫌いなんだ。例えば、アイツの過去、生まれ、今まで何をしていたのか……

そんな風にアイツの心の中に入り込もうとすると」

「どうなるんですか？」

「相当に鬱な気分になれる。ある意味、精神面を鍛えたいならシュレンの心に入り込もうしな。まぁ、俺は勧めねぇけど」

言葉は少し軽いものだが、実際は想像よりも酷いものなのだろう。

何故なら、あのレルデ・ローラルドが遠い目をしながら言っているのだ。はやての中ではレルデは何事にも怖じけない万能人間と思っている。

そんなレルデをそんな表情にさせる。

そう思わないわけがない。

「俺はアイツに何回心を折られたことか……」

「そ、そんなに辛いんですか？」

「辛いなんてもんじゃない。正直言って、アイツの言葉で自殺まで考えたんだぜ？」

「……あははは」

「まぁ、それは俺が何回もアイツの心に入り込もうとした結果だからな。未だに、毒舌を聞くこともある」

何と言って良いのだろう。

何回もシュレンの心に入り込もうとするレルデも、自殺まで追い込むような毒舌を言うシュレンも……

どんな関係だと問い詰めたいくらいである。

「ある程度の関係ならアイツの方から作ってくる筈だ。でも、それ以上は望むな。作ろうとするな。心を折られたくないならな」

「……アイツの方から作ってくる？」

「ああ。プライベートで一緒に買い物に行ってくれるくらいならな」

それは一般的に言うデートと言うやつではないだろうか。

いや、二人っきりで行ってくれるとは言っていないのでデートでは無いか。それ以前に、はやての性別が男だった場合ではデートというのは間違っているだろう。

というより、プライベートで買い物に出かけてくれるならば、問題は無いように思える。

「だから、必要以上に関わるなって訳だ」

その言葉に成程と頷き、はやては紙コップに入っていたコーヒーを飲みきる。

「じゃ、書類を出しておくから目を通しておいてくれよ」

「了解です」

「それじゃあな」

余談ではあるが、この書類こそが”不備だらけの書類”なので、目を通す必要など皆無なのだ。

寧ろ、今話してくれた情報の方が何倍も充実している。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　１　（後書き）

と、言う訳でサイドストーリーでした。

……はい、すみません、ごめんなさい。申し訳ないです。
調子に乗ってサイドストーリーなんて書いてしまいました。

今日の１２時に投稿して、何となく書いてたら『あ、折角だから投稿しちゃおう』という考えに至った訳ですね。
うん、でも、反省はしている。だが、後悔はしていない　状態ですね。

前作を知っている人は分かると思いますけど、何気に今回のレルデとはやての会話は文にしたのは初めてですからね。
レルデのシュレンに対する印象など、以外と重要なことも短い文ではありますが書いていますし……。

だけど、……正直に言ってしまえば、急いで書いてるのでクオリティが滅茶苦茶低いですね。
Ｐｒｏｌｏｇｕｅは結構頑張って書きましたけど、こちらは何となくですから。

というより、連続投稿は無理とか書いておきながら、連続投稿している自分って……。
まぁ、いい。
読者を待たせないというのは良いことだと思うから。

……ま、クオリティが低ければ、あまり意味はないけどな。

この小説に対するメッセージなどありましたら、容赦なく感想にどーぞ。

では。

第一話　『シュレン・ガルディン』（前書き）

考えなしの連日投稿。
こういうのは自滅を招く行動だ。だけど、止まらない。止められない。

……書き溜めは後2話分しかないのに（汗

では、第一話『シュレン・ガルディン』始まります。

第一話　『シュレン・ガルディン』

Ｓｉｄｅ　シュレン・ガルディン

急いだ結果もあって、予想よりも早く機動六課に着くことができた。しかし、嬉しいとは思わない。
レルデが前もって異動の件を伝えなかったので、僕は遅刻者になってしまったのだ。
だから、気が進まない。嬉しいとは思えない。
まったく、あの部隊に入隊して今までどれほど苦労したことか。
恐らく、あの部隊では僕が一番働いていることだろう。
部隊長であるレルデ以上に働いているかもしれないな。

「……さて、八神二等陸佐はどこにいる？」

一応、ここに来るまでに書類には目を通しているので、八神二等陸佐の顔は知っている。だが、その八神二等陸佐がどこにいるのか分からない。
高確立で部隊長室にいるのだろうが、生憎と今の僕には部隊長室の場所が分からない。

……困ったな。

確かに、機動六課に来るまでの時間はある程度早めることが出来

た。しかし、それは八神二等陸佐に会うという前提の元でだ。
早く会うことが出来なければ、この努力も無駄になる。
まぁ、どちらにしても、僕は怒られるのだろうが。

（とにかく、誰かに聞いた方が良いな）

そう判断し、近くを横切ろうとした人に声をかける。

「あの、すみません。少し宜しいでしょうか？」

「え？　あ、はい。何でしょうか」

幸いにも、その人は丁寧に対応してくれる人だった。
僕は人と会話をするのが苦手という訳ではない。基本的に初対面の人にも自分の意見を言うことができる。しかし、今回のように運用したばかりで忙しい人に声をかけるというのは気が引ける。
人の邪魔はあまりしたくないのだ。
だから、このことではこの人に、申し訳ないと思う気持ちがある。

「八神二等陸佐に会いたいのですが、部隊長室はどこにあるでしょうか？」

「えーっと、八神部隊長にどのような用事が？」

「自分は今日からこの機動六課に異動する者なので、まず最初に八

神二等陸佐に挨拶をしようと思いまして」

「それなら、ちょっと待ってて貰えますか？　今から確認しますので」

「分かりました」

僕から視線を外し、画面を展示させる。

僕の言葉通りに本当に転入者かどうか確認をするのだろう。そして、考えた通りに確認作業に入った。

数秒後、確認を終えたのか画面を閉じ、視線を僕に向けてきた。

「確認ができました。八神部隊長の所までご案内します」

「ありがとうございます」

ずいぶんと早い確認作業だ。少なくても、僕より早い。

僕もいつかはこのぐらいの速度で、仕事ができるようになりたいものだ。

「では、私に付いてきてください」

「はい」

そう言われて、僕は付いていく。

途中で、何処まで丁寧な対応なんだろうかと、そんなことを疑問に思った。
僕がいた部隊では、まずこのような対応は無い。
まぁ、だからと言って、荒っぽい対応でも無いのだが、この人のように教本に書いてあるような対応の仕方はしないのだ。
故に、僕はそう思った。
ある意味、僕はレルデに感謝した方が良いのだろう。

こんな良い部隊に異動命令を出してくれてありがとう、と。

しばらくして、僕は部隊長室の前にたどり着いた。

「わざわざ、ありがとうございます」

「どういたしまして。では、私は仕事がありますので」

「お忙しいところにすみませんでした。」

「構いませんよ。では、失礼します」

女性は最後にそう言ってから、去っていく。
今更ながらに、彼女の名前を聞くのを忘れていた。しかし、今ここで引き止めるのはやめておこう。
これから、仕事の種類は違うものの、同じ場所で仕事をするのだ。
だから、今ここで聞かなくても、いずれ分かるようになる。

それに、僕は最優先で八神二等陸佐に挨拶をしなければならない。

「……行くか」

緊張はしていないが、気まずさというものならばある。
何といっても僕は遅刻者だ。レルデのせいとは言え、僕が遅刻をしたという事実は変わらない。
世の中には第一印象という言葉があるが、今の僕はどうなのだろうか。
まぁ、いい。とにかく入ろう。これ以上ネガティブな思考になっても意味がない。

扉に近づくと、扉が横にスライドして開き、そのまま入る。

「失礼します」

部屋の中に入り、敬礼をする。
すると、デスクに座っていた一人の女性が視線を僕に向けてきた。

「自分はレルデ・ローラルド少将から異動を命じられたシュレン・ガルディン三等空尉です」

「あ、君が異動してきた……」

「はい。恐らく八神二等陸佐の思っている人物です」

「そうかそうか。随分と早い到着やな」

早い到着……それは遅刻をした僕に対して言う台詞だろうか。
随分と早い到着とは程遠い遅刻をしてしまっているのに。何故、そんなことを言う？

……成程。これが皮肉というやつか。
でなければ、遅刻をしてしまっている僕にそのような言葉を言う意味が分からない。
そうなると、言葉ではこう言っているが、心では僕のことを悪く思っているのだろう。

話を変えるが、八神二等陸差は資料で見た写真よりも綺麗に見える。道理でファンクラブというのができるのも頷ける。
ＳＳ魔導士ランクで『歩くロストロギア』と言われている人物が八神はやて二等陸佐だ。
僕はそこまで詳しいことを知っているという訳ではないが、八神二等陸佐は有名人なので必然的にそのような情報が入ってくる。

「さて、本来はすぐに確認作業なんかに入るんやけど、もらった資料に対して詳しいことが書いて無いなくて、それができないんよ」

「すみません。自分の上司が書類をちゃんと書かなくて」

書類に詳しい事が書いてないのはレルデが書類を書くことをさぼったからだろう。まったく、本当に困ったものだ。
何処に部下を遅刻にさせた挙句、書類に不備を残す上司がいるのだろうか？

世界中を探してもそんな奴はアイツ1人だけだろう。というより、アイツ1人だけじゃなかったら世界中が混乱する。

「平気やよ？　あの人の部下は苦労するっちゅーことは」

そう言えば、レルデ自身から八神二等陸佐は自分の後輩などと言っていたな。となると、八神二等陸佐もレルデによって苦労をしている被害者の1人なのだろうか。
この言葉から考えて、きっとその通りなのだろう。

「……ご愁傷様です」

僕はあまり人に同情することはないのだが、今回だけは同情してしまう。

「それはお互い様や。強く生きような」

「はい、ありがとうございます」

今ここに、レルデ・ローラルド被害者同盟ができたと言ってもいいだろう。
僕の一方的な考えではあるが、八神二等陸佐も恐らく同意してくれる筈だ。僕は……僕たちはそれ程までにレルデによって苦労をさせられているのだ。

僕と八神二等陸佐の階級が同じだったら、数時間にも渡って――レルデの悪口を――語り合いたいくらいだ。
階級が違うことが非常に残念である。

……こんなことを会って早々考えている辺り、僕は馴染みが早いのだろうか。
一応、レルデもそう言っていたからな。

「僕に関する書類はできる限り早く、今度は僕が作り直しますのでそれまで待ってもらえますでしょうか？」

「ん～、それでお願いや」

「分かりました。では、今日は異動の手続きをするということで」

本当に余計な仕事を増やさないで欲しいものだ。

「分かった……さて、シュレン・ガルディン三等空尉」

「何でしょうか？　八神二等陸佐」

「悪い知らせと良くない知らせ、どっちが聞きたい？」

八神二等陸佐が二つの選択肢を出してくるのだが、正直な話、意味がない。どちらにせよ、僕にとって“悪い”知らせなのだろうから。

それにしても、引っかかる言い方をする人だ。
もしかしたら、軽い冗談のように言ってくれているのかもしれないが。

「実はシュレン・ガルディン三等空尉は明日にここに来る予定だったんや」

「……そうですか」

……そうなると、先程の八神二等陸佐の言葉に皮肉は入っていなかったのか。何と言うか、悪く思ってしまって八神二等陸佐には申し訳ない。
とは言え、それは心の中だけに留めておく。

言っても、伝わらないだろうから。

「つまり、君は荷物をまとめてここに来たようだけど正式に所属されるのは明日からで――」

「あー、はい。分かりました。それ以上は言わなくても結構です」

それにしても、だ。
何が今日異動だ、何が遅刻だ。
僕が機動六課に配属されるのは今日の事ではないというのに……
まったく、僕の努力を返して欲しい。
あの一生懸命走った頑張りと、怒られるだろうと思っていた緊張

感を。

結局はこれも、レルデによる遊びか。

「一応、部屋とかは用意してるから、その部屋で荷物とかの整理してええよ。ただ、また後で呼び出しをすると思うから、その時はこの部屋にな」

「心使い感謝します。八神二等陸佐」

「困った時はお互い様や」

八神二等陸佐とは、本当に上手くやっていけそうな気がする。レルデと比べ、仕事を押し付けることもせず、初対面の僕にも配慮してくれる。

八神二等陸佐に関しては文句の言いようが無い。

「ありがとうございます。では、自分は部屋で待機してます」

「了解や」

最後に敬礼をしてから、僕は部隊長室から出た。

それにしても、あの部隊とこの一機動六課≪部隊≫の差が――と言っても良いのか分からないが、――激しいな。

別に、年齢的な意味では殆ど差は無いと言うのに。

それなのに色々な所が違っている。まぁ、でも、仕方がないことなのか。

（あの部隊にいる人は全員……）

全員、――――なのだから。

いや、全員と言うと間違いだな。正確には、僕とセレンを除いた全員だ。

そして、考え方によっては僕達の部隊は何とも滑稽なものであると思ってしまう。

まぁ、どうでもいいか。

今の僕は機動六課の一員。少しの間はあの部隊を離れるのだ。

故に、少しの間はあの部隊の事を考えなくても問題ないだろう。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ――――

シュレンが部隊長室から消え、残ったはやては手続きした書類に不備が無いかどうか確認する。
軽く目を通して、はやては満足そうに頷く。
というのも、今目を通している書類には、レルデの書類のような不備が見当たらなかったからである。

「レルデ先輩が教えてくれた感じとはちょっと違うな」

はやては数日前にレルデと直接会っている。その時に、シュレンのことを聞いた。
彼の資格や、魔導師ランクなど。それに加え、彼に接する時の注意点。

そのことを聞いてはやてはシュレンはもう少しレルデに似ている性格をしているのだろうと思ったが、実際はそうでは無く、寧ろ真反対な性格だろう。
レルデとは違い、生真面目そうな人だ。
まぁ、レルデにも真面目に仕事をする時というのはある。しかし、それは滅多にないことだ。

「シュレン・ガルディン三等空尉か……」

八神はやてはレルデ・ローラルドの後輩。
その為、レルデによって苦労している人物の一人なのだが、シュレンと違ってはやてはレルデに対して尊敬の目で彼を見ている。

それもその筈で、レルデはＳＳＳランクの魔導士。しかも、年齢は２１歳と若い。
故に、管理局に入っている者の殆どはレルデのことを知っている。
そして、その者の殆どが尊敬の目で見ている。

管理局は実力主義。
彼に憧れを持つのも至って普通だろう。

しかし、彼を知っている者からすれば『仕事をしないダメ人間』と思われている。
理由は……まぁ、その通りの意味だ。
書類を渡しても必ず不備がある状態で提出したり、――シュレンのように――予告なしの異動などと言ったり、レルデの部隊からしてみれば、レルデ・ローラルドという人物は無茶苦茶な人物である。

「……できれば書類に不備を残すのは勘弁して欲しいんやけどな」

はやてが目を通しているシュレンについて、まとめられた書類。
それも当然、不備が残っている。
書類で分かるのは名前と魔導士ランクと年齢の３つのみ。正直に言って不備を残すという次元では無い。

「魔導士ランクはＡＡで三等空尉……」

その――ほぼ未記入の――書類に目を通し、はやては呟く。
名前はシュレン・ガルディン。年齢は１９歳で魔導士ランクはＡ

A。
彼ははやて達のようなエース級魔導師ではないものの中々優秀な人物であることを、この書類では示している。

「スターズの方にしようかな？」

正式な所属は明日からではあるが、シュレンを所属させる部隊は早い方が良いと判断し考える。

最初はライトニング隊の副隊長にしようと考えた。
理由としては、副隊長の留守が多くなってしまう為、フェイトの仕事が増えてしまうことを思い出したからだ。だから、ライトニング隊のシュレンを副隊長とすれば、フェイトの負担は減ると考えた。

しかし、その途中でスターズ隊隊長のことを思い出す。

過去に無茶をしてアンノウンに撃墜され、怪我を負った親友のことを。
あの日以来、守護騎士のヴィータがなのはのことをよく見るようになった。そして、無茶もしなくなった。
しかし、親友のことを思うと、もう一人は近くにいた方が良いと思う。
その結果がシュレン・ガルディンをスターズ隊副隊長にすることだ。

「まぁ、細かいことはなのはちゃんとヴィータに話してからにしよか」

いくら部隊長とは言え、他の隊員の意見を聞かずに全てを決めるのは避けた方がいいと判断し、はやてはスターズ隊隊長と副隊長、すなわち、なのはとヴィータを呼ぶことにした。

二人の性格などから考えて、拒否する可能性は低いと思うが、念の為にだ。

数分後、呼ばれたスターズ隊隊長と副隊長が部隊長室に入ってくる。

「どうしたの？　はやてちゃん。ヴィータちゃんと呼ばれて来たけど」

入るとすぐにサイドポニーの女性――高町なのは――はそう言う。

今日の午前中の訓練は既に終了しているが、午後の訓練はまだ始まっていない。

だから、色々と準備などをしたかったのだが、はやてに呼び出されたことによって、その作業は中断された。

その為に少しなのはは急いでいた。

一方、――子供のような容姿の――ヴィータは黙ってはやての言葉を待つ。

「訓練前にごめんな。えっと、二人を呼んだのは実は機動六課に転入者が来るんや」

「転入者？　そんな話は聞いてないよ」

「まぁ、異動が急遽決まったやからな。それに、もしかしたら異動にはなって無かったと思うし……」

レルデから『もしかしたら異動の件はなくなるかもしれないから、あまり他人には言うなよ？』と言われていた為、リィン以外の者には言わなかったのだ。

しかし、何とも中途半端な男だろう。

「随分と曖昧みてーだな」

ヴィータの素直な感想にはやては苦笑いする。

「でな、その人をもう一人のスターズ隊副隊長にしようと思うて、2人の意見を聞きたかったから呼んだわけや」

「ライトニング隊のじゃなくて？」

「……どこかに無茶をして怪我をした人物がいるからな。その監視役もしてもらう予定や」

今度はその言葉になのはが苦笑いする。

しかし、有り得そうな話ではある。新しい部隊で新人達にあらゆることを教えるのだ。その為に、なのはは新人達の為に時間を割く

可能性がある。
まぁ、少しの時間ぐらいなら問題はないだろう。
だが、その少しの時間という規模が他の者と比べて違う。高町なのはという人物は自分のことより他人の方を優先させる。
そんな性格を知っているからこそ、はやてはそう思った。

「で、その転入者ってのは誰なんだ？　はやて」

「あー、うん。出来れば書類を見せたかったんやけど、ある事情でできないから名前と魔導師ランクだけ言っとくわ」

「うん」

本来であれば、ここで書類を見せた筈だったが、レルデのせいでそれは出来ない。
仮にレルデが記入した書類を見せたとしても、正直な話、口で言った方が圧倒的に早い。

「名前はシュレン・ガルディン。魔導師ランクはＡＡの私達と同じ１９歳や」

その言葉になのはとヴィータは驚いた。いや、驚いたというよりも、固まったという表現の方が正しいだろう。
まるで、その瞬間だけ全ての出来事が止まってしまったように。
しばらくして、――とは言っても、３秒ぐらいではあるが――なの

ははは驚きを沈め、はやてに確認する。

「は、はやてちゃん？　今、シュレン・ガルディンって言った？」

「ん、そうやけど。……もしかして知り合いなん？」

「……うん。一応」

一応という言葉に少し引っかかるはやてだが、それよりもシュレンがなのはとヴィータと知り合いであるということが気になった。

まぁ、別にこのようなことはよくあることではあるが、親友の知り合いと聞いて先程まで話していたシュレンに対するイメージが変わった。

より良い方向に。

一方、なのはとヴィータは久しぶりに聞いたその名前に、ただ驚いた。

シュレンとなのは達が知り合った経緯は少し……いや、かなり特殊なものであろう。

高町なのはにとって、シュレン・ガルディンという人物は命の恩人なのだから。

第一話　『シュレン・ガルディン』（後書き）

と、言う訳で第一話でした。

ハァ。前書きにもあったように、考えなしの連続投稿は危険ですね。
何というのでしょうか。焦っているのでしょうか？
前作は、自分の予想よりも読まれていた作品なので、早くそのぐらい読まれる作品にさせたいという願望から。
……うん、本当にこういうのは破滅フラグが建つ。
でもまぁ、そう願っている自分も必ず居るわけでして、複雑なものです。

さて、愚痴っていても仕方がないので、後書きらしいことでもしましょうか。

最初の方にシュレンが女性に声を掛けたというのがありますが、実は声を掛けたのはシャーリーという裏？　設定があります。
眼鏡を掛けているなどといった細かいことは書いていませんが、あの人はシャーリーなのです。

次に、はやてのシュレンに対する感情は前回のサイドストーリーの設定から少し使って書いています。
あ、前回に説明するの忘れてましたけど、基本的にサイドストーリーというのは、本編を補助するような形で投稿していきます。
ですので、別にサイドストーリーを読まなくても問題は無いと思います。
ただ、読んだ状態で読めば、より分かりやすく物語が読める……みたいな感じです。

まぁ、これは前回の投稿の時に思いついたことなんですけどね。
ということで、これからもサイドストーリーを挟んでいきますので、
早く物語を進ませろと思っている方はご了承ください。

この小説に対する意見などありましたら、感想の方にどーぞ。
では。

第二話　『八年振りの再会』（前書き）

……ふぅ、最早何も言うまい。（連日投稿について

では、第二話『八年振りの再会』始まります。

第二話　『八年振りの再会』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

与えられた部屋で、僕は本を読みながら待機していた。

読んでいる本は哲学とか、人間の思考に関する本。

正直、僕には何故作者がこのような考え方をするのか理解できないが、だからと言って読んでいる本は途中で投げ出さずに最後まで読む。

その思考を理解はできない。しかし、世界にはこのように考える人間もいる。

そういった意味では参考になる。

「……それで、いつまで待機すればいいんだ？」

キリの良いところで本を閉じ、そう呟く。

時間を測っていた訳ではないが、読んだページから考えて三十分ぐらいは経っただろう。

別に不満を言うつもりは無い。しかし、仕事の件にしては可能な限り早く、そしてきちんしておきたいのも事実だ。

レルデの部隊にいた時も仕事は真面目に行なっていた。そして、

僕を除いた隊員も数人を除いて、真面目に仕事をしていた。
それはいつもの様子からは考えられない程の変貌ぶりである。
僕は、これが唯一レルデの部隊で関心することと考えている。

「……ある程度は構わないが、あれは無理だ」

だが、仕事に関すること以外では不満しかないと言っていいだろう。
僕は静かな空間が好きだ。それを邪魔されると、不愉快な気持ちになるもので、苛立つ。
まぁ、それでも、僕はあの部隊が好きだ。
不満だらけではあるが。

そんなことを考えていた時、一人の女性が部屋に入ってきた。

「失礼します、シュレン・ガルディン三等空尉」

「……要件は？」

「はい。八神二等陸佐が部隊長室に来てくれと、そう伝えるように言われました」

「そう。わざわざありがとう」

「いえ、では失礼します」

どうやら、そのことを伝える為だけに、この部屋にまで来たようだ。
わざわざ、ご苦労なことである。
さて、では伝えられた通りに部隊長室に向かうとしよう。
部隊長室は先程まで八神二等陸佐と会話をした場所。ならば、問題ない。
先程、部隊長室まで案内してくれた時も迷惑をかけてしまったと、申し訳ない気持ちがあった。
しかし、今度は迷惑をかける心配はないようで、安心する。

僕は部隊長室に向かって歩き出す。当然、場所が分かっているから迷うことなく、短時間で着くことができた。
そして、僕はそのまま部隊長室に入ろうと足を進ませたのだが、途中で足を止めた。

「……取り込み中か？」

部隊長室の中から会話声が聞こえたからである。
こんな時に僕が部屋に入れとでも言うのだろうか。だとしたら、それは無理だ。八神二等陸佐に伝えられたからと言えど、難しい話である。
第一、運用したばかりの部隊で部隊長である八神二等陸佐が会話をしているということはそれなりに大事なことなのだろう。
しかし、さすがに確認した方が良いだろう。僕は呼び出されたのだから。

今、僕が入って良くなかった場合はレルデを犠牲にしよう。
そう考え、勇気を出して一歩踏み出した。

「失礼します、八神二等陸佐」

先程の挨拶の時と同様にデスクに座っている八神二等陸佐。先程の会話は通信によるものだったのだろうか。

と、その前に確認しなければ。

「呼ばれて来たのですが、間違っていないでしょうか？」

「うん、呼んだよ」

「……仕事に関することですか」

「ある意味そうやな。でも、実は呼んだのは私じゃなくて、その二人なんや」

その言葉と同時に八神二等陸佐が視線を逸らす。その視線を追うと、二つの人影があった。

その二つとも見知った顔だ。

そして、二人とも八神二等陸佐と同様に有名人と言っても良いだろう。

その内の一つはエースオブエースとして管理局で知られていて、もう一つはエースオブエースに比べたら知名度は少し低いが、それでも知っている者からすれば十分に優秀な魔導師だ。

高町なのはとヴィータ。

それがこの二人の名前で、少し前に色々と世話になった。

「随分と久しぶりですね、こうして会うのは八年振りでしょうか？」

実に八年振りの再会だ。

だが、だからと言って、特に思うことはない。この二人がこの機動六課にいることは書類を見て理解し、その時に色々なことを思ったのだから。

直接会ったかどうかの違いなど、僕にとっては微々たるものなのだ。

ただ、レルデ自身も僕の知り合いがいるとは言っていたが、書類を見た時はこの二人がいるとは思いもしなかった。

……正確にはもう一人、知り合いがいる訳だが、この際は置いておこう。

「それじゃあ、私は席を外すから二人とも話してええよ」

どうやら、八神二等陸佐は僕とこの二人が知り合いであるということを知っているようだ。もしくは、今さっき知ったのだろう。

そして僕を呼び出し、このような形で再会させた。

何とも、八神二等陸佐は友達想いの人だとでも言っておこうか。

そんなことを考えている内に、八神二等陸佐は部屋から出ていった。

だが、部隊長なのに部隊長室を他の隊員に任せていても良いものなのだろうか。

「さて、いい加減に睨んでくるのは止めて欲しいのですが」

沈黙していても意味が無いので、こちらから話を振ることにした。

「睨んでねぇよ。元々、こーいう目付きだ」

「私も睨んでるつもりは無いんだけど……」

「僕から見てみれば、二人とも僕のことを睨んできているようにしか感じないのですよ」

二人共、誰でも分かるくらいに分かりやすく怒っている。いや、この二人は怒っていないか。

怒りより、心配していたという感情の方が強いと思う。

僕は、この二人に心配をかけられるような事をしたのだから。

「それに、なんで敬語なんか使ってんだよ。前みたいに普通に話せ」

「プライベートなら構わなかったのですが、ここは仕事場。敬語を使うのは普通だと思うのですが？」

「……確かにその通りだけど、アタシとしては敬語じゃない方が話しやすい」

仕事に私情を挟むのはどうかと思うが、まぁ、構わないか。
僕は他人に迷惑をかけたくない。今のヴィータにとっての迷惑が、僕が敬語を使わないことに繋がると言うのであれば、僕は口調を戻そう。
とは言え、それでも少しは堅い口調になるが。

「そうか。なら、この口調で話すが問題はないな？」

「……！　おうっ！」

考えていることが表情に出やすい奴だ。
それで、先程からずっと黙っている高町なのははどうした？　具合が悪いという訳でもあるまい。
それとも、様々な感情が浮かび上がってきて困惑しているのか。
例えば、僕の身体のこと。例えば、今まで何処にいたのか。
そんな風に聞きたいことが多すぎて、混乱でもしているのか。

「……どうして、私たちの前から消えたの？　心配したんだよ」

そして、出てきた言葉はそんな言葉。

「どうしてと言われてもな、僕にも色々と事情があった。だから、消えただけだ」

「怪我も完治してなかったのに？」

「確かに怪我は完治していなかったが、ある程度は傷が癒えていたから、問題はなかった」

さて、いきなり怪我のことを言っても意味が分からないだろう。

簡単に説明すると、僕は昔に高町なのはを庇って大怪我を負った。

そしてその後、色々な出来事があったが、互いに自己紹介をして、ある程度は仲良くなった。

しかし、ある時に僕は忽然と姿を消したのだ。

何も伝えず、何の痕跡も残さず。

「それに、心配させたのは悪かったと思っているが、僕が何をやっても僕の自由だろう。だから、こんな風に怒られる必要はないと思うのだが」

「……相変わらず、相変わらずシュレン君は厳しいね」

昔から僕は、思っていることを言っているだけなのだが、他人からは厳しいと思われるようだ。

実際に、僕は他人とは違う思考の持ち主であるということは自覚しているから、その通りなのだろう。

「それで、他に聞きたいことはあるのか」

「ううん、もう聞かないよ。今ので十分だから」

「そうなのか。僕はこれから質問責めに遭うのだろうかと思っていたのだが、それは違っていたようだな」

どんな答え方をしようか悩んだというのに、それは意味がなかったようだ。

高町なのはの性格から考えて姿を消した理由など、そんなことをかなりの時間を費やすと思ったのだが……。

意外な結果だ。

「最低限のことは聞いたから。あとは、聞かなくてもいいんだ。シュレン君が無事だっただけで十分だから」

「そうか。随分と出会った時と考え方が変わったな」

「にゃはは。でも、どうせ聞いてもシュレン君は誤魔化すでしょ？だから聞かないよ」

少し感動したのを返せ。

コイツは僕が無事だったからというのも理由の一つであろうが、聞いても誤魔化すと思われてるようなので、どちらかと言うとこちらの理由の方が大きいだろう。

だから、随分と考え方が変わったなどと言ったが、結局のところはあまり変わっていないらしい。

「ヴィータもそう思ってるのか？」

「いや、アタシは後で個人的に聞きたいことがある」

「個人的にか。分かった」

個人的に聞きたいこと……何だ？

ヴィータには個人的に聞かれるようなこともなかった筈だが。

「……それで、今まで何処にいたんだ？」

……結局、一つの質問はするんだな。

まぁ、構わないか。

「レルデ・ローラルドの部隊だ。そこで働いて、今日この機動六課に異動を命じられた」

先程とは違い、この言葉は誤魔化す必要は無い。

だから、嘘を言わずに事実だけを言う。

僕とレルデが出会った時はある意味面白いものだったが、そのことを言う必要はない。言う気も無い。

まぁ、聞かれたのであれば、ちゃんと答えるつもりでいるが。

「さて、今度はこちらから質問をするが、僕を―この部屋≪部隊長室≫　に呼んだ理由はそれだけか？　他にも別の理由は無いのか？」

メインの話は僕との再会のことだろう。

しかし、先程八神二等陸佐が言っていたように仕事に関係することでも、呼ばれたと思っているのだが、違うのだろうか。

「あ、うん。はやてちゃん……八神二等陸佐と話してシュレン君はスターズ隊の副隊長ってことになったの」

「八神二等陸佐と呼び辛いなら、わざわざ戻さなくていい。違和感が出てくる」

「じゃあ、そうさせてもらうね」

というより、スターズ隊副隊長になったのか。僕にしては随分と立派な位置に配属されたことだ。

こんな半人前の僕にしては。

「それで私がスターズ隊隊長でヴィータちゃんが副隊長だよ。他にもフォワードが二人いるから後で会ってね」

書類に目を通しているので分かるが、ティアナ・ランスター二等陸士とスバル・ナカジマ二等陸士だな。

先程言っていたもう一人の知り合いとはティアナ・ランスターのことだ。僕と彼女は、彼女が小さい時から知っている。
故に、ティアナがどんな人物なのか予想できている。

しかし、もう一人のスバル・ナカジマ二等陸士のことはよく知らない。
僕は彼女と直接会ったことはないが、中々面白い人だと思う。そうでなければ、ティアナのパートナーなど不可能だろう。

「さて、この後に訓練が入ってるんだけど、最初の訓練ではシュレン君は見学ね」

「普通に考えてそうだろうな」

僕なりのやり方で訓練をするというのであれば、見学などする必要はないのだが、ここは機動六課。
僕のやり方とは違う方法で訓練をしていることだろう。

だから、普通に考えて僕が見学するというのは当たり前のことだ。

「それじゃあ、訓練場所まで案内するよ」

「頼む」

善意は、素直に受け取っておこうか。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ高町なのは

私とヴィータちゃんはシュレン君を訓練場へと案内していた。

最初は、はやてちゃんから急な転入者が来るって聞いたから誰だろうと思った。

だけど、シュレン・ガルディンという名前を聞いた時にはその疑問は消えて、ただ単に驚いた。

それはヴィータちゃんも同じだったみたいで同じように驚いていた。

シュレン・ガルディンという名前を聞くのは7年振りで、それまで一切の居所が分かっていなかったから驚きもする。

でも、どんなに探しても手かがりの１つも見つからなかったのに、こうも簡単に再会してしまっては何と言うか……落ち込む。

「僕の部隊は本当に大変だ」

「お前の部隊の隊長ってレルデ・ローラルド少将なんだよな?」

「先程も言ったが、その通りだ。それにしても、よくあの馬鹿の名前を知っているものだな」

「……管理局では滅茶苦茶有名じゃねーか」

「否定はしない」

そんな気持ちを知らない当事者（シュレン君）は呑気にヴィータちゃんと会話をしていた。

昔からの面影は大して変わっていない。でも一つ言うと、昔に比べて少しだけ雰囲気が優しくなったかな。

出会った当初なんて、拒絶されてたって思うくらいだったし。

まぁ、このことを言うと間違いなく否定されるから言わないでおくけどね。

それよりシュレン君がレルデ・ローラルド少将の部隊にいるという方が気になる。

何といっても、その部隊は管理局でもかなり有名な部隊だから。

部隊長であるレルデ・ローラルド少将はＳＳＳランクの魔導師で、かなりのカリスマ性がある。

その為、必然的に有名になって二つ名なんてある。

「と言うより、よくあの人を馬鹿って言えるな」

「馬鹿に馬鹿というのは可笑しなことか？　レルデの細かいところまで知ったら、ヴィータもそう思うようになる」

「いや、それはないと思うぞ」

その二つ名は『暴徒』という二つ名。

私はローラルド少将に会ったことは無いからよく分からないけど、彼の性格や戦闘スタイルから、暴徒なんて付いたらしい。

う～ん、やっぱりレルデ少将に関してははやてちゃんの方が知ってるかな？

はやてちゃんの先輩らしいし……。

「まぁ、とにかく、僕の部隊は忙しい」

「でも、聞いた話だとそこまで忙しい部隊とは聞いてないよ？　忙しいのは部隊長であるローラルド少将だけだって聞いてるけど？」

はやてちゃんもそんなことを言っていたような気もするけど、それは違うのかな？

「ん？　……ああ、確かにその通りだな。だが、僕だけは特別に忙しい」

「どうして？」

「これは言う訳にはいかない。一応、このことは部隊長殿に口止めをされているからな」

私としては、そう言われると物凄く気になるんだけどな……。
でも、シュレン君は口が堅いから教えてくれないと思うし、口止めをされているというのなら尚更。

だから、このことは素直に引き下がるしかないみたいだね。
ちょっと、残念だけど。
それはヴィータちゃんも同じように感じているみたいで、気になっているような表情になっていた。

「ところで、ティアナ・ランスター二等陸士とスバル・ナカジマ陸士はお前の目から見てどう思う？」

「……にゃはは」

あまりにも急な話の切り替えに苦笑いをしちゃう。
私達の表情を見て話を変えなきゃと思ったのかな？　でも、逆にそうされると気になっちゃうんだけどね。
出来れば、秘密にしていることを問い詰めたいところだけど、さっきも考えた通り、それは無理。

「ティアナとスバルのことは言って無いよね。どうして知ってるの？」

「書類を読んだからだ。それに、ティアナとは小さい時から出会っている」

「へぇ、そうなんだ」

ということはティアナに会うのも、実に八年振りぐらいなのかな？

シュレン君の行方はまったく分からなかった訳だし……。

「で、僕の問いに対しての返答は？」

「二人ともセンスは良いよ。だから、私がこの一年間でどれだけ成長するか楽しみ」

「そうか。答えてくれてありがとう」

「一応、聞いておくけど、どうしてこんなことを聞いたの？」

「知り合いを応援したくなるのは悪い事か？　つまりはそういうことだ」

シュレン君の言葉から考えて、どうやらティアナとシュレン君は結構仲の良い関係みたい。

二人はいつ知り合ったのかな？

そんな質問をしようとしたけど、訓練場が見えたから聞かないことにした。

今ここで聞かなくても、後でティアナかシュレン君に聞けば分かると思うから。

「思ってたより大きな場所だな」

「うん。シャーリーが自慢してるくらいだからね」

「……シャーリーとは誰だ？　僕が見た書類ではその名前の隊員は居なかったと思うが」

「ああ、ごめん。シャーリーって言うのはあだ名。名前はシャリオ・フィニーノだよ」

「眼鏡をかけているあの人か。一等陸士でデバイスマイスターだった筈……」

昔から思っていたんだけど、シュレン君って記憶力が物凄く良いんだよね。

私は、大勢の名前を覚える時は書類を見ても実際に会ってみないと、名前と顔が一致しない。

中学校にいた時も、名前が混ざっちゃって大変な目に遭ったことを覚えてるし……。

そういう意味では、シュレン君の記憶力が欲しい。

……そうすれば、中学とかの定期テストでもう少し良い点数が取れたのに。

「……って、アレ？」

気がついた時には、シュレン君とヴィータちゃんに置いて行かれた。
余計なことを考えたからかな？
すぐに私は追いつこうとして小走りしようとしたけど、止めた。

「まぁ、いっか」

だって、焦らなくても意味がないと思うから。
それに、少し考えたいことがある。

それはシュレン君と出会った時のこと。
まぁ、出会った時って言っても、その時の私は気を失っていたから、出会った時のことは知らないんだけどね。
でも、私はシュレン君に助けられた。
覚えていなくても、その結果は事実。ヴィータちゃん自身もそう言ってたから。

そして、その後に送った入院生活。
今思えば色々と、シュレン君に迷惑をかけたっけ？
……まぁ、もしかしたら今も迷惑をかけてるかもしれないんだけどね。

これは8年前の出来事。
時間からしてみれば長い時間だけど、私はこの出来事を一生忘れることは無いと思う。

あの、雪の日からの出来事を。

第二話　『八年振りの再会』（後書き）

と、言う訳で第二話でした。

最初にシュレンが読書をしていた訳ですが、シュレンは大抵、哲学や人の思考（まぁ、これも哲学の内に入っているかもしれませんが……）などの本を読みます。
ある意味、この本おかげ？　でレルデと対等に会話ができるのかもしれません。

次にレルデに関することを少々。
えーと、まぁ、二つ名については中二病ですね、ハイ。
何だよ、『暴徒』って？

……痛い二つ名を考えてしまった自分に反省です。

そして、最後にシュレンとなのは達に関することです。
正直、今回の再会はあっさりしたものだったかな？　と思っています。
前はもう少し上手く書けてたと思うけどな、まぁ、いいや。

とにかく、今回の回で言いたいことはシュレン達の仲は結構いいということです。
次次回辺りから回想になると思いますので、細かいのは後々ということで、お願いします。

この小説に対する意見などありましたら、感想の方にどーぞ

では。

オリジナルキャラの設定（7月3日）（前書き）

簡単なオリキャラ設定です。

オリジナルキャラの設定　（7月3日）

名前　シュレン・ガルディン
年齢　１９歳
身長　１６８ｃｍ　体重　５９ｋｇ
髪型　黒色で全体的に少し長い。具体的には前髪が目にかかる程度で、後ろは肩に届くぐらい。
瞳の色　朱色
一人称　僕
性格　基本クール。しかし、人をからかったりお茶目な所もある。ドS。
階級　三等空尉
魔力光　紅色
魔法体系　ミッド式&近代ベルカ式

基本的にクールな口調で、生真面目な性格。その為、機動六課の前部隊――時空管理局本局特命隊――でも、結構想われていた。
しかし、シュレンは必要以上に関わろうとしてくる者には冷たく接するので、それを知っている隊員は気を付けている。とは言え、隊員達とシュレンの仲は比較的良いほうである。
また、シュレンは部隊長と言うわけでも無いのに部隊長より仕事をしているので、そのことで苦労している。
コンプレックスの“たまに女の子と間違えられる”というのは結構気にしている方でありストレスがたまる要因の一つ。部隊でそのことをからかわれていたりした。

例えば、レルデの指揮の下男性隊員が――女装させられた――シュレンを追いかけ回したりしたこと。

……余談ではあるが、その後シュレンはレルデを追いかけ回した。

戦闘面では日常生活以上に冷静になり、正しい判断で行動する。

しかし、それはあくまでもシュレン自身が正しいと思った判断（考え）であって、他人からしてみれば間違った判断と思われることもある。

名前　セレン

年齢　１５歳以上２５歳以下　……要するに秘密

身長　１５６ｃｍ　体重　３０ｋｇ異常（ｒｙ　……要するに秘密

髪型　銀色のストレートを背中当たりまで伸ばしている。癖毛として、横の部分は少し跳ねている。

瞳の色　金色

一人称　基本、妾（わらわ）。しかし、たまに私になる

性格　お茶目。天真爛漫。

階級　二等空佐

魔力光　白

天真爛漫な性格で自分の意見は基本的に曲げずに、そのまま突っ切

るような人。
シュレンが生真面目な性格に対して、セレンは不真面目。シュレンに仕事を押し付けたりしている。が、シュレンが本気で嫌がったらそれを止める。
シュレンとは、シュレンが四歳の時に出会い、それ以降基本的に行動を共にしてきた。いわゆる、幼馴染のようなもの。また、シュレンに好意を寄せているが、事情の為それを隠している。だが、隠しているつもりでも他人から見てみればそれはバレバレである。

戦闘面でも性格が変わるようなことも無く、格下と判断した場合は遊ぶ。
同等の力を持っていると判断した場合、本気で敵をつぶしに行く。

シュレンとセレン曰く、セレンは『バグキャラ』である。

名前　レルデ・ローラルド
年齢　２１歳
身長　１７６ｃｍ　体重　６７ｋｇ
髪型　短く切りそろえた髪を上げている
瞳の色　蒼色
一人称　俺
性格　自由奔放。
階級　少将

魔力光　蒼

時空管理局本局特命隊の部隊長であり、ミッドではかなりの有名人。
（ファンクラブが出来るほど）
シュレンの仕事が増えている元凶。レルデが仕事をサボるので、シュレンがやっている。
仕事関係ではふざけているレルデだが、レルデ自身が気に入らないことが目の前で起きていると途端に真面目な性格になる。
例えば、八神はやてとの出会いなど。

部隊を無茶苦茶な方法で盛り上げている内に何故か部隊自体も有名になっており、特命隊に入隊できればエリート扱いされる程。
正直な話、レルデ自身も何でこうなったかわからない。
また、少将という階級の為、レジアス中将などの有名人とも関わりを持っている。

戦闘面では、暴徒という二つ名通りに暴れるような戦闘スタイル。
実はバトルマニア。
シュレンとセレン曰く、『最強キャラ』である

オリジナルキャラの設定（7月3日）（後書き）

という訳で設定でした。
ネタバレにならないぐらいのことを書いているので、必然的に短くなっています。
ですので本編が進み次第、少しずつ追加していきます。

この小説に対する意見など、ありましたら感想の方にどーぞ。
では。

第三話　『雪の日の出来事』（前書き）

次次話とか言ってたのに次話に回想って……
予定通りに投稿しろよ、自分。

では、第三話『雪の日の出来事』始まります。

第三話　『雪の日の出来事』

Ｓｉｄｅ――――

雪が降っている。雪は何処までも白く、綺麗なものだ
無数の小さな白い雪は落ちていき、やがて、世界さえも白に染めていく。しかし、白に染まっていた世界の一部が、赤く染まる。
世界からしてみれば、赤く染まっている部分は極僅か。この程度では、殆ど変わらないと言っても良いだろう。

では、赤く染まった部分は何で染まった？

答えは――――血だ。

「……っ！！」

高町なのはがアンノウンによって撃墜され、血を流している。鮮血によって、雪の白色を赤色に染めたのだ。
そう考えれば、今のこの状況は異常なものだと言えるだろう。

重力によって落ちていくなのはに、アンノウンは止めを刺す為か、なのはに近づいていく。
撃墜されているなのはには、それを抵抗する術も無く、近づいてくるアンノウンを見ていることしかできなかった。

そして、その光景を見ているヴィータもなのはを見ていることしかできなかった。

「とどけぇえええええええええっ！！」

ヴィータが必死になのはに向かって手を伸ばすも、わずかの所で届かない。それでも必死に手を伸ばすが、結果は変わらなかった。

だから、見ていることしかできないのだ。

ヴィータの頭に最悪のシナリオが想像させられる。

あのままアンノウンがなのはに止めを刺して、なのはの命が散るというシナリオを。そんなものは認めたくない。させたくないのに手が届かない。

あと、少しなのに。

（止めろ止めろ止めろ止めろやめろやめろっ！）

ヴィータがどれ程強く願っても、その願いが叶う事は無く、無残にもガジェットは刃を振り下ろした。そして刃は身体を貫き、血が溢れ出す。

その血はなのはの白きバリアジャケットを――雪と同じように――赤く染める。

ヴィータは最悪の出来事が現実になってしまったと思い、絶望感が走る。

しかし――

「……よかった」

――そんな声が聞こえた。

何処からと聞かれれば、なのはがいるところからだ。

注意深く見てみると、誰かがなのはを庇っていた。容姿などから考えて男だろうか。しかも、高町なのはと同じ子供だ。

その事実がヴィータにある絶望感を捨てさせた。しかし、今度は――なのはを想っていた感情とは――別の感情が湧いてくる。

ガジェットの――少年の漆黒のバリアジャケットを貫いていた――刃は腹を刺したままの状態になる。

子供の身体で、大きな刃が腹を刺しているということは、それは内蔵まで貫いているということで、口と腹からかなりの量の鮮血が溢れ出す。

「……ぐっ！　……――するっ！」

そんな状態であるにも関わらず、少年は身体を無理矢理に捻る。

当然、そんなことをしてしまったら刃も捻れ、余計に傷を広げる。

だが、それよりも、なのはを庇った少年はアンノウンを破壊することを考えた。

自分の痛みを堪えて。

「――、来い」

少年がそう言うと、手の周りに一つの“黒い刀”が浮かび上がり、それを力の限り握り締めた。
そして、黒い刀をアンノウンに突き刺す。
それは正直に言えば、綺麗な斬撃などではない。ただ、力に任せて、アンノウンを破壊するということのみを考えて、突き刺しただけだ。

「……っ！？」

しかし、それだけでアンノウンは確認するまでも無く破壊され、爆発する。

アンノウンに最も近いのはなのはだ。――その為、なのはを爆風の被害に遭わないよう――少年はなのはをヴィータのいる方向へと投げた。
少年もその場から離れたかったのだが、アンノウンの刃が少年を貫いているままの状態である。
つまり、離れることが出来ず、零距離で爆発を受けるということである。

「お前っ！」

その光景を見ていた者からすれば、少年は無事ではすまないと思うだろう。

何といっても、零距離で爆発を受けているのだ。機械の小さなパーツや、爆風……色々な物が少年を襲う。
現に出てきた少年は、あらゆるところにアンノウンを構成していた鉄などが突き刺さり、血まみれになっていた。
しかし、それは背面の方だけ。
少年は体を回転させ、何とか顔などに鉄が突き刺さらないようにしたのだ。

「……」

とは言え、今の少年は気を失っており、そんなことをした記憶は覚えていないだろう。
そして、気を失っている為、少年は地面に向かって落ちていく。

「おいっ！」

もちろん、それをヴィータが助ける。
身体が小さいヴィータではなのはと少年の二人を抱えるというのは難しいが、それでも何とか支える。
なのはを庇ってくれたのだ。あそこで少年がいなければアンノウンの刃はなのはを突き刺して、高町なのはという命は散っていたことだろう。
だから、だからこそ、今のヴィータには少年をできる限り早く治療することを考えた。
死なれてしまっては困るのだ。

ただ一方的に助けられ、それによって命を散らされるというのは。

「……まだ逝くんじゃねぇぞ」

「……」

少年に向けた言葉に、返事は返ってこなかった。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

高町なのはと高町なのはを庇った少年、シュレン・ガルディィンは同じ病室にいた。

二人は互いに無言で、――第三者から見れば――気まずい雰囲気が

流れている。
　二人は同じ病室ではないが、高町なのはが車椅子を使ってシュレンの病室を訪れた。故に、シュレンはなのはの方から、会話をしてくることを待っているのだが、ジーっとしているだけで会話をしてくるような雰囲気は無い。

「……」

「……」

「黙ってるだけなら、消えて」

「……っ！！」

　シュレンの言葉に拒絶が含まれているとなのはは思い、そのことが余計に自分自身を責める要因になった。
　しかし、シュレンは拒絶していると言うわけではなく、何かを言いたそうな表情をしては止め、何かを言いたそうな表情をしては消えるという無限ループが妙にイラついたからそう言ったのだ。

「消えないなら、早く何か話してよ」

「……」

「それで言いたいことは？」

「……うん。……えっと、その」

もじもじしながら言うなのはの姿にシュレンはイライラし始める。
その感情を感じたのか、なのはは勇気を出して言おうとした事が言うことができなくなってしまう。

その様子を見たシュレンはさらにイライラして、その様子を見たなのはは黙りきる……。こんな無限ループが続き、シュレンは内心溜め息を吐く。
相性で言えば最悪だろう。
一方が自己嫌悪して、もう一方がその姿を見てイライラするというのは。

「さっきも言ったけど、黙ってるままなら消えろ」

「……っ！」

「もういい、消えろ。……それと勘違いしてるようだから先に言っておくけど、今回の件で悪いのは僕だ」

「え？」

予想もしていない言葉になのはは驚く。

「だから、今回の件で悪いのは僕だ。原因は君にあるかもしれないけど、あの時にアンノウンを貴方を庇う前に破壊できれば問題無かった。それは僕のせ――」

「違う！　これは私のせいだよ！」

シュレンがそこまで言った時、なのはは我慢を堪えることが出来なくなった。

当然だろう。自分のせいである筈なのに、それはシュレンのせいだと言っているのだ。

自分（わたし）さえいなかったら、シュレンは怪我をしなかった。それなのに悪いのはシュレンと言っている。

それじゃあ自分（わたし）が悪くないと言っているように思えてしまう。

「私が皆の言ってる事を無視し続けて無理して頑張って！　頑張って皆から見放されないようにしてたのに！　その結果がこれだよ！　悪いのはシュレン君じゃない！」

気がつくと、いつの間に怒鳴り声を上げていた。

しかし、言葉の途中で止める気など無い。先程の様な気まずさも、今は気にしてる場合でもない。

言わなくちゃいけない。

ただそれだけがなのはを支配していた。

「悪いのは私だっ！」

呼吸も整えていない状態で咄嗟に怒鳴るのは思った以上に息が上がるもので、肩で息をするようになる。

一方、その声を聞いたシュレンは驚いたような表情をするが、すぐに納める。

「いいや、悪いのは僕だ」

そして、即座になのはの言葉を否定した。

あくまでも悪いのは自分自身だと言いきる。

あの時、絶対の確率でアンノウンを破壊できたと言う訳ではないが、それでも破壊することができた筈だ。

そう考えたからこそ、あの時アンノウンを破壊しようとした。しかし、結果としては失敗してシュレンとなのはの二人が怪我をしている。

だからこそ、シュレンは自分が弱いからなのはにまで怪我をさせたと考えているのだ。

「違う！　私だよ！　悪いのは私だっ！」

この言葉を聞いたなのはも黙ってはいない。

責任の押しつけ合いと言うものがよく行われる世界ではある意味、このような事は稀なケースなのかもしれない。

これではまるで、責任の押しつけ合いではなく、その真逆のことをしているのだから。

「……これじゃあ埒があかないな。言っておくけど、僕は全ての責任が僕にあるとは言ってないからな。さっきも言ったでしょ？　原

因は君にあるかもしれないと」

平行して続く言い合いに終わりがないと思ったシュレンはそう妥協する。しかし、それだけで頑固者の頭では納得できないらしい。

その証拠が――

「……シュレン君に責任は無い！　悪いのは全部私だ！」

――未だに反抗するなのはがいるからだ。

そのことで、駄々っ子と、シュレンはそう思ってしまうのも仕方がないと言えば仕方がないのだろう。

「……君と話し合うのは面倒。まぁ、いいか」

だからこそ、シュレンは心底どうでもいいようにそう言った。

別になのはが悪いと言ったとしても何が変わるのだろうか。

何も変わらないのだ。

シュレンとなのはのどちらが悪いと決めつけてもそんなものは意味が無い。

先程はシュレンも自分を責めるような事を言ったが、それは話を進ませる為で、なのはが思っている程、シュレンはどちらが悪いなどということに興味が無い。

まぁ、とは言っても、罪悪感というものならば有るが……。

それはこの際、置いておこう。

「どうしてシュレン君は私を怒らないの！　私のせいで怪我をしたのに！」

「別に怒った事で意味がある？　君を罵倒して、恨んで、憎んで……

……

そういうことをするのに意味がある？　意味なんて無い。例え、君がそうされたいと望んでも、そんなものは反省とは言わない。ただの自己満足だよ」

「っ！」

「だから僕は怒らない。罵倒しない。恨まない。憎まない。……ただ、それだけ」

シュレンがどれだけ言っても、なのはは納得できない。

今まで悪いことと認識した時には謝って生きてきた。それなのに、悪いと思っているのに言葉を受け取ってくれない。

そもそも謝ることすらできない。

それは今まで生きてきたなのはの常識を一方的に破るものだった。

「本当は私が憎くて憎くて仕方がないんでしょ！　私を庇わなかったら良かったって思ってるんでしょ！　私を傷つけたいって、本当は思ってるんでしょ！」

だからこそ、なのはは今まで考え無い様な危険な考えまで出てくる。

今までなのはを知っているフェイトに、はやてや管理局の人間からしてみると驚くような言葉だろう。誰もがなのはの口から“傷つける”なんて言葉を言うとは思ってもいないことだ。

しかし、なのはだけが自分の常識を破られていると言う訳ではない。何せ、この病室にはなのはとシュレンがいる。

シュレンもまた今までのシュレンを知っているものから見てみれば驚くような事を考えていた。

「……そんなに傷つけられたいなら、いっそのこと死んでみるか？高町なのは」

「え？」

「そんなにも自分の身体に傷をつけられたいなら殺してやろうかと言っている。……今すぐ僕の手で」

部屋の気温が一気に下がったような錯覚がするほどまでに、鋭い殺気がシュレンから溢れ出す。

その威圧はなのはを襲い、恐怖心が芽生える。

なのはは戦いの中で、殺気を何度も感じることもあった。しかし、それはどれも明確な殺意を持った殺気ではなく、どちらかと言うと、敵意に近いものだ。

だから、現在シュレンが出しているような殺意を込めた殺気を感じた事は無いのだ。

「殺気で怖がるようじゃ話にならない。そんな甘い覚悟でくだらないことを考えない方が良いよ。これは警告」

その殺気は部屋の中だけではなく、外で待っていたヴィータにも届き、感じた事の無い威圧にヴィータは病室に駆け込んで入って来る。

シュレンから感じる威圧にヴィータはすぐさま二人を会話させるのは危険と判断し、なのはをこの部屋から出させることを考えた。

「丁度いい。この頑固者を僕から引き離せ。このままだと、僕は本当にソイツを傷つけることになるから」

「言われなくても分かってる！」

「……それと、君はもう二度と僕と関わらない方が良い。互いに冷静な行動ができなくなる」

ヴィータはシュレンの言葉の途中であったが、なのはを部屋の外へ連れて行き会話を終了させた。

「……ごめん」

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

なのはとシュレンが言い合いをして後日。
シュレンは変わらずにベッドで横になっていた。ガジェットに貫かれた傷はある程度回復しているが、それでも危険であるというのは変わりない。
何せ、内臓がいくつも潰れたのだから。
医師曰く、何故死ななかったのかが不思議だと思っているくらいに。

まぁ、その状態から傷を癒すことが出来た医師も十分に凄いことではある。

「……」

無言で病室に取り付けられたテレビをじっと見つめる。

やっているのは高町なのはがガジェットに撃墜されたことだ。
時間が経つに連れ、事実が少しずつ明かされているが、1つだけ明かされていないところがあった。
それは、高町なのはを庇った少年……シュレン・ガルディンという人物の存在は伝えられていないのだ。

どうしてこのようになっているか。
シュレンに心当たりがないことも無い。寧ろ、心当たりしかないと言っても過言ではない。

「……こうしたのは――」

しかし、その思考を中断させて病室の扉の方を見た。
何故なら、未だに車椅子での生活を強いられている少女がこの病室に向かって来ているからだ。
つまり、高町なのはがシュレンに会いにきているということ。

前回の会話を振り返る。
互いに冷静でいれなくなり、なのはは考えられないようなことを考え、シュレンは本気でなのはを傷つけようとした。
シュレンはそのことでは申し訳ないと思っているし、できれば謝罪したいとも思っている。

「どうして此処に来た？　貴方に僕とは関わらない方が良いと言った筈だが」

しかし、シュレンはなのはが入って来ると同時に拒絶を含んだ声で言う。
それ程までにシュレンとなのはが会話をするのは危険だと、シュレン自身が判断しているのだ。
そしてシュレンがなのはの目を見た時、驚いた。

「少し、お話させて」

何故なら、それは前回の様な弱い意思は無く、何かを決意したような強い瞳になっていたからだ。

「何故？　また前回みたいに言い争いになりたいのか。言っておくけど、僕は嫌だ」

「前みたいにはならない。だから、お話させて」

「前回のようにどちらが悪いことを言い争うつもりは無い」

「今回来たのはその理由じゃないよ」

「……そうなの？」

前回の会話を振り返り、てっきり前と同じ理由で来たのかと思っていたので、理由が外れ少し考え込むシュレン。しかし、どれだけ考えても理由が一つしか出てこない。
どう考えても、先程の理由しか思い浮かばないのだ。

その様子を見ていたなのははは口を開く。そして、なのはの言葉にシュレンは珍しく混乱した。

「ありがとう」

その言葉にシュレンは固まった。
シュレンには礼を言われるような事をした覚えが無い。寧ろ、前回の会話の時に怒らせてしまったのだ。
礼を言われるようなことはしていない筈だ。

「……どうして、礼を言っている？　頭でも可笑しくなった？」

「まだ、助けてくれたお礼を言って無かったでしょ？　だから、ありがとうって言ったの」

言われてみれば確かにその通りだが、だからと言って礼をするものだろうか。
シュレンはそう思う。
シュレンが今まで生きてきた時間の中では、怒らせた相手に礼を言われるということは無かった。
少なくても、シュレンは自分を怒らせた相手に向かって礼をするような人物ではない。まぁ、場合が場合による話ではあるが。

「……どういたしまして」

「うん。それと、前のお話の時はごめんね」

「いや、君が悪い訳じゃない。そう言わせるような発言をした僕が悪い。だから、その件については素直に謝罪する。すまなかった」

「それじゃあ、お互いに悪かったということで、いいかな？」

「それがいい」

再び並行していきそうな話になったが、そこはなのはが妥協案を出し、互いにそれで納得した。

しかし、本音を言えば、この件はシュレンだけが悪いということにしたかった。

まぁ、それが出来ないと理解しているから納得したのだ。

「あ、そう言えば、未だに自己紹介をしてなかったね」

「……うん、そうだね」

「私の名前は高町なのは。これからよろしくね」

「僕は……僕の名前は、シュレン。シュレン・ガルディンだ。これからよろしく」

「うん！」

無邪気に笑うなのはの姿にシュレンは先程まで抱いていた感情が無くなっていくのを感じる。
シュレンはなのはを拒絶しようとした。それは、シュレンが高町なのはという人物に恐怖していたからだ。
何処までも真っすぐで正直ななのは。
それに対して、自分(ぼく)はどうだろう？
何処までも意地汚く、全てを騙している自分(ぼく)。
正直、自分(ぼく)にとって高町なのはという人物は眩し過ぎる
だからこそ怖かった。自分がその光を暗くしてしまうのではないかと、そう思った。
でも、高町なのははその光を暗くする事は無かった。
自分には無い、強い人間だ。

「自己紹介したところで悪いが、自分の病室には戻らなくて良いのか？　友達が待っているんだろ？」

「え～と、今日はもう帰っちゃったから大丈夫だよ」

「……そうか」

それから二人は暗くなるまで会話をした。
例えば、好きな食べ物のこと、嫌いな食べ物のこと。他には趣味などといった、他愛無い話を。
まぁ、二人は子供であるから、そのような話をするのは当たり前なのだが、何というか、二人とも子供にしては大人びているので、そ

んな話をするのは――こう言ってしまっては悪いと思うが――違和感が出てくる。

とは言え、二人にとっては楽しかった時間で変わりない。

まぁ、たった三日間の間だけだったが。

第三話　『雪の日の出来事』（後書き）

と、言うわけで第三話でした。

……これが一応、高町なのはとシュレン・ガルディンの出会いです。
とは言っても、結構短くしました。本当はもっと書きたい位なのですが、とある事情であまり深くは書きませんでした。
なので、シュレンとヴィータの会話とかは本編では書いていません。

さて、シュレン口調が若干崩れている件ですが、これは仕様ですのでそこまで気にしなくてもいいです。
口調については、後々語られますので（……予定ですが）

この小説について、リクエストとか分からないことなどありましたら感想の方にどーぞ。
では。

……あ、それとＰＶ１００００行きました。ありがとうございます！

第四話　『偽りの言葉』（前書き）

今回は前回に引き続き、回想シーンなのですがメインキャラがなのはからヴィータに変わっています。

では第四話『偽りの言葉』始まります。

第四話　『偽りの言葉』

Ｓｉｄｅ――――

怪我の為、病室の備えられたベッドに横になっているシュレンは、近くの椅子に座っているヴィータと会話をしていた。
それはシュレンとなのはの会話の時のように気まずい雰囲気は無く、仲良く会話をしているように見える。

「やはり、殺気まで向けたのはいけないよな。正直、罪悪感がある」

「確かに結構濃密な殺気だったぞ。
アタシはお前となのはの会話を全部聞いてた訳じゃないから分からないけどよ、そこまでお前を怒らせるようなことをなのはが言ったのか？」

二人の会話はシュレンとなのはが喧嘩をしたことについてだ。
この時は既にシュレンとなのはは和解していたので、シュレンとなのはの関係は良かった。
だから、ヴィータにこのことを話しても特に問題は無い。

「いや、なのははそんなことを言っていない。僕が少し子供みたいな考えをしたのがいけない」

「お前も子供だろ？」

ヴィータのその言葉を聞いて、シュレンはヴィータのことをじーっと見る。具体的には頭から足までじっくり。
正直、ヴィータからしてみれば気持ち悪いと言っても良いほどに見てくる。
そしてシュレンはじーっと見のを止め、ヴィータの目を見る。

「……確かにその通りだが、ヴィータも子供だろ？」

そして出てきた言葉はそんな言葉。
どうやら、先程の視線はヴィータの容姿を確認する為だったようだ。

「アタシは大人だ！」

「だけど、見た目的にはロリキャラ――」

「それ以上は言うな。アタシも色々悩んでるんだ！」

このようにして、シュレンとヴィータは既に馴染んでいた。
しかし、突如ヴィータの表情が一瞬ではあるが変わり、シュレンに質問を投げかける。

「突然聞くけどよ、シュレンの魔導師ランクは何だ？」

「僕の魔導師ランクはB。それは前から知ってると思っていたが？」

「いや、なのはを庇ってくれた時のお前の動きは明らかにBランクを超えてるものだったからよ、ちょっと気になってな」

「……あの時は自分でも驚くぐらいに上手く動けたと思う。刃が僕を貫いたままだったが」

当時の事を思い出す様にしながら言うシュレンに対して、ヴィータは苦笑いするシュレンを注意深く観察していた。

あの時、あの場所でのシュレン行動を全てヴィータは見ていた。

身体を大きな刃を貫かれても持続する集中力に加え、身体を回転させ黒い刀を出した時と言い、その後の動きと言い……

それはシュレンが言っているBランクというのと一致しないように思えた。

「……そうか」

「まぁ、今はリンカーコアが少なくなっているから、Bランクよりも下回ってるとは思う」

シュレンの言葉の言う通りシュレンのリンカーコアは、なのはを庇った時から大分無くなってしまっているので、ヴィータには確認する術がない。

一方、シュレンはヴィータの視線が気になる。
あの時の動きはBランクとは思えないようなものだったというのをシュレンは自覚している。しかし、あの様にしなければ高町なのはという存在はガジェットによって消されていたのも事実である。
ランクを偽るのと高町なのはの命とでは、シュレンは迷わず高町なのはの命を救う。

「だけど、リンカーコアは回復するって医者が言ってたから問題は無い」

「お前、アタシに嘘吐いてねーか？」

シュレンはヴィータのその言葉に虚をつかれた。
そのせいで一瞬だが表情が変わる。それをすぐに納めたシュレンだったが、シュレンのことを注意深く見ていたヴィータがその表情の変化を見逃すことは無かった。

「……やっぱり嘘吐いてたんだな」

「何のことだ？　別に僕は嘘は吐いて無い」

「嘘に嘘を重ねると余計に怪しく見えるぞ」

その言葉でシュレンは言い訳を考えるのを止めた。
何を言っても信じてくれる可能性は限りなく低いと思ったからである。とは言え、シュレンはヴィータに真実を言う気は無い。

言ってしまったら、高町なのはが自己嫌悪に陥る危険性があったからである。

「……確かに、僕は嘘を吐いてるけど、ヴィータに本当のことを言う訳にはいかないな」

真実を伝えたくない。知らせたくない。

そう思っているから、シュレンが真実をヴィータに言う事は無い。

一方、その決意のようなものを感じ取ったのか、ヴィータはシュレンから本当の事を聞くのを止めた。

「そうか。……なら無理には聞かねーけどよ、もし困ったことが起きたらアタシやなのはを頼れよ」

ただ、その一言を言ってヴィータはこの件からは引いた。そして、そのことに感謝するシュレンだった。

その後も、シュレンとヴィータは会話をした後ヴィータは病室に後にしたのだった。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅヴィータ

アタシはシュレンとの会話を終わらせてから、外の空気を吸っていた。
なのはと話しても良かったけど、今はシュレンが言った言葉の方が気になる。アイツが嘘を吐いているということについてだ。

アイツは一体何を隠してる？
さっきは無理には聞かないとは言ったけど、あの時のあの表情はどこか寂しそうなものだった。
だから聞きたい。
アイツが何を隠しているのか？

「とは言っても、シュレンが隠していることを知る術はねぇから、どうすることもできねーけどな」

誰もいない病院の外で1人呟く。
それは、何となく口に出した物で返事が返ってくる筈なんてない。
だからこそ、柄にもない独り言なんて呟いた。

それなのに

「妾の会話相手になってくれないかの？」

突如、そんな声が聞こえた。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ――――

返ってくる筈も無い独り言に、返事をしたセレンが木の上に立っていた。

木の高さは１０メートルと言ったところで、かなり高い場所にいる。

それにも関わらずセレンは木から降り、衝撃を和らげる為に膝を曲げることもせず、高い場所から降りたとは思えないほど――何事も無かったように立った。

髪は銀色のストレートで背中に届くまで伸ばしている。癖毛として横側の髪は跳ねているが、ただのストレートでは出てこない雰囲気が出てくる。

キメ細かな肌に加え、眼や鼻、それに唇などの顔のパーツも驚く程

綺麗に整っている。さらに、日本人では考えられないような金色の瞳に、服の上からこれでもかと押し付ける胸。

……ハッキリ言って、どこのお嬢様だと言いたいぐらいの容姿だ。

そんな彼女の視線はヴィータを捉えている。

「初めまして、とでも言っておこうかの」

何処までも余裕な表情で呑気に言いながら――――気がついた時にはヴィータの目の前にいた。

「グラーフアイゼン！」

セレンとは違いヴィータは焦った。

セレンの存在に気付くことができず、いきなり目の前に現れたからだ。しかも、ヴィータは目の前にいるセレンは、今まで感じたことがないような威圧に驚く。

だからこそ、ヴィータはセレンから距離を取り、グラーフアイゼンをセットアップさせた。

「……妾（わらわ）が何もしていないのに、攻撃してくるか？　妾（わらわ）は無意味な戦いはあまりしたくないのじゃが」

「うっせぇ！　第一、そんな威圧してる奴だけには言われたくない！」

「おっと、やはり今の妾が会話するとそうなるか。まぁ、よい」

ヴィータは注意深くセレンのことを見て、いつでも戦闘ができるようにグラーフアイゼンを構えた。

今まで、実力が上の相手でも勝つこともあった。それはヴィータの諦めない精神というのがあったからこその勝利でもあった。

「……っ!?」

しかし、目の前にいるセレンに“勝てる”などとは思えない。

雪の日で高町なのはの命が散ることに恐怖をした時とは別の恐怖がヴィータを渦巻いていた。

長い時間を生きてきている守護騎士だが、ここまで禍々しい空気は初めてだ。

「どう見ても妾は敵として見られているようじゃな。……やれやれ」

「……」

「妾はただ、お話がしたいだけなんじゃぞ？　シュレン・ガルディンについての話をな」

「え？」

シュレン・ガルディンについてと聞いて、ヴィータは一瞬止まる。
シュレンに関してはセレンが現れる前に考えていて、気になっていることがあるのだ。
だから、セレンの会話に応じようと考えた。

しかし、ヴィータは警戒心を解かないまま、一つの疑問を考える。
それは、どうして、コイツ(セレン)がその名前を知っているのかというものだ。
現在、テレビなどで放送されているのはどれも、高町なのはに関することのみで、シュレン・ガルディンについては名前も、シュレンがいたという事実さえ伝えられていないのだ。
とはいえ、ヴィータはその理由を知っている。

何故なら、ヴィータ自身がシュレンの存在を管理局の者に伝えなかったからだ。
別に行為的にしたことではない。
ただ、あの時は、シュレンの傷が余りにも酷いもので、治療に専念させなければ危険と判断したのだ
故に、シュレンは管理局の者には知られていない。
まぁ、その後に伝えることも可能ではあったが、シュレンとなのはの件などで伝えることができなくなっていた。

「どうして、その名前を知ってんだよ?」

そして、流されていない情報を知っているということは、コイツ(セレン)があの現場にいたということ。そして尚且つ、コイツ(セレン)がシュレン・ガルディンと知り合いでなければならないということだ。
この2つの条件に当てはまる人物がいるのだろうか?

仮にいたとしても、あの現場でシュレンがガジェットに貫かれた時には、じっと見ていただけなのか？

そんな疑問がヴィータの頭をあちこち回る。

「それは妾がシュレンの知り合いだからじゃ」

「……ならあの時、アイツがやられてた時に駆け付けようともしなかったんだ？　知り合いなんだろ」

「シュレンは確かに妾の大切な人じゃぞ。だから、その現場を目撃していたら妾がアンノウンを破壊しておるよ。じゃが、妾はその時には現場にはいなかったのじゃ。故に、駆け付けられなかったということじゃ」

「ならどうして、アイツが怪我をしたことを知ってんだ？　今、流れてる情報だとアイツの名前すら出ていないんだぞ」

セレンの言葉――が全て本当だと仮定して――から考えると、セレンは現場に居らず、誰からもシュレンのことを聞かず、１人でここまでやってきたということになる。

もし、セレンの言った全ての事が本当だとすると変な話だ。

一体、どこからセレンはシュレンが怪我をしたという情報を得たのだろうか。

「お主から見てみれば、妾は滅茶苦茶怪しい奴だというのは自覚しておる。じゃが、情報のソースは教える訳にはいかないのじゃよ」

「そうかよ」

ヴィータは警戒心を残したままではあるが、会話に応じることにした。

信用は出来ない。

しかし、話をするだけの価値はある。

少なくても、セレンはヴィータよりはシュレンのことを知っていそうなのだから。

「では、単刀直入に言うぞ」

セレンは一旦、瞳を閉じて深呼吸をしてから瞳を開ける。瞳を開けた後の金色の瞳は先程より鋭く、深いものだった。

そして、その視線をヴィータへと向けて言う。

「高町なのはのせいで、シュレンが力を失った」

と。

それは余りにも淡々とした口調だった為、一瞬だけヴィータはセレンが何と言ったか理解できなかった。

しかし、時間の経過と共に、次第に理解していく。

「……っ！？　それってどういう意味だよ！？」

「そのままの意味じゃ。シュレンの力が失った……いや、扱えなくなったというのが正しいか」

ヴィータの動揺を見ても、どこまでも冷静にセレンは言う。

それ以前に、セレンはヴィータがそう言ってくることを予想していた。故に、どれだけ大きな声で言われようとも、どれだけ怒鳴りつけられようとも、言う言葉は決まっていた。

「そんなもん実際に調べてみないと分からねぇだろ！」

「いいや、妾には分かるぞ。妾達は共に行動をしてきたからの。あやつの身体の変わり具合が分からん訳が無い。それに、嘘だと思うのであれば実際に確認すればよかろう」

ヴィータはこの言葉でシュレンとセレンが知り合いであると言うことに確信し、それと同時に何とも言えない感情が出てきた。

今回の件でなのはを無理にでも休ませるべきだった。

それなのにそれが出来ず、結果として、なのはは怪我をしてシュレンは力を失った？

無様だ。自分（アタシ）がもっとなのはを見てやれれば、こんなことにはならなかった。

と、そんな考えがヴィータを渦巻かせる。

「ま、お主には確認することはできないじゃろうがな。

それと、1つ言っておくが、別に妾はこのことでお主達を傷つけたりせぬ。逆に、妾はお主達には感謝しているくらいじゃ」

「……？」

セレンのその言葉が理解できなかった。

知り合いに怪我をさせたのに感謝されるよりも憎まれたりするものだと、そう考えているからだ。しかし、セレンは感謝していると言っている。

嘘を言っているようには見えない。

それなら、コイツとアイツの仲は悪かったのかと思うヴィータだが、即座にそれも違うと切り捨てる。

「仲が良いのに、どうして怪我をさせた相手に感謝すんだよ？」

何故なら、先程セレンが言ったのだ。

『妾達は共に行動をしてきた』と。共に行動をするなら、ある程度の仲は良い筈だ。

仲が悪い者同士で行動を共にするメリットがないからである。

仲には例外というのもあるだろうが、それはこの際無視して考える。

それなら、出てくる結果は1つ。

コイツ（セレン）とアイツ（シュレン）の仲が良いということだ。

「……昔からシュレンは無茶をする奴だったのじゃ。どんな状況に立たされても自分を犠牲にして他者を救う奴じゃ。毎回毎回傷付い

て、見ている妾にとっては心配で仕方が無かった。それなら、シュレンに力が無くなったらどうなるのじゃろうかと、妾はそう考え始めた。そして、今回の件じゃ。……これでシュレンは無茶をすることが無くなると思ったから妾は感謝したのじゃよ。じゃが、別に感謝だけでは無いぞ。大切な者を傷つけられて怒ってもおる」

「だからって、感謝するものか？」

「普通の者なら感謝はしないじゃろう。じゃが、妾は少し狂っているからの。そう感じているのじゃ」

セレンは苦笑いしながらそう言う。

一方、その言葉を聞いていたヴィータはセレンに対する恐怖心が増す。何に恐怖しているのかは分からない。

しかし、ヴィータは確実にセレンに対して恐怖心を持っていた。

そこで、セレンは何故か溜め息を吐く。

「ハァ……妾はこの辺で消えるとするかの」

「その前に1つ聞いて良いか？」

セレンヴィータに背を向けようとした時、ヴィータが質問をする。

先程からずっと気になっていたのだ。

どうして、会ったばかりの自分にシュレンのことを話すのか。

どうせなら、自分よりなのはに言った方が良い筈だと、ヴィータは考えていた。

「どうしてアタシにこの事を言った？　アタシよりもなのはに言った方が良いだろ」

「妾から見てみて、高町なのはは自己嫌悪が強い奴と見た。そんな奴にこんな事を言うと、自分を責める。そんな姿は見たく無かろう？」

そう言われ、実際に想像をしてみる。あの純粋ななのはが暗くなっている姿を。

どんな想像をしたのかは分からないが、ヴィータの中ではそれは余程ダメなものらしく、すぐに想像を終わらせた。

セレンはその姿を見て、愉快そうに笑う。

「じゃから、愚痴も込めて偶然通りかかったお主に言ったということじゃ」

「そうか。引きとめて悪かったな」

その言葉を聞いてセレンは歩きだす。

何処に行くのかは分からないが、この場所から離れるのだろう。

そう思っていたらセレンが足を止め、こちらを向いてきた。

「そう言えば妾は自己紹介をしていなかったの。妾の名はセレンじゃ。会う事はあまり無いと思うのじゃが、よろしく頼むぞ。鉄槌の

騎士ヴィータ」

「どうして名前を知ってる？」

「その質問には答えられん。じゃが、お主は有名人じゃろう？　そう考えれば普通ではないか？」

確かに最もらしい理由である。

事実にしろ言い訳にしろ、それならば筋が通っていて、納得というものが出来るだろう。とはいえ、間違いなく今言った言葉は言い訳であるということは理解できる。

元々、このことを聞かれるのを想定していたかのような言葉だ。

「それと、すまぬな」

最後にそう言って、セレンは姿を消した。

何故、誤ったのかは分からない。もしかすると、先程言っていた感謝というのに関係があるのかもしれないが、少なくても今のヴィータには何故謝られたか分からなかった。

しかし、今はそんなことはどうでも良い。

確かめなければならないのだ。

セレンの言葉通りにシュレン・ガルディンの力が消えてしまったのかどうか。

だからこそ、ヴィータは急いでシュレンがいる病室へと急いだ。

しかし――

「……どういうことだよ？」

――病室には、シュレン・ガルディンの姿は消えていた。

第四話　『偽りの言葉』（後書き）

と、言うわけで第四話でした。

今回は前書き通りヴィータの方に注目して書いてみた訳ですが、結構難しいです。

それと、最後の方は何かと早い展開になって申し訳ないです。

……えっと、本編の回想は今回で終わりですが、次話でサイドストーリーを一話か二話はさむ予定です。

この小説に対する意見などありましたら、感想の方にどうぞ。

では。

Side story 2（前書き）

……短かっ！？
書いてビックリする程の短さです。

では、サイドストーリー始まります。

Side story 2

Side――

ヴィータがシュレンの使っている病室――正確には、使っていた病室――に戻ってみると、シュレンの姿が消えていた。
病室にいるのはヴィータと、同じく目の前の事に呆然としている高町なのはの姿だけだ。

病室の状態は酷いものであった。
シュレンが使っていたベッドや状態を測る機械などが全て破壊されていたからだ。
まるで、爆発でもあったかのように。木端微塵に。
しかし、そんな爆発音など聞こえなかったし、仮に聞こえたとしてもその時はセットアップした状態で病室（ここ）に向かうことだ。

「なのは、シュレンは何処に行ったんだ？　飲み物でも買いに行っているのか？」

「……分からない」

ヴィータよりもなのはの方が先に病室にいたため、そう質問をする。
考えてもいない可能性を口に出すヴィータではあるが、それは口に出す前から違うと分かっている。

シュレンの身体はアンノウンに内蔵をいくつか潰され、極めて危険な状態だった。だから、シュレンには絶対安静を言い渡されていた。

シュレン自身もそれを理解していたからこそ、ベッドの上から動かなかった。

そんな絶対安静を言い渡されていたシュレンが飲み物など買いに行く筈がない。

（……アイツか？）

思い浮かべるのはセレンと名乗った女性。

彼女はシュレンと知り合いと言っていた。それならば、彼女がシュレンを連れ出した可能性が高い。

シュレン一人で抜け出した可能性もあるが、シュレンの傷の具合から、その可能性を否定する。

あの状態で動けば、間違いなく傷口が開いてしまうからだ。

それに加え、セレン自身も言っていたことだ。

『ま、お主には確認することはできないじゃろうが』

と。つまりあの言葉はこうなることを計画していたからこそ、言った言葉なのだろう。

しかし、もしそれだけならば、セレンの目的は一体何だったのだろうか？

そう考え、セレンがヴィータに近づいてきた――会話をしてきた

――目的を会話を振り返り、思い出す。
だが、セレンがヴィータに話したのは、シュレンが力を失ったこと。
その一つだけで、具体的な目的というのは出てこない。
ヴィータとセレンの仲が良い関係ならば、その言葉は両方とも事実であると思えただろう。
しかし、ヴィータにとってセレンは出会ったばかりの得体の知れない奴なのだ。
その言葉をそう簡単に信ずることは出来ない。
だからこそ、ヴィータは言葉が事実であるか、確かめに来たのだ。
（……ったく、これじゃ確認できねーな）
とは言え、先程も述べた通り、今のヴィータには確認する術（すべ）はない。
シュレンが消えてしまったのだから。いや、この場合は連れ去られたと言った方が良いのだろうか。
「シュレン君、あんな状態なのにどこに行っちゃったんだろう？」
「……」
なのはのその言葉にヴィータは黙る。黙ることしかできない。
なのはにセレンのことを話しても構わないのだが、話したところ

で何になる？
……話しても、シュレンがここに戻ってくる訳ではないのだ。
それに加え、話してしまったら、またなのはが無茶をする可能性がある。それはできる限り避けておきたいことだ。

それに、何もこの事態は悪い方向ではないのではないかと考えている。
セレンと名乗った女性はハッキリ言って信用できない。しかし、何故かヴィータは心の何処かでセレンを信じている。
頭では否定しているのに関わらず、だ。
未だに警戒心は残っているが、何故か信用してしまいそうになる。
だからこそだろうか――甘い考えなのかもしれないが、――シュレンが消え去った可能性を知る者からしてみれば、これはそこまで悪い事態ではないと考えるのだ。

しかし、頭ではそう考えていても、納得できていないヴィータがいる。
例え、考えている通りにこれが悪いことでは無かったとしても、せめて一言ぐらいは声を掛けて欲しかった。

「……うっ、ん」

そうすれば、目の前のなのはは泣かなかったかもしれないというのに。
チクリと心が傷んだ。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　２（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。
今回は前回の後の話でした。まぁ、短いですけど。
一応、今回で回想編は終了です。

とは言っても、この三話分の回想はなのは側の回想です。
いずれシュレンとセレン側の回想もしますけど、当分先ですのでそれは置いておいてもらって構いません。

次話もサイドストーリーですが、更新が遅れるかもです。
……決して、買ったゲームをやり込むとか、そういうんじゃありませんから！

この小説に対するアドバイスなどありましたら、感想の方にどーぞでは。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　３（前書き）

ゲームをやり込んで、すみません。
更新遅れてしまって、すみません。
遅れたくせに短くて、すみません。

では、サイドストーリー始まります。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　３

Ｓｉｄｅヴィータ

ざっと、八年前の出来事を思い出すならこんな感じか？
シュレンとの出会いと言い、その後の出来事と言い、よく八年も前の出来事を鮮明に思い出せる。
そのことに少し関心するけど、そんなものはどうでもいい。
アタシは現在、シュレンと一緒になのはの訓練を見学している。
シュレンはなのはの教育方針のようなものを理解していないし、アタシの出番はまだまだ先ということで、アタシが色々と説明してやっている。

「成程。あの件のことを頭に入れて訓練をさせているのか」

「ああ。第二第三のお前が出ないようにな」

「……昔も言ったと思うが、アレは僕の責任だと考えている。だから、そのように考えるのは無意味だな。まぁ、素直に言えば嬉しいが」

無表情でそう言っても、あんまりそうとは思えないんだけどな。
コイツはあまり表情を顔に出さないから、そういう所の判断が難しい。まぁ、難しいと言っても会話は成り立つから問題は無い。

「それで、僕に個人的に聞きたいこととは何だ？」

いきなり題を変えるシュレン。

そのことに驚くアタシだけど、アタシにとってこの題は待っていたものだった。気づいていたから言ったのか、それは分からないけどアタシにとっては好都合だ。

今なら、聞ける……と思っていたけど、やっぱりここじゃ無い方が良いな。

ここで聞いてしまって、万が一なのはの耳にでも入ったら大変だ。

「いや、ここじゃ聞かない。ただ、後でアタシが指示した場所に来い。その場所で聞く」

「そうする理由は？」

「できるだけ聞かれたくないことだからだ」

「……そうか、ならそうしよう」

シュレンは少しの間考える素振りをしたけど、すぐにそれを納めてそう言った。

「ところで、ヴィータは訓練に参加しないで良いのか？　見学なら僕一人でできるが」

「アタシはまだ新人達に教えられねーよ。まずは基礎を固めねぇと、すぐに潰れる」

「確かに、正直に言ってしまえばヴィータと新人の力の差は大きいからな。……とは言え、なのはの訓練は基礎を少しだけ飛ばしていないか？」

「まぁ、なのはなりに考えてるから良いんじゃねーの？」

「さすがは管理局の白い悪魔と言ったところか？」

「……なのはの前でそれ言うなよ？　Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされるぞ」

アタシ達はなのはのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩは怖いという認識で見ているから、できるだけなのはを怒らせないようにしている。だけど、シュレンはそんなことは知らねー筈だからそう忠告しておく。

本当に、コイツとなのはの喧嘩は冗談にならない。

それは八年前に経験した。

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ？　……ああ、あの頑固者モードのことか。それならば問題ない」

「まぁ、意味は大体合ってるけどさ」

「大方、自分に都合が悪くなったら力でねじ伏せるのだろう？　なら、言葉で攻めればいいだけだ」

なんつーか、コイツ前に比べて好戦的になっていないか？
前はもう少し落ち着いている雰囲気だったっていうのに、今は何か違う。

「例えば、１９歳で未だに自分のことを少女と思っている勘違い野郎……いや、野郎ではないか。とにかく、そんな風に言えば――」

そこまで言った時、シュレンは文字通りの意味で吹っ飛んだ。
理解できねーだろうけど、実際にそうだから納得してくれ。アタシも理解できてないんだ。ただ、落ち着いて周りを見てみれば、すぐに理解できた。
周囲には桃色の魔力でできた魔力弾が４つ浮かび上がっている。
つまり、なのはがこの会話を聞いていたということ。

「シュレン君？　再会してすぐにそんなことを言うのは酷いと思うよ？」

「だったら、それを暴力によって誤魔化そうとするお前も十分に酷いぞ。それに、僕はただ事実を言った――」

「……アクセルシューター」

……よし、アタシは何も見ていなかった。それに何も聞いていない。

だから、今後ろで大きな物音がしても、それは勘違いなんだ。幻覚なんだ。

そう考え、アタシは二人にバレないようにその場から消える。

さっきも言ったけど、シュレンには聞きたいことがあったけど後でいい。少なくても、なのはがいる場所ではとてもじゃないが聞けねー。

……やっぱり誰もいない所で聞いたほうがよさそうだな。

病院でセレンと名乗ったアイツのことは。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　３（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。

一応、今回は前回の続きのような形です。

サイドストーリーは読まなくても全く問題はないんですけど……今気づいた。

サイドストーリーの方が今のところ伏線の数が圧倒的に多いことに。

これは不味いかもしれません。

まぁ、できる限り頑張ろうと思います。

では。

……さぁ～て、ゲームやるか（おい

第五話　『追求』（前書き）

シリアスになったり、ギャグなったり、バラバラな感じに書いちゃってますね……
これは不味いな。

すみません、間違って消しちゃいました。

では、第五話『追求』始まります

第五話　『追求』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

なのはの訓練を見学した後に――正確には逃げた後だ――僕は食事をしていた。オレンジ色の髪の女の子。ティアナ・ランスターと共に。

彼女こそがもう一人の知り合いで、ティアナとは過去に出会っている。

ティアナの場合は雪の日とは違い、失踪して消えた訳ではないのでティアナには心配されることなく再会できた。

改めて言うが、僕はティアナと一緒に食事をしている。

どれも美味しいと思える料理だ。

調理が出来ない僕にとっては羨ましい限りである。

「それにしても、ティアナが機動六課にいることを知った時は少し驚いた」

「私もシュレンさんがいた時は驚きました」

僕はティアナのことをそのままティアナと呼ぶ。対して、ティアナは僕のことをシュレンさんと呼ぶ。

敬語などを使うのは結構だが、知り合いからそうされるのは違和

感がある。
まぁ、ただ単に昔は敬語を使っていなかったからなのだが。

「訓練の方でも、正しい指示を出していたな」

「訓練校の時にも努力はしてましたから」

それは分かる。ティアナが訓練校に行ってから、どんな努力をしたのかはよく分からないが、相当な努力はしたのだろう。そうでなければ、先程のガジェットを使った訓練の時に冷静に指示をだせない筈だ。
ティーダさんもティアナのこの姿を見たら喜んでいたと思う。

「そう言えば、ティアのパートナーの……スバル・ナカジマ二等陸士はティアナから見たらどうだ？」

訓練の時でも、僕なりにスバル・ナカジマ二等陸士に対する評価を出していたが、やはり長い付き合いであろうティアナに聞いた方が良いと判断し、そう聞く。
ティアナが人に評価をつけるということは得意なのかどうか知らないが、客観的に物事を見れるから平気だろう。

「そうですね……馬鹿真っ直ぐでドジで体力馬鹿で食いしん坊と言ったところですね」

「……成程。まぁ、少しは参考になるか」

思っていた以上にティアナの――スバル・ナカジマ二等陸士に対する――評価が酷いものだった。

しかし、まぁ、ティアナがベタ惚れするのと今のティアナのような評価では、どちらかというと後者の方が信頼しているということが分かる。

ティアナがベタ惚れするなど、正直有り得ないだろう。

そんなティアナは何かを思い出したような表情になり、僕に聞いてきた。

「セルスさんも一緒にここに来る予定だったんじゃ無かったのですか？」

と。

セルスとは、セルス・ローラルドでレルデの義理の妹……という設定だ。

正確にはセルス・ローラルドとはセレンが使っている偽名だ。

ある事情からセレンの名前は迂闊には言えない為、セルスと偽名を名乗っている。セレンの本名を知っている者は誰も居ない筈だ。

僕も含めて。

「それは僕の所属している部隊の部隊長さんが馬鹿で、僕とセルスを引き離した」

「えっと、シュレンさんの所属している部隊って、時空管理局本局特命隊ですよね？」

「そう。名前だけは偉く有名な部隊」

時空管理局本局特命隊。それが僕の所属している部隊の正式名称だ。

名前だけはかなり有名な部隊で、特命隊に入っているのは全員がエリートだとか、そのように言われている。しかし、実際はただの暇潰し部隊である。

仕事も行なっているがそれ以外の行動が酷い。とは言え、仕事をちゃんとやっているから他の部隊から文句は言われない。

『仕事をやるからこそ遊びは楽しくなるんだ』これは何処かの部隊の部隊長さんの名言だ。それ故に仕事をする時は真面目にして、遊ぶ時は遊ぶという何とも言えない部隊になってしまった。

ちなみに、時空管理局本局特命隊という名前はレルデ・ローラルドがあるドラマを見て、勝手に命名されたものだ。

僕はドラマなどよく知らないが、あまりこのことを追求しない方が良いとのこと。

何故だ？

「それで僕は何故か部隊長代理で、部隊長がサボった仕事を仕方なく片づけている」

「……そ、そうなんですかっ！？」

「だが、レルデが部隊の中で最も仕事を押し付けやすい相手だったら誰でも良かったと思う」

僕があの部隊でも特別に忙しいのは僕が部隊長代理だからというのが理由の一つだ。
レルデが仕事を――殆ど――やらないので、その分僕が代わりにやっているのだ。本当に迷惑な話である。
それに加え、僕が忙しいのにはもう1つ理由がある。
それはセレンのせいだ。セレンもセレンでレルデのように仕事をサボり僕に押し付けてくる。
つまり、僕は僕の分とレルデの分とセレンの分、計3人分の仕事を1人でこなしているのだ。忙しくないわけがない。
とは言え、今の僕はあの部隊から異動してきたから、これからはあの部隊より忙しくなることはないだろう。……そう願いたい。

「話を変えるが、ティアナはこの部隊で上手くやっていけそうか？」

これ以上あの部隊での仕事関係のことを考えると疲れるので話を変える。
ティアナは僕の話の切り替え方に少し唖然としたみたいだが、少し考えているような素振りをした後に答えてくれた。

「……そうですね、正直、私みたいな凡人がこんなエリート部隊にいても良いのか迷いますけど、とりあえずは自分に出来ることを精一杯にやりたいと思ってます」

真面目な回答だな。
レルデ部隊長にもこのような一面があって欲しいものだ。まぁ、

レルデの真剣モードのようなものを僕は知っている。
だから、今の言葉は少しの語弊を生むが、その辺は見逃してもらいたい。
こんなことは置いておいて、ティアナの回答に対するアドバイスでもしよう。

「ティアナに1つ言っておくが、あまり自分の事は過小評価するな。別にするなとは言わない。しかし、自分の事を過小評価するのは良くないと僕は思っている。何故なら、そんなことしたら次第に自分は出来なくて当たり前って思うだろう？　そうなってしまったら力を望み、無茶なことをする者が多い。そして、その無茶なことのせいで大切な物を失う」

そう。過去に無茶して怪我をした高町なのはと同じようになる。
なのはは1人になりたくないということからの無茶をした。そして、あの雪の日に怪我をして、二度と空を飛ぶ事が出来ないと言われ絶望した。
結果としては空を飛ぶ事が出来てるけど、もしかしたら死ぬ可能性だってあった。
正直、そんな危険な目に知り合いが遭って欲しくない。

「とは言え、これは僕の一方的な考えだから気にしなくても良い」

これはあくまでも僕個人の意見。
それを人に強要するような、無駄なことはしない。

「それじゃあ、また午後の訓練で」

「分かりました」

食事を食べ終え、席を立つ。

ティアナが食べ終わるまで待っててても良かったが、ヴィータが二人きりで話したいと言っていたことを思い出した。

だから、ヴィータの指示を出した場所と向かう。

ヴィータの聞きたいこと。

そのことは間違いなく僕のあの日に関することだろう。

なのはは聞いても無駄と判断したのかどうか知らないが、あまり聞いてこなかった。だが、ヴィータは違う。

間違いなく聞いてくるだろう。

……不味いな。

僕は自分のことを探られるのが何より嫌いだというのに。

これは不味い。危険だ。

「頼むから、抑えろよ。……シュレン」

あまりヴィータは傷付けたくない相手だから。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ――――

訓練場が見渡せる所にヴィータは１人でいた。
近くにあった木に寄り掛かりながら瞳を閉じて、シュレンを待っていた。
聞きたいことがあるからだ。

「……早く来い」

独り言を呟くと同時に一つの気配が近づいてきた。
これが誰かなどと確認するまでもない。

間違いなく、シュレンだ。

「待たせたか？」

「いや、アタシはさっき来たところだから、そんなに待っていない」

嘘だ。さっき来たという訳ではない。
正確には三十分以上も待っている。しかし、元々の待ち合わせの時間にはシュレンは間に合っている。
ただ単にヴィータが早く来ただけのこと。

「それは良かった」

安堵したような表情で言いながらシュレンはヴィータに――自動販売機で買った――コーヒーを投げ渡す。それを片手でキャッチし、飲み物を開ける。
正直に言えば、コーヒー以外の飲み物が良かったが、折角買ってくれた物を飲まないというのは失礼なので飲む。
まったく飲めないという訳ではない。
しかし、心境が心境なだけにあまり飲みたくなかったのだ。

「サンキュー」

「おぉー、子供がコーヒーを飲んでいる姿ってシュールだ」

「……」

返って来ない返事にシュレンは戸惑う。
普段なら必ずと言ってもいいほどに子供扱いすると、それを頑な

に否定するヴィータの姿があったからだ。
それなのに、今は否定せず黙っているだけ。

「どうした？　いつもなら『アタシは子供じゃねー！』とか言う筈だが。元気がないのか？　だったら、僕の事を聞くのは後日の方が良いぞ」

「シュレン、アタシの質問に正直に答えろ」

「……？」

いつもとは違う行動を心配したのにも関わらず、返事はおろか、まったく違うことを言うヴィータにシュレンはさらに戸惑った。
シュレンがヴィータを見てみると、出会ってから今までで最も真剣な眼差しになっていた。
ヴィータに釣られ、シュレンも少しずつ真剣な表情になる。

「お前は8年前にアタシと話していた時に、私に嘘を吐いてるって言ったよな？」

「8年前？」

すぐには思い浮かばず、当時のことを思い出す。しかし、ヴィータの言葉だけではどの場面か分からない。
場面さえ分かれば、シュレンは思い出す自身があった。
記憶力には自信があるのだ。

「……リンカーコアの話をしてた時に嘘を吐いてるってお前は言ったんだ」

「ああ、そんな話もしたな」

その言葉でシュレンは言われたことを思い出した。
確かにそんな話をしていた記憶がある。
つまり、ヴィータが言いたい嘘とはその時についた嘘のことだろうと結論づける。

（だが、このことはヴィータから追求してこないと八年前に言ったの筈だが）

その時の細かい事までシュレンは思い出す。
少しの間、ヴィータ自信が追求してこないと言ったことを忘れているのかもしれないと思ったが、この件で話してくるというはしっかり覚えている筈。
そう仮定するならば、それを無視してでも確認しなければならない事がある。
つまり、ヴィータは……。

「それでな、お前とその会話をした後にセレンっていう奴に会ったんだ」

その言葉でヴィータが何を言いたいのか、シュレンは理解した。
シュレンはセレンが本当の事をヴィータに話してしまったのだろうと考えた。そして、そのことでシュレンが力を失ったことを知った。
ヴィータはそのことを確認したかった。しかし、出来なかった。
何故なら、シュレンは失踪してしまったのだから。
ヴィータはこのことを誰にも言わず、心の中にしまっていた。

「ソイツはお前がなのはを庇ったから力を失ったって、そう言ってたんだ」

しかし、シュレンとの再会で心にしまっていた事をしまったままには出来なかった。
緊迫した空気がシュレンとヴィータの二人に流れる。
空には鳥が元気良く羽ばたいているというのに、その真下では怖いと思ってしまうほどの空気があった。
風も吹かず、雲も動かず、音も聞こえない。
ヴィータが最後の言葉発してから、両者は互いに無言。ただ、沈黙だけが流れていた。
しかし、その沈黙は終わる。

「……事実だ。僕は高町なのはを庇ったことで力を扱えなくなった」

「っ！？」

シュレンが事実を言うという形で沈黙は終わった。

一体どれだけの時間沈黙していたのか分からない。しかし、ヴィータにとって終わった沈黙と言うのはとても、とても長く感じた。

「彼女から聞いたというのは予想外だが本当の事だ。……僕は高町なのはを庇ったから力を扱えなくなった」

事実をシュレンは繰り返す。しかし、そこに怒りや憎しみなどは無かった。

一方、ヴィータは繰り返された言葉を聞いてセレンが言ったことが事実であると、改めて思った。そして、それと同時に激しい後悔の念がヴィータを押しつぶすように出てくる。

（本当にコイツはアタシのせいで力を……）

再会した時からずっと考えていたことで、どうしても事実かどうかを知りたかった。

しかし、現実とは理不尽なもので最悪な形で事実を知ってしまった。

シュレンは真実をヴィータとなのはは知らないと思っていた筈なのだ。だからこそ、８年前はこの事実を隠した。

それなのに、ヴィータは今ここで聞いてしまった。シュレンが隠したかったことを。シュレンにとって隠したままの方が楽な事実をヴィータは聞いてしまった。

「……ヴィータ、１つだけ質問を聞くけど良いか？」

シュレンから言葉に迷うことなくヴィータは首を縦に振った。

「どうしてヴィータがこのことを彼女から聞いている？　僕はこういうことを聞かれるなら、なのは本人からだと思ったんだけど……」

「どうしてって聞かれてもな……」

思ってもいない質問にヴィータは戸惑う。

とは言え、首を振った以上は答えなければいけないので訓練の時と同じく、出会った時のことを振り返る。

「……そう言えば、アイツはなのはが自己嫌悪が強い奴って思ったからアタシに言ったって言ってたぞ」

確かに、そう言っていた。

あまりにも変わりすぎている意見は、今思い出してみても変わっているものだと思う。

一方、その言葉を聞いてシュレンは――ヴィータに気付かれる前に表情を元に戻したが、――納得したような表情になる。

「ありがとう。……それともう1つ我儘を言うが構わないか？」

「何だ？」

「ヴィータが知っている事実の全てをなのはには言わないで欲しい」

「……なっ！？　どういう意味だよ！」

シュレンの言葉に驚く。

シュレンから罵倒の声などを覚悟していたヴィータにとって驚くべきことであった。それに加え、ヴィータはシュレンの言った言葉の意味を理解した。

つまり、このことは無かったことにしろ。

と、シュレンはそう言っているのだ。

だからこそ、ヴィータは怒鳴った。

「どういう意味も何も、恐らくヴィータが思っている意味の通りだ。……だから、この事はなのはには言うな」

しかし、シュレンは冷静に、表情は何処か申し訳なさそうに言う。

空を飛んでいる鳥もいつの間にか消え、太陽の光は雲が重なりシュレンがいる側だけが影に包まれる。

まるで、シュレンが闇に堕ちてしまったように。

「頼むからアイツにはこのことを言うな。

僕が機動六課に所属して間もないっていうのに嫌な空気になるのは遠慮したい」

「だけど！」

「……本当に、僕が我儘を言って申し訳ない限りだが、僕は自分のせいで誰かが悲しむ顔なんて見たくない。だから、頼むから言わないでくれ」

八年前のシュレンを知っている者として今のシュレンを見てみると、本当に同一人物かどうかと疑いたくなるぐらいに弱々しかった。先程までは、ヴィータやなのはを弄るような元気があったというのに。

「僕は怒ってもいなければ、憎んでも無い。だから、ヴィータが今までのように黙ってくれるだけで不幸の絶対量というのは小さくて済む。だが、ヴィータが真実をなのはに伝えてしまったら不幸の絶対量は一気に大きくなる。……折角、八神はやて二等陸佐が努力してこの部隊を設立したのだろう？　それを僕1人のせいで台無しにするようなことにはするな。もし、ヴィータが真実を言って不幸の絶対量が増えた時は僕がヴィータのことを怒るかもしれないし、憎むかもしれない」

「……」

弱々しく見えている筈なのにハッキリと自分の意見を言うという矛盾がヴィータを混乱させる。弱々しい表情なのに強い瞳で、何かを決意してるような目で、シュレンは確かにそう言った。

ヴィータの頭はこんがらがる。

どうして、コイツ（シュレン）はそこまで他人を思う事ができるのか、と。

これじゃあ、まるでコイツ（シュレン）が悪者に見えてしまうじゃないか、と。

訳が分からない。
ヴィータにはシュレン・ガルディンという存在がよく分からなかった。

「……この件はヴィータが黙っているということで解決。八神はやて部隊長に聞かれても出来るだけ隠せ。まぁ、別に言っても構わないが、その時はヴィータに対して何て思うか分からないぞ」

そうこう考えている間にいつの間にか話がまとまってしまっていた。
まだ話したいことがあるのに、まだ言いたい事があるのに、何も言えない。否、何も言う事ができなかった。
寧ろ、本来ならばシュレンがここまであっさりと引いてくれることに感謝するべきだろう。
しかし、ヴィータは納得できなかった。

「それでは、午後の訓練の時にまた会いましょう。ヴィータ三等空尉」

最後に笑みを浮かべ、ヴィータが納得できないままシュレンはその場を去っていった。

「……畜生……っ！」

残されたヴィータは何とも言えない感情が渦巻き、最後に見せたシュレンの笑みを思い浮かべながら、拳を思い切り握り締めた。

「畜生っ！」

最後に見せた笑みには、正直言って笑みと呼ぶには程遠い物だった。顔は確かに笑みを浮かべていた。しかし、その笑みには悲しみしかなかった。

笑みを浮かべると気持ち悪いと思われる者が精一杯に浮かべた笑みは、どうしても悲しみしか呼ばない笑みだった。

「どうしてアタシはこんなにも弱ぇんだよ！　……あの時、なのはを助けれてたらこんなことにはならなかったのにどうしてなんだよ！」

言いたいことを一言も言わせてはくれず、去っていったシュレンのことを思いながらも、ヴィータはしばらく自分自身を責めていたのだった。

「……クソッ！」

第五話　『追求』（後書き）

と、言うわけで第五話でした。

更新速度が遅くて申し訳ないです。
何か色々なゲームをやり込み、部活やらなんやらで時間が……。
ゲームをやらなければいいんですけど
というより、今月は色々忙しいですね。
部活の合宿や試合で……

まぁ、できる限りは頑張ります。

この小説に対する意見などありましたら感想の方にどうぞ
では。

第六話　『二つの考え』（前書き）

う～ん、本編なのにサイドストーリー並みの短さだ。
まぁ、これでも頑張って長くしたほうなんですけど……

では、第六話『二つの考え』始まります

第六話　『二つの考え』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

「……ふぅ」

ヴィータとの会話を終え、部屋に戻った僕は――設置されているベッドに――倒れこむように横になった。
そして溜め息を吐く。
もちろん、理由は先程の会話についてだ。

「……ヴィータはセレンと会話をしたのか」

そのせいで僕に関する事を知ってしまった。
僕が隠していたい事を。
高町なのはがこのことを知れば自己嫌悪に陥ることだろう。そんな姿にはさせたくない。……いや、そんな姿は見たくないというのが正しいか。
結局、この件を隠しているのも自己満足。
しかし、まだ問題ない。

「それにしても、セレンは予想以上の行動をしたな」

ヴィータからセレンに出会ったことは聞いた。ヴィータとの会話の内容も。そして、その感想を一言で表すならば、『予想以上』だ。

何故なら、セレンは間違いなく高町なのはという人物を潰そうとしたと思うからだ。

ヴィータはセレンという人物に出会い、そこで会話をして僕が力を失ったことを知った。

言ってみると少ないのだが、セレンという人物を知っている僕から考えれば、これは明確な悪意があると考える。

「……ヴィータのことをどう思ったかは知らないが、なのはのことを潰そうとした可能性は高いな」

僕がこう考える理由は、第一にセレンは直接高町なのはには真実を言わず、ヴィータに話したと言うことである。

ヴィータは『アイツはなのはが自己嫌悪が強い奴って思ったからアタシに言ったみたいだ』と言っていた。その言葉をヴィータは信じた。

しかし、僕が知っているセレンという人物は面倒な事はしない。

そもそも、彼女（なのは）にはそんなことはしないだろう。

『なのはが自己嫌悪が強い奴って思った』それはつまり、――言葉で考えれば――セレンはなのはのことを最低でも一度は見たということだ。

先程も言ったが、セレンは面倒事が嫌いだ。それにも関わらず、セレンはその場では言わなかった。

セレンを知っている者としては、このことを不思議に思う。

だから、セレンが言った理由とは違う理由があって、セレンはヴィ

ータに接触した。

僕はそう考える。

そして、僕はその理由に関してもある程度の予想は出来ている。

が、これは置いておいて先に進む。

そして、2つ目の理由。

……これもあくまでも僕の推測でしか無いので、見当外れの可能性もあるが、そこは黙って聞いて欲しい。

「僕を病院から連れて行ったことで、高町なのはとヴィータから遠ざけた」

これでは意味が謎のままというか、謎が深まってしまうような言い方だが、これでいい。

何故なら、そうすることで僕と高町なのはが和解するという時間が無くなるからだ。

怪我をさせたということでは確かに和解したが、高町なのはは僕が力を失ったということでは和解どころか、そのことを知らないのだ。

彼女は。

それに加え、セレンはヴィータにある期待をしていた筈だ。

その期待というのは、ヴィータが高町なのはに真実を伝えるということである。そうすることで、高町なのはは自己嫌悪に陥る。

そして、怪我をさせた時と同じように会話をしようとするだろうが、その時には既にシュレン・ガルディンという存在は病院にはいないどころか、行方不明になっている。

小難しく言っているので、簡単にまとめると、セレンはヴィータに

真実を言った後に僕を連れ去った。そして、セレンはヴィータが高町なのはに真実を言うと思った。そして、真実を言って僕と会話をしたと思うだろうが、僕はいない。
こうして、セレンは高町なのはという存在を潰せると考えたと思う。だって、セレンは彼女を自己嫌悪の強い奴と思っているのだから。

「……ま、こんなものか」

ざっと、考えられることを思ってみた。
先程から何度も言っているが、これはあくまでも僕の推測で絶対というわけではない。この世界には絶対ということはないのだから。
だから、今言ったことは無視してくれても構わない。
それに、ヴィータが真実をなのはに言う前に僕と再会している時点で、この過程は意味をなさない事だ。
セレンに聞けば事実かどうかは分かるけど、聞いたところで意味はない。
だから、このことは忘れるようにする。
それが、誰もが傷付かずに済む道なのかもしれないのだから。

「さて、訓練に参加しよう」

今回の訓練から僕も本格的に参加することになった。
まぁ、まだ新人達に自己紹介――ティアナは除く――をしていないので、恐らくそちらが先になるだろう。

それにしても、考えていた以上に悪い事態にならずに良かった。
全員がまだ、一つの嘘に気づいていない。
いや、嘘と言うと語弊があるか。まぁ、いい。

この件はできる限り考えないようにしよう。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅヴィータ

納得できない。
それだけがアタシの心を支配していた。
ただ、黙っていてくれとだけ言ってこの件を終わらせようとするシュレンにアタシは納得できねぇ。
８年前の時もアイツは自分が怪我をしたことをアタシのせいにはせずに自分のせいだと、そう言っていた。……昔からのシュレンに対する印象だけど、全てを１人で解決できる凄い奴ってアタシは思

ってる。
確かにその通りだ。
アイツは誰も傷つけようともせず、最低限のことだけを言ってさっきの会話も終わらせた。

「……っ！」

でも、だからと言ってアタシは納得できない。
別にアタシはなのはみてーな立派な理由は持ってない。シュレンのような覚悟もない。そんなアタシがこんなことを言うのは間違いなのかもしれない。
いや、絶対に間違っている。

「ヴィータちゃん？」

「……なのはか」

……少し深く考えすぎてたみてーだな。
つーか、よりによって、何でなのはがアタシのことを見つけるんだよ。正直、今のアタシはなのはとは会話したくない。
話すとシュレンから言われた言葉を無視してても本当のことを言いそうになる。
だけど、そんなことをしても傷つくだけで意味なんてない。

……何でだろうな？
アタシはなのはに本当のことを言いそうになっているけど、隠し

ていたいという願望もある。
何で、アタシの考えは矛盾してるんだ？
アタシの方がとても長い時間を生きてきているというのに、何でアタシは悩んでいるんだ。

「どうしたの？　何か元気が無いように見えるけど……」

「別にいつも通りだ。だけど、ちょっと難しい考えをしてるな」

「そうなんだ。それじゃあ、あまりしつこくは聞かないけど、困った時は私やはやてちゃんを頼ってね」

「おう」

はやて達は優しい。
昔から道具として生かされてきたアタシにとって、はやてやなのは達は特別だ。一人の人として見てくれてる。
だからこそ、アタシは考えることもできているし、悩むことができている。
でも、何つーか、悩むって辛いな。

それははやての守護騎士をしてきて、よく分かった。

「そう言えば、シュレンはまだ新人達に挨拶はしたのか？」

「いや、ティアナ以外にはしていない筈だけど」

アタシは正直に言って、悩むというのは不似合いだ。
だから、アタシは……

「そうか。なら、自己紹介を終えた後、アタシがシュレンと模擬戦をしてシュレンの実力を新人達に見せつけたいんだけど、いいか？」

「？　どうして」

「いや、アイツは最近まで特命隊にいたらしいが、あまり新人達はあの部隊の名を知っているだけで中身までは知らないだろ？　だから、一番単純な方法で実力を知らせてやりたいんだ。
……まぁ、アタシ自身もアイツの実力を知りたいっていうのもあるけどな」

「ヴィータちゃんはシグナムさんみたいな性格じゃないって思ってたよ」

「いやいや、アタシはシグナムみてーにバトルマニアじゃねー」

「ふぅん。でも、確かにヴィータちゃんの言うことも一理あるし、良いかな？」

そうだ。これでいい。
これが一番単純で一番アタシらしいやり方じゃないか。

第六話　『二つの考え』（後書き）

と、言うわけで第六話でした。
前回に引き続きシュレンとヴィータの関係です。

えっと、ヴィータの口調や考え方はなど可笑しくはないでしょうか？
オリキャラは書くのは平気ですけど、原作キャラは色々気にしながら書いていますので。

この小説に対する意見などありましたら感想の方にどうぞ
では。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　４（前書き）

サイドストーリーです。
ただ、いつもよりキャラ崩壊してますし、シリアスかもしれません。
なのはメインです。

では、サイドストーリー４始まります

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　４

Ｓｉｄｅ高町なのは

最近、ヴィータちゃんの様子が変だ。
いや、最近と言うと何時からか分からないけど、正確にはシュレン君が機動六課に来てからヴィータちゃんの様子が変わった。
ヴィータちゃん自身が気づいているかどうか知らないけど、私は変わったと思う。
会話をしても何処かよそよそしくて、私のことは見ているんだけど、でも何処か違う部分を見ている。
何か、隠し事をしているのかな？シュレン君についての。

……次の訓練の準備も終わり、自室に戻ろうとした時偶然にもヴィータちゃんを見つけた。だけど、ヴィータちゃんはいつものヴィータちゃんじゃなかった。
何と言うか、いつもより雰囲気が落ち込んでいる。

「ヴィータちゃん？」

「……なのはか」

しかも、私が近づいてきているということにも気付かなかった。
そんなこと、いつものヴィータちゃんなら有り得ないこと。

「どうしたの？　何か元気がないように見えるけど……」

「別にいつも通りだ。だけど、ちょっと難しい考えをしてるな」

その言葉が嘘であることはすぐに分かった。いや、嘘かどうかは分からないけど、少なくてもヴィータちゃんが心の内を読ませないようにしていることは分かった。

多分、はやてちゃんならヴィータちゃんから聞くんだろうけど、私は聞かない。聞いても意味がないだろうし。

ヴィータちゃんにとって、はやてちゃんは主で――曰く、世界で一番――大切な人だけど、私はそうじゃないから。

「そうなんだ。それじゃあ、あまりしつこく聞かないけど、困った時は私やはやてちゃんを頼ってね」

そうじゃない私は友達として、それぐらいのことしか言わない。言えない。

「……アタシがシュレンと模擬戦をしてシュレンの実力を新人達に見せつけたいんだけど、いいか？」

「？　どうして」

「いや、アイツは最近まで特命隊にいたらしいが、あまり新人達は

あの部隊の名を知っているだけで中身までは知らないだろ？　だから、一番単純な方法で実力を知らせてやりたいんだ。
……まぁ、アタシ自身もアイツの実力を知りたいっていうのもあるけどな」

「ヴィータちゃんはシグナムさんみたいな性格じゃないって思ってたよ」

でも、模擬戦をするなら。訓練の準備は無駄になっちゃうけど良いかな？
私としても、副隊長同士の戦いはフォワードメンバーに出来るだけ早く見せておきたかったから。
目標にさせるという意味でも、技を盗む機会としても役に立つと思う。
だから、ヴィータちゃんには別の目的があって模擬戦を頼んできたことには目をつぶろう。
それが多分、友達として出来ることだから。

「サンキュー。……お休み、なのは」

「お休み、ヴィータちゃん」

最終的な確認をした後、ヴィータちゃんは去っていった。まぁ、去っていったと言っても自分の部屋に戻るだけだけど。
私は一旦部屋には戻るけど、すぐに部屋を出る。夜風に当たる為、少しの間機動六課の隊舎を出る為だ。
その途中で見知った顔にいくつか会ったけど、全員が簡単な挨拶

をして部屋に戻った。
当たり前だ。
時間は既に夜中の2時を回っているから。

外に出て、近くに設けられていた休憩所のベンチに私は腰を下ろす。そこに適度な風が吹き、周りにあった木がゆらゆらと揺れる。
やっぱり、落ち着く。

「……良い風」

こうやって夜風をあたるようになったのは八年前から。つまり、シュレン君が私を庇って怪我をした後から。
もっと具体的に言うと、シュレン君が失踪してから。
あの時から、私の性格は少し変わった。

あの時から私は友達を頼るということはできるようになった。
だけど、それ以上に私は私自身のことを信じることが出来なくなった。

要するに、自分のことを出来損ないと思うようになった。

そして、今までそのことを悟られないようにビクビクしながら過ごしてきた。
エースオブエースだなんて言われてるけど、私はそんなに凄くはない。
そんな風に言われているのだって、結局は私の外面しか見ていない人が言う人。私の内面まで知ったら、きっと落胆する。
私は怖い。

いつか、私の内面を知った時のフェイトちゃん達の反応が……
友達を頼る、信じることはできるようになったけど、それ以上に
私は駄目な人になっている。
それを強く自覚している。

一体、何時になったら、こんな駄目な自分とは決別できるのかな？

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　４（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。

……さて、実はこの作品のなのはは自分に自信を持っていません。
理由は物語の後半部分で明かす予定ですが、なのはは基本的に他人には悟られないようにビクビクしながら生きています。
ただ、今のところ他人には気づかれていません。
二人を除いて。

っと、あとがきで伏線を張ったら駄目ですね。すみません。

にしてもマジすみません。
何か、なのはが病みキャラもどきになってしまって。

この小説に対する意見などありました感想の方にどうぞ。
では。

第七話　『和解』（前書き）

すみません、更新が遅れました。
えっと、今回はゲームをやっていた訳ではありませんよ（汗
……合宿の関係で遅れました。

では、『和解』始まります

第七話　『和解』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

訓練場に着いた僕はフォワードメンバー４人の前に立っていた。
本来ならば、既に自己紹介をしていてもおかしくはないのだが、レルデのせいで僕は機動六課には遅れて所属。
その為、まだ自己紹介はしていない。
本当に迷惑な人だ。
まぁ、このことはさておき、僕はフォワードメンバーに自己紹介をすることを優先させる。

「今日から皆の訓練にも参加することになったシュレン・ガルディン三等空尉だ。これからよろしく頼む」

少し簡潔過ぎる自己紹介だとは思うが、世界には　Ｓｉｍｐｌｅ　ｉｓ　ｂｅｓｔ．　という言葉がある。
つまり、がやがやと色々なことを言うより、簡単に言った方が良いということだ。まぁ、世界には例外と言う言葉があるが、この際は無視することにする。

「ティアナを除いたフォワードメンバーのことは、書類を見ただけであまり知らない。だから、名前だけで構わないから自己紹介してくれ」

この言葉にフォワード陣の3人はティアナの事を見て聞きたそうな顔をしたが、それを堪え、最初に青髪の女の子が前に出てきた。

「スバル・ナカジマ二等陸士です！　よろしくお願いしますっ！！」

そして、大きな声で自己紹介をしてきた。……してはくれたのだが、思っていたよりも大きな声だったから少し驚く。

とは言え、元気があると言う事は悪いことでは無いので文句を言うつもりは無い。寧ろ、好印象だ。

次に出てきたのは赤い髪をした男の子。

「エリオ・モンディアル三等陸士です。これからよろしくお願いします！」

先程のスバル・ナカジマ二等陸士程ではないにしろ、元気はある。

……正直、機動六課には男があまりいない（とは言っても、それは前線メンバーの話だ）ので、このような場に幼いにしろ、同性がいるのは精神的に楽になる。

念のために言っておくが、僕にその手の趣味は無い。

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。この子はフリードです。宜しくお願いします！」

最後にピンク色の髪をした女の子が自己紹介をしてきた。
読んだ書類によると、結構珍しい魔法を使うとのこと。しかし、僕が驚く事は無い。何故なら、珍しい魔法というものは今まで散々見てきたのだから。

「これからよろしく。……さて、早速訓練に入りたい訳ですが、高町教導官はどんな訓練をしているのですか？」

訓練場は仕事場ということで、なのはには敬語を使っている。
このことは既になのはには言っているので文句を言われる心配は無い。

「いつもは私の考えたメニューをこなしていくような形なんだけど、今日はヴィータちゃんに頼まれて模擬戦をすることになったよ」

「それは、僕とフォワード陣がですか？」

「違うよ。ヴィータちゃんとシュレン君が模擬戦をするの」

そんなことをするなら前もって教えて欲しかった……と言いたいところだが、大方ヴィータがなのはに頼み込んで模擬戦を行うようになったのだろう。
だから、恐らく伝えなかったというよりは伝えられなかったのだろう。
まぁ、それでも念話で伝えるという手段もあった筈だが、こいつ

は多分それを忘れている。
……それに、別に構わないことだ。ある意味、僕にとって好都合。
今までの様子から考えるに、こちらから話してもあまり意味が無いと思うからな。

「……つーことだ、お前の力をフォワード陣に見せつける良い機会だからな。だからアタシが模擬戦の相手になるっていうことだ」

「分かった。まぁ、お手柔らかに」

僕の力をフォワード人に見せる良い機会か……。
そんなこと殆ど思っていないだろうが、先程言った通り別に構わない。

バトルマニアという訳ではないが、僕も少し闘いたいからな。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ――――

訓練場の真ん中に既にバリアジャケットを展開しているヴィータと、まだ展開していないシュレンがいた。
ヴィータはいつもより鋭い視線でシュレンの事を観察しているが、シュレンは無表情だ。

「……ホルス、セットアップ」

短く低い声で言うと身につけていた腕輪が変化する。
シュレンが紅色の魔力光につつまれた後、黒色と紅色を中心とした服装を着ているシュレンが現れた。
黒色のロングコートに黒色のズボン。さらにシャツまで黒色だが所々に紅色が入っていて制服の時とは違い紅色のネクタイは緩めて付けていてラフな格好だ。
そして、両手には――ティアナと同じく――二丁の銃を握っている。

「……好きなタイミングで来い。僕はそれに合わせる」

「分かった」

そう言って、ヴィータは一度呼吸を整え――

「……行くぞ！」

開始の合図を出した。
開始早々、ヴィータは鉄球を取り出し、それをグラーフアイゼンで打ち出す。そして、鉄球は一直線でシュレンへと向かい、同時にヴィータは背後から――挟み撃ちのような形で――シュレンに近付く。
一方、シュレンは持っている二丁（ホルス）の銃の内、一つを向かって来ている鉄球に標準を合わせ、もう1つを背後から近付いて来ているヴィータへと合わせる。

（出来れば、そのまま魔法弾を撃ちたいが……）

しかし、シュレンは定めていた二つの標準を外し、横に跳んだ。
それを見たヴィータは鉄球と一緒に方向転換をして追撃をする。
シュレンにとって、鉄球と並行して向かってくるヴィータは挟み撃ちにされるより狙いやすく、今度は後ろに下がりながら銃を構える。

「……シュート」

小さな声ではあるが、シュレンはそう言い魔法弾を二発放った。
一発は鉄球に向かって、そしてもう一発はヴィータ本人に魔法弾が向かう。
鉄球はシュレンが放った魔法弾によって弾き返される。しかし、ヴィータ本人へと向かった魔法弾は――グラーフアイゼンを盾のよ

うにして――防がれる。

「やはり、そう簡単には行かないか」

「当たり前……だっ！」

ヴィータは今の勢いを殺さずにシュレンの懐に入りたかったのだが、シュレンはヴィータと一定の距離を保っている為、それは難しい。

その為、無理に速度を上げ、攻撃したとしてもかわされる。

それならばと思い、ヴィータはデバイスを振り切り、ヴィータにとっての相棒の名前を叫ぶ。

「グラーフアイゼン！　カートリッジロード！」

《Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ》

叫び声と同時にグラーフアイゼンの形が変わっていく。

ただのハンマーのような形から、最終的に、一方はロケットの噴射口のような物が付いていて、反対側は先程よりも鋭く攻撃特化になっている形に変わった。

その形状変化を見ているシュレンは一定の距離を保つのを止め、逆にヴィータに近付いて行く。

しかしそれは、形状変化を終えているヴィータにとって、それは格好の的となる。

「ラケーテン！！」

ロケットの噴射口から凄まじい勢いで炎が噴き出し、その勢いと同時にヴィータが動く。その動きは先程より比べ物にはならず、速い。

攻撃範囲にシュレンが入るまで数秒も掛からなかった。しかし、シュレンはヴィータが思ってもいないことをする。

「……ホルス」

シュレンは――デバイスの名を呼びながら――魔法弾を放った。しかし、標準は近付いてくるヴィータにではない。シュレンの真下……つまり地面にだ。

「……っ！？」

さすがのヴィータもこれは予想できなかった。その為、ヴィータは攻撃を止めた。否、止めなければいけなかった。

何故なら、シュレンの魔法弾は地面に向け放たれ、砂煙が舞ったからだ。つまり、その砂煙のせいでシュレンの姿が目視出来なくなったということである。

「どうするつも――……っ！？」

突如、――ヴィータの事が殆ど見えない筈なのに――砂煙から魔法弾が向かってくる。そして、それと同時に砂煙が完全に晴れるが、そこにシュレンの姿は無かった。

「……カートリッジロード」

しかし、そんな声がヴィータの真上から聞こえた。

ヴィータが見上げると、そこには二丁の銃ではなくライフルのような物を持っているシュレンがいた。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅヴィータ

正直言って、シュレンは予想以上に強い。力を失ったってことは、聞かないと分からねーぐらいに強い。

でも、だからと言ってアタシは負けるわけにはいかない。だから勝つ。

「アイゼン！」

アタシは相棒の名前を呼ぶ。
ライフルを持って落ちてくるシュレンは、スコープのような物に片目をつけて完璧にアタシに標準を合わせている。
だけど、この距離ならシュレンが撃って来る前に攻撃できる。

「ラケーテン、ハンマァアアッッーーー」

さっきはこの攻撃を中断したけど、今なら出来る。
だからアタシは炎の勢いを殺さずにシュレンのいる所へと近付き、アイゼンを振りかぶった。
一撃目は――シュレンの綺麗な体捌きで――かわされる。

（……だけど、それはジャブだぜ）

瞬時にアタシはシュレンの後ろへと回り込み、――シュレンを地面に叩きつけるように――思いっきり振りかぶった。
この攻撃はかわせられないと思ったのか、シュレンは真正面から受け止めてきた。でも、アタシは手加減なしでシュレンを叩きこむ。

「……くっ！！」

叩き込められたシュレンは体制を整えられずに地面に衝突する。
さっきみたいに砂煙が舞うけど、空中にいるアタシにはシュレンが何処にいるのかが分かった。
だからアタシはこの機を逃さずに、再び後ろに回り込んだ。

「……終わりだっ！」

先程とは違ってシュレンはアタシを視界には入れて無い。だからアタシはそのままアイゼンをシュレンに向け振る。
タイミングは完璧に捉え、避けるのは背中に目が付いていない限り不可能な筈だ。それに、もしこの攻撃がかわされても追撃で終わる。
そう思ったから、アタシはこれで終わったと思った。
それなのに、それなのにどうして――

「……僕の勝ちだ」

気付いた時にはシュレンに銃を突きつけられている？

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅ――――

シュレンとヴィータの模擬戦の後は高町なのはのスパルタ方式の訓練が行われた。とは言え、シュレンとヴィータはその時の訓練に参加はしなかった。

そして現在、訓練を終えたティアナは再びシュレンと会話をしていた。

会話の内容は訓練のことや、先程の模擬戦のことである。

「何か質問はあるか？　出来る限り答える」

「そうですね、それじゃあ、最後に一体何が起きたんですか？私達にはシュレンさんがヴィータ副隊長に地面に叩きつけられたことによって煙が舞い、見えなくなりましたが、煙が晴れた時にはシュレンさんがヴィータ副隊長に銃を突きつけていましたので」

「そうだな、僕はヴィータによって地面に叩きつけられた。そして、その隙を逃すまいと思ったヴィータが追撃をしようとしたが、僕の作戦で追撃は失敗。逆に、僕が勝ちと言った感じか？」

「作戦……ですか？」

「……まぁ、作戦と言うと語弊があるな。正確にはティアナと同じ

幻術を行使して勝ったということだ」

確かにあの攻撃は完全にシュレンを捉えていた。それなのに何故、ヴィータがシュレンに銃を突きつけられたか？

答えは簡単である。

ヴィータが攻撃したシュレンは幻術なのだ。

つまり、ヴィータが幻術のシュレンを攻撃している間に本物のシュレンはヴィータの背後に回り込み銃を突きつけたということだ。

「でも、煙が舞ってから、すぐにヴィータ副隊長は追撃しようとしたんですよ？　そんな短時間で幻術なんて使えますか？」

ティアナはそう聞く。

同じ幻術を使う者同士として気になる事だ。ティアナは幻術を使うのに長時間という訳ではないが、少し時間を喰う。

それなのに、――リミッター付きとは言え――ＡＡランク魔導師をも騙せるほどの幻術を短時間でシュレンは作ったのだ。少なくても、今のティアナに短時間でそんな幻術を作り出すということは不可能である。

だからこそ、ティアナはそう聞いた。

「確かに結構短い時間だったが、出来たからな。まぁ、実際のところは結構ギリギリだった」

「だからと言って、そんな短時間で幻術なんて使えないですよ」

「後は経験だな。経験を積めば、色々と役に立つことが多く、応用もできる。だから、高町なのは教導官の教導通りに教えられればいずれ使えるようになると思う」

「……凡人の私にできるでしょうか？」

自信なさげに言うティアナのその姿を見てシュレンは二歩近付く。元々、二人の距離は近かったので、シュレンが二歩近付いたことによりティアナにとっては、目の前にシュレンがいるという形になる。

ティアナも年頃の女の子。異性が近くにいると言う事は色々と意識してしまうもので、ティアナの頬は――熟したリンゴのように――赤く染まる。

（シ、シュレンさんの顔が近い！？）

と、先程までは不安そうな顔だったのにシュレンのせいで、それが吹き飛ぶ。

一体、何をされるのだろうと、色々と想像（妄想）をするティアナ。……正直、ティアナを知るスバルからしてみれば、今のティアナは可笑しいと思うことだろう。

そして、シュレンはティアナの顔へと手を伸ばす。

「だから、自分の事を過小評価しないことだ」

「いたっ！？」

シュレンの言葉と同時に額に来る衝撃。
その衝撃は瞬時に痛みへと変わり、ティアナは額に手を当てた。
そして、ジト目でシュレンのことを――恨めしそうに――見て、文句を言う。

「……何するんですか？」

「何って、デコピンだが？」

「どうして、デコピンをしたんですか？」

「自分の事を過小評価してたからな。食事の時に言った筈だが？自分の事を出来る限り過小評価するなと」

「確かに、そうですけど……。これじゃあ、変な事を考えた私が馬鹿みたいじゃない」

ティアナは小さな声ではあるが、そう愚痴を溢す。
その小さな愚痴を聞きとれたシュレンはニヤリと笑う。まるで、面白そうな玩具を見つけた子供のように。
……この男、人を弄る時の笑みだけはある意味一流である。

「ほぉ、ティアナは僕にそういう事をされたかったのか？」

「ち、違います！　私は別にそんなことを考えてません！」

「それでは、先程僕が見た変な顔のティアは勘違いだったのか？」

「～～～っ！！　し、失礼します！」

ティアナは顔を赤くしながら、そして慌てながらシュレンの元から走って去っていった。

シュレンはしてやったりという……まぁ、何か勝ち誇ったような表情になり、去っていったティアナの後を見つめていた。

しかし、ティアナの姿が完全に見えなくなった後、シュレンの表情が変わる。

「……それで、何時まで見てるつもりだ？　ヴィータ」

「気付いてたのか」

「ティアナは違う事を考えていて気付かなかったみたいだが、そこまで注意深く見られていると、さすがに気付く。それに僕はそういった視線には敏感だ」

シュレンの表情が変わった理由。それはヴィータが近くにいることを知っていたからだ。

ヴィータは先程の模擬戦でシュレンに圧倒的に勝つつもりだった。別に、力を失ったからと言って油断をしていた訳ではない。寧ろ、力を失ったことが本当かどうかを確かめる為に本気で叩き潰しに行った。

そして、模擬戦の時にヴィータは本当にシュレンが力を失ったか

どうか疑ったぐらいの実力だった。
そして、――リミッターが付いているとは言え、――負けた。
正直、シュレンに真実を言われた時よりショックだ。

「先程の模擬戦のことなら、別に気にしなくていいと思うぞ。確かに、僕は力を扱えなくなった。しかし、だからと言って、僕は誰かに守られると言うのは何より嫌いだ。だから、血を吐くような努力をした。
その結果が僕の勝利ということだ。だから、ヴィータは僕のことを可哀そうな奴などとは思うな。もちろん、ヴィータが心配してくれるというのは嬉しい事だが」

「……それなら、どうしてお前はさっき本当の事を言ったんだ？お前の性格から考えて人に心配ごとをかけるのは嫌なんだろ。だったら、嘘を貫き通せば良かったじゃねーか」

こんなことを言うのは最低だろう。
力を失って弱くなったと思っていた奴は自分よりも強くてショックを受けて、真実を言えと言ったのに嘘を貫き通せば良かったと言う。
……本当に最低な奴だと、ヴィータ自身は思う。

「確かにそうなのかもしれない。しかし、逆に聞くが、ヴィータはあの時、僕に嘘を吐いてて欲しかったか？」

「……いや、そんな事はない」

「その筈だ。だから、ヴィータが今悩んでいることは意味の無いこととは言わない。
……それより、僕のような屑なんかの為に費やす時間は勿体ないと思うぞ」

「お前、ティアナに言ってることと自分に言ってる事が矛盾してるぞ」

確かに、シュレンの言っている言葉は矛盾している。
シュレンはティアナには『自分のことを過小評価するな』と言っているのに、自分自身のことは過小評価しているのだ。

「それは、まぁ、この際は置いておけ。……それで、とにかく僕が言いたいのは、僕のことを特別視しないで欲しいということだ」

「特別視？」

「そう。これは、あくまでも僕の推測でしかないから間違っていると思うが、ヴィータは僕の事を『力を失ってしまった奴』みたいな感じで見て無いか？
正直言うが、同情はあまりして欲しくない。何故なら、そんなことをされたら、自分は可哀そうな奴と自覚してしまうだろう？
……僕は力を扱えなくなったからこそ、ここにいる。だから、同情なんてされたら、それは今の僕に対する否定なんだ」

今まで考えた事も無い考え方に、少しヴィータは頷く。
確かに、シュレンの言う通り今まで同情してシュレンのことを見

てきた。それは、そうすることが普通で当たり前だと思ったからだ。
しかし、シュレン本人からしてみればそれは迷惑な行為だった。

「だから、これからは僕を『力を失った奴』という認識ではなく『普通の同期』と、思ってくれると助かるな」

言葉と同時に笑みを浮かべる。
相変わらずの不器用な笑みだが、その笑みは模擬戦前のような悲しみしかない笑みではなく、シュレンが本当に純粋にに笑っているようにヴィータは感じた。
だからだろうか？
先程まであった筈の心のもやもやがすっかり晴れたのは。

（本当にコイツ（シュレン）はスゲェな）

ヴィータは改めてそう思う。
しかし、シュレンの何が凄いと聞かれれば、返答に困る。とは言え、ヴィータがシュレンを凄い奴と思っているのは紛れもない事実だ。

「……子供がそんな難しいそうな顔をしたら駄目だぞ。子供は子供らしくしていないと」

「アタシは子供じゃねーよ。立派な大人だ」

「一体何処に、立派な大人がいる？　……あぁ、成程。これが自意識過剰というやつか」

「違ぇよ！　シュレンはアタシを子供扱いするな」

「だが断る。……僕は部屋に戻るから、子供は早く寝ろよ。成長に良くない筈だからな」

そして、8年前のようなやり取りをするシュレンとヴィータ。

……まぁ、やり取りというよりはシュレンがヴィータを弄っていると言った方が正しいのかもしれない。とは言え、ここはヴィータの名誉の為に大人しくしていよう。

シュレンがヴィータの視界から消え、ヴィータは無意識に笑みを浮かべる。

「……だから、アタシを子供扱いすんなってーの」

こうしてヴィータは強引ではあるが、ヴィータはシュレンに対して納得したのだった。

第七話　『和解』（後書き）

と、言う訳で『和解』でした。

戦闘シーンが少し短いようですが、これでも結構頑張って増やした方なんです。
すみません。
それと、何かこの和解って自分で書いていて、簡単に和解しちゃったなぁと思っています。なので、その内訂正（編集）すると思います。

次話はまたサイドストーリーです。
それと、また更新が遅れると思います。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　５（前書き）

相変わらず、サイドストーリーは短めです。
普段の四分の一ぐらいですからね。
それと、今回は自己解釈のようなものがあります。

では、サイドストーリー始まります

Side story 5

Side――

「ふぅ……ここ数日間は疲れたな」

冒頭から愚痴を言って申し訳ない限りだが、本当に疲れているのでそう愚痴をこぼすのも仕方がないことである。

本当に色々な出来事があった。

まぁ、言う程多くはないのだが、僕が疲れたという事実は変わらない。

発端はレルデが僕に機動六課に異動させたこと。そして、機動六課には色々と因縁深い者と再会して、少しの間ではあるが仲違いのようなことをしていた。で、何故か模擬戦をＡＡＡランク魔導師と行った。

……振り返ってみると、そうでもないな。

レルデの部隊にいた方がまだ忙しかった。

……それにしても、ヴィータは一つの勘違いをしているようだ。

それはヴィータは僕の全体的な能力が落ちてしまったと考えているということだ。例えば、それはリンカーコアや体の後遺症などがあるなどと言った、僕の身体に関しての影響があるとヴィータは考えていること。

しかし、実際はそうではない。

「魔力量やリンカーコアに変化はない」

言った通り、魔力量などには変化はない。

寧ろ、八年前と比べ全体的な魔力量は増えた方だろう。昔はＢランク程だったのに、今ではＡＡランク……

正直に言って、八年前ヴィータに嘘はついていない。

僕は本当にＢランク相当の魔導師だったのだ。

しかし、僕はそれ以上の実力を持っていた。

誤解のないように言っておくが、別に相手を罠で陥れるなどといったことはしない。正々堂々、真正面から闘い勝利できる。

まぁ、相手の油断というのは除く。

「ランクが低くても、能力さえあれば高ランク魔導師にも勝てる」

そう。別にランクが低くても希少能力（レアスキル）さえあれば、高ランク魔導師に勝つことができる。

キャロはその良い例ではないだろうか。

今はまだ、完璧に制御できている訳ではない。しかし、完璧に制御できるようになったら――魔力量などの関係上、少ない時間だったとしても――高ランク魔導師を圧倒できる筈だ。

こう言ってしまったらキャロを傷つけるが、キャロが過去に恐れられたのは龍を制御できないからだ。しかし、もし、キャロの周りの誰かが龍を力尽くで抑えることができる者がいたのであれば、キャロは恐れられなかっただろう。

暴走しても、抑えることができるのだから。

しかし、結果としてキャロは恐れられた。周りに強者が居なかったから。

……まぁ、ある程度、腕の立つ者はいたのだろう。だが、龍には勝てなかった。だから、恐れられた。

「まぁ、生半可な腕では無理だろうな」

このようにランクが低くても、希少能力（レアスキル）または突起している能力さえあれば、勝ててしまうのだ。

そして、今のはキャロの場合の話だが、今度は僕の話だ。

僕も希少能力（レアスキル）を持っている。

自分で言うが、この能力を使っている間は、余程のことがない限り負けない自信がある。

……とは言え、僕の場合はキャロとは違って副作用のようなものがある。制御はできているが、代償を払わなければ使用することができない。

僕が扱えなくなった力というのは希少能力（レアスキル）のことなのだ。

そして、この希少能力には代償がある。

そう考えれば、別にこの能力はあってもなくてもどちらでも構わないのだ。

この代償というのは、別に僕自身が苦しむ訳ではない。セレン曰く、僕ではなく、僕に親しい人が傷つく代償だ。

そして、厄介なことに代償は僕自身が気づくことはない。

つまり、代償を払っている感覚がないのだ。代償のこともセレンに言われるまでは気付かなかったこと。

いや、正確には今でも気づいていていない。

……止めだ。こんな考えはもう終わりにしよう。
既にヴィータは納得して、なのははこの事実を知らない。まぁ、仮に知ったところで高町なのはが悪い訳ではない。
だから、もう止めにしておこう。
これ以上考えてしまっては僕自身も少しだけ辛くなる。

これ以上考えたら、あの時の、あの人の、泣いている顔を思い出してしまうから。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　５（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。

いやぁ、今回は短いながら、結構重要な話だったと思います。
シュレンの話とか、シュレンの能力に関しての事実。

そして、最後の『あの時のあの人』という伏線。
まぁ、大体予想できているとは思いますけど……
だけど、その予想をある意味裏切ると思います。

この小説に対する意見などありましたら感想の方にどうぞ

第八話　『日常』（前書き）

更新がだんだんと苦しくなってきている。

……では、第八話『日常』始まります。

第八話　『日常』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

ヴィータと和解――まぁ、和解と言うよりはヴィータが一人で納得したという方があっているが――をしてから数日後。
あれから、ヴィータとの気まずい空気は無くなった。
そして、僕達に関する出来事を知らない人からしてみれば、いきなり仲良くなったという印象を持たれることだろう。
それは僕を観察しているような人の視線で分かる。
観察をしているような人というのは、極度の人見知りであったり、その他の理由で僕に話しかけてこない人のことだ。
とは言え、機動六課の殆どの人とはある程度のコミュニケーションは取っている。

「お早うございます！」

「お早う。スバル」

と、僕の座っているテーブルにスバルが座って来た。
ヴィータとの模擬戦の後、何故か親しくなって、よく食事の際には一緒に食べている。ティアナも一緒に食べるのだが、最近は顔を合わせるたびに避けられてしまう。
やはり、前に弄ったのが悪いのだろうか？
……まぁ、反省も後悔もしていないが。寧ろ、あるのは達成感だけ

だ。

「今日もティアは一緒ではないのか？」

「はい。やっぱり、色々と気にしちゃってるようで……」

「しかし、ティアナのあのような表情は中々新鮮なものだろう？」

「はいっ！　正直、あのティアの表情は反則だと思います」

まぁ、このような会話を食事の度にする。

ティアナのこと、スバル自身のこと、スバルが思っていることなどを会話する。そして、僕はそれに対して、出来る限りのアドバイスをしている。

それが、年上の務めだというものだ。

だが、スバルに関しては１つ気になっていることがある。

「本当にあんな可愛い表情のティアを見せてくれてありがとうございます。レン兄」

そう、何故か僕は『レン兄』と呼ばれているのだ。

まぁ、最初の方こそ戸惑ったものの、さすがに何回も呼ばれると慣れるもので、今ではこの呼び方が定着している。

しかし、この呼び方が定着する前に、少し面倒な事もあった。

『どうして、シュレン君はスバルに兄って呼ばれてるの？』

とか

『もしかしてお前は来て早々に、兄って呼ばれるようなことをしたのか？』

など、……色々質問責めにあった。

とは言え、後者の質問をしてきた奴には『子供がそういうことを言ってはいけないだろう』と弄り――……もとい、注意をしてあげた。

「それにしても、スバルはよく食べるな」

スバルの食べている量を見て思わずそう言う。

別に僕が少食という訳ではない。寧ろ、平均より食べる方だと思っているが、スバルはそれを遥かに超えている。

朝食からそんなに食べてよく高町なのはの訓練をこなせるものだ。

僕なら、鍛えているとは言え少しは内蔵を痛めることだろう。

「そうですか？　普通だと思うんですけど」

しかも、その自覚が無いらしい。

こんなことを言ってしまったらセクハラと思われてしまう可能性があるので、言葉にはしないが、よくそんなに食べて太らないものだ。

あのバグキャラであるセレンでさえ、食事には気をつけていると言うのに。

「あ、そろそろ訓練の準備とかしないといけないから先に行きますね、レン兄」

「……了解」

残っていた食べ物をスバルは――滅茶苦茶早く――食べ終え、瞬く間に去っていった。

前に言っていたティアナのスバルに対する評価を聞いたが、その理由が少し分かったような気がする。

それと、物凄くどうでもいいことなので聞き流してくれても構わないが、1つ気になる事がある。

それは――

（レン兄と呼ばれると言う事は、上司として見られていないと言う事か？）

ということである。

まぁ、敬語を使っているということから、一応上司として見られているのは分かる。分かるのだけど、少し複雑な気分だ。

……なのはには憧れていて、ちゃんと上司として接しているとい

うのに。

それともこれが、天才と呼ばれている少女と一般局員の差なのだろうか？

僕はその日から、そんなことも考えるようになった。

閑話休題。

僕は食事終えた後、予定通りに訓練を行っている。とは言っても、僕は見ているだけで実際には訓練は行っていない。

何故なら、今フォワード陣がやっている訓練というのが『シュートインベーション』というもので、なのは自身が行っているからだ。だから、僕は訓練には参加していない。

それに加え、僕個人からしてみても見学を希望した。理由としては、フォワード陣のチームワークを詳しく見たかったからである。

部隊にいる者として、チームワークというのはかなり大事なものになってくると僕は考えている。

理由としては、個人の力を上げるよりも最初にチームワークの向上をしておけば、――少し言い方が悪いが――任務の成功確率が上がるからだ。

とは言え、セレンや高町なのは一等空尉とテスタロッサ・ハラオウン執務官、それに八神はやて二等陸佐のような一騎当千のような強者は除かれる。

一騎当千のような強者の個人の力というのは凄まじく高い。しかし、それができない者も世界には当然のようにいる。

寧ろ、こちらの方が圧倒的に多いだろう。

だからこそのチームワークである。

確かに、個人の力を上げるというのも大事な事だ。だが、チームワークさえ良ければ、例え、一騎当千の敵でも勝てる時がある。

僕は実際に、そのことを体験したことがある。

「……」

まぁ、だからと言って、機動六課（ここ）ではそこまでのチームワークを上げる必要も無いと考えてもいる。

何故なら、今のフォワード陣も隊長陣の人達も全員がまだ若いから。

この先の未来に最高の相棒が見つかったとしたら、自然とソイツとのチームワークは上がるものだ。

僕とセレンは……いまいちピンとこない。

だが、まぁ、他の者と比べたら色々やりやすい方なのだろう。

……と、柄にも無く綺麗事を並べてみたのだが、正直言って違和感がある。やはり、柄にも無い事はしない方がいいということだ。

僕が細かく言ってしまうとキリが無いということで、訓練の細かいところは省く。

とは言え、先程のシュートインベーションの結果だけを言えば、フォワード陣の勝ち……と言っていいのだろうか？

とにかく、早朝訓練は終わった。

無事に終わったのだが、スバルとティアナのデバイスが故障した。

訓練校時代から使っていたということもあって、中々古いデバイスだ。それに加え、朝から晩までのハードな訓練をしていた。

だから、それにしては、よくやった方だろう。

「じゃあ、一旦寮に戻ってシャワーを浴びてから、ロビーに集合しようか」

「「「「はいっ！」」」」

その為、フォワード陣はシャワーを浴びてからということになり、現在は寮に戻る為に訓練場から歩いている。

その途中で――避けられがちではあるが――ティアナと会話をする。

内容は先程の訓練でのことだ。

「ティアナの指揮も随分と様になってきているな。……何故、そんな驚いたような表情している？」

「い、いえ、何でもありません」

それなら構わないが……。今、一瞬ではあるが、本気でティアに避けられ始めたのかと不安になった。

改めて考えてみたら、僕がティアナを褒めるのは数少ないな。

僕の性格から、あまり他人を褒めるといったことはしない。だから、ティアナは驚いたのだろうか。

「指揮官訓練でも受けたらどうだ？　なのはもそう思うよな？」

「うん、確かにね。どうする？　ティアナ」

「……わ、私は戦闘訓練だけで精一杯です」

遠慮する必要なんてない……と、できれば言いたいところだが、ティアの言う通り、あの管理局の白い悪魔のスパルタ方式訓練、もといストレス解消の餌食となっているせいで、色々と疲れているのだろう。

基礎体力を付けさせる過程を飛ばしたのもフォワード陣を苦しませる為で、管理局の白い悪魔にとって、苦痛で歪ませている表情と言うのは最高なものなのだろうか。

いや、最高なものなのだろう。

……ん？　何故か、背中から視線を感じる。

「シュレン君って私の事をそんな風に見てたんだ」

「僕は振りかえってみると、怖い表情で睨んでくる高町な――……では無く、管理局の白い悪魔がいた。どうやら、考えていた事が口に出てしまったようだ」

「……地の文のように言ってても悪口には変わりないよ。だから、あとでシュレン君は私と“お話”しようか？」

「だが断る。……だからと言って、レイジングハートを構えるな」

まったく、本当に恐ろしい奴だ。前から考えていたことなのだが、コイツはゲームにいるラスボスのような所にコイツはいるのだろう

か。
だとしたら、僕はそのゲームを買う機にはなれない。
――そもそも、ゲーム自体をあまりやらないので分からないが、――コイツがラスボスだとしたら、そのゲームは絶対にクリアできる人はいないことだろう。

と、そんなくだらないことを考えていたら、正面から一台の黒い車――スポーツカー――がこちらに向かってきた。
黒をベースにして、派手過ぎずと言ったところか、中々カッコ良い車だ。そして、その車は僕達の目の前で止まり、乗っていた二人の人物が現れた。
まぁ、正確には現れたというより、オープンカーのような形状になり顔を出したといった方が正しい。

「フェイトさん、八神部隊長！」

中に乗っていたのは八神部隊長にテスタロッサ・ハラオウン執務官……いや、機動六課ではフェイト隊長と呼んだ方が良いか。
とにかく、車の中にはその二人がいた。
フェイト隊長とは正直、あまり面識は無い。互いに自己紹介はしたが、食事などを一緒に食べた事は無い。

「すご～い！　これってフェイト隊長の車だったんですか？」

「うん。地上での移動手段なんだ」

「みんな、練習の方はどないや？」

八神部隊長はフォワード陣になのは、それに僕のことを見ながらそう聞いてきた。
……ふむ。
「ご主人さｍ――……じゃなくて、なのはさんが虐めてきます」
だから僕は、八神部隊長にそう返した。すると、八神部隊長は僕の意図に気が付いてくれたみたいで、求めていた返事が返ってくる。
何とも乗りの良い人だ。
「……なのはちゃんはシュレン君にご主人様とでも呼ばせてるんか？」
「ふぇ！？」
「ご主人様は……なのはさんは僕の事を虐めてくるんです！」
「何やて！？　ダメやないか、なのはちゃん！　シュレン君を虐めたりしたら」
「さっきだって、レイジングハートを僕に向けようとしました」
僕は嘘は吐いてない。
向けようとしたことは事実だし、ご主人様って呼ばされているな

んて一言も言っていないのだから。
こういうの屁理屈と言う？
言っておくが、レルデの場合はもっと酷いぞ？

「……へぇ。それは詳しいことを聞く必要があるな。な？　なのはちゃん」

「は、はやてちゃん？　それは誤解だよ。私はそんなことをしてないよ！」

「嘘に嘘を重ねない方が身のためやで？」

「だーかーら！　私はそんなことをしてないってば！　確かにレイジングハートを向けようとしたのは事実だけど……」

「やっぱり嘘を吐いてたんか！　見損なったで！」

僕と八神部隊長となのはを除いた全員は、目の前で起きている出来事にボケっとしている。
まぁ、当然の反応だ。

「……と、冗談は此処までにしておいて。訓練の方は順調ですよ、八神部隊長」

「……そうなんや。これからも頑張ってな。応援してるから。レルデ・ローラルド被害者同盟を結成した者として」

「ええ。それは僕も同じです。頑張ってください」

レルデ・ローラルド被害者同盟は堅い結束である。

まぁ、その後に白い悪魔に怒られたのは当たり前の話だが……。

閑話休題。

現在の状態を一言で表すなら、暇だ。

男であるエリオは既にシャワー室から出てきて暇そうに座っていた。とは言え、僕はシャワーを浴びていないという理由から、エリオが暇と思っている時間よりも待っている時間は長い。

シャワーを浴びていないからと言って不潔だと思われたくはない。僕は今回の訓練には不参加で、汗なんてまったくかいていなかったのだから。

と、まぁ、そんな訳で僕達は未だにシャワーを浴びている三人を待っていた。

『男なら女性を待たせるな』と、レルデが言っていた。まぁ、確かにその通りで、女性は待たせるべきではない。

「……遅いな」

エリオが愚痴をこぼす様に小さな声でそう言う。

それと何となくではあるが、1つ気になることがあるのでエリオに質問をする。

「エリオ、1つ言っておくけど……覗くなよ？」

「そ、そそんなことはしません！」

「……やはり、普通はそのような反応なんだよな」

「え？」

「いや、何でも無い。気にするな」

そう、気にしない方がエリオの為になる。

特命隊にいた時は別の意味で疲れていたのだ。その理由というのが、レルデが『男なら女の着替えやシャワーの時には除け』と言ったからだ。

その為、僕以外の男は異様なほどテンションが上がり、その日から正々堂々と覗くようにになった。

さすがに不味いと思った僕はストッパー役として止めていたのだが、相手（馬鹿）は数十人。とにかく、滅茶苦茶疲れた。

だから、この程度のことでは愚痴など言わない。ある意味、あの部隊では精神が鍛えられたのだから。

本当に、この機動六課に所属されて良かったと益々思った。

まぁ、あの部隊は疲れる。が、楽しいと思えたというのも、また事実だな。

第八話　『日常』（後書き）

と、言うわけで第八話でした。
サブタイ通り日常のような感じで書きました。

それにしても、思った。
この小説ってギャグが少なくね？　と。
シリアスが基本な作品もアリと言えばアリなんですけど、自分の作品って中途半端というか何というか、困ったものだ。
基本的にはなのは弄りか、レルデさんの暴走ぐらいしか思いつきませんし……
今後の課題だ。

それと、文章の書き方ですね。
正直、今回の最後の部分は書かなくても良かったと思ってますし、最後の部分を書くだけに閑話休題を二回も使ってしまいましたし……
閑話休題は使うとしたら一回というのを目標にしてるんですけどねまぁ、長い文章だったら別ですけど。自分のはそこまで長いというわけではありませんから。

えっと、この小説に対する意見などありましたら感想の方にどうぞでは

第九話　『ファーストアラート』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

女子メンバーのシャワーが終わり、ようやく終わった退屈な時間の後は予定通りにロビーに向かっている。
その途中でも、これから支給されるであろうデバイスの話題で話が盛り上がっている。
もちろん、それは僕も例外ではない。この場にはなのははいないが、アイツも同じようなことを考えていると思う。
僕達教導官は、新人達のデバイスまでもよく観察しなければなれないということもあるからだ。

「そう言えば、ティアナとスバルは支給品のデバイスでは無く、オリジナルのものなんだよな？」

「え？　あ、そうですよ」

「そうだよ、レン兄」

相変わらず、スバルには兄と呼ばれている。……というより、最近は敬語まで疎かになっている始末だ。
まぁ、別に構わないのだが、こうもフレンドリーに接せられると対応に困る。

慣れたと言えば慣れたのだが、特命隊にいた時は――悪ふざけはあったが、――ちゃんと接せしてくれたので特に気にはしていなかった。

「私はカートリッジシステムを使いたくて、スバルは戦闘スタイルがあんななので、私達は自分で組むしかなかったんですよ」

「成程」

ティアナには兄の力を証明してみせるという意地もあるのだろう。その為にカートリッジシステムは近道にもなる。が、訓練校などではわざわざ一人一人の為に管理曲側が専用のデバイスを作ることは不可能。

そうなると、きちんとしたデバイスマイスターが作成したデバイスと比べ、性能は落ちる。

結果として、今回の故障だ。

まぁ、故障というのは努力の証拠だな。

その後もデバイスの話などで盛り上がり、気がついたらロビーに着いていた。

ロビーの自動ドアが開き、中に入る。

「……少し待たせたか？」

「いえ、寧ろグッドタイミングです」

「それなら良かった」

簡単なやり取りをして、フォワード陣をデバイスの前に立たせる。
ちなみに、シャーリーとリィンとの仲は結構良い方だ。
僕が機動六課に着いて、八神部隊長のところまで案内してくれたのはシャーリーであり、リィンとは八神部隊長とレルデのことを愚痴っていた時に何時の間にか仲良くなった。
そして、リィンもレルデによって苦労している人であることが分かった。そして、リィンともレルデ・ローラルド被害者同盟を組んだのだ。

「これが私達の……」

「新デバイス？」

ティアとスバルが目の前にあるデバイスを見て、そう呟く。

「そうで～す！　設計主任は私、副設計主任シュレンさんに、協力はなのはさんにフェイトさん、レイジングハートさんとリィン曹長です」

「……レン兄が副設計主任？」

「そうだ。……僕はデバイスマイスターの資格を持ってる」

僕の持っているデバイスは少し特殊で、他のデバイスマイスター

では改造が出来ない。
……いや、正確には、改良されてしまうので、僕は自分がデバイスマイスターの資格を持つ必要があった。
恐らく、僕以外のデバイスマイスターがホルスを見た時、そいつは驚くことだろう。何故なら、僕のデバイスには色々と無茶をしてかなりの量の物を詰め込んでいるから。
しかも、戦闘には関係ないものを。

「だから、ホルスは自分で作ったデバイスだ」

「そうだったんですか。凄いですね」

他人から褒められるということはあまり無いので、どのような反応をしていいのか困る。まぁ、世辞なのだろうが。
というより、ティアナとスバルも自力でデバイスを作ったではないか。
それと、出来れば僕に関する話は早めに終わって欲しいと思う。
同じデバイスマイスターの資格を持っているシャーリーが目をキラキラさせながら、僕の腕輪を見てるから。
先程も言ったように、ホルスの中身を見られたら改良されてしまう可能性が高い。だから、早く終わって欲しかった。

「リィン、フォワード陣に言いたいことをどうぞ」

「はいです！」

僕は逃げるようにリィンに話を振り、逃げた。
シャーリーの目が先程より余計にキラキラと輝いているが、それは無視する方向で話を進めていこう。

「……みんなが扱うことになる４機は六課の前線メンバーとメカニックスタッフが経験と技術の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的に合わせて、エリオやキャロ、スバルにティア、個性に合わせて作られた文句なしの最高の機体です」

僕も出来る限り頑張って作った４機のデバイス。それに文句をつけられたら、絶対に落ち込むな。
しかし、文句を言われたとしたら、その場合はもっと良いデバイスを作るだけではあるが。

「この子達は、まだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められていて、いっぱい時間をかけてようやく完成したです。……ただの武器や道具だと思わないで大切に、だけど能力の限界まで思いっきり全開で使って欲しいです」

「うん。この子達もね、きっとそれを望んでいるから」

リィンとシャーリーのデバイスに対しての心構えのようなものを言った後、遅れてなのはが入って来た。

僕はスターズ隊副隊長だが、なのはからはあまり仕事が回って来ない。だから、恐らくなのはは相当の量の仕事を1人でこなしているのだろう。

それなら遅れた理由にもなるが、1つ気になることはある。
それは8年前の出来事。
アレはコイツが無茶をしたからこそ起こった出来事だ。だからこそ、今は無茶をしていないかと、気になるものである。
まぁ、前回と違ってなのはの傍には、信頼できる友達が観察してるようなので、問題は無いと思う。
まぁ、このことは今考えていても仕方がないから、後回しにするか。

「その子達には何段階に分けて、出力リミッターをかけてるのね。だから、最初からビックリするようなパワーが出る訳じゃないから、まずはそれで扱いを慣れて行って。
……で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、リィンやシャーリーの判断で解除していくから」

「丁度、一緒にレベルアップしていく感じです」

余計なことを考えていたので話が飛んでいるが、理解できていないという訳ではないので問題ない。寧ろ、一緒にレベルアップ方式は僕が考えたことで、それを他の者は採用したのだ。
力は振るう物。力に振るわれてしまってはいけないというのが、僕の考えである。

「出力リミッターって言うと、なのはさん達にもかかってますよね？」

リィンの言葉を聞いて、ティアナはそう聞いてきた。

「うん。でも、私達はデバイスだけじゃなくて、本人にでもだけどね」

「えっ！？」

……ティアナ達はこのことを知らなかったのか。

ティアナは物事をよく知っているという印象があり、真面目な性格なので本人達にもかかっているリミッターのことぐらいは知っていると思っていたが、どうやら違っていたようだ。

僕達、隊長陣はデバイスだけでは無く、本人にもリミッターがかけられている。そのメリットは、多くの優秀な魔導師を1つの部隊に集めるということだ。

まぁ、少し汚い方法なのだが、こうすれば優秀な魔導師を集められ、必然的に――上司が優秀なので、――部下も優秀になってくる。

とは言え、デメリットもある。

それは僕の所属している特命隊でも同じ事が言えるのだが、管理局の中でも有名な部隊になるということだ。

それ故、その部隊に嫉妬する所も多い。

まぁ、特命隊はあまり嫉妬はされていない。

何故なら、特命隊にいるエース級の魔導師というのはレルデしか

いないからだ。まぁ、正確に言うとバグキャラ（セレン）もいるのだが、この際は数えない。

では何故、エース級魔導師が1人しかいないというのに、有名な部隊になっているかと言うと、それは――本当はこんなことを言いたくないのだが――レルデのカリスマ性だろう。

しかし、この機動六課ではそうもいかない。

特命隊と違って、エース級の魔導師が何人もいるのだから。

「でも、シュレン君の場合は私達と少し違うんだ」

「そうなんですか？」

少し考えごとをしていたら、話が僕に振られてきた。

ティアナ達に事情を話していたので、なのはは僕のことを含めたことまで説明をすると予想していたが、僕のことは僕自身でやれ、ということらしいな。

とは言うものの、殆どは説明された通りなのだが。

「僕も力を制限しているが、僕の場合はなのは隊長達と違って許可を貰う人が違う」

確か、僕を除いた隊長陣はクロノ提督許可を出されている筈だ。

しかし、僕はクロノ提督とは二度しか会っていない。

その為、クロノ提督――正確に言うと、なのは隊長達にリミッターをかけてる人達――からはリミッターをかけられていない。

それなのに、僕は力を制限させられている。

「僕はレルデ・ローラルド少将から許可を貰わないといけない」

そう、僕はレルデから力を制限するように言われているのだ。
それと、どうでもいいことなのだが、本音を言うとレルデのことを少将と言うのは何かと気が引ける。仕事も真面目にやらず、面倒事を押し付けてくる奴などに少将と言いたいくないのだが、仕事というのはそれを我慢して言わなければならない。
本当に仕方なく言わなければならないのだ。

「レルデ・ローラルド少将って、あの時空管理局本局特命隊隊長のレルデ・ローラルドですか？」

「……そうだが、どうした？」

それを聞いていた者は少しの沈黙をおく。
僕の言葉がそんなに理解できなかったのか。
そんなことは無い筈だ。寧ろ、二言しか言っていないのだ。つまり、この二言の間にこの沈黙を発生させる原因があったということ。
……とはいえ、既に原因は気づいている。
失言だったな。

「「「「……えぇぇぇえええええっ！？」」」」

ティアナを除くフォワード陣には僕が時空管理局本局特命隊所属であることを伝えていなかった。
自己紹介の時は簡潔なこと、最低限のことしか言わなかったので伝え忘れていたか。
それならば、この大声の理由は分かる。
アイツとあの部隊の名前だけは無茶苦茶有名だ。それはティアの時にも学んだ筈なのに、すっかり忘れてしまっていた。
……僕からしてみれば、あんな部隊がこんなにも驚かれる理由が分からないがな。
いや、まぁ、理由は知っているが、少なくても認めたくはないな。

「どうして、もっと早く伝えてくれなかったんですかっ！？」

「怒鳴り声で言われても困るだけだ。というより顔が近いぞシャーリー」

シャーリーが物凄く怒ったような表情をして、僕に言ってくる。
だが、そう言われても困る。
それに、君は女の子だろう。
顔をここまで近づけてしまっていいのか？　２０ｃｍもないぞ。
だから、やめてくれると助かる。それができないなら離れてくれ。

白い悪魔がコチラを見ているのだ。
と、そんな願望が叶ったのか、シャーリーは離れてくれた。が、僕に近づきすぎたということもあり、顔が紅潮している。
恥ずかしいなら、やらなければいいのに。
しばらくして、何とか復帰したシャーリーは大声でそう言ってくる。

「……私、あの人のファンクラブに入ってるんです！！」

あったのか、そんなファンクラブ。
そのファンクラブに入っている者達には悪いことを言うようだが、潰れてしまえ、そんなファンクラブ。
レルデのことを褒めても、調子に乗るだけだぞ？

「ほら、これがファンクラブに入っているという証拠です！」

取り出してきたのは人形だった。しかも、レルデに物凄く似ている。
……何故だろうか。物凄い殺意が湧いてくる。

「シャーリー、今すぐその人形を渡せ。その人形を殺す……ではなく、壊すから」

人形だから壊すという言葉に直したが、僕にとっては殺すという意味合いで間違っていない。

「嫌です！　絶対に渡しません！」

大事そうに抱えるシャーリーを見て、これから行うことに罪悪感

を感じそうだが、僕は人形（レルデ）を壊さなければならない。
別に、シャーリーが持っている物だから壊すと言う訳ではない。
というより、それは完璧なイジメだ。
ただ、人形がレルデの形をしていなければ良かったのだ。

「勿体ないな。その人形を渡しさえすれば、僕がレルデに頼んで会わせることもできるかもしれないのにな？」

「っ！？」

「そうかそうか。そんなに会いたくないか、分かった」

「どうぞ！　このままでよろしいでしょうか？」

……切り替え早いな。
まぁ、好都合だからいいか。
それに悪い話ではない筈だ。シャーリーはレルデに会えて、レルデは美人に会えるのだから。
ただ僕は、それの仲介に入っただけにすぎない。そして、その報酬に人形を得ただけなのだ。
……さて。

「……君に恨みは無い。だから、別に僕を許さなくても良い。寧ろ、ずっと恨んでいて欲しい。そうじゃないと、僕は罪悪感で押し潰されてしまうから」

そう言いながらホルスを展開して、――普段は二丁剣銃だが――一丁の銃を取り出す。そして、銃先をレルデ人形の額の部分に向け、瞳を閉じる。

（でも、恨むならレルデ人形を作った奴も恨んでね）

そう心の中で呟き、指先に力を込めて引き金を引く。

しかし、ここで予想外のことが起きた。人形を渡してきたシャーリーが僕のことを邪魔したのだ。

横から思いっきり突き飛ばされ、吹っ飛ぶ僕。

「……ぐふっ！」

だが、吹っ飛ばされながらも僕は銃先を再び人形に合わせる。

この程度のこともできなければ、フォワード陣に教える教官になどなれるものか。そして、そのまま再び引き金を引こうとした。しかし、僕は見てしまった。

シャーリーの瞳を。強い目を。僕は見てしまったのだ。

揺れる僕の心。

それはとても短い時間だったが、吹っ飛ばされていた僕にとっては長い時間だった。

だから、僕はそのままデスクの角に頭をぶつかった。

「「「シュレンさんっ！？」」」

「レン兄っ！？」

その様子を見ていたフォワード陣は心配してくれて、――そこまで距離がある訳ではないが――駆け付けてくれ、僕は吹っ飛ばした張本人（シャーリー）は、取り返した人形を先程と同じように抱いていた。

なのはとリィンは苦笑いをしている。

「大丈夫ですか？　シュレンさん」

「問題ない。首が少しゴギッという音が鳴っただけだ」

「……そ、それは大丈夫じゃないと思います」

本当に僕は上司として見られているのだろうか？

部下に心配されるということは良い事ではあるのだが、大抵の場合、それは上司が不甲斐ないと思われているからだと、レルデが言っていた。

別にレルデの言葉の全てを参考にしている訳ではない。あくまでも参考程度だ。しかし、意外と役に立つことも多い。

だからこそ、僕はそう思った。

「まぁ、とにかく、シャーリーが僕を吹っ飛ばしたということは取引は出来ないということか？」

これ以上考えていても気分が鬱になりそうな予感があったので、

話を変える。

「はい。さっきはレルデ少将に会えると聞いて気分が浮かれてしまいましたが、この人形を渡すわけにはいかないって思ったんです」

「……それは何故だ？　人形さえ渡せば、簡単にアイツに会う事が出来るのだぞ？」

「だからこそ、です。私は楽してあの人に会う訳にはいかないんです。
私がもっと努力して、もっと才能を認められて、特命隊に推薦が来るくらいに努力をしたいんです。そうじゃないと、ズルいじゃないですか。私以外にもレルデ少将に会いたいって思ってる人は沢山いるのに、たまたま特命隊にいる人が同じ部隊にいたっていうだけで会えるのは、とてもズルいことだと私は思うんです」

「そう。それなら、頑張れ。その意気込みは褒めておこう」

「はいっ！」

先程から思っていることなのだが、どうしてシリアス風味の文になってしまっているのだ？
どうして、ここまで真面目な話になっている？
たかが、レルデの形をした人形だぞ？　それなのにどうしてこうなったんだ？
幼稚な奴なのだろうか、僕は。まぁ、実際にそうなのだろう。それは過去の体験で嫌という程に経験している。

「さて、コントも終わったし、訓練をしながら新しいデバイスに慣れて行こうか」

「「「「はいっ！」」」」

今のをコント扱いか。

僕はとにかく、シャーリーにとっては真面目な話だった筈なんだが。

「……さすが、管理局の白い悪魔だな」

「シュレン君は後で私と二人っきりでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩね。拒否権はないから」

「お手柔らかに」

ふざけた様な口調になのはの目が暗く、そして怖いものへとなっていく。そんな目をするから、そのように言われるのを気づいていないのか。

と、そのようにふざけていた時だった。

『ＡＬＥＲＴ』

という文字がデバイスルームに赤いランプと同時に現れる。それ

に加え、この警報は一級警戒態勢の合図。
つまり、簡単に言ってしまえば緊急事態だ。

「グリフィス君！」

高町隊長は迅速に――冷静に――ロウラン陸尉を呼び、ロウラン陸尉がモニターに映る。

『はい。教会本部から出動要請です』

『なのは隊長、フェイト隊長、シュレン副隊長、グリフィス君。こちらはやて』

「状況は？」

『教会の調査団が追っていたレリックらしきものが見つかった。場所はエイリの山岳丘綾地区。目標はリニアレールで移動中』

……成程。それならば一級警戒態勢というのも頷ける。
ガジェットがリニアレールの制御を奪い、レリックを探しているということか……。しかも、リニアレールということは、そのまま暴走するという可能性もある。
それならば、ガジェットを迅速に破壊するしかないな。
もう１つの方法として、レリックらしき物の確認がとれ次第、ガジェットごとリニアレールを破壊するという手段もあるが、目標は前者だ。

『リニアレール車内のガジェットは最低でも３０体。大型や、飛行型の未確認のタイプがでてくるかもしれへん』

最低でも３０体……。数が少なくないか？

レリックを奪いに来る奴の目的は分からないが、出来るだけ確実に手に入れるのであれば、もっと多い方が良いと思う。

とは言え、数が少ないと言う事は楽ということなので、寧ろここでは喜ぶところなのだろう。

『いきなりハードな初出動や。みんな行けるか？』

「「「「はいっ！」」」」

「「了解！」」

『ええ返事や。ほんなら、機動六課フォワード部隊……出動や』

まぁ、ここでグダグダ考えていても仕方が無い。僕はただ、与えられたことをこなすだけだ。だから、考えるのは、ノルマを達成した後にだ。

それに、随分と久しぶりのセレン抜きの実戦だ。

正直に言えば、少し緊張している。が、緊張が原因で失態でも犯してしまっては笑い話にもならない。

そうなってしまってはレルデに何て言われることか。

可能性は低いが、部隊から追い出される可能性だってある。

まぁ、レルデに迷惑をかけない程度に働くとしよう。

第十話　『初出動』（前書き）

初出動編です。
まぁ、でも、対して原作と変化はないですね……二次創作なのに。
ですが、もう少しでかなり変化する部分がありますので、そこまで待ってください
では、第十話『初出動』始まります

第十話　『初出動』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

緊迫した空気が流れている中、僕達はヴァイスが操縦するヘリコプターに乗り込み、現場へと向かっている。
初出動の為か、新人達は緊張しているようにも見える。
ティアナとスバルは前の部隊でも出動したことがあるのか、エリオとキャロに比べれば比較的落ち着いている。
が、比較的落ち着いているというだけで、少しは緊張しているようだ。
もちろん、僕だって緊張はしている。

“シュレン君はスバルとティアナのサポートをお願い”

そんな中、目を合わせないで、――まぁ、僕が窓から空を見ているから合わせることができないのだが、――なのはが念話で話しかけてきた。
念話で話しかけてきた理由は余計な不安を生ませない為だろう。
それにしても、なのはらしからぬ言葉だな。
過保護なコイツは僕をエリオとキャロのサポートに回すと思っていた。

“……エリオとキャロの方ではないのか？“

“確かに緊張してるみたいだけど、これは良い意味での刺激になると思うから、二人にはちょっと難しいと思うけど頑張って貰う。もちろん、危なくなったら私かシュレン君がサポートに行けば良いと思うし……”

“成程。案外と新人達の今後のことまで考えているのか”

“にゃはは……”

多少の危険はあるが、確かに言う通りで良い意味での刺激にはなるとは思う。しかし、緊張している状態と言うのはミスする可能性が高いので、心配ではある。

先程から言っているが、僕だって緊張はしている。しかし、キャロに比べたら良い方だと自覚している。

……言っておくが『キャロが子供だから』という理由で心配しているという訳ではない。――言い方は大袈裟だが――戦場に出る者として『子供だから』という理由は通じないのだ。

戦場に出た以上、1人の兵として扱われる。

兵のミスはそのまま死に繋がる。だからこそ、僕は心配している。

初出動で死人が出るなど、目覚めが悪くなるだろう？

……逆に緊張させてしまうかもしれないが、ここは1つ僕からのアドバイスを言うとしよう。

「新人達に言うが、緊張しているのが自分だけだと思うな。隣にい

る奴も自分と同じように緊張している。
……しかし、それは決して悪い事じゃない。寧ろ、その緊張は根源的なものだ。大事にしておけ」

自分でやっておいてなんだが、僕のキャラではないな。だが、これは特命隊にいた時から教えていることだ。
緊張しすぎてミスをする者、緊張をしなさすぎて油断をする者。後者の場合をあまり見かけはしないが、前者は多く見かける。殆どの者がそうだろう。
しかし、それでは出動中にミスをする可能性がある。
だから、僕達特命隊では『程よい緊張感を持ち、任務が終了したら遊び尽くそう』というモットーのようなものがある。
これのおかげで僕達は任務中で緊張しすぎず、程よい緊張感を持ちながら任務を遂行することができていた。

「僕だって緊張している。恐らく、そこにいる悪魔だって緊張をしている」

「……私は悪魔じゃないよ」

「僕が言いたいのは、緊張しない奴などいないということだ。仮にいたとしても、そういう奴は油断してミスをすることが多い。だから、そういう奴に比べたら君達はまだ平気だ」

僕は油断してミスをしたことがある奴を何人も知っている。

「君達は悪魔のスパルタ訓練を受けているのだろう？　だったら、それに誇りを持ち無事に任務を終わらせろ。大丈夫、悪魔の訓練に比べたら、こんな任務など簡単に終わる」

「だから、私は悪魔じゃないって言ってるでしょ？」

「それに、今回は隊長陣が付いている。君たちがミスをしたら庇う。だから、安心するといい」

「……人の話を聞いてってば！」

さて、何やら声が聞こえるが、そんなものは無視。というより、幻聴だろう。まったく、年寄りと言う訳でもないのに幻聴が聞こえるなんて、ボケが早いのだろうか？

と、平和ボケたことを言っている時に、ロングアーチから通信が入って来る。

『ガジェット反応、空から！？』

『現地航空観測隊、反応を多数確認！』

『恐らく、航空型のガジェットです！』

航空型。少し嫌いなガジェットだ。何故なら、悪魔……高町なのはを庇った時のアンノウンも航空型だったから。

とはいえ、恐怖は感じていない。元々僕は――感情を感じにくい体質なので、そのせいかもしれないが――死への恐怖というのはあ

まり無い。
あの時に僕はヴィータに『死にたくない』と言った。でも、それは死に対する恐怖から出たものではなかった。
ただ単に、生き続けたかっただけだ。
同じ意味合いに思えるだろうが、僕としてはまったく違うものだと考えている。

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を抑える」

「分かりました！　なのはさん、お願いします」

「リィンとシュレン君はここに残って。シュレン君はスターズの方をフォロー、ライトニングの方はリィンがサポートをお願い」

「了解」

「分かりましたですよ」

さすがエースオブエースと呼ばれることもあって、冷静で的確に指示を出している。ここは素直に関心すると言っておこう。
それにしてもエリオとキャロの方にリィンがフォローするなら、少し……いや、かなりマシだろう。

「なら、抑え役は任せたぞ。なのは」

「うん。スターズ０１、高町なのは。……行きます！」

そして、ヘリのハッチが開き、なのはがそこから飛び降りる。
……と、飛び降りながらのセットアップか。そんなことをしたら新人達が真似をしようとするのは考えていないのだろうか。
現に、スバルは目を輝かせている。
こういう所が駄目だな、アイツは。

「……っと、今なのは隊長の指示があったように、僕はスバルとティアナのフォローを、リィンがエリオとキャロのフォローをする。状況判断で、途中で僕がエリオ達の方に行くかもしれないから、その時は反抗をせずに納得しろ」

「それで、皆さんがすることはレリックの回収とガジェットの破壊です」

「ガジェットを逃がす事はせずに、だ。……レリックはリニアレールの中央あたりの7両目にある。スターズとライトニングは別れて中央を目指すような形だ。それで、先に着いた方がレリックを回収する、以上」

最低限の説明は今の説明で終わりだ。できる限り理解しやすく言ったつもりなので、問題は無い筈だ。
その後、リィンの詳しい説明があり、ヘリは降下ポイントに到着した。

「隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントへ到着だ。……準備はいいか！？」

「「「「はい！！」」」」

ヴァイスの声に元気よく返事をした後、ティアナとスバルがメインハッチへと近付く。

……考えた通りにコイツらはお前の真似をする。

僕達が作ったデバイスとは言え、不備があったらどうするつもりだろうか。まぁ、その時は僕が助けに行くが。

そもそも、デバイスに不備があるなど考えられないが。

「スターズ０４、ティアナ・ランスター」

「スターズ０５、スバル・ナカジマ」

「「行きます！！」」

高町なのはの飛び降りながらのセットアップを真似する二人には、後で話をするとして……いや、今回は見逃すとしよう。

さて、残ったのは僕とライトニングのエリオとキャロに、リィンか。

順番的に次は僕なんだが、未だに緊張しているキャロに言っておくか。

その為に、僕はキャロの目を見る。その瞳は何か――まぁ、自身の力だろう――に恐怖している眼だった。

だけど、これからはその恐怖にも勝たなければならない。

「僕はキャロではないから、キャロの全てを知らない。だから、下手な同情はしない。だが、これだけは覚えておけ」

キャロから視線を外し、降下ポイントを確認する。

そこには既に、クロスミラージュとマッハキャリバーをセットアップさせているティアとスバルが僕の事を見ていた。

最後に、今度はキャロのことを見ずに言う。

「怖がって何もしないようじゃ、いつまで経っても前には進めない」

と。

そして僕も――ティアとスバルを追いかける為――ヘリから飛び降りる。

「……ホルス、セットアップ」

そうだ。何かをしなければ、何かは始まらない。

例え、それが最悪なことでも、それを受け止めなければ前には進まない。だから、キャロも前に進め。

フェイト・T（テスタロッサ）・ハラオウンのように。

飛び降りた後、落ちながらバリアジャケットが展開されていく。
ヴィータとの模擬戦で違う所などは特にない。強いて言うなら、ネクタイの色が少し変わっているというところだろうか。

「ティアナとスバルは説明通り、レリックの回収に向かえ。僕は基本的に後方支援でフォローをする」

「「分かりました！」」

返事をした後、ティアとスバルはリニアレールの中に入り、そのまま進んでいく。
もちろん、ガジェットを破壊しながらだ。ティアの方は多重弾核が効率よく作れていて、スバルの方もよく動けている。
デバイスのおかげと言うのもあるのだろうが、訓練の成果というのもある筈だ。やはり悪魔の訓練は伊達ではないということだな。
しかし、順調に進んでいたティアナとスバルの足が止まる。

「大型ガジェット。……新型か？」

大型のガジェットが二人の進行を邪魔していたからだ。しかも、二人の攻撃は通じず、苦戦している。
ふむ。今はレリックの回収を優先させたいので、僕がコイツの相手をするか。

「……ここは僕に任せろ。お前達は先にレリックの回収に向かえ」

「私達もここに残ります！」

「……あくまでも今回の任務はレリックの回収及び、リニアレールを止めることだろう。こんなところで時間を喰うな。……先に行け」

恐らく、一緒に戦ったほうが効率よく倒せると考えているのだろう。しかし、任務はコイツを倒すことではない。

それならば、誰かが引きつけて先に進めた方が効率が良い。

「大丈夫だ。この程度の相手はすぐに終わる」

「……分かりましたっ！　スバル、行くわよ！」

「でも！」

「あー、もう！　シュレンさんがああ言ってるんだから、素直に従えってーの！」

……仲が宜しいことで。

まぁ、コントをするのは良いが、出来る限り現場でそのようなことをするのは止めておいた方が良いぞ。

「さて、あまり時間も喰わせられ――」

言葉の途中でガジェットの太いアームが襲ってくる。
それを紙一重のところで膝を曲げ、腰を下ろすことで避ける。しかし、もう一つのアームが僕の頭上から向かってくる。
それもかわそうとするが、一撃目で膝を曲げて避けてしまった為、身体を起こすのに時間がかかる。

「……カートリッジロード」

だから、僕は途中で身体を起こすのを諦め、ホルスを向かって来るアームへと向けた。その途中で、ホルスから一発のカートリッジが排出され、形が変わっていく。
二つの片手銃が重なり合い、1つの銃になる。それは俗に言う散弾銃というもので、横に分厚く、全体的に重たそうな物だ。
変形（散弾銃）したホルスを片手で持ち、向かって来るガジェットのアームに至近距離で放つ。
散弾銃の弾丸が文字通りに散らばる前というのは、数十個の弾丸が一つにまとまっている。
その為、散弾銃は近く撃てば撃つほど、弾は散らばらずに攻撃力は増す。

「砕け散れ」

至近距離で放った弾丸はガジェットのアームに命中し、言葉通りに木端微塵に砕け散った。
追撃として、もう一発をガジェットに近付き、そのまま放つ。しかし、弾丸は先程とは違い、ガジェットに命中する前に無効化され

る。

（……ＡＭＦか）

小型ガジェットと違い、大型ガジェットはさらに戦闘面を強化したガジェットだ。それ故、小型と違ってＡＭＦの効果は広範囲で、尚且つ、濃いということか？

それならばと思い、瞬時に――訓練の時のティアのように――膜状バリアで包み込んだ多重弾核を形成し、それを放つ。

だが、濃密なＡＭＦの前にはそれすらも無効化される。

「面倒だな。……面倒事は大嫌いなんだが？」

そう言いながら、再び多重弾核を作り出す。

その多重弾核は先程とは違って、先程よりも一回り大きくなっている。それもＡＭＦによって無効化されるが、諦めずにもう一度、多重弾核を作る。

その魔法弾も先程よりも一回り大きくなって。

僕は膜状バリアを一層だけではなく数層にして魔法弾に包めば、魔法弾は大型のガジェットでも届くのではないのだろうか？

と、疑問に思い、それを実行している。

一層が駄目なら次は二層。二層が駄目なら次は三層。三層が駄目なら次は四層……と、次々と膜状バリアの層を増やしていく。

そして、四層目でようやくガジェット本体にも魔法弾が通じることが確認出来た。

「……機会には言葉が通じないから分からないと思うが、膜状バリアを四層も包み込むのは案外大変なものなんだぞ」

襲いかかるアームを紙一重で避けながら大型ガジェットに近付いて行く。

それと同時にホルスからもう一発のカートリッジが放出され、機械音がリニアレールに響く。

そして、ホルスから紅色の魔力光が――壊れた水道のように――溢れ出す。

「だから、いい加減に消えろ」

その状態のホルスを――高速でさらにガジェットに近付き、――零距離で突き出し、そのまま放つ。

当然、先程よりも魔力を込め、距離も近いので威力は高い。その為、ガジェット本体はアームと同じく木端微塵に砕け散った。

砕け散ったガジェットを見て、呼吸を一度整える。

「……追いかけるか」

先行したティアナとスバルを追いかける為、再び走り始める。とは言え、そこまで距離が離れていると言う訳ではない。

これでも副隊長だ。

大型のガジェットを破壊することに、そこまでの時間は要らない。

「大型がもう一体いるな。しかも、エリオとキャロと戦闘中か」

しかし、途中で動かしていた足を止める。

ティアナとスバルの進行方向に目障りな障害は特に無しと判断……。それならば、僕がエリオとキャロのフォローに回っても構わないか。

“……ティアナ。そちらに向かう筈だったが、エリオとキャロのサポートに行く。だから、そちらは任せたぞ”

“分かりました。こっちは任せてください”

“無茶はするなよ”

ティアへの軽い指示を出した後、僕はホルスをリニアレールの屋根の部分へと向ける。

「リニアレールが少しぐらい破壊されていたとしても問題はない筈だよな？」

そう言って、リニアレールの屋根を壊す。……何ともまぁ、――自覚しているが、――大雑把な正確である。

そして、壊した屋根の部分から外に出る。忘れているかもしれないが、僕は三等空尉。

空を飛ぶことなんて、造作も無い。

しかし、随分と久しぶりに空を飛ぶが、問題無いだろう。

「……よし」

僕はリニアレールと並行して空を飛ぶ。

そして、持っているホルスは先程の散弾銃――まぁ、ショットガンと言った方が良いのかもしれないが――とは変わっていて、これは前のヴィータとの模擬戦の時に見せた銃。

いわゆる、スナイパーライフルというやつを持っている。

それを並行して飛んでいると同時に、担ぐような形で持つ。そしてエリオとキャロのフォローに回る為、大型ガジェットに狙いを定める。

しかし、対象も動き自分も移動していると、標準が定まりにくい。

「……面倒だな」

その為、思わず愚痴をこぼしてしまう。

面倒事は大嫌いなのだ。

スコープを覗きながら、風邪の向きと風速、距離や角度……あらゆる全てのことを計算する。

その計算の途中でもエリオとキャロは大型ガジェットと戦っている。

焦る気持ちを抑え、迅速に、正確に、狙いを定めていく。

それと同時に膜状バリアを四層……いや、念のために五層を魔法弾に包みこみ、魔力が完全に固まるのを待つ。

距離が離れている分、魔力の密度を濃くしなければならない。

それに加え、二丁拳銃（ダブルハンドガン）や散弾銃（ショットガン）と違って形を丁寧に弾の構成しなければならない。

そうでなければ、空気抵抗などにより狙いから少し逸れてしまう。

ライフルを使うにあたって、そのほんの少しのズレすらも許されないのだ。

だから、焦ってはいけない。

――例え、エリオがガジェットによって、崖に投げられたとしても。

「シュートt――……いや、まだか」

だから僕は、さらに追撃をしようとしているガジェットに風穴をあけようとしたのだが、その前にキャロがエリオを追うように、リニアレールから飛び降りた。

一瞬だけ、どうして？　と思った。しかし、キャロの周りに浮かび上がってくる魔法陣を見て思い出した。

キャロの能力のことを。

……それに、このことはヘリから降りる前にキャロに言ったことではないか。

『前に進め』と。

「……結局、僕がしたことは大型ガジェットを一機潰しただけか」

レリックとリニアレールの制御の方はティアナとスバルが入手したようだ。だから、フォワードメンバー達の仕事はこれで終了だ。

まぁ、初出動にしてはよくやった方――――……。

「……ッ！」

突如、人の視線ではないが、何かに見られているような感覚。咄嗟にホルスをいつもの形態――二丁拳銃――に切り替え、見られている方向を向いた。

敵意や悪意がある訳ではない。

ただ、見られているだけのような気がする。

そして、目を凝らしてよく見てみると――

「……観察用ガジェットか？」

――いた。しかし、そのガジェットは今まで見てきたガジェットとは異なり、こちらに向かって来ることもせず、ただそこにいるだけだ。

別に観察用ガジェットを見たことがないという訳ではない。

しかし、それにしては余りにも高性能だ。光学迷彩を組み込んでいるガジェットなど、初めて見たな。

いや、光学迷彩を組み込んでいるという訳ではなさそうな。どうやら、僕とティアナと同じく幻術使いが敵側にいるようだ。
それも、かなり優秀な。
……破壊するか？
観察されているということは、少なくても機動六課のことを調べている。そして、ガジェットを使用しているということは犯罪者…
…つまりは今回の件の黒幕の可能性が高い。
それならば破壊した方が良い。

……いや、止めておこう。
下手に動くと、思わない攻撃を喰らう可能性も捨てきれない。それに、この破壊は任務の内容から外れている。
余計なことはしないほうが良い。
過去に学んだことだ。

『スターズ０４及びスターズ０５がレリックの回収とリニアレールの制御を正常に戻しました！』

……丁度、リニアレールとレリックの連絡が回ってきたところだからな。

「戻るとしよう」

まぁ、観察しているガジェットの件は一応、八神部隊長に伝えておくか。
念には念を。

どんな目的で機動六課という部隊を立ち上げたかは知らないが、目的がある筈だ。可能性は低いが、その目的に引っかかるものかもしれない。
機動六課には可笑しいと言っても良いほどの戦力がある。
総合的な戦力は特命隊よりあるかもしれない。

まぁ、どのみち、これから面倒事が起きるのは間違いないようだ。

第十話　『初出動』（後書き）

と、言うわけで第十話でした。
前書き通り、原作と差があまりないと思います。本当にすみません。

ですが、本当にあと少しで変わってくると思います。具体的には、
ナンバーズが出てくる辺りからです。
あぁ～、早く書きたい。
小説さえ消えていなければ……

と、こんなことは置いておいて。
次話はサイドストーリーです。ただ、過去最短の短さです。

この小説の意見などありましたら、感想の方にどうぞ
では

第十一話　『面倒事』（前書き）

ふう、三日連続投稿か……
次はもう無理だ～

では、第十一話『異動』始まります

第十一話　『面倒事』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

僕は現在、訓練場が見える場所で新人達の訓練を観察している。
初出動が良い刺激になったようで、初出動前の訓練の時と比べ、さらに気合が入っているように思える。

「いや～、やってますね～」

「初出動が良い刺激になったようだな」

それは隣にいるシグナムさんとヴァイスもそう思っているようだ。
訓練があっても僕が教えている時間が短い。ヴィータとなのはに比べて、訓練の見学時間は間違いなく長いだろう。
理由として、新人達の個別訓練で教える事がないというのが、原因の一つなんだろう。
いや、それにしても、あの魔王の訓練に対して気合が入るなど、新人達はマゾか？

「良いっすね、若い連中は」

「若いだけあって成長も早い。……まだ、しばらくの間は危なっかしいだろうがな」

「その時は僕がフォローしますよ」

「ああ、その時は頼むぞ」

まぁ、そのような訳で、シグナムさんとヴァイスの二人と一緒に訓練を見学している。

シグナムさんとはヴィータを通じて仲良くなった。印象としてはクールでカッコイイという感じだろうか。しかし、会うたびに模擬戦を頼まれるのは困る。

なんでも、ヴィータとの模擬戦で僕が勝った事を知り、興味が湧いたとのこと。

もちろん毎回のように断っている。僕は貴方の様な強者には勝てません。

ヴィータとの模擬戦の時は、ヴィータ冷静な判断が出来ていなかったから勝ったようなものだからな……。

真剣勝負……互いに全力で戦ったら、間違いなく負ける。

「……くどいようで悪いが、いい加減に私と今度模擬戦をしてくれないか？　シュレンの実力をこの目で見てみたい」

「申し訳ないですけど、断らせて貰います」

「力尽くでも、と言ったら？」

「全力で逃げます。僕がシグナムさんのような強者に勝てるわけありませんから」

本当にこの人とは戦いたくない。
今までの会話を通して分かったことなのだが、シグナムさんは戦闘狂だ。それも、結構重症。しかし、シグナムさん以上の戦闘狂を僕は知っているので、それに比べたらまだ可愛いものだ。
とはいえ、戦う気にはなれない。

「シグナム姐さんは、訓練に参加しないんで？」

「……私は古い騎士だからな。スバルやエリオのようにミッド式と混じった近代ベルカ式とは勝手も違うし、剣を振るうしかない私がバック型のティアナやキャロに教えられるようなこともない」

ヴァイスが良い感じに話を逸らしてくれたようだ。
僕達は階級などの違いはあるが、互いに敬語は使っていない。この機動六課では男女の人数は同数ぐらいなのだが、僕と会話ができる者があまりいない。別に、そのことで不満を感じているわけではないが、僕と会話をしようとする者は数少ない。
そんな時、ヴァイスから声をかけてきたのだ。
で、それから、色々と会話などが盛り上がり、互いに敬語は使わないということになったのだ。
……と話が逸れたな。

「ま、それ以前に私は人に物を教えると言う柄ではない。戦法など届く距離まで近づいて斬れ、ぐらいしか言えん」

「スゲェ奥義ではあるんですけど……」

１つの技も極めれば、それは奥義となる。
僕にだって、そんな技をいくつか持っているが、理由があって現在は使わない……いや、使えないと言った方が正しいか。
……理由は、――言わなくても分かるだろうが――８年前の怪我が原因だ。

「ん？　……分かりました。シュレン、主はやてがお前のことを呼んでいるぞ」

と、シグナムさんがいきなりそう言ってくる。
八神部隊長とシグナムさんは家族のような関係だったな。だから、僕にではなくてシグナムさんに伝えた可能性がある。
恐らく、僕を見かけたらそう伝えるようになど、そのように言われたのだろう。

「しかし、急ぎの用事でもないらしいので、訓練を見終わった後でも良いだそうだ」

「分かりました」

急ぎの用事ではないということは、いつもの話か。
いつもの話というのは、基本的にレルデに対する不満をお互いに話し合おう……まぁ、簡単に要約すると、そんな感じだ。
……それにしても、急ぎの用事がレルデに対する愚痴なのだろう。

普通は逆ではないか？
　まぁ、それだけアイツに対する不満が大きいというだけなのだろうが。

　閑話休題。
訓練が終わり、僕を呼んだ八神部隊長のところに向かっていた。とは言え、既に部隊長室の前にいる。

「失礼します、八神部隊長。シュレン・ガルディン三等空尉です」

　何度もこの部屋に入ると最初に来た時の様な緊張感は既になく、既に慣れている。部屋に入ると資料　――恐らく、仕事関係の資料――を見ている八神部隊長がいた。
　そして、八神部隊長は僕に気づき、持っていた資料をデスクの上に置き、視線をこちらによこした。

「来たね。……それと、私のことははやてで良いって言ってるよ？同い年な訳やし」

「いえ、なのはとヴィータには呼び捨てですが、八神部隊長を呼び捨てにするのは気が引けます」

「そんなん気にせんでもええよ」

「……分かりました。改善しようと思います」

……八神部隊長にもこう言われると言う事は、僕は堅い人間と思われている証拠なのだろう。

正直に言って、僕は人と会話をするのは得意とは言えない。

昔はこんなことを思いもしなかったが、さすがに仕事やプライベート、その他のことでも言葉を交わすというのは重要なことなので、色々と努力をしている。しかし、どれも僕が堅い人間であるというイメージを崩すことはできなかった。

僕が一度でも敬語を使おうと思った人には、その人が使わなくてもいいって言っているのにも関わらず、敬語を使い続けることがある。

八神部隊長もその一人だ。

「それで、僕に話したいこととは何でしょう？」

「えっとな、またレルデ少将から少し頼まれごとをされてな……」

「頼まれごとですか？」

「そう。ま、とは言っても命令みたいなもんやけど」

要するに、レルデは八神部隊長に対して厄介事を押し付けたということだろうか。

本当に――ある意味で――後輩思いの先輩だな。八神部隊長が可哀そうだ。とは言え、多分僕はそれ以上の苦労を今までに味わっていると思うが。

「そんでな、レルデ少将から、『特命隊からもう一人を機動六課へ

異動させるけど良いよな？　拒否権は無いけどよ』って言ってたんよ」

「それはご愁傷様です。それで、誰が来るかは分かってるんですか？」

「いや、レルデ少将はそんな詳しい事は教えてくれへん。でも、レルデ少将はシュレン君に聞けば分かるだろうって」

まぁ、それはそうだろう。

僕は特命隊の部隊長代理だ。特命隊にいるメンバーの名前と顔以外に色々知っている。例えば出身世界や、魔導師ランク、特命隊の前に所属していた部隊などだ。

だから、僕に聞けば分かるというのは当たり前。

だが、レルデ（アイツ）がこう言うのは大抵の場合――というより、アイツの行動の殆どに――嫌な出来事が起こる。

「えっと、脅されたって言えば分かるって、言ってたよ？」

「……」

ほら。とんでもない厄介事を僕に押し付けてくる。

レルデを脅した奴が機動六課に来てしまったら、絶対に気まずい雰囲気になる。

僕とヴィータでの間に気まずい雰囲気があったように、間違いなくアイツとヴィータとの間もしくは、なのはとの間に溝が出来る。

だって、そうだろう？

アイツはヴィータに僕のことを話してしまっているのだから。

「一応、聞いておきますけど、その異動を拒否することは出来るんですか？」

「可能と言えば可能やけど、その代わりに物凄く大変な目に遭う覚悟があったらええよ」

「……要するに無理と？」

「そうやね。その通りや」

……別に、僕はセレンに来て欲しくないと言いたい訳じゃない。――と言うより、来てくれてありがとうと、言いたいのだが――ただ、これからの事を思うと溜め息を吐きたくなるのだ。

結局、僕は大きな溜め息を吐く。

レルデだけで相当苦労しているのに、それ以上の者が来るのだ。とは言え、確率は低いがまだ希望はある。

何故なら、セレン……いや、セルス・ローラルドか。とにかく、アイツは管理局にいる時はそこまで暴走しない。

だから、まだ希望はある。だが、その希望は儚いものだ。

「多分、八神部隊長も会っている筈ですよ」

八神部隊長はレルデの後輩。それならば、恐らく義理の妹――と

いう設定――であるセルス・ローラルドに会っていても不思議ではない。

「セルス・ローラルド……レルデの義理の妹です。会ったことありませんか？」

「……もしかして、異動してくるのって」

「ええ。恐らくセルスです」

その言葉を聞いて、八神部隊長は固まった。いや、もう、石になってしまったかのように。その反応から考えるに、――良い意味か悪い意味かは分からないが、――大変になるらしいな。

一体何をされるのだろうか。

仕事を押し付けてくる程度ぐらいならば問題はないのだが、――まぁ、大変ではある――無茶ブリなど不可能なことを『しろ』と命令などされたら、さすがに辛い。

「ふ～ん、彼女なんや。異動してくるのって」

「……？」

固まった状態から復帰した八神部隊長は意味深そうに呟く。その口調は八神部隊長と出会ってからは聞いたこともない口調なので少しだけ驚く。

嫌っているという訳ではない。しかし、苦手意識のようなものを

持っているらしい。
……何か、セレンは八神部隊長に対して失態を犯してしまったのだろうか。

「彼女が八神部隊長に対して、何かしましたか？　失礼なことでしたら注意しておきますけど」

「……ん、いや、ええよ。そんなことしなくて」

「そうですか」

八神部隊長はセルス・ローラルドという名を聞いただけで、――僕から見てみても――ここまでの変化が出るとは……。
セレンは一体八神部隊長に何をした？　場合によっては、詳しく話をする必要があると見た。
しかし、そんな考えを遮るように八神部隊長が言う。

「いや、セルスさんはレルデ先輩のようにふざけてる人じゃなくて、真面目な人っちゅーことは知ってる」

……この時点で間違いがあるが、気にしないでおこう。
ただ、一つ言わせてもらえると、アイツは仕事をしない。

「ただな、セルスさんが私のことを苦手としてるみたいなんや」

「……え」

――ま、そうは言っても初対面の時だけやったけど。と、八神部隊長は付け足す。

しかし、僕にとって、付け足したとしても衝撃を受けたのは事実だ。

セレンが人に対して、苦手意識を持つのは有り得ない話ではないが、そんなことがあるのか。

セレンといえど人間だ。だから、人に対して苦手意識を持つことは普通だが……少なくても、僕が知っているセレンという人間は誰にも苦手意識を持たない。

どこまでも天真爛漫で、我侭で仕事をしないセレンが他人に苦手意識を他人に悟られるなんて。

と、そこまで頭を過ぎった時――僕は納得した。

（……ああ、そうか。成程な）

そうだった。忘れていた。

僕先程まで、一人称が『妾（わらわ）』の方のセレンを想像していたが、『私』という一人称を使うセレンのことを忘れていた。

とはいえ、『私』を使って会話をした時など、両手で数えられるぐらしか無い。しかし、八神部隊長と会った時は――　一人称は『妾』だが、――そちらの性格が現れたのだろう。

セレンのもう一つの性格が。

……それならば、特にセレンと話をすることもないな。恐らく、

セレンはこのような話をされるのを嫌うだろうから。
そう思うからこそ、話を変える。

「とりあえず、八神部隊長は胃薬の準備をした方がいいかもしれません」

「……そうするわ」

「まぁ、誰が来たって特命隊にいる人は皆個性が強い人達ですからね。大変になると思いますよ」

「……お疲れ様や。色々と」

「お心使い感謝いたします」

本当に――何回も何回もくどいようで申し訳ないが――八神部隊長は良い人過ぎる。
特命隊には八神部隊長の様な一般常識を持った人間が1人でも多くいた方が良い。それは間違いない。
それに、シャーリーが言っていたレルデのファンクラブというやつだが、僕が思っているものより相当不味いものだった。
例えば、レルデが着る私服を持っていない者には、その私服を強制的に買わせたり、仕事を終え、――実際はサボっている――買い物などに出かけているレルデにストーカー行為をしたり……。
挙げればキリが無い。
……僕が思った一番不味いなと思ったのは、レルデに会う為にわざと犯罪を犯そうとするまでする連中がいたことだ。
……と、このようにしていれば、先程の考察はなかったことにで

きるだろうか？
いや寧ろ、こう言わなければ良かったのか。

「では、僕はこれで失礼します」

そう言った後、すぐに僕は部隊長室から出ていった。
本当はリニアレールの時に発見したガジェットのことも聞こうとしていたのだが、それよりも、最優先でやらなければならないことが出来た。
それはレルデに対する確認作業だ。本当にセレンがここに来るのかどうか。来る場合、高確立で機動六課に異動という形で来るのだろうが、念の為の確認作業。

それに、レルデのことだ。僕と同じようなやり方ではセレンをこちらによこしはしないだろう。

まぁ、至って普通に来るのがＢｅｓｔなんだがな。

第十一話　『面倒事』（後書き）

と、言うわけで第十一話でした。

シュレンはシグナムとの模擬戦から逃げているけど、結局は……
と、まぁ、置いておいて。

若干、ペースを早めて投稿しております。
なので、ちょっと日常回とか、あんまないですね。
もちろん、そういうのを書けというのであれば書きますが、早くシリアスが書きたいんですよ！

自分って、別にバッドエンドが好きと言うわけではありませんが、ハッピーエンド前のシリアスが好きなんですよね。
だから、それに近いものを早く書きたいと思っている訳です。
ま、更新速度が遅いんじゃ意味ないですけど……

それと、連日投稿は前書き通りもう無理っす！
多分、以前の三日に一度ぐらいのペースに戻ります。最近は、少し休憩できていましたから

この小説に対する意見などありましたら、感想のほうへどうぞ
では。

第十二話　『とんでもなく馬鹿なこと』（前書き）

すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません
すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません
すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません
すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません
……うん、何回も書くと読めない。

さて、本当にすみません！　更新が遅れました。
くそ、まさか、いきなりここまで忙しくなるなんて……予想外です！

では、第十二話『とんでもなく馬鹿なこと』始まります

第十二話　『とんでもなく馬鹿なこと』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

「ほんなら改めて、これまでの流れと今回の任務のおさらいや」

僕は機動六課の前線メンバーと八神部隊長とリイン、シャマル先生と一緒にヘリに乗って目的地に着くまで会話をしている。

もちろん、仕事関係のことだ。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者。及びレリックの収集者は現状ではこの男……違法施設で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進めてる」

モニターが現れ、次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの顔が映る。

初めて見る顔である。

それは当たり前のことなのだが、何故だろう？　どうもジェイル・スカリエッティという名前に覚えがある。

……まぁ、大方、今までに見た書類等にジェイル・スカリエッティという名があったのだろう。

レルデは大事な書類まで僕に任せるのだから。

しかも、レルデは今までに次元犯罪者を捕まえた事が何度かある。

だから、――言い方は可笑しいが――次にフルボッコにしようとし

ている奴なのかもしれない。
……何と言うか、ジェイル・スカリエッティには同情する。レルデに目をつけられたとしたら、驚く程しつこく追いかけられるのだから。

「こっちの操作は私が中心になって進めるけど、一応皆も覚えておいてね」

「「「「はい！！」」」」

ジェイル・スカリエッティが何故レリックを収集しようとするか理由は分からないが、出来るだけレリックの収集は阻止した方が良さそうだ。
大抵の場合、こういうことを好き勝手にやらせてしまうと、後々面倒な事になる。
……しかし、僕が言うのもどうなのだろうか。

「で、今日、これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

今回の任務の場所と内容の確認を行う。
ただの警備と警護だけならば、機動六課が動く事は無い。しかし、取引許可の出されているロストロギアが数点出品され、そのロストロギアをガジェットはレリックと誤認する可能性が高いのだ。

そんな訳で僕達が向かうことになった。

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ身にもなったりするし、色々油断は禁物だよ」

フェイト隊長の言う通り、ガジェットだけに気を付ければ良いと言う訳では無いので、色々と気を使う任務ではある。

とは言え、僕はこういう気を使うことには慣れているので問題は無いだろう。

僕はレルデの会談に何故か付き添いとして、レルデに付いて行っているのだから。

「現場には昨夜から、シグナム副隊長とヴィータ副隊長、他数名の隊員が張ってくれてる」

「私達は建物の中の警備に回るから、前線はシグナム副隊長とヴィータ副隊長の指示に従ってね」

「「「「はい！！」」」」

僕も副隊長なのだが、僕だけは八神部隊長達に付いて行くことになった。

何でも男が1人いた方が良いとのこと。しかし、僕のような、そこら辺にいそうな奴が八神部隊長達のようなエース級魔導師について行ってもあまり意味は無いと思うのだが。

……と、いけないいけない。

少し前にヴィータに言われて意識した事なのだが、出来るだけティアナに言ったように、自分の事を過小評価しないようにしている。

（……八神部隊長の汚点にならないように堂々とするか）

そうしよう。

それにしても、我ながらよくこんなことを思っているものだ。昔の僕は正直に言って、あまり人のことを考え無い奴だった。

無愛想で、冷酷で、残酷で、酷い事を言う奴だった。

それが『汚点にならないように堂々とする』と、他人のことを想うようになっている。

……いや、違うな。結局はこれも――――――

「聞いてる？　シュレン君、聞いてるの？」

「……ん？」

「だから、私の話を聞いてるのって言ってるの！」

「……悪い。少し考えごとをしていた」

……っと、くだらないことを深く考え過ぎたようだ。

しかし、今話していた話の内容も理解出来ているから問題は無いだろう。とかまぁ、そんなことを考えていたら、拳が僕に向かって飛んできた。

いやいや男が殴るならまだ分かるけど、女が殴りに来るとは。
ああ、そうか。悪魔だからか。

「危ないな。当たったらどうするつもりだよ？」

「……っち」

……僕が言うのもどうかと思うけど、キャラが変わってますよ。
貴方はそんなに暴力的なキャラじゃ無かった筈ですよね？
しかも、新人達には気付かれない死角から殴ってきている。陰険だな。

「あの、シャマル先生。さっきから気になっていたんですけど、その箱って……」

「あぁ、これ？」

キャロが指さしたのは１つの箱。とは言え、ただの箱では無く、中身はちゃんと入っている。それは今回の仕事で使う衣装で、僕と八神部隊長となのはとフェイト隊長の分が入っているのだ。
……正直、あまり乗り気ではないが。

「隊長達のお仕事着♪」

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「こんにちは、機動六課です」

その言葉と同時に八神部隊長は身分証を見せる。

すると、受付の人は驚いたような表情をした。まぁ、無理も無い事だろう。何せ、管理局で有名な八神はやて部隊長なのだ。

驚くのも無理は無い。

……特命隊とレルデはカウントしないぞ。

その後、受付と簡単なやり取りをして、僕は八神部隊長とフェイト隊長に衣装のことを聞かれた。まぁ、そう言うと変な風に聞こえてしまうが、実際は似合っているかどうかの質問である。

正直に言えば、今の八神部隊長とフェイト隊長の衣装は、お世辞でも無く、普通に似合っていると思える。

「とても似合っていると思います。自分はこのような服には疎いのですが、そんな自分でも目を惹くような美しさですよ」

「お、おおきにな……」

「そ、そんなことは無いと思うけど……」

僕の言葉を聞いて、恥ずかしさからか八神部隊長とフェイト隊長は顔を赤くさせる。

……こういうのを『萌え』というんだったか？　特命隊の馬鹿どもに3時間以上熱心に語られていたので覚えていたが、区別が分からない。

まぁ、『萌え』というのと『美しい』というのは対して差はないのだろう？

ならば、問題ない。

今回は男の場合のみ――しかし、極少数に女もいる――特命隊の者はテンション？　が上がり、何をするか分からない。

例えば、何処から見ても盗撮したと思われる写真を部屋中に張り付けていたり、『〇〇〇〇たん……ハァ……ハァ！』と、欲情していたり、色々と大変である。

……いつか犯罪者が出そうで怖いと思うのは当たり前の事だ。

「……むぅ」

それで、だ。

先程から何故かなのはに睨まれているのだが、理由が分からない。

まったく、困ったものだ。

「シュレン君ははやてちゃんとフェイトちゃんの感想を言うのに、私の格好を見ての感想は言わないんだ」

「まぁ、聞かれていないからな」

「それじゃあ、今の私はどうかな？」

……一発で切り返されてしまったか。

まぁ、そんなことはともかく、今のなのはの感想か……。

「魔力光と同じ桜色の服装が合っていて知っている者からすればとても似合っていると思われるのではないか？　少なくても、僕はそう思っている」

こんなところだろうか。

長過ぎても、褒め言葉としてはどうかと思うので、僕の好きな言葉　Ｓｉｍｐｌｅ　ｉｓ　ｂｅｓｔ．　にならって、短く言ったのだがもう少し長く言った方が良かっただろうか。

しかし、それなら八神部隊長とフェイト隊長にも言い直さなければいけないな。

と、そのように考えていたら、なのはの表情が驚いたような顔になっていた。……いや、なのはだけではなく、八神部隊長とフェイト隊長もだ。

「どうしてそんな表情をしてる？　今の言葉は駄目だった？」

「いや、そうじゃなくて……えっと、シュレン君が素直にそう言ってくれるとは思わなかったから」

ああ、成程。

いつもいつも悪魔呼ばわりしているから、今回もそんな風に言われると考えていたのか。

……馬鹿なのだろうか。コイツ。いや、馬鹿であると言う事は前から知っていることだな。

僕は感想を言えと言われたんだ。感想というのは心に浮かんだ思いのことを言う。

だから、余計な事を言わずに、素直にそう言ったのだ。

「安心しろ。今の言葉は本心だから」

「あ、ありがとう！」

「五月蝿い。大きな声を出すな。……というより、礼なんて言わなくていい。僕はただ、思ったことを言っただけだから」

僕は確かに、なのはのことは悪魔呼ばわりしているが、もし、本気でコイツが嫌がったら、それ以降は滅多なことでは悪魔呼ばわりはしない。

それとも、コイツはいつものように桜色よりも、黒と赤のような色の方が悪魔らしくて似合っているとでも言って欲しかったのだろうか。

……少なくても、コイツはそうは思わない筈だ。

「すみません、少しホテル・アグスタ内部を歩いてます」

なのはの頬が紅潮している間に、そう八神部隊長に伝える。別に

今は緊急時というわけではないので問題なくＯＫを出された。
まぁ、却下されたとしても、きちんと理由を言えば許可されると思っていた。
ここ場所、ホテル・アグスタは若干……いや、かなり大きい建物だ。だから、万が一ガジェットが襲撃してきた時の一般人の避難経路や一時的に避難させる場所などを予め知っておいた方が効率が良い。

……少し話を変えるが、前回の初出動での僕の行動を覚えているだろうか？
リニアレールでの僕の行動を。
僕はエリオとキャロのサポートにいく為にリニアレールを破壊して外に出たことを覚えているだろうか。
まぁ、覚えていないのであれば、数話戻ってくれ。
で、こんなことはおいておく。
さて、ここで重要なのは僕がリニアレールを一部とは言え破壊してしまったということだ。実は、僕が破壊した部分というのはリニアレールの部品の中でもかなり重要な物で、それを破壊してしまうとリニアレールが使い物にならなくなるというものだ。
……つまり、結果的に僕はリニアレールを完全に破壊してしまったようなものなのだ。後日知ったことなのだが、あの時、リニアレールが止まったのはティアナとスバルが止めたという訳ではなく、僕が壊した部品が原因で止まったとのこと。
そして、僕は八神部隊長に怒られた。
まぁ、当然のことだ。

……さて、ここで話を戻そう。
ここホテル・アグスタは有名な高級建築物である。
つまり、先程は逃走経路だなどとほざいていたが、実際は一般人のことを気にしていたら誤ってホテル・アグスタも破壊してしまう可

能性があるので、とっとと緊急の時は消えてほしいということだ。
あ、ちなみに、リニアレールの件は最終的にレルデの金で解決した。まぁ、このことをレルデ自身は知らないと思うが。

と、言うわけで僕はホテル・アグスタ内を歩き回る。
途中で、見知った顔があったような気がしたが、気のせいと判断して歩くのを止めない。しかし、途中で僕は足を止めなければならない出来事が起きた。

「久しぶりだな、シュレン三等空尉。機動六課で元気にやってるか？」

背後から聞こえてくる男の声。
咄嗟に僕はその男に対し、左足を軸として右足で回し蹴りをする。回転をすることによって蹴りの威力には遠心力も加わり、人を吹っ飛ばすならば十分な威力だ。
しかし、男は僕の蹴りを片手で――しかも、利き腕では無い左腕で――受け止めた。
その為、僕は片手銃（ホルス）を取り出し、男に向け、引き金を引く。

「……」

「……っお！　あ、危ねぇだろうが！」

しかし、僕に声をかけてきた男はそれを先程と同じく片手で――

しかし、今度は利き腕だ――魔法弾を打ち消した。
その為に男は正面をむいてくる。そこで初めて、僕は男の顔を見た。
……意外なことに知り合いだった。

「いやいやいやいや！　意外じゃないだろ！　お前なら声で判断できるだろうが」

「しかし、レルデ。いきなり声をかけてくるのは駄目だ。驚いてしまっただろう？」

まぁ、いきなり声をかけられたからと言って、今回のように攻撃したのは初めてだったが。
それに、声で判断しろと言われても、僕は判断する前に気づいていたら攻撃をしていたのだから無理な話だ。

「つーことは、何だ。脊髄反射的な感じで攻撃してきたのか？」

脊髄反射。脳が無意識のうちに脊髄が中枢となって起こる反応。
脳を経由して反応するよりも素早い行動が可能。
例としては、熱いものに触れた時、反射的に手を引くなどといったことが挙げられる。

「説明としてはこんな感じか？」

「俺は脊髄反射の説明なんて聞いてねーよ。そんな感じで行動したのかって聞いてんだよ」

……ふむ。先程の例から考えてみると、

『レルデに声をかけられた時、反射的に殺Ｓ――……潰Ｓ――……攻撃をする』

まぁ、このような形か。

案外、こうして考えてみると、脊髄反射の例としても挙げてもいいのではないだろうか。次から、説明するときはこの例を挙げてみよう。

「却下だ。つーか、何だよ。二回も説明文のミスがあるじゃないか」

「殺すという部分と潰すという部分か？　一応、僕として考えてみたのだが、説明文としては、そのような言葉を使ってはいけないと判断した。とはいえ、僕が殺そうとしていたのは事実ではあるが……」

「あ、成程ね。別に隠そうというつもりで言い直している訳じゃないわけね」

「ああ。殺気を込めた攻撃ではなかったが、殺そうとしたぞ？」

「……今度から、背中から声をかけるのは止めておく」

「ふむ、残念だ。……ではな」

他愛のない会話をして、僕はその場から去って行く。言っておくが、久しぶりにレルデと会話が出来たからといって特に思うことはない。強いて言うなら、殺し損ねたのが残念ということだろう。

……さて、自身を仕事モードに切り替え――

「って、待て待て待てぇぇぇいっ！」

「……何か？」

「何かじゃねーよ！　何一方的に消えてんだよっ！？」

「……今日は随分と突っかかってくるな。まったく、元気が良いな。何か良いことでもあったのか？」

「止めろ！　それ以上そういうネタを使うな！」

「仕方がないな。……それより、話があるならば場所を変えろ。ここでは色々と目立つ」

まったく、レルデが叫び声をあげるせいで、周りにいる人達に気づかれてしまっているのだ。

このホテル・アグスタにあの有名なレルデ・ローラルドがいるということに。

それに加え、その有名な人物と敬語も使わずに会話をしているシュレン・ガルディン……即ち、僕が何者であるか？

と、そのような会話が僕たちを見ている者から聞こえる。

僕は目立つということが嫌いだ。だから、正直に言ってしまえば、

周りに人達が目障りだ。

「分かったよ。さすがに、お前の毒舌が周りにも被害が出たら大変だ」

「そうだ。だから、迅速に行動しろ」

「仕方ないか。しょーがない。仕方ねぇ」

レルデがそう言うと、僕とレルデの足元に魔方陣が現れる。恐らく、転移魔法でも使うのだろう。

そして、気づいた時にはホテル・アグスタの外に出ていた。

相変わらず、レルデの転移魔法は速い。まぁ、それはそうだ。コイツは仕事をしないとは言え、ＳＳＳランク魔導師。

この程度のことは造作もないらしい。ＡＡランク魔導師である僕からしてみれば、羨ましい限りだ。

しかし、憧れの対象と聞かれれば、僕は間違いなく違うと即答するだろう。

「で、話とは何だ？」

先程までの余計な考えや会話などを一旦、頭から削除する。そして少しずつ意識を、これからレルデと会話をすることに専念していく。

わざわざ、レルデから声をかけてきたのだ。ある程度は重要な話なのだろう。

仮に、もしくだらないことだった場合、その時はレルデを潰す。

「潰すって容赦ないっすね、シュレンさん」

「御託はいい。それ以上余計なことを言うなら、僕は仕事に戻らせてもらう」

「……分かった」

この場面では僕が冷徹、酷い奴だなどと思われるかもしれないが、こうでもしなければレルデは仕事をしないのだ。
典型的な、追い込まれなければやらない奴とでも言うのだろうか。
まぁ、こんなことはどうでもいい。

「セルス・ローラルドの異動の件は既に聞いてるな？」

その名前を聞いてはいないが、とは言わずに僕はそのまま聞く。
わざわざ、話を折るようなことをしたくはない。
そんなことをしてしまっては、話が長くなる。
ただでさえ、八神部隊長には無断で警備の仕事をサボっているのだから。

「ああ、八神部隊長から伝えられた」

「なら、単刀直入に言うか」

そこでレルデは一度言葉を区切り、呼吸を整える。まぁ、とはいえ、元々息は乱れていない。
レルデがこのように言葉を区切るのには二つの理由がある。
一つ目の理由がレルデが真剣にならなければならない程の緊急の時に、自身を冷静にさせるというものだ。
僕は色々訳があって滅多なことでは取り乱れたりしない。しかし、他の者は僕と違う。緊急時は慌てたりするものだ。そういう意味では一つ目の理由には関心できる。
そして、問題である二つ目の理由だ。僕もガヤガヤと長く話すのは好きではないので、簡単に言う。

二つ目の理由はとんでもなく馬鹿なことを言う時だ。

「なんと、この俺、レルデ・ローラルドも機動六課に行くことになりました！」

……ほら、な。

第十二話　『とんでもなく馬鹿なこと』（後書き）

と、言うわけで第十二話でした。

はい！　レルデも機動六課に異動……になったら大変ですよね。特に、はやてとシュレンがまぁ、誰もが大変な目にあうと思いますが……

次話は今回の話の続きに加え、できればティアナの暴走のところまで書きたいなとは思っています。

この小説に対する意見などありましたら容赦なくどうぞ

では

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　６（前書き）

今日は部活の試合だ……。
今頃、自分は電車に乗っているのだろうか

では、サイドストーリー始まります

Side story 6

Sideシュレン・ガルディン

「……相変わらずの馬鹿ぶりだな」

先程のレルデの言葉に僕はそう言う。いや、言うしかない。
コイツは馬鹿だ……と。
とんでもなく馬鹿なことを言うとは思ってはいたが、ここまで馬鹿だったとはレルデに対する認識を改めなければならないらしいな。
これは一種の諦めというやつだが、事実なのだから仕方がない。

「オイオイ、俺から馬鹿を取ったら何が残るんだよ？」

「何も無いな。強いて言うならば、生きて動く迷惑すぎる生ゴミと言ったところではないか」

「……お前、今日は本当に毒舌だな」

ああ、もう、本当にレルデ・ローラルドという男と会話をするのはとてもつもなく疲れる行動だ。思い切って、これからのレルデの行動は全て無視……できたら、どれだけ僕（の胃）が救われることか。
いや、僕だけではなくて、どれだけの人間が救われることか。軽

く一時間程は考えてみたいものだ。
いや、そんなことをするのは無駄なことか。
そんなことより、レルデは一体何を考えているのだろうか？

「お前は一体何を考えている？」

「単なる暇つぶし」

「……即答で嘘を言うな。単なる暇つぶしで特命隊から離れることなどできるわけがないだろう」

ただでさえ、時空管理局本局特命隊は有名だ。その有名な部隊の部隊長が他の部隊……ましてや知り合いが創り上げた部隊になど来ることができない。
そんなことをしてしまっては、特命隊が批難されたりする可能性があるからだ。
仮に、批難されなかったとしても、あまりいいように思われないのは深く考えなくても分かることだろう。
……まぁ、幸いなのはレルデ・ローラルドが陸の部隊の方にも色々としているところだろうか。
それ故に、コイツは有名人でもある。

「……まぁ、仕事の話だよ。珍しくな」

「聞いておくが、どのような仕事だ？」

「簡単に言ってしまえば、お前ら機動六課の監察だな」

……監察か。まぁ、何故とは聞かない。理由は説明できる。
僕が前に疑問に思ったこと。それは機動六課の異常なまでもの戦力だ。Sランク以上の魔導師何人も集めているのだ。しかも、エースオブエースなど、誰もがレルデ程ではないにしろ管理局では有名人。
それに加え、機動六課を立ち上げた際の後見人も気になる所だ。リンディ・ハラオウン総務統括官、クロノ・ハラオウン艦長、カリム・グラシア少将……あまりにも、しっかりとしすぎている。
そんな部隊を不審に思わない人間がいるのも、当たり前と言ってもいいだろう。そして、レルデがその監察役を引き受けた。

「おぉ、監察と言っただけで、そこまで考察できるのか。凄いな」

「で、何故、こんなことをする？」

僕は少しだけコイツを敵と判断して、威圧のある声を出す。低く、重く、暗い声に。
しかし、レルデはそんな声を聞いても表情一つ動かさない。ランクの差というのもあるにはあるのだろうが、コイツの場合はこのような敵意には慣れているというのが表情を動かさない一番の理由だろう。
……まぁ、殺気ではないからというのも理由の一つだ。

「それはもちろん、俺が機動六課を不審に思ってるわけじゃないさ。だけどな、管理局という組織は不審に思っている。組織で動くにあ

たって、上の命令は従わなければならなんだ。それがどんな命令でもな」

……レルデの言っていることは正しいことだ、正論だ。

組織というのは人の集団ではあるが、一つの考えの元に集まっている。例えば、時空管理局であれば平和の為など、そんな目的だ。

そして、組織にいる以上はその考えに背くようなことはできない。仮に背いたとしても、ソイツは裏切り者、反逆者として組織に追われることだろう。

いくらレルデ自身が凄まじい能力を持っていようとも、管理局を敵に回したら厄介な筈だ。

だから、レルデの言っていることは正しいことだ。

……しかし――

「……で、本音は？」

「監察役になることで特命隊の仕事を合理的にサボれるからだ！」

……この馬鹿はそんなことを第二、第三に考えている大馬鹿者だ。

恐らく、僕が機動六課に異動したことによって特命隊の仕事が減らないのだろう。自慢ではないが、僕がいない特命隊は仕事が出来ない。いや、終わらないというのが正しいか。

それなりに優秀な者もいるが、それでも終わらないことだろう。

「まったくだ、お前さんがいなくなったせいで、部下達に文句ばっか言われてんだよ」

「その言葉だけを聞くと、まるで僕が悪いようだな」

「……え？　違うのか？」

「ほう。そんなことを言うのか。理解した」

どうやらこの生きて動く迷惑すぎるゴミは大変な目に合わなければ、どれだけ僕が迷惑をかけられているのか分からないようだな。

まぁ、このゴミには一言言えば十分だろう。

「……今後一切、貴様の仕事はやらない」

この一言を。

特命隊にいた時はこの一言を言うだけで、レルデは少しの間とは言え仕事を自ら行なった。そして、それに加え、レルデは何かしらの特典もくれた。僕にとって、とても嬉しい物を。

だから、この一言言えば終わりだろうと思っていた。

「おう、いいぜ」

そう思っていたからこそ、この一言はあまりにも予想外すぎて、僕にしては珍しく数秒間思考が完全に止まった。

何だ、どうした？

レルデがこんなことを言うなんて、明日は槍……いや、隕石が降

ってくるのか？

「隕石って、それはもう世界崩壊レベルじゃねーかよ。そんなに珍しくねーよ。俺はただ単にお前には頼まないって言ってんだよ」

「……お前には？」

「ああ。どうやら、可愛い後輩が俺の仕事をやってくれるそうだからな」

……何故だろうか。レルデのあまりにも馬鹿ぶりに殺意が湧いてくる。

何が、『可愛い後輩が俺の仕事をやってくれるそうだからな』だ？　それはお前が八神部隊長に仕事を押し付けるという意味だろうが。

折角、僕がお前に関心するところだったというのに、興ざめだ。

やはり、この男はいますぐこの手で葬っておくべきか？　葬っておこう。

「……シュレンさ～ん？　どうして、ホルスをわたくしめの頭に向けているのでしょうか？」

「わからないか。それは――貴様を葬る為だ」

シュン！　という音がレルデの頭のすぐ隣から発せられる。原因は僕が握っているホルスの引き金を引いたことだ。しかも、今度は

片手銃では無く、散弾銃。
故に、回避は不可能。
それを悟ったのか、レルデは右手を銃口に近づけた。そして、放たれる魔法弾が右手によってかき消される。
相変わらずの無茶苦茶ぶりに呆れつつ、次の攻撃をしかける。
とは言え、既に仕掛けている。
それは、相殺しきれずにレルデから逸れた魔法弾を操作し、再びレルデを標的として攻撃することだ。

「……っ！？」

それに気づいたレルデは横に移動してかわす。しかし、僕の狙いはその移動した後のレルデ。つまり、そうさせることが僕の狙いだ。
そして、既に構えていたホルスを再び放つ。
さすがに身体が崩れている状態で魔法弾をかき消すことはできないようで、障壁を張ることしかできなかった。

「……っと、さすがに焦ったぞ」

とは言え、障壁はビクともしない。やはり、リミッター付きの攻撃はＳＳＳランク魔導師には通じないということだ。

「マジで殺す気かよ」

「安心しろ。殺傷設定ではないということはないからな」

「……結局はそれ、殺傷設定じゃないか。ったく、相変わらず怖いな」

どうやら、この場でレルデを葬ることはできないようだ。
まぁ、この程度で死なれてもらっては困ると言えば困るな。せめて、僕が今までに味わった苦労の3倍を苦痛としてレルデにぶつけなければ。
……そうなると最初に、爪を一つ一つカッターで少しずつ切り落としていくか。途中で肉などを切るが、それでも少しの血しかでないだろう。
なら、問題ない。

「いやいや、何が問題ねーんだよっ！？　怖すぎるぞ、その発想！」

「……？」

「そんな風に首を傾げてもダメだ！　可愛らしいけど、ダメだ！」

「僕は男だ。可愛らしいと言われても嬉しくはない」

「まぁ、それ以上にお前は毒舌だから問題はない筈だぜ？　……いや、でも、可愛らしい容姿で毒舌……新種の良いキャラだ！　これで、勝つる！」

この馬鹿は一体、何に勝つと言うのだろうか？　まぁ、大方、部下達に僕にとってはくだらないアイディアの勝負でもしているのだ

ろう。
部下達、頑張ってくれ。そして、レルデ……お前は負け犬になれ。

「オイオイ、俺には応援してくれねーのかよ。何年もの付き合いだって言うのに」

「何年もの付き合いだからこそ、応援をしないんだが？」

「する意味がないってか？　まぁ、正論だな」

ああ。お前は負け犬になれ。
……それより、凄く自然に話が物凄く変な方向に変わっているのは何故だ？　最初はレルデの機動六課に行くという件だったのに、何故こうも変な話になっているのだ。
まぁ、最初に話を逸らしたのはレルデだったか。

「違う。お前が『……で、本音は？』と聞いてきたから、話が逸れたんだ」

「言っておくが、それはまだお前の考えていることを聞いているのであって、関係の無い話をしていないぞ。寧ろ、お前が『まったくだ、お前さんがいなくなったせいで、部下達に文句ばっか言われてんだよ』と言った辺りで、話が崩れたんだ」

まったく、とんだ言い掛かりは止めて欲しいな。
さて、レルデが無駄話ばかりするので時間を喰ってしまったが、

そろそろホテル・アグスタの方に戻らないと不味い。
そろそろ、八神部隊長がレルデの存在に気づくだろうからな。

「という訳で、戻るぞ。レルデ」

「へいへい。仰せの――……来たか」

突然、視界に入っている木がなぎ倒された。それに伴い、木が倒された音と機械音が僕とレルデに届く。
どうやら、本格的に遊んでいる場合ではないようだ。僕の予想より遥かに早くガジェットがホテル・アグスタに向かっている。
幸いなのは、ガジェット達は僕達に気づいていないということだろう。

「今ここで数を減らしておいた方が効率がいいか……」

「俺はすぐに中に戻ることをお勧めするぜ」

僕の意見をレルデは却下する。レルデの言葉にしては珍しく、目の前に戦闘ができる場所があるにも関わらず、そんなことを言った。
レルデはシグナム副隊長と同じく、バトルマニアだ。しかも、シグナム副隊長より重症である。そんなレルデが戦闘ができる条件が揃っても戦闘をしないなど……
ある意味、仕事をするより珍しい。

「お前は俺をバトルマニアと思うな。ただ、バグキャラがいる筈だから俺達の出番はない」

「……成程」

「それに、内部を警備してるのに外に出ていてはダメだろう。だから、お前はさっき戻ると言ったんじゃないか」

「その通りだな。なら、頼む」

僕はここで破壊していった方が効率が良いと考えたのだが、まぁ、いい。

フォワード陣が何かしらの失態を犯しても、副隊長達が庇ってくれるだろう。なら、戻っても別に構わないか。

そんなことを考えている内に此処に来た時と同じく魔方陣が現れ、僕達をホテル・アグスタへと転移させた。

「僕は八神部隊長のいるところへと向かう。レルデはどうする？」

「俺はちょこっと、寄り道してからそっちへ行く」

「了解」

最低限のやり取りをして、僕達は別れた。

スーツ姿だから動き辛いというのはあるが、与えられた仕事はミスをすることなく遂行するとしよう。誰にも迷惑をかけることはせず、完璧に。

とは言え、今回の任務でも僕は恐らく目立った活躍はしないのだろう。

防衛ラインが破られる可能性など、殆ど無いだろう。まぁ、だからといって、油断はしない。

油断はミスを誘うからな。

まぁ、傲慢や欲張りもミスを誘う要因の一つだな。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　６（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。

いや、今回の回……原作キャラが空気過ぎる！
はやてだけが辛うじて名前だけ出たけど、殆ど空気みたいなモンだし、いくらオリキャラがいるからといっても、不安ですね（汗

そのことはさておき。
今回は珍しく、サイドストーリーにしては長かったと思います。何か、シュレンとレルデの会話って自然と長くなるんですよね。
まぁ、レルデが殺されかけるというのが多いからですけど……

それと、レルデが機動六課に行く件については若干説明不足だと思います。ですが、また三話後ぐらいに詳しい説明に入りますので、ご了承ください。

最後の文は一応、ティアナのことを指しています。
次話は原作基準ですかね？

この小説に対する意見などありましたら、感想の方にどうぞ
では。

第十三話　『正体』（前書き）

今日も今日とで部活の試合～
……片道二時間とか面倒～

では、第十三話『正体』始まります

第十三話　『正体』

Ｓｉｄｅ――――

現在、機動六課のフォワードメンバーは先程までの警備の時とは違い、――オークションで使われるロストロギアをレリックと誤認した――ガジェットと交戦していた。

八神はやての守護騎士達の活躍によって数が減るガジェットだが、当然、守護騎士達だけでは全てのガジェットを殲滅することはできず、機動六課の新人達もガジェットと交戦している。

襲いかかって来るガジェットに交戦するフォワードメンバーだが、リニアレールの時と違い、改良されたためか動きが早くなっていた。

その為、中々攻撃は当たらず、どちらかと言うとフォワード陣はガジェット達に押され気味だった。

とは言え、元々の任務はホテル・アグスタの護衛。

全機落とす必要は無い。厳しい闘いではあるが、守り抜き通せば良いのだ。

『防衛ライン、もう少し持ち堪えて！　もう少しでヴィータ副隊長が戻って来るから！』

機動六課のロングアーチもそのように考えている。別にフォワード陣を信用していない訳ではないが、現状の戦況を見てそう判断したのだ。

この場にシュレンはいないが、仮にいたとしたら間違いなくロン

グアーチと同じようなことを言うだろう。焦りは闘いに置いて禁物なのだ。

しかし、そのように考えないものが現場にはいた。

「守ってばっかじゃ行き詰まります！　ちゃんと全機落とします！」

オレンジ色の髪をした少女。ティアナ・ランスターである。

彼女は初出動のリニアレールでの任務では上手くやっていた。しかし、それはあくまでも客観的に見た時の場合だ。

ティアナはそう考えていない。

どちらかというと、エリオとキャロの二人が大型ガジェットを破壊しているので、エリオとキャロの方が上手くやっていた。とはいえ、ティアナ自身も自分がミスをしたとは思っていない。

ある程度は上手くやったと思っている。だが、目立った活躍はしていない。

『ティアナ大丈夫なの!?　無茶しないで!』

「大丈夫です。毎日朝晩、練習してきてんですから……

エリオ、センターに下がって。私とスバルのツートップで行く!」

そのことが彼女の心に焦りを生んでいる。

彼女は心に誓っていることがある。それは、証明することだ。ティアナの兄ティーダ・ランスターの……いや、ランスターの弾丸を証明することだ。

かつて、憧れていた兄を侮辱した奴らに証明してみせる。

「スバル！　クロスシフトA行くわよ！」

「おう！」

スバルに指示を出すと、ティアナは前線に駆け出す。その間にスバルはガジェット達を誘導させティアナの魔法が完成するまで、何とかガジェット達による攻撃をかわす。

それを見たティアナはカートリッジを4発ロードさせ、ティアナの周りに魔方陣が浮かび次々と魔法弾が形成されていく。

（証明するんだ……特別な才能や、凄い魔力が無くても）

ロングアーチからティアナの行動を止めさせるような言葉があるが、そんなものは今のティアナには聞こえない。

今のティアナはガジェットを破壊するということしか考えていない。

（一流の隊長達がいる部隊でだって……どんな危険な戦いだって！）

クロスミラージュをガジェット達に標準を合わせる。

しかし、ティアナ自身の制御しきれない魔力が腕に負担をかけ、集中力が少し欠ける。が、それすらもティアナは無視する。

この判断は間違っていないと判断して。

「私は、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

ティアナのその言葉と同時に無数の魔法弾が放たれた。

ティアナの放った魔法弾――クロスファイア――は次々とガジェットを貫き、ガジェットの機能を停止、破壊している。

しかし、ガジェットの破壊に比例していくように、弾の精密度が落ちていく。

それもその筈だ。

現在のティアナの実力では、カートリッジを4発もロードした状態のクロスミラージュを完璧に制御するということはできないからである。

それでも、ティアナは撃ち続ける。

証明する為に。

ランスターの弾丸が敵を撃ち抜けるということを証明する為に。

だが、ティアナの魔力で作られたオレンジ色の魔法弾は、ガジェットから大きく逸れてスバルの背中に向かって進んで行った。

「……っ！？」

途中でスバルも近付いて来る魔法弾に気付くが、それはあまりにも遅かった。その為、回避行動を取ることも、恐怖から目を逸らすこともスバルにはできない。

咄嗟の判断でティアナは放っている魔法弾を消そうとする。しかし、既に放っている魔法弾はどうする事もできない。
仮にそれが出来たとしても、圧倒的に時間が無かった。魔法弾はスバルのすぐそこまで近付いていてしまっているのだ。

（……スバルッ！！）

日常での二人の会話とは反対に、ティアナは本気でスバルの事を心配した。とは言え、思ったところで何もできず、ただ単に見ていることしかティアナには出来なかった。
そして、スバルに向かっていった魔法弾は――――真っ二つに切り裂かれた。
スバルに向かっていたオレンジ色の魔法弾は何故か真っ二つに分かれてスバルの隣を素通りしたのだ。
どうして、という疑問が出てきた時、スバルの隣に純白の刀を持った銀髪の女性が突如現れる。
女性が刀で魔法弾を切り裂いたのだが、スバルとティアナはそれのことに気付くのに少しの時間が必要だった。
そして、切り裂かれたと気付いた時には驚くことしかできなかった。

「……どうして？」

ティアナが驚き、声を上げた理由は二つある。
一つはスバルに衝突すると思っていた魔法弾が切り裂かれたことだ。ティアナにとって、それは考えてもいない可能性で誰かが助け

てくれるとは思わなかった。
だからこそ、ティアナは驚いた。
しかし、一つ目の理由だけではティアナはここまで驚く事は無かった。
問題は、魔法弾を切り裂いた者だ。

「……ふむ」

綺麗に輝いている銀色の髪に、視線が鋭い金色の瞳。
ティアナはその顔に覚えがあった。
短い時間ではあったが、色々なことを教えてくれ、ティアナを導いた者。そして、シュレン・ガルディンと同じく、ティアナ・ランスターにとっての、もう一人の憧れの人。

「久しぶりじゃな」

その声は背後から聞こえた。
先程まではスバルの隣にいた筈なのに気付いた時には、ティアナの背後にいた。そのことに驚くが、すぐに冷静になる。
ティアナもまた、彼女を“バグキャラ”という認識で見ているのだ。

「――久しぶりじゃな、小娘」

シュレン・ガルディンと共に行動をしている女性――セレンを。
ティアナとしては、再会した喜びを表情に出したかったのだが、セレンが出している威圧がそれを許さない。
久しぶりに感じるこの威圧に膝が震えるが、出会った時に比べたらまだまだ可愛い部類だ。

「……お主はそこで見ておれ。正直に言うが、今お主は使い物にならん」

その言葉を否定したかった。だけど、否定することはできない。
否定することは許されない。
ティアナはセレンの目の前ではやってはいけないことをしてしまったのだから。
一方、セレンはティアナから視線を逸らし、ガジェットの方へと向ける。

「妾を倒したいのなら、最低でもこの３００倍は持ってこい」

セレンは何処かの金ピカ王のような台詞を言いながら、ガジェットを注意深く一体ずつ観察する。そして、最初に見たガジェットを標的として、持っていた純白の刀を投げ飛ばす。
ただ、投げ飛ばしたのであれば、ガジェットはそれに反応して刀をかわすことができただろう。しかし、投げた刀はガジェットに突き刺さる前に消える。
そして、消えた刀は気がついた時にはガジェットに突き刺さって

いた。
言葉だけを聞くと理解できないが、セレンが行なったことは簡単なことである。ただ、投げ飛ばした刀をガジェットの内部に転移させただけなのだ。
しかし、言葉にしてみればそれだけのことなのだが、そんなことが実際にできる者など滅多にいないだろう。

「……案外脆いものじゃな」

貫かれたガジェットは爆発音と共に破壊され、刀は吸い寄せられるようにセレンの手元に戻った。
その間にガジェット達のアームがセレンを襲うが、どれも紙一重のところでかわす。そして、刀を再び握ったセレンはガジェットのアームを切り裂く。
ガジェットの堅い筈のアームをいとも簡単に。

「数が多いのに妾一人にやられるとは……これでは眠気覚ましにもならん」

戦闘中であるにも関わらず、呑気にそんなことを呟くセレン。
油断している訳ではない。が、余裕を持っているのは事実だ。
それに、既にガジェットの数は半数を切っている。彼女にとっては、この程度の戦力は最早警戒する必要はないのだ。

「……これなら、わざわざ妾が出てくる必要は無かったかもしれん

の」

セレンはそう言うが、もしセレンが来なかったらティアナの魔法弾は切り裂かれず、ミスショットが原因でティアナの放った魔法弾はスバルを襲っていたことだろう。最悪の場合、魔法弾の直撃により死ぬ可能性もあった。

それなのにも関わらず、セレンはそう呟いた。

もちろん、セレン自身もその考えがない訳ではない。しかし、セレンはまるで、そうならないことを知っているかのように切り捨てる。

「まぁ、よい。今は鉄屑を破壊することを第一に考えよう」

鉄屑というのはガジェットのことを指しているが、ガジェットのことをゴミと同じように例えるところから考えてみても、セレンは第三者から見てみれば油断しているように見えるだろう。

現にスバルとティアナはそのように考えていた。厳密にはロングアーチも含まれているが、この際は数えない。

そして、再び刀を握り締め、ガジェット達へと切りかかるセレン。しかし、その斬撃はかわされる。

「……む。反応速度が上がったかのう？」

セレンの言葉通りガジェットの操作方法が変わり、先程よりもガジェットの戦力は上がる。しかし、それでもセレンは警戒のレベル

を少しも上げず、精精、多少面倒なことになったと思っているくらいだ。
多少の戦力が上がったとしても、『自分自身に破壊される』という結果は変わらないと思っているからである。

「妾に壊されると言う運命は変わる事はないのじゃ」

彼女にとって、完全に破壊するまでの過程など綺麗で有っても無くても、どちらでも構わないのだ。
つまり、彼女には結果さえあれば十分なのだ。
だから、それまでの過程などに『綺麗』という言葉は必要無い。
まぁ、その代わりに格下と判断した敵には遊ぶ。
だからこそ、初めの攻撃で――実際には投げた訳ではないが――刀を投げた。
しかし、剣術を習っている彼女にとって、刀を投げることなど言語道断だ。

「……そう考えたら、不味い事態かもしれんの。間違いなく、この戦闘のことはあやつに知られてしまうじゃろうし」

冷や汗を垂らしながら言う。それに加え、少しだけ顔は青ざめて、震えているようにも見える。その表情は普段の彼女から見ないもので、凛々しい彼女からのギャップがあって可愛らしいと思えるものだった。
まぁ、戦闘中でなければの話ではあるが……。

「それならば遊んでいる場合ではないか……」

この場には空中に浮いているガジェットが存在する為、地面を力強く蹴り高く跳ぶ。

そして、刀を振るう。

力に頼らず、脱力して、最低限の力だけで振る。そうすることによって、余計な力が働かず、刀を振り切る速度は飛躍的に上がる。

具体的には、ガジェットが反応できないくらいに。

数秒後、ガジェット本体に一つの線が浮かび上がり、それにそっていくようにガジェットがズレていく。

「終わりにしよう」

横に真っ二つに分かれたガジェットは重力に逆らうこと無く落ちて行く。セレンはそれを足場として、さらに一歩踏み込み跳んだ。

セレンも――シュレンと同じように――空を飛ぶことは出来る。

しかし、セレンもガジェットと同じように重力に逆らわずに落ちることにした。その途中で上段の構えを取り、ガジェットの位置を確認する。

とは言え、セレンがガジェットの位置を確認するのに一秒で十分だ。

セレンは刀に魔力を込めていく。

刀から込めた魔力が、刀に納まりきらずに漏れていくことを確認すると、今度はただ単に力に任せて振る。そうすることによって、刀に込めた分の魔力が勢いよく放出され、白い魔力がガジェットを押しつぶしていくのだ。

圧力に耐え切れなくなったガジェットは潰れていき、爆発音と同時に全てのガジェットの機能が停止した。
そして、ガジェットの爆発音が止むと同時にセレンは地面に足を着けた。

「ま、少しは眠気覚ましにはなったかの？」

ガジェットの残骸を見てそう呟く。
先程と同じく油断しているように見えるが、一応、残心している。
確かに、セレンにとって今の戦闘は遊びだ。しかし、だからと言って、完全には油断しない。
剣を扱う者として、基礎は怠らない。

「……さて、と」

戦闘は終わった。
だが、これからしなければならないことがある。まぁ、正確にはやらなくても構わないのだが、やらなければ気が済まない。

「おい、ティアナ・ランスターにスバル・ナカジマ二等陸士」

名前を呼ばれてビクビクと震えるティアナ。
口元は誰もが惚れ惚れする程の良い笑みなのだが、目元は笑っておらず、セレンの雰囲気は鬼が背を向けて逃げる程怖い。

だが、しかし、その雰囲気に気づかない者もいる。
青い髪をした少女、スバル・ナカジマだ。彼女にとって、セレンとは初対面で今さっき初めて顔を見たのだ。それ故に、セレンが不機嫌であるということに気づいていない。
寧ろ、先程のガジェットを破壊した時の動作を凄いと呑気に感じている。

「いや、スバル・ナカジマ二等陸士には用事はないか。まぁ、よい」

とりあえずは標的をティアナに絞り、歩いていく。
……正直に言えば、殺気がある訳ではないのに無茶苦茶怖い。現にティアナは若干の涙目である。

「で、ティアナ……お主、先程の行動は何じゃ？　どういう目的があったのかの？」

「……わ、私は、ガジェットを破壊しようと」

「ほう。そのついでに仲間まで破壊しようとしたのかのう。自分の実力を正確に見積もることも出来ずに」

「ち、違いますっ！」

「何がどう違うのじゃ？　事実だけを言えばその通りじゃろうに。
まぁ、妾は説教をするという気分では無いから見なかったことにするが、次に馬鹿な行動を取ったら――――潰すよ？」

いつもと違う口調に恐怖が倍増する。
このままセレンと会話をしてしまっては本気で泣くかもしれないと考えていた時、不幸か幸運か、赤いバリアジャケットを纏っている上司、ヴィータがこの現場に到着した。
そして、ヴィータはティアナとスバルを見た後にセレンの顔を見た。

「……っ！？」

八年前、あの病院で一度だけ顔を合わせただけだというのに、ヴィータはこの顔をよく覚えている。
覚えようと意識している訳ではないが、それでも忘れなかった。
できれば、今すぐにセレンと会話をしたい。しかし、それよりも先に自分の部下の失態を叱る。
ロングアーチと繋がっているのはティアナとスバルだけではないのだ。その為、ヴィータにもティアナのした行動を知っている。
一方、そんな様子を見ているセレンはヴィータを見ているが、正直に言えば暇だ。
何故なら、この場にいる中ではヴィータとティアナ以外――正確には、それに加え、レルデのファンクラブに入っている者も含む――はセレンのことを知らない。
だからこそ何も言えず、セレンはやるべきことがない。
そして数分後、ヴィータによる二人への説教が終わった。

「……で、何でテメェがいるんだ？」

ティアナとスバルは別の場所へ行った為、この場にはヴィータとセレンしかいないということになる。
さらに、今はロングアーチとの繋がりを切っている。
だから、この状況ならばじっくりと話ができるとヴィータは考えている。

「……テメェが何でここにいるんだ？　しかも、ティアナと知り合いみたいだな」

「八神はやて二等陸佐から聞いておらんのか？　妾が機動六課に異動することを」

「……聞いてねーぞ、そんな話」

「まぁ、シュレンと同じで異動が急遽決まったようなもんじゃからな。知らないのも不思議ではないか」

正確には、この異動が急遽決まったものではないが、その事実をセレンとヴィータは知らない。とは言え、ここでは詳しい事情は省略しよう。

「まぁ、お主には妾に聞きたいことが山ほどあるじゃろうが、今は無理じゃ。じゃから、後で聞いてくれないかの？」

「……その時は逃げんなよ？」

「もちろん。というより、機動六課にいる時点で逃げることは不可能じゃ」

セレンの言う通り、既にセレンの機動六課への異動は確定、絶対的なものなのでヴィータから逃げることは不可能。しかし、質問に答えないことはできる。

セレンには機動六課に行かないという手段があるが、そうしてしまうとレルデに多大な迷惑をかける。セレンにとって、それは避けておきたい出来事だ。

もう一つの手段してヴィータの質問を却下するというのがある。これはそのままの意味だが、ヴィータとセレン……いや、セルス・ローラルドではセルスの方が階級が上。

つまり、上司命令としてその質問を却下することもできる。

「高町なのはにはシュレンのことを伝えたのかの？」

とは言え、逆もまた然り。

セレン自身がヴィータに質問することもできる。

「……伝えてない。伝える必要がない」

「まぁ、そうじゃろうな。お主は優しいからな」

「……ふん」

八年前と比べ、少しは警戒のレベルが下がったものの、やはり八年前に会話した時は忘れることができず、ヴィータはセレンのことを警戒している。

ヴィータは今すぐにはセレンのことを信用することはできない。理由は先程の通りだ。

しかし、ある意味では逆に警戒のレベルは上がっている。

（コイツ、何も変わってねぇ……！　八年も経ってんだぞ？）

ヴィータはセレンという人物像を信用していない。しかし、今のヴィータはそれ以外のところでもセレンを信用できない。

それはセレンの正体だ。

別にセレンが管理局でも階級が上の者、セレンが次元犯罪者であるなど、そのようなことを言っているのではない。

ヴィータにとって、八年間という時間は長いようで短い。

闇の書、夜天の魔道書として生きてきた時間としては圧倒的に短いが、八神はやてが主となってからの時間としては長い。

そして、人間にとって八年という時間が長く、その間にも色々な出来事が起きるということを理解した。

そして、色々なものが変わっていくものだと理解した。

それにも関わらず――

（……人間なのか？　コイツは）

――八年も経っているというのに、セレンの容姿が何一つ変わっ……

ていないということだ。

第十三話　『正体』（後書き）

と、言うわけで第十三話でした。

うん、また大きな伏線……でもないか。
一応、病院の時のセレンの容姿の描写と今の容姿の描写と殆ど同じだし……
このことに気づいた人もいるのではないでしょうか。

さてさて、後少しでギャグ回のようなものが一杯書ける！
まぁ、その前にティアナの件がありますが……

それと、更新が遅れて申し訳ありませんでした。

この小説に対する意見などありましたら感想の方にお願いします
では

第十四話　『自己紹介』（前書き）

すみません、更新が最低限の一週間に一度のペースになってます
言い訳は後書きで。それと短いです。

では、始まります。

第十四話　『自己紹介』

Ｓｉｄｅ八神はやて

今日、部隊長室には私とシュレン君を除くスターズ隊の隊長陣が集まっていた。
できればライトニングの方も集合させたかたんやけど、フェイトちゃんとシグナムは仕事の事情の為いない。
そして、どうしてこの部隊長室に隊長陣を集めたかというと、それは特命隊からセルス・ローラルドさんが機動六課にやって来たからや。

「時空管理局特命隊から来たセルス・ローラルド二等陸佐じゃ。敬語は使わんで良い。普通に話してくれ」

「セルスさんと私は昔からお世話になってる人で、先輩……じゃなくて、レルデ・ローラルド少将の義理の妹なんよ」

「八神の言う通りレルデの妹じゃが、できれば妾をそのようなレッテルで見て欲しくはない。妾を一人個人じゃと思って普通に接してくれ」

初めて私と会った時とは違い、自信ありげに凛々しく自己紹介をするセルスさん。
とは言っても、言うてる程気にはしてへん。初対面の時に私が失礼なことをしたのかもしれへんから……。

「長い自己紹介は嫌いじゃから、一旦ここで切るが、何か質問がある奴はおるかのう？」

セルスさんがそう言うと、なのはちゃんが手を挙げる。

「ん……何じゃ？」

「えっと、セルスさんってシュレン君と同じ部隊なんですよね？」

「まぁ、その通りじゃ。階級は妾の方が上とはいえ、特命隊ではシュレンの部下ということになっておる」

――シュレンは妾より階級が低いとは言え、レルデから部隊長代理を任されておるからの、とセルスさんは付け加える。

その言葉で納得した。

前にシュレン君とセルスさんの異動の件で話した時に呼び捨てだった理由が分かったからだ。

「他に質問はあるのかのう？　高町なのは一等空尉殿」

「いえ、ないですね。ありがとうございます」

「……じゃから、敬語は使わんで結構と言ったじゃろう？　特に、お主には使われたくない」

「……？」

どういう意味や？　なのはちゃんには使われたくないって……。
もしかして、前になのはちゃんとセルスさんは会ったことがあるんかいな？

「そうではないぞ、八神。
妾とシュレンの間では通信などでは会話はしないが、シュレンとレルデは一応していたのじゃ。それで、レルデから聞いた話なのじゃが、シュレンは高町なのはを尊敬していると聞いてな」

「……それとどういう意味が？」

「あー、つまりじゃな、シュレンが尊敬している相手に敬語は使われたくないということじゃ。妾自身はシュレンを尊敬している訳じゃからのう」

えーと、ちょお分かりにくいから私で置き換えてみると……レルデ先輩が憧れている人に敬語を使われるっちゅーことかいな。
まぁ、確かに、それは何というか嫌やな。
寧ろ、仮にそんな人がいたとしたら、私がその人に対して敬語を使いたい訳やし。

「まぁ、それにの、階級が上だから敬語を使うという概念は排除しろ。

仮に敬語を使うのであれば、まず妾自身が尊敬に値できる人物かどうかを判断してからじゃ。正直、形だけの尊敬など目障りなだけじゃ」

それにしても、相変わらずこういうところはカッコええな。
自分の意思を曲げないというか何というか……。

「ふむ、少し上から目線で喋り過ぎてしもうたかの？　いやいや、済まぬな」

「謝んなくても平気やよ？　セルスさんの言ってることは間違ってない訳やしね」

「そう言ってくれると助けるぞ、八神」

それに加えて、日本人みたいな謙虚なところも……。
まぁ、セルスさんの出身世界は知らんけど、セルスさんって色々と私達の世界に詳しい人や。
一体、誰に教わってるんやろうか。

「本来であればスターズ隊とライトニング隊の隊長、副隊長に自己紹介をしてもらいたいところなのじゃが、それは面倒じゃから後でも良いじゃろうか？
親睦を深めるのは仕事をこなす内に自然となっていくじゃろうしな。
よって、妾は持ってきた荷物を置きたいのと機動六課内の見学を

したいぞ」

「相変わらずやね」

「そうかのう？　ま、妾は我侭な性格じゃから仕方がないのじゃ」

普通は面倒だからという理由では自己紹介を拒まないのに、セルスさんはそれを平然とやってのける。

せやけど、多分セルスさんは私達のことを知ってるから自己紹介を省いたと思う。レルデ先輩から書類なんかで私達のことは知ってる筈……。

セルスさん……というより、ローラルド兄妹はあまり無駄なことはしない主義なわけやし。

「さて、できればこの中から機動六課の隊舎を案内してくれる人がいたら助かるのじゃが、さすがに隊長陣となると無理じゃろう？　……いや、シュレンがいたか」

その言葉を聞いて、私はここには居ないシュレン君にご愁傷様と思ったとその時――

「却下だ。僕は少しデスクワークがあって忙しい」

部屋の入口から聞こえてきた声に、思わず部屋にいた全員がそちらの方を向いた。

するとそこには、書類をこれでもかと思うほどの量を一人で抱え込んでいるシュレン君がいた。まぁ、実際はシュレン君の顔が書類で隠れていてシュレン君と判断したのは声だけやけど。

「ふむ、別にその程度の量ぐらい構わんじゃろう」

いやいや、セルスさん？
シュレン君が今抱え込んでいる書類って、何故か私がする分より圧倒的に多いよ？

「特命隊の時程ではない。故に問題ない」

「問題無いと勝手に決めつけるな。第一、セルスがやらなければならない書類も何故か僕の手元にあるのだが？」

「さぁ、何のことやら？」

ああ、成程。これはシュレン君が苦労する訳や……。
正直、今までは悪くても私と同じくらやと思うてたけど、全然違うわ。
一体何や、この書類の数？　シュレン君が持ってる書類だけでも私二人分の高さはいけるで。

「それに加え、何故か僕の端末に特命隊の仕事に関するデータが送られている」

「それは妾ではない。間違いなくレルデじゃ」

……うん、本気で同情するで。

あまりにもシュレン君が可哀想すぎるわ。私だったら一日でギブや。

それに、『それは』って言ってる時点でシュレン君が持ってる書類はセルスさんが原因や。

「……仕方がないな。二時間程待っていてくれないか？」

「……十分で済ませるのじゃ」

「一時間」

「二十分じゃ」

「四十分」

「二十五分じゃ」

「三十五分」

「……仕方がないのう。三十五分で落札じゃ」

……うん、仕方がない。

本来、ウチはボケの役なんやけど、今回だけ特別にツッコミを入

れたる。

「何でオークションのような感じになってるんや！？
それにそんなに多くの書類をどうやって持ち運んでるんや！？
次に何でレルデ先輩の仕事がシュレン君のＰＣに入ってくるんや！？
最後にそんなに多くの書類を三十五分でできるかい！？　私には
不可能やで！」

まぁ、きっと途中で切り上げるんやろうけど……。

「……まぁ、頑張れば出来ますよ」

「やっぱりそうやろ。普通はでき……って、できるんかい！？」

「はい、疲れますけど」

私でも最低は四時間ぐらいはかかるで？

「いやいや、そうレベルの話じゃないやろ！　どんだけ早いねん！」

「まぁ、八神。色々な意味でシュレンは妾達を軽く凌駕している存
在じゃからな。
そう思うのも無理はないが、出来るだけ早く諦めたほうがいいぞ
？」

「……シュレン君は常識人やと思ってたのに」

「シュレン曰く、一般常識人らしぞ。まぁ、妾達にとってはシュレンは非一般人の非常識人じゃがな」

「本人を目の前にして酷いな」

そうは言うけど、これは事実やから。

レルデ・ローラルド被害者同盟を組んだ者やから仲良くはしたいんやけど、どうやらそれは今日までみたいや。

まさか、シュレン君に裏切られるなんて。

……裏切ったな！　私の気持ちを裏切ったな！！

「ネタじゃな」

「ああ、知ってるん？　このネタ」

「うむ。昔に同じネタを使っていた人がいての」

多分レルデ先輩なんやろうけど、何でこんな回りくどい言い方をしてへんの？

こんな言い方をする程二人の仲って悪くない筈やけど……

「すみませんが、話がそれ始めていますので戻しますね、八神部隊長」

「ああ、ええよ。別にシュレン君が逸らした訳やないし」

「はい。……セルス、お前はヴィータ副隊長かなのは隊長のどちらかを選んで見学しろ。もちろん僕でも構わないが、どちらかというと二人の方が助かると僕は考えている」

一応、さっきからだから慣れたけど、シュレン君の敬語以外で話している所って初めて見た。

いつも私の時は敬語を使ってくるから新鮮や。

せやけど、レルデ先輩が言ってた通り、二重人格ばりの代わり様やな。

「まぁ、その通りじゃな。……八神、ヴィータ副隊長を借りたいのじゃが構わんか？」

「そういう訳や。お願いできるか？　ヴィータ」

「……アタシは別に構わねーよ」

「ヴィータの分の仕事は代わりに僕がしておくから、じっくりと話でもすればいいさ」

話？　ヴィータとセルスさんの間に話すことがあるのかな？

二人は初対面やと思うてたけど、私が知らないうちに知り合いにでもなってたんか。それに加え、なのはちゃんとも知り合いなんかな？

シュレン君はこの二人を推薦したから。

互いに知り合いなら、この二人を選ぶ理由も頷けるし。
まぁ、そんな訳でヴィータはセルスさんの案内、それ以外メンバーは仕事に戻ることになった。

にしても、想像以上にシュレン君とセルスさんの仲って凄くええんやね。

第十四話　『自己紹介』（後書き）

と、言うわけで第十四話でした

はい、まず更新が遅れた理由を。
前回の前書きなどで部活の試合があるとか書いてたんですけど、その大会は県の大会で結構大きな大会なんですね。
それで（テニス）選手が役２０００人いるんです。
で、自分はその中のベスト８０に入りまして、試合はまだ終わってないんですよね。
だから、最近は練習を優先していまして、小説を書く時間なんてまったくと言っても良いほどに無いんです。
……つまり、何が言いたいかというと、

更新遅れてごめんなさい！　それとこれからもかなり更新が遅れます。

ということです。
まぁ、プロットなどを作っておけばこのような事態にはならないんですけどね。

さて、言い訳はおいておきまして。
今回の話は少し短いです。（まぁ、書けなかったからなんですけど）
そして、ちょっと？　話の内容が愚だっています。
ですので、時間に余裕ができたら恐らく、この話は書き直すと思います。
前回から話がかなり飛んでますからね。

それに加え、少しだけ書き方を変えています。
ＳＩｄｅシュレンだと内心の分が凄く多く、殆ど会話をしていないということになっているんですが、今回はそれを短めにして会話分を多くしました。
正直、こちらの方がキャラが動く……と、思っていたんですが

今回の話、なのはとヴィータが空気すぎてワロタ！
みたいな感じになってます。ヴィータなんているのに一言しか喋っていませんからね

まぁ、こんな訳でグダグダな話でした。
いずれ書き直します。

では。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　７（前書き）

また、更新が一週間に一回に……
後、二回はこのぐらいかな？　……申し訳ないです。

では、サイドストーリー８始まります

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　７

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

ホテル・アグスタの任務から二日後、僕はとんでもない量の書類を片付けている。

今日の早朝訓練は既に終わり、書類を消していくのだが数が明らかに異常だ。書類を積み上げるのも大変なくらいに。

「……」

原因は分かっているが、いちいち気にしていられない。

そんなことよりも気になっていることがある。それは、前の任務、ホテル・アグスタでの任務でティアナがミスショットをしたことが関係している。

ガジェットとの戦闘の際、ティアナはミスショットをした。

まぁ、それだけならば対して気に止めたりなどしない。そんなことは優先順序はとてつもなく低い出来事になる。

しかし、ティアナのある行動には問題があり、気に止めることとがある。

それはティアナが自分の実力を見誤りミスショットをしたということだ。ハッキリ言って、自分の実力を見誤ることなど論外だ。

「……理由は前に言ってたことだろう」

ティアナと前に会話した時、ティアナは自分を“凡人”と指した。凡人な私がこんなエリート部隊にいても良いのかとか、そんな風に言っていた筈だ。

そして、僕はその言葉に自身のことを過小評価するのはよくないと言ったか？　まぁ、それはどうでもいい。

とにかく、僕は今のティアナに対してどんな言葉をかけてあげたら良いのかと、そのようなことを考えている。しかし、僕が言ったところで逆効果だろう。

何故なら、ティアナから見てみれば僕は“非凡人のエリート”らしいからな。

正直言って、驚くことである。

「僕など普通にいる一般局員Ａという存在位置だというのに」

特命隊の部隊長代理になったことも、機動六課スターズ隊副隊長になったことも、管理局に関しての全ての出来事は、僕の知り合いがいるからこそ成り立っている。

例えば、部隊長代理の件だったらレルデ・ローラルド。スターズ隊副隊長の件だったら高町なのは。

そのように、僕が良い位置にいるのは僕の実力と言う訳では無く、僕の知り合いが優秀な魔導師だからだ。

だからこそ、僕は偶然こんな場所にいる。

だけど、ティアはそれを僕の実力だと思っている。

「……本当に摩訶不思議だな」

本当に不思議に思う。
しかしまぁ、仕方がないことなのだろう。人間というのは自分に無い物を特別と思い、それを欲しがる性質がある。
今のティアナにとって、自分に無い物というのは“力”だ。
だから、ティアナが人間である限りそう思うのは仕方のない事だ。
そして、それを哀れだと思うのも仕方がない事だ。
何故なら――

「……いや、これは言わなくていいな」

さすがにこのことを言うのは酷というものだ。と言うより、例えこのことを言ったとしても意味がない。
人には人なりの価値観がある。
例えば、僕は辛い食べ物が好きで、甘い食べ物は嫌いだ。
しかし、世界には僕とは逆に、甘い食べ物が好きで、辛い食べ物が嫌いという人がいる……もしくは、両方とも好きか、嫌いな人がいるだろう。
これは単に味覚の違いなのだが、これでも価値観の違いというのが出てくる。
何故なら、大抵の者は好きなモノを価値のあるモノと認識するからだ。そして、大抵の者は嫌いなモノを価値の無い物として見る。
一体誰が、嫌いなモノを価値のあるモノと思うのだろうか。
例外もあるにはあるが、これは大抵の者に当てはまることだろう。

つまり、僕が言いたいのは、僕が最も正しいと思う事を言っても、それは他人から見てみれば必ず同意してくれるとは限らないという

ことだ。
だから、僕がティアナに言いそうになったこの事も、ティアナからしてみればただの迷惑なのだろう。
だからこそ、僕は言っても意味がないとそう思ったのだ。

「……面倒だな」

とは言え、言わないという訳ではない。
僕が面倒事が嫌いであるというのは自分でも自覚しているが、それでも言わなければならないような気がする。
もし、ここでティアナを放っておけば、さらなる面倒事に繋がる可能性があるからだ。
どちらにせよ、若い芽は早めに摘んでおくのが良い……と、言うのであったか？　まぁ、そのような感じだ。

……まぁ、その前にこの異常と言っても良いほどの書類を部隊長室に運びこばなければな。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

部隊長室での会話を終え、仕事をしていた。しかし、仕事は十分

前から終わっているので、現在は自室でくつろいでいる。
とは言え、呑気にしている訳ではない。少し思考に浸っている。

「……盗み聞きすれば良かったか？」

セレンとヴィータの会話を。
まぁ、盗み聞きなどしてしまうと変態のように思われるかもしれないので、実際には行動に移さないが。
しかし、それでも気になる。
セレンが機動六課にとって不利益になるようなことはしないとは思うが、僕とヴィータとの間にちょっとした溝ができたように、セレンが誰かとの間に溝ができたら面倒だ。

「まぁ、出来ても出来なくても、どちらでも良いのだがな」

正直に言うと、面倒なだけで別にどちらでも構わない。そう、どちらでも構わないのだ。
何故なら、例えどちらに転んだとしても僕の行う行動は変わらないからである。
僕には行動の優先事項というものを決めている。
今まで、僕はそれに従って行動していた。だから、これからも変わらずに優先事項の通りに行動するだけだ。
とは言え、例外も存在する。
例えば、八年前に高町なのはを庇ったこと、それよりも前にあの人と約束をしたこと……他にもまだあるが、代表的なモノはこの二つだろう。

「ま、どうでも構わないか」

結局はそれもある意味の優先事項を守ったに過ぎない。

それよりも、先程言った通りヴィータとセレンの会話が気になるところだ。

「……このような時にレルデがいたら楽なのだろうがな」

レルデがいたら恐らく、そちらにしか集中できないような厄介事を持ってくる筈なので、今の僕の『気になる』という感情は一時的にとはいえ忘れるのだから。

勘違いされるようだと困るので言っておくが、別に僕はレルデに頼っているという訳ではない。寧ろ、逆に頼られているという感じだ。

いや、まぁ、アイツが消えると僕も困るが、別にそれは心配しているという訳ではないぞ？

……話が逸れたな。

「さて、どうするか？」

一応、ヴィータはセレンと会話をしたがっていたようだから、僕がそれを実行に移させた。

セレンにヴィータと高町なのはの二つの選択肢を挙げたところ、

セレンはヴィータを選んだ。ということは、セレンは高町なのはとの会話よりヴィータとの会話を選んだということだ。

まぁ、それはそうだ。

彼女が高町なのはに対してどのような想いを持っているのかは知らないが、少なくても今の彼女はそのようにしなければならない理由がある。

「……まったく、どうして僕の周りの人は色々と複雑な考えを持っているのだろうか？　一度で良いから僕の身にもなって欲しいぐらいだな」

言葉の裏などから心を読み取るというのは慣れたことではあるが、案外と疲れることなのだ。

僕のように、単純に生きて欲しいものである。

セレンは否定するが、僕みたいな一般常識人がいたら案外簡単に世界というものは平和になるのではないかと時々思う。

「そんな馬鹿なことがあるか」

しかし、僕はその考えを自分で考え自分で否定する。

「……人が居る限り、平和は訪れない」

例え、どんなに同じ考えを持った人間がいたとしても争いは起き、世界は平和ではないくなる。
それに、人々が平和と呼んでいるモノは本当に誰もが同じ平和と言えるのか？
答えは否だ。今の世界を平和と思う人もいれば、今の世界が平和ではないと思う人もいるだろう。価値観の違いがある限り、そのような差は生まれ、考えることは無意味だ。
しかし、管理局が無意味と言っている訳ではない。理由があって管理局に入ったとはいえ、ある程度は意味のあることだろう。
管理局は抑止力という形で平和を目指している人もいるからだ。

「平和とは難しいものだな」

まぁ、そもそも、こんな大きなテーマを19年程度しか生きていない僕が語るのもどうかと思うのだけれど。
それも気にしない方向でいこうか。

「何を難しい考えをしておる。妾でもそんな題は語れぬぞ？」

ちなみに、何故それもと言ったかというと、セレンが勝手に自室に入り込んできたからである。
僕のプライバシーは保護されることはないのだろうか？

「勝手に人の部屋に入るな」

「特命隊の時は一緒の部屋だったのに、何故ダメなのじゃ？」

「特命隊の時は僕と君の二人部屋だったからだ。だけど、この部屋は僕の僕による僕のための一人部屋だ」

「成程の。それならば八神に頼めば問題ないということじゃな」

呆れて物が言えないというのはこのことを言うのだろう。

まぁ、元々この部屋は二人部屋と言っていたので問題はないだろうが、だからと言ってこれはどうなのだろうか。

「セレンは羞恥心をもってないのか？」

「さぁの？　そもそも、特命隊にいた時などで妾の下着姿などは何度か見ているのじゃろう？　ならば、今更恥ずかしがっても意味がない」

「そういうのを羞恥心を持っていないというのだ」

ちなみに、僕はセレンの下着姿は二度見たことがある。

……何故だろうか、今誰かに物凄く理不尽な怒りを向けられているような気がする。具体的には『リア充はもげろ！』と言っているレルデの姿が思い浮かぶ。

……リア充って何だ？

「現実（リアル）に充実している生活を送っている人間のことを言う。略して、

リア充じゃ」

「それならば、僕はリア充ではないな。僕のような者が充実した生活を遅れる筈がない。そもそも、何故それだけでリア充と言われるのだ？」

「それは妾の下着姿を見たからじゃろうに」

「見たくて見た訳でもなく、見せつけられた訳でもない。たまたま見えてしまっただけだぞ？」

そう言うと、何故かセレンは膝と両手を地面につけ、がっくりと凹んだ。

「わ、妾の下着姿に対して……こやつは何の興味も持っておらんじゃと」

「……」

セレンが落ち込んでいるところ悪いが、今のと一体どのような関係があるのだ？

もしかして、セレンは身体のことを褒めて欲しかったのか？　女性にとって身体を褒められるというのは凄く光栄なことだと聞いている。まぁ、レルデ曰くだが。

……ふむ、よく分からないな。

まぁ、とりあえず、褒めておけば良いのだろう？

「あぁ、でも、良い身体だったよ？」

「～～～っ！！」

照れているのか？　顔を真っ赤にして。

……しかし、よくよく考えてみれば、僕は物凄いことを口走っていないか？

『良い身体だったよ？』など、ただの変態が言いそうな言葉ではないか。

言葉選びというのは難しいものだ。

「……う、うむ。やはりここではお主と同じ部屋になるというのは止めておこうかの。ある意味、妾が大変な目に遭ってしまう」

「……？」

セレンがいきなり意見を変えるなど珍しいことだな。

……もしかして、こんな変態とは一緒にいたくないと遠回しに言っているのか？　だとしたら、傷つくことである。

だが、その可能性が高い為に否定することができない。

そしてその後、セレンは逃げ足で僕の部屋から去っていった。

「……結局、セレンには羞恥心があったということだな」

顔を真っ赤にしたくらいだ。間違いない。とはいえ、何か失ったような気がする。

「……」

……ところで、ティアナのことはどうしようか。

先程までヴィータとセレンのことを考えていたからすっかり忘れてしまっていた……訳ではないぞ？

うん、忘れていた訳ではないんだ。信じてくれ。

それに僕が大事な後輩のことを忘れる訳がないじゃないか。まったく、何を言い出すんだよ。

何？　動揺して口調が変わっているだと？　そんな馬鹿なことがあるわけないよ……あるわけない。

ティアナに大事なことを言うと決めたことは忘れるなんて……忘れるなど、言語道断だよ。

……仕方が無い。自白しよう。

僕はすっかり、ティアナ・ランスターの件を忘れてしまっていた。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　７（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。
今回は前回に比べたらまだいい出来だと思います。とはいえ、満足かと聞かれれば微妙と答えますけどね（汗

さて、今回、色々と忙しかった。
いつものようにシリアスになったりギャグになったりと忙しかった。
本当は前回の会話のシュレンＳｉｄｅで書いていたんですけど、急遽変更しました。

で、次話ですが、恐らくティアナのことに関するエピソードになります。
４話ぐらいで終わらせるつもりですが、シリアスだと思われます。
シュレンが鬼になるかな～？
ファンに怒られそうで怖い。

ちなみに、試合は台風の影響で延期になりました（←

この小説に対する意見などありましたら容赦なくどうぞ
では

第十五話　『対立』（前書き）

更新は相変わらず遅い……
マジでスミマセン。

では、『対立』始まります。

第十五話　『対立』

Ｓｉｄｅ――――

ホテル・アグスタでの一件があった時以来、ティアナは高町なのはの訓練以外に自主練をしている。
高町なのはによる訓練も十分に辛いのに、ティアナは自主練をしている。
こうでもしなければ、ティアナは落ち着かないのだ。自分のホテル・アグスタでの失敗を許せないから、強くならないといけない。
そして、今度は失敗をしない。
そんな気持ちがティアナを支配していた。
結果的に数時間にも渡る訓練をしても、さらにティアナは訓練を続けようとした。
しかし、それは一旦遮られる。

「少し邪魔するぞ」

「……え？」

ティアナにとっての憧れの人、シュレン・ガルディンに。

「いつから見てたんですか？　シュレンさん」

「いつから……そうだな、三時間ぐらい前からか？」

「……セルスさんとは会話しなくていいんですか？　私なんかの為に時間を割いてると、会話ができなくなっちゃいますよ？」

「ご心配なく。彼女とはある程度の会話をするだけで十分だ」

ティアナはシュレンとセレンの関係を深くは知らない。しかし、二人は互いに大切に想いあっているということは知っている。だから、ティアナはそう言ったのだがそれは無意味だ。まぁ、二人の関係を知らないので当然といえば当然なのだが。

「少しは休憩したらどうだ？」

「……それじゃあ、少しだけ」

その言葉を聞いて、シュレンは何処からか、ティアナにスポーツ飲料とタオルを投げ渡す。

まさか、投げ渡されるなどと思っていなかったので、ティアナは慌てながらそれをキャッチした。キャッチした後、少しだけシュレンのことをジト目で見るが、シュレンはそんなのものはお構いなしだ。

「スポーツ飲料とタオルは僕の奢りで構わない」

「い、いえ、そんなことをしてもらう訳には……」

「構わん。僕と君の仲だ。それに、これは僕が勝手にした行動だからな」

ティアナは渡されたスポーツ飲料とタオルが、シュレンが買ったものだと聞き、そう言うがシュレンに遮られる。

シュレンの性格から考えて、確かにこんなことをしてくれると思う。

しかし、ティアナにはある不満があった。

「……それで、そんなことをしているのはミスショットが原因か？」

そこでシュレンはティアナに聞く。

正直、シュレンとしては既に確信しているようなものなので聞いても意味が無いと思っているのだが、確認の為そう聞いた。

一方、聞かれたティアナはホテル・アグスタの時の事を思い出す。

少しでもセレンが来るのが遅かったら、ティアナの放っていた魔法弾がスバルに被弾していたかもしれない。

自分のミスショットのせいでだ。

そこで、ティアナは自分を凡人だと改めて思った。

「私はシュレンさんのように才能も無い凡人なので、こうやって努力するしかないんですよ」

「……努力か」

溜め息と同時に視線が鋭いものへと変わる。
この視線には見覚えがあった。正確にはセレンの視線と重なったというのが正しいのだが、それよりも昔の瞳に似ていた。
あの、昔の出会ったばかりにシュレンの瞳に。

「僕からしてみれば、こんなのは努力ではない。ただ、我武者羅にやってるだけで、意味なんてない。
……いや、ミスショットをしたことを忘れようとしているとしか思えないな」

そんな眼差しのままシュレンは言う。
この言葉はシュレンが素直に思っていることを口に出しているだけ。しかし、この言葉にティアナは苛立つ。
こうでもしなければ強くなれないと思っているのに、それを簡単に否定されたのだ。

（……何が）

必死に強くなろうとしているのに、それを否定される。
それは今のティアナ・ランスターという存在を認めないと言われているようで、ティアナはシュレンに対して我慢ができなくなった。

少し簡単に言ってしまえば、ティアナはブチ切れた。

「貴方に、貴方に何が分かるって言うんですかっ！　貴方は才能がある人だから分からないんですよ、才能を持たない人のことなんて！

……それなのに、それなのにどうして否定するんですか！」

感情に任せて怒鳴るティアナ。しかし、今言っている言葉は昔から思っていることだ。

才能のあるシュレンが、どうして凡人であるティアナを分かっているような気でいるのだろうか。

シュレン以外にもセレンというバグキャラがいるのだが、ティアナは彼女のことを深く知らない。というより、教えてはくれなかった。

その為、結果的にセレンよりもシュレンの方に好意を持つようになった。

だから、どんなのに分かったような気でいられようと我慢していた。しかし、それも遂に我慢が出来ずに、感情に任せて叫ぶ。

「いつもいつも！　私のことを分かったようなことを言って、いい加減にしてください！　私は貴方のような才能も無い魔導師なのに、どうして分かったようなことを言うんですか！」

言葉が終わると同時に、全ての音が止まった。鳥のさえずりも、風も、木が揺れる音も……この場にある全ての音が不気味と言っても良いほどに止まった。

あるのはただの沈黙と――シュレンの威圧だけ。

「いつ僕が、ティアナを才能のない魔導師と言った？　いつ僕が分かったようなことを言った？
僕はただ、思ったことを素直に言ってるだけだ。昔から変わらずに」

「……っ！？」

「僕からも一つ言わせてもらうと、ティアナはいつから、僕がそんな風に思っていると思い込んでいる？」

淡々とした口調にティアナは息を呑む。
シュレンが淡々とした口調で言うのは別にこれが初めてではないが、それでも息を呑むのには十分な理由だ。

「ティアナの方こそ、僕を分かったようなことを言うな」

「……いつ、いつ私が分かったようなことをシュレンさんに言いましたか？　私はただ――」

――ただ、思ったことを言ってるだけなのに。
ティアナはそう続けようとしたが、それはシュレンに遮られる。

「ただ、何だ？　……もし、それで僕と同じ理由だとしたら笑える

な」

「……」

「……他人のことを考えていないのに自分のことだけを言うな、考えるな。我侭な子供だなと思うだろう」

シュレンの言葉にティアナは反論しようとするが、それはできなかった。

分かったような気でいられたのが堪らなく不愉快だった。でも、それはシュレンも同じだったのではないのだろうか。

だとしたら、ティアナは何も言えない。

先に感情に任せて怒鳴ってしまったのは私なのだから。

「自分が凡人ですから？

……ティアナはこれからも、そう言って言い訳をするのか？　まぁ、そうすれば、傷つかないで済むからな。今のティアナにはそれが一番お似合いだぞ？」

「……っ！」

その言葉を聞いて、気づいた時にはクロスミラージュをシュレンに向けていた。人差し指は引き金を完全に引く手前で止まっている。

先程まで感じていた怒気もなくなっている。しかし、怒気とは別の感情をシュレンに対して抱いていた。

それは敵意。

殺意という訳ではないが、ティアナはシュレンを敵と判断した。

「……それで、そのままティアナは引き金を引くか？　いいぞ、引いてみろ。ただ、今度は気づいた時に地面に叩きつけられてるがな」

鋭い視線がティアナを捉える。

挑発とも取れるその言葉にティアナは我慢することができなくなった。もちろん、今のティアナは怪我をさせてしまったらどうしようなどとは考える訳がない。

そして、指先に力を入れ引き金を――――引くことはできなかった。

「……がはっ！！」

何故ならば、気づいた時にはティアナは地面に叩きつけられ、握っていた筈のクロスミラージュはその反動で手から離れたからだ。

挑発として言われた通りのことをされたと気づくのに、対して時間は掛からなかった。

「疲れているから動きが鈍いんだ。そんなことにも気づかないのか？」

「……」

「まぁ、長時間に渡る訓練をしても、自分にあったことをしなければ身を滅ぼすことにも気づいていないティアナには分かる筈もない

か」

「……い」

「それに、今のは挑発に乗って撃ってこようとしてきたのだろう？
……センターともある者がその程度で乱れるとは愚問――」

「うるさい！！」

言葉を遮って怒鳴る。
もう、邪魔で苛立って不愉快でしょうがない。

「……怒鳴り声をあげてどうする？　冷静ではないという証拠だな」

「貴方が乱してくるんでしょうが！」

「まぁ、その通りだ。しかし、この程度で乱れるとはな」

アンタが言わない辺り、一応、完全に目の前が見えていないという訳ではないと判断するシュレンではあるが、それでも今のこの状況には満足いかない。
とはいえ、ティアナを乱したシュレンがそう思うのも可笑しなことである。

「やはり、ティアナはティーダさんとは違うようだな。あの人は緊急時にも出来るだけ冷静さを保っていたからな」

「……っ！」

「それにも関わらず、君は冷静ではない。その程度で本当にランスターの弾丸を証明できるのか？　少なくても僕はティーダさんは認めているが、今のティアナでは残念ながら認めることはできない」

次々と出てくる言葉にティアナは黙って聞くことしかできなかった。いや、正確には聞いてはおらず、ただティアナにとっては馬鹿にされていると考えている。

しかも、隙があれば先程のようにシュレンを攻撃しようとまで考えている。だが、地面に叩きつけられたことにより、身体が痺れて動かない。

相当強く叩きつけられたことが実感できた。

「悔しいか？　僕なんかにこう言われて。……悔しいなら僕と模擬戦でもしてみるか？

君が勝ったら僕はティアナを認めてやろう。しかし、僕が勝ったら、僕は一生ティアナ・ランスターの弾丸は認めない……という条件で」

今すぐに行うという訳ではないのだろう。

何せ、既にシュレンはティアナから視線を逸らし、その場を立ち去ろうとしているのだから。

「自信があればやった方が良い。怖いならやらない方が良い。

時間は深夜2時で、場所はここだ。それと、疲れて模擬戦ができませんというのは話にならないから、今日の訓練は出なくて良いぞ。
ティアナにとっては自主練の方が効率が良いのだろう？」

「……」

「……まぁ、せいぜい頑張ることだな。できれば、僕の期待を裏切らないでくれよ？」

そしてシュレンは歩いていき、数秒でティアナの視界から消えた。
最後の表情はどんなものだか分からないが、恐らく自分を貶しているようなものだと考えた。
まるで、そんな努力は無意味であること教えてあげると、そう言っているように。まぁ、確かに実際に言葉通りなのだろう。
シュレンにとっては。
しかし、ティアナは自主練を否定されてシュレンに対してさらにキレた。
そして、ティアナはクロスミラージュを力一杯握り締める。

「やってやろうじゃない……っ！！」

それならば、否定されたのであれば、それを認めさせればいい。
どんな方法でも。どんなに力尽くでも。
勝てるとは思えないなんて、絶対に思わない。思う訳がない。もし、これでシュレンに負けたとしたら、本当に今まで生きてきた意味がないのだ。
負けてしまっては、いつまで経ってもランスターの弾丸を認めて

くれる人は居なくなってしまう。

「……絶対に勝つ」

今のティアナにあるのはただ、敵を倒すという執念のみ。
ランクの差なんてどうでもいい。自分より階級が上なんてどうでもいい。ただ、勝つだけ。
勝って、認めてもらうのだ。
ランスターの弾丸は……ティアナ・ランスターの弾丸はちゃんと敵を貫けると。
そう考えたティアナは痺れた身体が回復した後、一人で自己練習をした。シュレンが訓練には出てこなくで良いと言ったのだ。それなら自分のやりたいことをする。
言葉は悪いが、高町なのはの訓練では強くなっている自覚が出てこないのだ。
だからこそ、一人であるこの時、この場所で黙々と自己練習を続けた。

それを見つめる視線があることに気づかないまま。

第十五話　『対立』（後書き）

と、言うわけで第十五話でした。
うん、シュレンが鬼畜かな？　と書いていても思わせる話でした。

でも、正直、ティアナの沸点が低いかな～なんて思っていたりします。
もう少し長く虐めて切れるなら分かりやすいんですけどね……そこは自分の文才ってやつです！
威張ることじゃないけど。

さて、次回から数部でこの件を片付けていくんですけど、正直、納得できない所もあると思います。
そうなってしまったらすみません。

この小説に対する意見などありましたら感想の方にどうぞ
では

第十六話　『渇望』（前書き）

いつもの時間では無く、ちょっと時間を変えて投稿します。
ふむ、出来はまずまずと言ったところでしょうか

では、第十六話『渇望』始まります

第十六話　『渇望』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

ティアナとの会話――というよりは一方的な挑発――から少し時間が経ち、今は訓練が始まる1時間前と言ったところだろうか。
そんな時間に僕はなのはに伝えたいことがある為、なのはに会っている。
伝えたいこととは、ティアナのことだ。……ああ、いや、訂正する。正確にはティアナが訓練を休むということだ。
まぁ、僕が許可した事とはいえ、形では僕の上司に当たるなのはに伝えた方が良いと判断したのだ。
ちゃんとした理由があるのならば全てを話すのだが、さすがにティアナとの出来事を知られたら面倒……ではなく、駄目なので適当に誤魔化すことにした。

「え？　ティアナが訓練を休むって？」

「ああ。体調が悪いのかどうか知らないが、そういうことらしい。まったく、訓練というのは少しずつ積み上げていくようなものなのに、一日でも休んでしまっては意味がない」

僕は嘘は言っていない。体調が悪いのかどうかなど僕の知ったことではないからだ。

昔から僕はズルい人だと言われているが、別にそのことで僕は何とも思わない。寧ろ、誇りに思えるほどだ。

この世界では、ズルい人間こそが生き残れるのだから。

まぁ、これは殆ど弱者にしか当てはまらないことではなるが、ズルい、反則な人間なほど世間体から見てみれば立派な人間になれる。

レルデは弱者ではないが、アイツはこれに当てはまる。

……話が逸れたな。

「見舞いをするなら明日の方が良いと思うぞ。実際に体調を崩していたら、変に気を使わせて悪化する可能性もあるからな」

「あぁ、うん。そうだね」

「……まぁ、どこかの悪魔様のスパルタが身体に響いたのかもしれないが」

なのはにギリギリ聞こえる程度の声でそう呟く。

もちろん、僕がどのように言ったとしてもその可能性がある筈がない。何といっても、ティアナが訓練を休むのは僕が原因なのだから。

しかし、そうは思っているが、そう言うことにした。

弄る為である。

「だーかーら、私は悪魔じゃないってば！　毎回毎回、私のことを悪魔呼ばわりして酷いよ！」

「そう思うなら、優しい天使だと思えるような行動をすることだな」

「これでも充分にしてるつもりだよ？」

「それで悪魔なのか。……可哀想に」

主に、これからなのはを怒らせるような行動をした者に。

「むむむ！」

……いや、怒っていることをアピールするのに、『むむむ！』という奴がいるか。可愛らしいだけだぞ？

寧ろ、和やかな空気になりそうだ。

まぁ、なのはがいるだけで良い雰囲気になることは前から知っていることではあるが。

「では、最低限のことは伝えたぞ」

「はい。後半以外はちゃんと聞きました」

「訓練には参加するが、遅れて参加するような形になる……それとキャラを変えるな、違和感が出る」

僕にもティアナとの模擬戦に向けての準備がある。

今は冷静ではないから対して脅威ではないと思っているが、油断はしてはいけない。逆に言えば、冷静なティアナは脅威であるという

ことだからだ。
僕とティアナの違いなど、経験と魔力量ぐらいしか差はない。
正直、僕とティアナが二つの片手銃を使って模擬戦をした場合には負ける可能性だってありえるのだ。
……とはいえ、これはあくまでもティアナが冷静だったらという話だ。

「分かったよ。でも、あとちょっとで個別の訓練とかする予定だから、その時にはちゃんと参加してね」

「確かに、そろそろ基礎は出来上がりそうな感じだから丁度良いのか。……まぁ、了解した」

「うん。それじゃあ、また後で」

そう言って、なのはは訓練場の方へと歩いていく。
なのはが僕の視界から完全に消えたところで、僕も自室を目的地として歩き始める。
先程言った準備の為だ。僕のデバイスであるホルスのメンテナンスなどをしたいので、専用の道具など取りに行っているのだ。
しかし、その途中で声を掛けられたので歩みを止めた。

「お？　またシュレンは訓練に参加しないのか？　なのはさんに怒られるぞ？」

「……既に許可は取ってあるから安心しろ、ヴァイス」

僕より年上のヴァイス・グランセニックに声を掛けられ、歩みを止める。前にも言ったが、僕達は互いに敬語は使っていない。
別に無視してもよかったのだが、どうやら僕に用事があるようだから無視はしない。とは言っても、普段から僕は無視するようなことはしていないが。

「そうかい。随分と用意が良いことで」

「準備、用意を怠らないのは魔導師として当たり前のことだ。ヴァイスでもヘリに必要なパーツは必要が無い時でも揃えておくだろう？　要はそれと同じだ」

「まぁ、お前ならそう言うだろうと思った」

「……」

ふむ、今日のヴァイスは少し様子が可笑しいな。
まぁ、既に何故ヴァイスの様子が可笑しいのかは知っている。いや、予想できているというのが正しいな。
恐らく、僕が原因だと思われる。

「で、要件は何だ？　わざわざ内側に抱えている怒りを収めて僕に話かけてきたんだ。ある程度は大事な話なのだろう？」

「……やっぱ気づいてたか」

「ティアナのことか？」

その言葉でヴァイスは黙る。どうやら当たりのようだ。

先程、ティアナを挑発していた時に感じていた視線があった。ということは、恐らくあの場で盗み聞きしていたのもヴァイスなのだろう。

僕が去った後も、ティアナの自主連のようなものを見続けていたのだろうか。

わざわざご苦労なことだ。

「いくらなんでも、アレはやり過ぎだろ……！」

「どうした？　ヴァイス。お前もティアナと同じく馬鹿な考えの持ち主なのか？」

あの程度でやりすぎとは、不思議なものだな。

僕はただ事実を悪意を込めて言っていただけに過ぎないと言うのに。

「それがやりすぎだって言ってんだ。アイツが潰れたらどうする？　お前は責任取れんのかよ……！」

「そう熱くなるな。熱くなったら上手くいかないことは知っているだろう。過去に失敗したことがあるヴァイスならな」

「今はそんなことを話してる訳じゃねぇよ。アイツのことを言って

るんだ」

「そんなことか……。妹の目を傷つけたことが『そんなこと』とは随分と酷い兄だな」

自分でもこれが嫌な言い方であることは理解している。というより、わざと嫌な言い方をしているのだから当たり前か。

そして、この言葉でヴァイスはキレたのか、僕の襟元を掴みかかろうとしてきた。しかし、途中で腕を下ろし拳を強く握りしめる。

「……どうやら、ティアナと同じ馬鹿ではないようだな」

先程のティアナなら間違いなく掴みかかってきたことだろう。

それに対し、ヴァイスは途中とは言え冷静になった。まぁ、冷静かどうかは知らないが、少なくても手を出すのを抑えた。

それだけでも充分に評価できる。

「で、俺の話は今は良い。それで、本当にティアナが潰れたらどうすんだよ？」

いつもの優しいイメージとはかけ離れ、ドスの利いた声で言ってくる。

まったく、怖いではないか。

それに、『ティアナが潰れたら』だと？　……それだとまるで僕が本心ではティアナを潰さないと考えているようではないか。

僕は本気でティアナ・ランスターを潰しに行くつもりだったのだが……。
だから――

「潰れたとしたら、それはティアナがその程度だったということだ」

その瞬間、ドンッ！　という大きな音が響くぐらいに僕は壁に叩きつけられ、襟元を両手でつかまれる。
……痛いな。まったく。

「潰れたらその程度だと？　……ふざけんなテメェ！！」

「……言いたいことはそれだけか？　終わったのなら離せ、苦しい」

先程は怒りを収めることができていたというのに……。
今度は部隊の後輩の為にキレたか。しかも、我慢していた手を出さないというのも破ったようだ。
他人の為に怒る……というのは僕にだってあるが、このパターンは珍しいな。
……まぁ、僕が怒ることなど滅多にあることではないが。

「何故そうまでして怒る？　ただの部下で後輩だろう。ヴァイスにとっては」

「だから何だ？　だから、俺がこうしちゃいけないってか？
……なら、お前は後輩の間違った道を正そうともしないのかよ」

「僕は少なくても、他人に言われて自分の道を正すなんてことはしない。そして、他人の道を変えたりなんてしない。
まぁ、例外も二件あるが、基本的に僕は放任主義だぞ？」

自分でも、今の僕は他人から見てみればとてつもなく苛立つだろうな。
何と言っても、レルデとの会話で学んだのだ。どうしたら、話相手の心情を崩すことができるのか、を。
そして、今まで崩した人間の数は計りしれない。

「で、いい加減に手を離してくれないか？」

「……ちっ！」

舌打ちをした後、ヴァイスはようやく僕の襟元から手を離してくれた。
完全ではなかったとはいえ、足元が少し浮くぐらいまでに力を込められていたのだ。苦しくない訳がない。それに、シャツがシワだらけになってしまった。
……やれやれ。

「僕は色々とやるべきことがあるから失礼するが、ヴァイスはティ

アナを見続けるのか？
それと、僕達の模擬戦も見るつもりなのか？」

「……知らねぇな」

「まぁ、どちらでも僕は構わないが、出来るだけ見に来ない方が良いぞ。ティアナを見ていられなくなる可能性があるからな。
だから、信じて待っていろとでも言っておこう」

まぁ、見に来たとしても幻術で誤魔化して、模擬戦の内容など見せるつもりは無い。途中で割り込んできたら面倒だからだ。
それはヴァイスも分かっているのだろう。だからこそ、知らないとしか言うことができない。
口での喧嘩では相手の話す言葉を封じるのは当たり前のことである。

「まぁ、安心しろ。仮にティアナが潰れたとしても、それはヴァイスの責任ではなく僕の責任なのだからな」

ここで漫画など出てくる嫌らしい笑みを浮かべられるのならば最高なのだが、笑みが残念な僕にはすることはできない。非常に残念である。
……ふむ、どうも、今の僕は人を弄ることしか考えていないようだ。まぁ、最近は特命隊の者を苛めていないから不満なのだろう。

「では、失礼する」

顔は見ずに僕は去っていく。
そうした方が僕に対して悪いイメージを持ったままになるからだ。
変に良いように思われても正直に言って迷惑である。
だからこそ、こうする。
それに、僕はそもそも良い人間ではない。間違いなく、悪い人間だ。
勘違いされては困る。
まぁ、僕をどのような人に思うのかはその人の自由だが、そのことで僕にガヤガヤと言うのは止めて欲しいな。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ホルスの調整を終え、訓練も終えた。フォワード陣三名の成長ぶりは順調と言ってもいいだろう。
それぐらいには評価できる。
しかし、ここにティアナはいない。

「……やれやれ」

ティアナがフォワード陣の三人に劣等感を抱いているのかは知っ

たことではないが、だからと言って、それが無茶をするというのに繋がる訳ではない。
そんなことを言ってしまったら、僕は一体どうなるのだろう？
特命隊ではレルデ・ローラルドはＳＳＳランク魔導師でセレンはレルデを倒せる程の実力者。機動六課では高町なのは、フェイト隊長、八神部隊長を初めとする隊長陣。
隊長陣はティアナも思っているだろうが、ティアナは特命隊の者を知らない。
だから、分かる訳がないのだ。

例え、どんなに努力をしたところで、僕が魔法使った勝負であの二人に勝てる訳がない絶望感を。

……僕の希少能力（レアスキル）が使えるというのであれば勝てるだろう。それぐらいの自信はある。
だが、なければ僕は弱い。
それに少し言い方を変えれば、僕は二人に勝てる程の力を持っていたにも関わらず、僕が二人に勝つことはできない。
そう言い切れる程、今の僕は弱い。

「……まぁ、もう慣れた」

もうかなり長い時間、この絶望を味わっているので慣れたものだ。
しかし、羨ましいと思っている。
力を持っている二人を。
まぁ、でも、セレンの仕方がないと言える。セレンは特別な環境だろうから。
レルデも特別な環境で育ったが、セレン程ではない筈だ。

……ま、僕がどれだけ言葉を並べても二人と並ぶのは希少能力が再び使えない限り不可能だ。

まぁ、つまり、僕が何を言いたいかと言うと。

「まだ伸びしろがあるティアナが絶望しているというのは――――見ていて苛立つ」

本当にこの程度で絶望していては、これからの人生は絶望の連続だ。

第十六話　『渇望』（後書き）

と、言うわけで第十六話でした。

今回はヴァイスとの言い合いとシュレンの望みのようなものです。
場面がコロコロと変わって申し訳ないです。

最初はなのは、次にヴァイス、最後に考え事。
……何だこれ？　読者の神様、めっちゃ疲れないか？　と思ってしまうほどですね、はい。

さて、次回からティアナとの模擬戦に入ります。
正直、まだどうなるか決めてません（おい
ですが、まぁ、出来るだけ皆様に見捨てられないよう頑張ります。

あ、それと、試合は終わりました。
県でベスト４０でした。ちなみに、テニスです。
だけど、今度は学校行事に定期テスト……大変だ。

……この小説に対する意見などありましたら、感想の方にどうぞ
では

第十七話　『怒り』（前書き）

更新です。
でも、かなり出来が雑になっています。

あ、でも、後半部分はあえてそのような書き方をしてますので、できれば雑だなと思わないでください。

では、『怒り』始まります

第十七話　『怒り』

Ｓｉｄｅ――――

昼の時間とは違い、夜のこの時間帯では場の雰囲気が一変する。
場所は先程シュレンとティアナが口論をした場所。そこにシュレンは立っていて、ティアナはクロスミラージュを握り締め、構えていた。

「……一つ言っておきます」

「どうぞ、勝手に」

ピリピリとした空気の中、ティアナは決心する。
他人から見てみればあまり褒めれたことではないということは分かっている。しかし、言わなければ気が済まない。
あそこまで挑発され、散々言われたのだ。
そうティアナが思うのも至って普通である。

「私が逆に大嫌いな貴方を潰しますので、覚悟しておいてください」

「……あまり強い言葉を使わない方が良いぞ。さて、グダグダと話していても意味は無い。
そろそろ始めるとしようか。くだらない模擬戦を」

その一言でティアナは表情を引き締める。
緊張してるということではない。しかし、何があってもこの模擬戦には――シュレンには勝たなければならない。
そうでなければ、ティアナは一生シュレンに認めてもらえないのだ。
魔導師ランクとか、そういうのは関係ない。

「ルールは言わなくても大体は理解できてるな？」

「……ええ」

最早、敬語を使っていないティアナだが、シュレンはそんな小さなことを気にしていない。
寧ろ、今まで敬語を使われていたのが不思議に思っているぐらいなのだ。
敬語を使う理由など生まれた時間しか変わらない。別に尊敬される部分など自分にはないと考えながら。

「なら、好きなタイミングで来い」

シュレンは以前、ヴィータと模擬戦をした時とまったく同じ台詞を言う。殆どがあの時と同じだが、一つだけ決定的に違うことがあった。
それはティアナが何も言わずに、先制攻撃したということ。

「せめて、一言言ってから初めて欲しいものだ」

しかし、それを予想していたシュレンはそれを二つの片手銃の一つで向かってきた魔法弾を相殺してもう一つで反撃をする。それと同時に周囲に魔方陣を組み数発の魔法弾を浮かび上げる。

もちろん、ティアナも見ているだけではない。

シュレンはまだ大技のようなものを出してくる気配はない。今、浮かばせている魔方陣も、そこまでの大技ではない。

それならば、先にこちらから仕掛ける。

「カートリッジロード！！」

ガシュン！　という機械音と同時にカートリッジが排出される。排出されたカートリッジの数は、ホテル・アグスタでミスショットをした時と同じ四発。

とは言え、ティアナはまだこの数のカートリッジを使いこなすことができない。

ホテル・アグスタの時のように数発は狙いから逸れてしまう。

（……勝たないといけないのよっ！！）

しかし、ティアナはこれでいいと思った。

何故ならば、今この場には“敵”しかいないのだ。つまり、どれほど狙いから逸れようとも、ミスショットの心配をする必要は無い。仲間に向かう魔法弾は絶対的な確立で無い。

「クロスファイア――」

敵を倒す。今のティアナはそのことだけを考えていた。

一方、その姿を見ているシュレンもカートリッジをロードしていた。その数はティアナと同じく四発。

「思ったより四発ロードって辛いな……ティアナは辛くないのか？」

「シューット！！」

シュレンの問いかけを無視して、ティアナはクロスファイアを放った。シュレンもそれに合わせるような形で紅色の魔法弾を放つ。

「……シュート」

シュレンとティアナの魔法弾が衝突し合い、相殺されていく。しかし、時間が経つにつれ、ティアナは押され始めていった。

それもその筈だ。

シュレンは、ティアナとは違って、カートリッジを四発ロードさせても完璧に制御することができる。

ティアナは制御できずに数発をシュレンから外してしまうのに対して、シュレンはそれが無い。つまり、制御できずに外してしまった分の弾をフォローしなければならないのだ。

しかし、庇ったとしても少しずつではあるが、確実にシュレンの放つ魔法弾はティアナに近づいていく。

（……っ！　早い！）

とはいえ、ティアナがシュレンに放った弾丸を数発外してしまうだけならば、まだ何とかフォローできただろう。しかし、それに加え、ティアナよりシュレンの方が連射速度が早い。

それにより、たかが数発と思う弾丸も重要になってくる。

「手を休ませるなよ。でないと、すぐにやられるぞ？」

第三者が見たとしても、この二人の模擬戦はどちらが有利であるかは考えるまでもないだろう。

シュレンの猛攻に対して、ティアナは守ることしかできていない。いや、守ると言っても完璧には守れていない。

先程から数発の魔法弾がティアナにかすっているのだ。

（このままじゃやられる……一旦、体制を整えないと……）

そんな考えがティアナに浮かぶ。

しかし、ティアナ自身もそれが甘い考えだと自覚している。一瞬でも気を緩めたらやられてしまうのだ。
距離をとることも、幻術を使うことさえも、シュレンは許してくれない。

（一か八か……試しにやってみるしかないわね）

このままでは遅かれ早かれやられてしまうと悟ったティアナは、魔法弾を放ちながら集中力を高めていく。
静かに。どこまでも静かに。
不気味と言っても良いほどに静かに集中して、瞳を一瞬だけ閉じる。そして、瞳を大きく開いて、ティアナは地面を蹴り走った。
シュレンがいる場所へと。
当然、走るということは、シュレンが放っている魔法弾を相殺することは出来ないということ。
つまり、無数の魔法弾がティアナを襲うということだ。

「……っ！」

しかし、それをティアナは紙一重のところで躱し、走りながら引き金を引き、シュレンの魔法弾を相殺させる。
先程まで集中力を高めていたのはこのためだ。出来るだけ見てギリギリのところで魔法弾を殺す。
失敗したら無数の魔法弾がティアナに命中していたが、結果的には成功した。

（……よしっ！）

正直、成功する可能性は低いと自覚していたので、上手くいったことに驚いた。とはいえ、失敗したらただ魔法弾を直撃するだけと考えているので、失敗したとしても負けることは無いと思っているが……。

一方、シュレンはティアナがそんなことをしてくるとは思っていなかったので、ティアナの接近を許してしまうが、すぐさま冷静になり銃先をティアナへと向ける。

「クロスミラージュ！」

《ＯＫ．　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

しかし、シュレンよりも先にクロスミラージュの銃口から魔法弾が形成され、ティアナはさらにシュレンに走りながら近づいていく。

シュレンの魔法弾が腕を掠めるが、そんなことを一々気にしていられない。

そして、二人の距離がほぼゼロ距離になる時にティアナは魔法弾を放った。

「……危ないな」

シュレンはそれを身体を回転するという形で躱す。だが、ティア

ナにとっては躱されたとしても構わなかった。
何故なら、極短い時間とはいえシュレンの視界からティアナが完全に消えたからだ。
元はと言えば、ティアナは体制を整えるという目的があって、魔法弾を躱し、反撃に転じた。
その結果としてシュレンは一瞬ティアナを視線から外した。
一旦引くための時間としては十分過ぎるものである。

「……適切な判断か？」

姿を消したことを確認したシュレンはそう言う。
あの場でティアナは追撃をするということも可能だっただろう。
しかし、ティアナはそれを選択しなかった。
ティアナには引くという目的があったからこそいいものの、あのまま追撃していたらティアナは負けていた。

「……」

シュレンの手には散弾銃になったホルスが握られていた。
回転している最中にホルスの形状変化を始め、回転が終わる頃にはそれを終わらせていたのだ。
つまり、ティアナが追撃しようとしていたら、散弾銃によってやられていたということ。
片手銃（ハンドガン）は躱されても、散弾銃を躱すことなんて――ましてや、近距離で躱すことなど――不可能だ。

「僕を潰すと言ったにしては姿を消すのか……」

ホルスの形態戻した後、思ったことを言う。

ティアナは模擬戦を始める前にシュレンを潰すと言った。にもかかわらず、この現状だ。少しばかり守りに入っていただけで攻撃は殆どして来ていない。

一体、これのどこに潰す要素があるのだろうか？

「……冷静か冷静でないか、が分からないな」

とは言うものの、シュレンはティアナの考えが大分読めている。

ティアナは正面からシュレンに勝つつもりでいたが、それが出来なかった。それならば、次に行うべき行動は不意打ちだ。

自らの力より上の者に勝つ手段など、それ以外には無い。

ティアナ自身、幻術が扱えるので幻術を駆使しながら攻撃してくるだろう。そう考えたシュレンはあえて何もせず、ただ待つだけにした。

こちらからも幻術を使うことは可能だ。

しかし、それでは面白くない。ティアナからの攻撃を完全に封じることで面白味が増してくるというものだ。

ティアナが何をしてくるかは分からない。が、それを正面から封じることで、徹底的に潰すことができるだろう、とそう考えて。

そして、次の攻撃がやってくる。

前後の二方向からオレンジ色の魔法弾が向かってきたのだ。

どちらかは幻術である可能性は高いが、どちらか片方だけに絞ることはできない。だからシュレンはこう選択する。

「なら、両方ともに撃てばいいだけの話だ」

ヴィータの模擬戦の時でも同じことがあった。恐らく、それを見てティアナは真似事をしているのだろうと考えたシュレンは右手を前に、左手を後ろへ向けて魔法弾を放つ。

が、放った魔法弾はオレンジ色の魔法弾と衝突しなかった。

衝突する前にオレンジ色の魔法弾が消えたのだ。つまり、幻術である。

そして、少し右側に離れた所にティアナがクロスミラージュをシュレンに向け、シュレンがティアナを見た時には既に準備を終えているように見えた。

「意外性という意味は評価できる」

シュレンはティアナが砲撃魔法を使ってくるとは思わなかった。故に、そこの部分は評価できる。

しかし――

「だが、甘い」

それに気づかないシュレンではない。

先程、幻術の魔法弾を通り過ぎた瞬間から、このような手に出てくるのは予想できていた。いや、それ以前にそうではないかと考え

ていた。
だからこそ、先程放った魔法弾は誘導弾なのだ。
通り過ぎた紅の魔法弾が湾曲を描きティアナがいる場所へと向かう。が、それはティアナさえも通り過ぎる。

「貴方がそうするのは分かってました」

突如、シュレンの背後からそんな声が聞こえる。
するとクロスミラージュを構えていたティアナが煙のように消え、シュレンの背後に魔法刃を展開したクロスミラージュを持っているティアナが現れる。
そう、先程の砲撃魔法の構えをしていたティアナも幻術だったのだ。

（……これで私の勝ち！）

そうティアナは確信した。
シュレンの意識は幻術でいたティアナの方に傾いていたのだ。今更、ティアナに気づいてもシュレンが対応できる訳がないと思って。
それに、ヴィータとの模擬戦とは違い、シュレンが幻術を使っているという痕跡はない。
つまり、目の前にいるシュレンは紛れもない本物であるということ。
だからこそ、ティアナは勝利を確信した。

そして、ティアナはそのままクロスミラージュで展開した魔法刃を――

――突き出すことは出来ず、横方向に吹き飛ぶ。

「っ！？」

突然の衝撃にティアナは混乱した。

それも当たり前のことだ。勝利を確信したにも関わらず、気づいた時には吹き飛ばされていたのだから。

「だから、甘いと言っただろう？　……逆に、君がこうするのは予想できていた」

シュレンの周りに、先程幻術のティアナを通り過ぎた筈の魔法弾があった。

つまり、シュレンは幻術のティアナに引っかかる振りをして、逆に次の行動を読めていたシュレンは魔法弾を操作してティアナにぶつけたということである。

そして、シュレンは吹き飛ばされたティアナを鋭い視線で見つめる。

「力の差を見せつけられても尚、僕に向かってきた意気込みは素直に評価しよう。

しかし、それだけで勝てる程甘くはない」

「――っ！？」

シュレンから向けられる殺気にティアナは恐怖した。昼間の時も敵意のようなものを向けられ膝が震えた。しかし、今向けられているのは違う。

膝が震えていない代わりに、あまりの恐怖に息が苦しくなり、シュレンに対してただ恐怖心を抱く。

そしてシュレンはそんな状態のティアナを見ても表情一つ動かさないまま口を開く。

「……まだ、僕に歯向かって来るようなら――――僕は君を潰す」

その言葉を聞いた瞬間、ティアナはシュレンが居ない方向へ走り出した。

プライドなど関係ない。勝つことなど考えられない。そもそも勝負をしているということも忘れている。

ただ、シュレンから向けられる殺気から逃げることだけを考え全力で走っているのだ。

（ほ、本当に私このままじゃ――っ！）

潰される！　、と最後までティアナは思うことが出来なかった。

「弱者に追撃するのは好きではないが……」

何故なら、ティアナのすぐ隣にはシュレンがいたからだ。
そして、シュレンは移動している勢いを殺さずに蹴りを入れる。
回避行動を取ることもできずに蹴りを腹部に受け、ティアナは転がる。

「だが、臆病者を潰すのは嫌いではない」

冷たい視線のまま、ティアナを見る。

「……僕を潰すと言ったわりには何だ？　この無様な姿は。
正直、もう少し出来ると思っていたのだが、とても君には失望したな」

そう言いながらシュレンはティアナに近づく。
先程よりも濃い殺気を前にティアナはただただ怯える。怯えていることはシュレンも理解できている。しかし、だからと言って、ティアナに向けている殺気を止めるようなことはしない。
そもそもの彼の目的はティアナ・ランスターを潰すことなのだから。

「降参するか？　すれば、殺気を止める代わりにティアナ・ランスター……一生、君のことは認めない。
まだ、続けるのであれば、もう少し粘ってみせろ」

もう、今のティアナは戦う気というものが出てこなかった。
何をしても何をやろうとしても、それはシュレンに読まれ無力化される。ハッキリ言って、勝てる見込みがないのだ。
だから、ティアナは降参するという考えが頭に思い浮かべた。
別にここで負けたとしても死ぬ訳ではない。ただ、シュレンには今後何をしても良いようには思われないだろうが、今感じている恐怖に比べたら、そのぐらいのことは構わない。

後悔はするだろうけど、それよりもどれだけ努力しても才能のある人の凡人が勝つことは出来ないという絶望感の方が大きい。

（やっぱり私には無理なんだ……）

そのような絶望感を。
とはいえ、その絶望感を味わっているのはティアナだけではない。シュレンもまた同じである。
しかし、ティアナはそんなことを知らない。
ただ、今のティアナは目の前が真っ暗で冷たくてどうしようもない自分を嘆いているだけ。
そんな彼女だったが、次のシュレンの言葉でそんな考えが吹き飛ぶ。

「僕はティーダ・ランスターのことを過大評価していたか？

妹がこんな出来損ないだ。そんな奴の兄が立派な筈だないだろう。
……だとすると、君は可哀想な奴だな。
出来損ないの兄を持ったが故に、自らの才能に悩んでいる訳だからな」

次の瞬間、ティアナの怒鳴り声が響いた。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅティアナ・ランスター

私は実の兄であるティーダ・ランスターに憧れていた。
強くて優しくて頼りになる兄さんに憧れていたのだ。
だけど、私がまだ十歳だった時、兄が死んだ。
いや、この言い方だと少し語弊があるので訂正する。正確には、違法魔導士との交戦によって殺された。
大袈裟かもしれないが、私としてはそう思うのが普通だ。
そして、それからしばらくして兄さんの葬式を迎える。

『……』

辛かった。

両親を小さな時から失っていた私にとって、兄さんは私を育ててくれた親のような人で唯一、まともに話せる人だった。

だから、兄さんが死んだと聞いた時、その事実を認めたくなかった。

でも、どれだけ願ってもその事実は変わることはなく、兄さんが死んだという事実だけが残る。

そして、さらなる追い打ちをかけるように、私は辛いことを聞いた。

『無能だな……死んででも犯人は捕まえるべきだった』

『まったくだ、局の汚点になる』

そんな言葉を聞いた。

服装から考えて兄さんの仕事の上司だってことは分かった。

その時の私は勇気と言えるものは無かったから、兄さんを悪く言った人たちに何も言えなかった。

でも、私の心は兄さんを悪く言った人たちへの怒りで一杯だった。

憧れていた兄さんが認められなくて、私は内心で怒っていた。

兄さんは汚点なんかじゃない！　……って、そんな風に。

だから、私はランスターの……兄さんの実力を認めて貰いたくて強くなることを決心した。

だけど、時間が経つに連れ、その道がとてつもなく険しいことを理解していく。

でも、私は諦めなかった。

スバルにミスショットをして、なのはさんに怒られた時も今度はミスショットをしないと誓って一人で自己練習をしていた。
だけど、それをアイツに否定された。

物凄く怒った。でも、そんな言葉は届かなくて、私の想いを理解しているつもりのような言葉ばっかり言ってきた。
そして成り行きで模擬戦をした。
結果としては、私はこれ以上にない惨めな想いする。
でも、ある意味分かり切っていたことだ。

凡人が才能のある人に勝てる訳がないじゃない。

そんな風に絶望しかけた時だった。
コイツがこんなことを言ったのは。

『僕はティーダ・ランスターのことを過大評価していたか？
妹がこんな出来損ないだ。そんな奴の兄が立派な筈だないだろう。
……だとすると、君は可哀想な奴だな。
出来損ないの兄を持ったが故に、自らの才能に悩んでいる訳だからな』

この言葉だけは、この言葉だけは認めたくない。
この言葉は私が十歳の時、兄さんを侮辱した管理局の奴と同じ言葉だった。
兄さんは私なんかよりも優秀だ。だからこそ、今、コイツが言ったことだけは許せない。
そして、気づいた時には私は声を上げていた。

「兄さんを馬鹿にするなぁぁあああああ！！」

第十七話　『怒り』（後書き）

と、言うわけで第十七話でした。
はい、読んでいただけたら分かると思いますが、シュレンが前より鬼です。
レルデなら女性に対して蹴りなんて入れないんですけど、シュレンは問答無用ですからね……普通に回し蹴りをいれます。

アレ？　予定ではここまで冷酷の筈じゃなかったんだけどな～（汗
ティアナファンの方、申し訳ないです

さて、今回、ティアナがシュレンに対して恐怖を抱くところがあったんですけど、正直、全然イメージとかけ離れています。
イメージとしては、アニメ『ブリ○チ』の下駄商人との最初の修行……をイメージしていたんですけど、全然上手く書けません。
改めて、文字で表す大変さを思いました。

次話は予定では模擬戦の決着です。
よく見かけるタイプのこのような模擬戦ではティアナが勝ちますけど……
自分は少し違う感じで書くかもしれません

この小説に対する意見などありましたら感想のほうにどうぞ
では

第十八話　『決意』（前書き）

一応、模擬戦決着です。
正直、皆さんの期待を大きく裏切る結果になることでしょう。

では『決意』始まります。

第十八話　『決意』

Ｓｉｄｅ――――

「兄さんを馬鹿にすなぁぁあああ！！」

ティアナ自身、ここまで自分が怒りに捕らわれた声が出るとは思っていなかった。

十歳の時は勇気と言えるものがなくて、ティーダを侮辱した奴らには何も言えなかった。しかし、目の前にいるシュレンにはそのことを怒り、声を荒らげた。

だけど、そこに勇気はない。

あるのはただの憎しみや憎悪などと言った、負の感情だけだ。

「だから、センターともある奴がそんな大声を――――」

「ごちゃごちゃうるさい！！」

怒鳴り声と同時に数十発の魔法弾が襲ってくる。

先程は数発の操作で苦労していた筈なのにも関わらずこの攻撃だ。

さすがにシュレンも数十発の魔法弾を相殺して攻撃を無力化することはできず、数発の魔法弾がシュレンのすぐ隣を通る。

しかし、シュレンの表情に焦りは見えない。

相殺して無力化できないというのであれば、相殺はせずに躱すことに専念すれば良いと考えたのだ。
とは言え、躱すことが出来ない魔法弾に関しては相殺する。

「シューットッ！！」

「……」

もう。さっきまで絶望していたのが嘘のようだ。今はただ、最初と同じように目の前のシュレンをただ倒すことだけを頭に浮かべる。
一方のシュレンは今のティアナに内心で満足する。
もし、あれを言っても怒りを露わにしないというのであれば、シュレンはその場で模擬戦を終わりにするつもりだった。
しかし、結果はそうではなかった。

（まだ粘るのか。良いだろう）

だからこそ満足する。
先程の一手も攻撃がシュレンに届くことはなかったが、シュレンは内心で関心していた。幻術を二重に使い、中距離を得意とするティアナが接近戦で来るということには、素直に面白いと思えていたのだ。
恐らくここでもこの模擬戦を終わらせることは可能であると、シュレン自身は考える。それも、シュレンの勝利で。
しかし、シュレンはそうしない。

（……もう少しだけ時間をやるか）

まだ、模擬戦を終わらせるには早いと考えて。

だから、怒りで絶望を忘れているティアナの攻撃を相殺はせずに躱し、一旦その場から離れる。

その途中でもティアナの魔法弾が襲ってくるが、それすらも躱す。

最後にシュレンから反撃として魔法弾を放つが、それはティアナが相殺した。

思わず、感心してしまった。

最後の攻撃を――ティアナの意思で魔法弾と魔法弾同士を相殺させるという形で――殺されてしまったことに。

そんなことを思いながら、シュレンはティアナの視界から消えた。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

Ｓｉｄｅティアナ・ランスター

さっきまでは兄さんを馬鹿にされ怒りで頭が一杯だったけど、少しずつ落ち着いてきた。そして落ち着くに伴って、怒りとは別の考

えが少しずつ出てくる。
それは、一つの疑問。
何故、シュレンさんが兄さんを馬鹿にしたのかということだ。
さっきのあの時では、そんなことを言う必要はまったくない。シュレンさんの目的が私を潰すということであるなら、言う必要なんて無い。
寧ろ、私を潰すつもりなら言わない方が良い。
これは少し昔にシュレンさんから教わったことだけど、為になることとして覚えている。

それは、怒りは負の感情を忘れさせてくれるということだ。
さっきの私みたいに絶望していても怒りさえあれば、その瞬間から絶望していたことなんて綺麗さっぱりに忘れてしまうものだ。
もちろん、怒りが切れたらその効果は無いけど……。
今の私は疑問の方が大きいから絶望はしていない。というより、後回しと言った方がいいか。
とにかく、次々と出てくる疑問を消すことを優先させる。

「……」

一応という形ではあるけど、時間の経過とともに疑問は消えていく。
とは言っても、疑問の答えを自分で見つけたという訳じゃない。
過去のシュレンさんと会話を思い出して、ただそれを答えとして扱っているにすぎない。
そして、私はその中でも印象が深い会話を思い出す。

『ティアにはこれから生きていく時に、自分ではどうすることも出来ない時があると思う。でも、そんな時にこそ、どんなに辛くても逃げるな。真っ向に歯向かえ』

『……真っ向に歯向かってもダメだったら、どうすればいいんですか？』

『その時は砕かれろ。
砕かれたことで潰れてしまったら、それはティアナ、お前がその程度だったということだ』

物凄く無茶苦茶なことだとは思う。
普通は諦めるなとか、そういうことを言うべきなのに……その時は砕かれろって。
当時の私はそう言われ、そんなことを思った筈だ。そして、それは今も変わらない。そして、シュレンさんにはこうとも言われた。

『自分が最も不出来な奴だとは思うな。
世界には上には上がいるように、下には下がいる。それなのに、不出来な奴だと思ってしまっては下の奴等に迷惑だ』

と。

確かに、シュレンさんが『僕は不出来な奴だ』なんて言っていることを知ると迷惑……というより困惑するだろう。
シュレンさんが不出来な奴だったら、私はなんなのだろうか。
上には上がいるように、下には下がいる。

その考え方は、当時の私にとって、とても変わった考えでよく覚えていた。

（……アレ？）

そこまで回想した時に私はあることに気づく。いや、気づくというより、違和感と言った方が正しいのかもしれないが。

とにかく、私はあることを思った。

それは、今ここで行われているのは、まさにその言葉通りじゃないかって……。

だって、さっきからシュレンさんは挑発ばかりしてきた。考え過ぎかもしれないけど、その可能性は完全には捨てきれない。

それに、さっきから私は何をしてるのよ？

（シュレンさんを倒すって決めたのに、どうして私は逃げてるの？）

本当に私は何をしているの。

ちょっとの力の差を見せつけられたからって、何を弱気になってるのよ。ここで逃げたら、結局は弱いままの私じゃない。

シュレンさんが放つ殺気が怖かった？

そんなのは負けた時の言い訳。

それだったら、私の憧れだった兄さんはどうなのよ？　結果的には違法魔導師に負けて死んじゃったけど……

その時の兄さんは言い訳なんてしたと思う？

（……兄さんは言い訳なんて絶対にしない）

実際に聞いた訳じゃないから分からないけど、少なくても私の知っている兄さんは言い訳なんてしない。

そんな兄さんがあの人達に兄さんを悪く言われた。

それを私は怒って『ランスターの弾丸は敵を撃ち抜ける』ことを証明するために努力をした。

それなのに、私が逃げてどうすんのよ？

認めさせるんでしょ？　私の実力で。

だったら、逃げてんじゃないわよ。

（……そうだ。私は今までずっと――）

今までずっと、自分は凡人だと思っていることを都合の良い言い訳にしていた。

凡人だから仕方ないって、それでも私の心の何処かでそれを納得できなくて、私は無茶をした。

それでもって失敗して、努力して、否定されて、怒った。

……ああ、本当に私は何をやってんのよ。

これじゃあ、シュレンさんの言うとおり、私が子供じゃない。

（……かっこ悪いな、私は）

だけど、そんなかっこ悪い私とは今日でさよならだ。
今日からは少しずつだけど、今までよりもかっこ良い私を目指していこう。

その手始めとして、この模擬戦を最後までやり通す。
もう模擬戦の結果は見えてるようなものだけど、最後までやり通そう。
負けたらシュレンさんには一生認められないけど、それなら何があっても認められるような魔導師になればいい。
結果を残して、認めさせればいいんだ。
だけど、今までのような馬鹿なことはしないで少しずつ焦らないでコツコツと実力を伸ばしていく。そうじゃないと、また同じ失敗をするかもしれないから。

（……と、決意したはいいけど）

今は目の前の壁をどうするか。
さっきも言ったけど、もう私がシュレンさんに勝てる可能性なんてゼロみたいなもんだ。でも、それでも無様に負けるんじゃなくて誇れるような負け方をしたい。
まぁ、負けることを前提で話しているのもどうかと思うんだけどね。

……普通に考えて幻術を使うのは必須だ。

あのシュレンさんにバカ正直に攻撃しても意味がない。正直に言って悪手だ。それはさっきまでの内容で嫌というほど理解できた。
だから、バカ正直には攻撃しない。凡人なら凡人らしく不意を突くのが良い。
と、ここまでは普通に考えられるけど。

（……シュレンさんに不意を突くってどうやるの？）

方法が分かるならわざわざこんなことを疑問には思わないけど、残念ながら方法は分からない。
そもそも、幻術を使った攻撃ですらシュレンさんには通用しない。私なりに色々考えて幻術を使ってシュレンさんの背後を打ったつもりだったけど、それすらもシュレンさんは簡単に無力化してきた。
……打つ手無しだわ。まったく、一体どんだけ冷静なのよ？
というより、シュレンさんのことだから私の行動の全てを見通して――――

（……ん？）

私の攻撃を見通して？
……いや、違う。ただシュレンさんは私の攻撃を予測しているだけだ。仮に見通していたとしたら、どれだけ読心術ができるのよ。
そんな相手に傷一つ負わせることもできない。
だけど、それはあくまでも私の考えを見通していた場合の話だ。

私の記憶にはシュレンさんがそのような希少能力を持っていた記憶は無い。

だから、あくまでもシュレンさんは私の攻撃を予想しているだけ。とは言っても、予想は一つや二つじゃ無いはず。

シュレンさんのことだから、私の戦術を十個ぐらいは予想しているのだろう。

それならさっきまでの冷静な対応も頷けるし、幻術で揺さぶっても意味がないというのも分かる。

さっきの私ならここで諦めていたかもしれない。だけど、今は違う。

（もし、私の考え通りだったら、シュレンさんに攻撃を入れることが出来るかも……）

そう。もし、シュレンさんが私の攻撃を予想して行動しているのなら、攻撃が通じる可能性がある。

考え方は実に簡単だ。

それは、シュレンさんが予想していないこと……即ち、シュレンさんにとって一番馬鹿だと思うことをすれば良い。

出来るだけシュレンさんが予想してくる行動で一番最初に外してくるものが良い。

だったら、私には一つしか思い浮かばない。

（……正面からシュレンさんに突っ込む）

ということだ。
普段のシュレンさんなら、『センターが敵の正面から突っ込むな』って言いそうだけど、今の私にとってはこれが最もＢｅｓｔな作戦だ。
とは言っても、ただ正面から突っ込むという訳ではない。というより、そんなことをしたら、恐らく瞬殺される。
故に、私の作戦は――――
そこまで考えた時、私は咄嗟に回避行動を取った。

「……ふむ」

理由は言わなくても良いと思うけど、シュレンさんからの攻撃があったから。
もう少し気づくのが遅かったら、さっきの蹴りみたいに無様に転んでいたかもしれないわね。
まぁ、今はこんなことはどうでも良い。
正直、まだ仕込みは終わってないけど、さっき考えた戦術通りに行動を移すとしよう。
私の恐らく最後の攻撃だと考え、シュレンさんに向かって走り出す。
近づいていく私にシュレンさんは驚いた様子もない。
これが幻術だと思っているのか、それとも馬鹿か？　と思っているのかは分からないけど、立ち止まる訳にはいかない。
クロスミラージュで魔法刃を展開して……

「この模擬戦はもう止めだ」

……え、何言っちゃってんの？　この人。

第十八話　『決意』（後書き）

と、言うわけで第十八話でした。

……はい。本当に申し訳ありません。ｍ（－－）ｍ
ティアナが覚醒してシュレンを圧倒すると予想してきた人、
覚醒するけどシュレンに潰されると予想した人、
シュレンが優しさを見せると予想して人
など、恐らく予想した結果とは異なったと思います。つーか、予想できた人は尊敬します。
だって、こんな展開予想するの無理ですもん。

シュレンが模擬戦を放棄するなんて結果を誰が予想できるか。
と、期待していた人は申し訳ないです。でも、ちゃんとした理由はあるのです。
……多分、きっと、メイビー

次話はシュレンの優しさ？　を見せるかもしれないです。

それと、更新についてですが、皆さんは短くても更新が早いほうがいいですか？
それとも不定期でも良いから、ある程度は長い方がいいですか？

意見お願いしまーす。
この小説に対する意見などありましたら、→と同じくお願いします

では

第十九話　『前へ』（前書き）

……何か、微妙な出来になってしまった。
つーか、シュレン。お前って、そんなに多弁な奴だったか？

ちなみに、今回は殆ど説明回です。

では、『前へ』始まります

第十九話　『前へ』

Ｓｉｄｅティアナ・ランスター

いきなりのシュレンさんからによる模擬戦の放棄で混乱する私。
当たり前だ。
最後の一撃という覚悟を持ってシュレンさんに正面から突っ込んでいったというのに、その途中での模擬戦の放棄。
混乱しない訳がない。
そんな混乱している私にも、シュレンは淡々とした口調で口を開く。

「もうこの模擬戦の結果は見えた。これ以上続けても結果は変わらない」

「ち、ちょっと待ってください！！　いくら私が負けることが見えたからって、それはないですよ！」

正直に言えば、この模擬戦は最後までやらなくても結果は私の負けになると思っている。だけど、だからと言ってこの結末には納得できない。
そしたら、さっきの私の決意は無駄だ。何と言うか、かっこ悪い。
……ホント、いくらなんでもこれは酷すぎると思う。まだ負けと確定した訳でもないのに、今のシュレンさんは言葉だけで負けを確

定させたようなものだ。
実際にはまだ負けていないのに。

「……頭の中で色々と考えているようだが、何を勘違いしている？」

「え？」

私はシュレンさんからの言葉から考えてそう結論づけたのにシュレンさんにそう言われるということは、私の結論が違っている可能性があるということ。
……だけど、きっと対して変わらないんだと思う。

「僕はティアナの負けが見えたなどとは一度も言っていない筈だ。もちろん、僕の勝ちが見えたという訳でもない」

私がこの言葉を一度で理解できるならよかったんだけど、生憎、私はシュレンさんのようなちょっと変わった思考の持ち主ではない。
だから、正直に言えば、シュレンさんが何を言いたいのか分からない。
そんな私の姿を見て、理解できていないことを悟ったのか呆れるような溜め息を吐いた後に、もの凄く面倒臭そうに説明をしてきた。

「この模擬戦が始まる直前に僕が何て言ったか覚えているか？　……とは言え、説明を受けているということは覚えていないと判断するぞ。
模擬戦が始まる前、僕は『ルールは言わなくても大体は理解でき

ているよな?』と言った筈だ。その言葉だけを聞いて、ティアナは模擬戦を始めた。

だが、考えてみろ。僕は大体はと言っているんだ。つまり、普通の模擬戦のルールとは少し違うということ。

ティアナの頭の中にある普通の模擬戦のルールはどのようなものか分からないが、恐らく対戦相手に対して魔力ダメージでノックダウンをするとでも考えているのだろう?

……あぁ、今は何も言うな。説明が面倒なことになる。

とにかく、ティアナはそのような考えであるということを仮定して話を進めるぞ。

先に言っておく。今からティアナからしてみれば屁理屈だろうと思うことを言う。

さて、先程の言葉から考えて今回の模擬戦でのルールは僕とティアナでは勝敗条件が違うことが分かるな?

……ティアナの勝利条件はティアナが考えているものと同じ、僕を魔力ダメージによるノックダウンすれば良いというものだ。

しかし、僕の場合は違う。

僕の勝利条件はティアナ・ランスターを再起不能にさせることだ。つまり、ティアナを徹底的に潰したら僕の勝ちということにした。

だからこそ、僕は模擬戦でティアナを潰しにかかった。挑発や幻術を使わないといったことで精神を潰そうとした。

結果は途中まで僕の有利という形で進んでいった。しかし、途中でティアナは怒りに感情を任せて折れそうだった心が元に戻った。

その時に僕は考えた。

これ以上、ティアナを潰そうとしても意味が無い。今のティアナは中々潰れにくいだろう

そんなティアナを潰すことも可能と言えば可能だが、何しろそんな骨の折れる面倒事は面倒だから止めておこう。

それに、ティアナはどうやら僕に勝てるとは思っていないようだから、丁度良い。

この模擬戦は引き分けということにしよう。

と。

……理解できたか？」

「一応は」

「そうか。なら問題はないな。つまりこの模擬戦の勝者はいないということだ」

……でも、ちょっと――というより。かなり？　――納得できない様な気がする。だって、今の説明から考えてシュレンさんは私を少しも敵とは思っていないから。

シュレンさんにとっては多分、私が使えものになるかどうかの試験みたいなものだと考えていると思う。

だとしたら、私は一体どのぐらい甘く見られていたのか？

そんな疑問が浮かぶ。

「それにしてもティアナが潰れてくれなくて良かった。もし、潰れてしまったとしたら色々な人からの説教が待っていたからな。

いや、説教どころではなく、憎まれるだろうな。とはいえ、潰れなかったのだからこんなことはもう考えていても意味が無いがな」

「……私個人の心配はしてくれないんですか？」

期待はまったくしていないけど、あえてそう聞く。
きっとシュレンさんのことだから『面倒だからしない』とか言って、潰れてしまった私を見捨てるんでしょうね。

「ああ」

……ほら。

「前に言っただろう？　砕かれて潰れてしまったとしたら、それはティアナがその程度の奴だったということだ、と。
そんな潰れてしまった奴に構っていられる程、僕はお人好しではない」

「そこまで言えるシュレンさんに寧ろ憧れますよ。色んな意味で」

「僕に憧れるのは止めておいた方がいい。憧れだけならばレルデの方が数倍良い筈だ」

この人は前に、自分のことを過小評価するなと言ったことを覚えているのかな。覚えているとは思うけど、シュレンさんはこれでもかという程に自分自身を過小評価するから。
……ホント、変なところで変わっているのよねシュレンさんって。
ただ、正論をついてくる場合は言葉で苛めてくるけど。
変な例え話だけど、言葉を武器にできたとしたら私なんか瞬殺だ。

「……何故、僕がここまでティアナを潰そうとしたか分かるか？」

不意にシュレンさんはそう聞いてくる。

シュレンさんが私を潰そうとした理由って、甘ちゃんな私を見ているのが気に入らなかったとかそういう理由じゃないの？

というより、そんなことを考えられる程余裕がなかったから考えようともしなかった。

「今日、頑張った褒美として話そう。が、これは一つの例え話だ。だから、別に聞き流してくれても構わない。

聞いたところで理解できると決まった訳でもないしな。

……あるところに一人の少女がいた。

その少女は魔導師としてはとても優秀で、誰もが知っていて、とても頼りになるような人だ。

友人からは頼りにされ、少女もまた頼られることが嬉しかった。

友人は頼りにできる友人を持っていることが誇らしかった。少女もまたそのように思っていると考えていた。

確かに、その事実に間違いはない。しかし、ある一つの問題点があったことに友人は気付かなかった。

それはとても少女が臆病だったこと。

今は、皆から頼りにされたり笑いかけてくれるけど、それは魔法が……この才能があるからだ。

この才能が無い自分なんて皆にとっては必要の無い存在だ。

と、少女は次第に考え始まる。

そう考えたからこそ、少女はまともに身体を休めずに次から次へと任務をこなしていった。
そうすることで自らの存在を肯定できると思ったから。
そうすることで皆は自分を見放されなくて皆から必要な存在になれると思ったから。

そして少女の考えた通りに物事は進んだかのように思えた。
しかし、そこである事件が起きてしまう。

任務を終えて、いつもの仕事場に戻ろうとした時、突如、アンノウンに襲われた。
いつもの少女なら、この程度の不意打ちを躱すことなんて造作もなかった。しかし、少女はその攻撃に反応するのが遅れた。
それもその筈だ。
少女は身体も休めずに次々と任務をこなしていった為、少女が気づかない内に身体はボロボロになっていた。
故に、攻撃に対しての反応が遅れ、アンノウンからの攻撃を受けてしまった。
その攻撃で少女からは大量の血が流れ、意識を失う。

少女が気づいた時には、そこは病院の病室だった。
しかし、身体がとてつもなく痛む。腕や足はちゃんとある筈なのに、動かそうとしてもまったく動かない。
代わりに激痛が少女を襲う。
そこで改めて少女は自分はアンノウンにやられたと自覚した。
それと同時に不安になった。魔法の才能のしかない自分にこんな大怪我を負ったら友人達に見放される、と。

そう考えた時に少女の友人の一人が駆けつけて病室にやってきた。

少女にとっては物凄く怖かった。もしかしたら、お別れの挨拶でもされるのだろうかと考えていたからだ。

しかし、友人はそうしなかった。

寧ろ、友人は少女のことを心配して意識を取り戻したことを知ったからこそ、駆けつけて病室に向かったのだ。

だからこそ、友人は少女が意識を取り戻したことをとても喜んだ。

そんな姿を見て、少女は思った

もしかしたら、自分の考えはまったくの無意味だったのではないかと。

もし、自分のことを魔法の才能だけで見ていたとしたら、ここまで自分のことは心配してくれないだろうと思ったからだ。

途端に、少女は自分のことを恥ずかしく思えた。

まったくの勘違いだったのだ。皆は本当に私のことを一人の友人として見ていてくれている。

今回の件で自分はどれだけ皆に心配をかけたのか考えると、自分を責めた。

どうして、自分は皆のことを信じられなかったんだろう、と。

だからこそ、これからはちゃんと頼って二度とこんなことがないように頑張ろうと少女は心に誓った。

……今の例え話だが、案外このようなことは今まで生きてきた中でも度々見かける」

「……」

それはきっと、私のことを言っているのだろう。

今の話を簡単にまとめると、臆病な少女が無茶をして大怪我をするけど、最終的にはそんな臆病な少女が前に進もうと決心する……。

まるで、今の私のようだ。
自分の才能に不安になって無茶をして身体を休めることをしなかったし、シュレンさんとの模擬戦で絶望しかけたけど、最終的には前に進もうと決心できた。

「別に無茶をするなと言っている訳ではない。無茶をするのは大いに結構だ。
ただ、無意味なプライドは捨てろ。そんなものはただの邪魔な荷物でしかない」

……無意味なプライドね。確かに、シュレンさんから見たらそうなのかもしれない。
でも、私にとって『ランスターの弾丸を認めさせる』ことは無意味なプライドとして捨てるわけにはいかない。
もし、それをしてしまったとしたら、私は強い人間ということになる。
生憎、私はシュレンさんのような強い人間じゃない。
弱い人間だからこそ、私は他人に頼って生きることしかできない。

「別に誰かに頼ることが弱さではない。弱いように見えるのは物事を客観的に見えていていないからだ。
自分で言うが、僕は物事を客観的に見れると思っている。そんな僕がそう言うのだ。
頼ることは弱さではない」

「それはシュレンさんが強い人間だから、そう考えられるんですよ」

「……面白い冗談を言うな。僕が強い人間？　それこそ有り得ないというものだ。
僕はただ誰にも頼ることもせず一人で強がっている弱虫という奴だ。ただ、強がっている弱い人間だ」

それを自覚してる人は弱い人間じゃありません……って言いたかったけど、シュレンさんにしては珍しく弱気な声だったから黙っておく。
相変わらずの過小評価だ。
……いやまぁ、ただ単にそう聞こえただけで実際にはシュレンさんはそんなを声をしていなかったかもしれないけど。

「さて、これで僕の伝えたいことは伝えた。後は一人で部屋で考えると良い」

「……それは要するにとっとと部屋に戻れと言っているんですか？
私としてはここで答えを出したい気分なんですけど」

「口答えをするな。ここでよりティアナがいなくて混乱しているかもしれないスバルの所で考えろ」

いくらなんでも私がいないだけでスバルが混乱するのは……
あるかも。
訓練もスバルには何も言わないで休んだしね。もしかしたら、シュレンさんの言葉通りに混乱してるかも。

「……こんなことを機動六課の誰かに見られたら面倒だ」

……本音がそれですか。

だけど、別に私とシュレンさんがこの場所にいることを見られたとしても問題は無いように感じるのは気のせい？

シュレンさんの特別訓練を受けていましたみたいな感じのことを言い訳として使えば、見逃してもらえると思う。そもそも、私達は悪いことをしていない。

だから、怒られるのは場違いだ。

「怒られるのが面倒と言っている訳ではない。説明するのが面倒だ」

「……いや、そのぐらいのことはしてくださいよ」

「お前とのやりとりの全てをか？　それこそ面倒だ。

というより、間違いなく説明したら僕が説教されるという面倒な事態に陥る」

うん、私が言うのもアレだけど、シュレンさんは怒られても構わないと思う。

「と言う訳でとっとと部屋に戻れ」

シュレンさんのその言葉で私はようやく部屋に戻る決心をする。

元々、そこまで長い時間に渡ってこの場所に残ろうともしていな

かったし、さっきはちょっとした意地悪のような気分でここに残りたいと思ったのだ。

だから、ここはシュレンさんの言葉に従うことにする。

……案外、シュレンさんには今回の件でとてもお世話になったし。

そんなことを考えながら、私はシュレンさんに別れの挨拶を言った後部屋に戻った。

その途中で私の頭にはふと、どうでもいいことが思い浮かんだ。

それにしても今日のシュレンさん、かなりの多弁だったわよね？

第十九話　『前へ』（後書き）

と、言うわけで第十九話でした。

はい、前書き通り殆どが説明だったと思います。シュレンがめっちゃ喋ったな。

説明とどっかの誰かさんの例え話で２０００文字以上は逝きました。

まぁ、本当はもっと『例え話』を細かく書く予定だったのですが、やめておきました。

さて、少し前に納得できない終わり方になるかもしれませんと書いたと思うんですけど、それは今回のことを言ってます。

正直、今回の件はシュレンが言葉を上手く使っているだけに過ぎませんから。

まぁ、要するに屁理屈ばっか言ってるということです。だから、納得できないかな～、と思っていた訳ですよ。

そして、例え話で出てきた少女と友人。

この二人の正体は言わなくても分かると思いますので、スルーします。

次話からギャグパートにでも入ろうと考えていたのですが、その前に余計な話を一、二話入れることにしました。

だけど、こちらもある意味屁理屈ばっかですね。シュレンも。

あ、それと、更新が少し定期テストで十月二十五日。つまり、二週間は一話しか更新できないと思いますので、ご了承を。

この小説に対する意見などありましたら、感想の方によろしくお願いします。

では

第二十話　『女子心』（前書き）

テストが終わった！　色んな意味で！
と、言う訳で更新です。ホント、二週間も更新できなくてすみません。
しかし、まだ忙しいので更新は一週間に一度のペースでいきます……

それと、前話で余計な話を付け加えると書きましたが、嘘になっちゃいました（汗
余計な話＋普通の話みたいな感じです

では、『女子心』始まります

第二十話　『女子心』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

眠い、怠い、寝たい。
今の僕が素直に自分の気持ちを言葉で表現するのならば、この言葉がすぐさま出てくるだろう。
眠いと寝たいは殆ど同じではあるが、どうかそれは見逃して欲しい。
それほどまでに面倒な出来事が目の前で起きているのだ。別の言い方をしみれば緊急事態だろう。
……そんな時に寝たいと思う僕もどうかとは思うが。

「――聞いてるの？　シュレン君」

「……一応」

「じゃあ、私が今なんて言ってたか教えて。ちゃんと聞いてたなら分かるよね？」

このやり取りで理解できたと思うが、僕は現在上司である高町なのはと会話……もとい尋問　（され）中である。
理由はもちろんティアナの件に関してである。
ティアナと模擬戦をする前になのはと会話をした時の『ティアナ

が体調不良の為に訓練を休んだ』という嘘がバレた。
最初はティアナが僕を裏切って？　なのはに正直に話したのかと思ったのか、どうやら違うらしい。
話を聞く限り、どうやら僕とティアナの模擬戦を見られていたらしいのだ。

「話を聞いてってば！！」

「っ！？」

不意に襲ってくる腹部への衝撃にともなって、僕は思わず膝を付いた。
……いくらなんでも不意打ちで鳩尾（みぞおち）をアッパー気味に殴るのは止めてくれ。
冗談抜きで、苦しい。

「人の話を聞いていないのがいけないんだよ。私は悪くない」

……何だ、そのドヤ顔。レルデでも滅多にそこまでのドヤ顔は見せないぞ。というより、人を殴っておいてドヤ顔するなど正気の沙汰とは思えないな。
やはり、高町なのはは悪魔か？
――と、考えた瞬間、再度、僕は鳩尾（みぞおち）を殴られる。

「っ！　……だ、だから、冗談抜きで……止めてくれ。すまないと、

思っているから止めてく、れ」

そもそもなのはは運動神経が悪い筈だ。
それなのに何故、足で地面を蹴り、その勢いを少しも殺さず拳に伝える事ができる？
僕も出来ないことはないが、運動神経が悪い奴にここまでの一連の動作を綺麗に行うということは出来ない筈だ。
仮になのはのことを知らなかった者が今の動きを見てみれば、間違いなく運動神経が良い人だと判断されるだろう。
接近戦が苦手というのは嘘か。……それともこの場でだけか？
後者だとしたら益々たちが悪いな。

「多分、この場だけだと思うよ？　自分でも分からないけど勝手に身体が動いたから」

「……そうか。悩みの種が増えたな」

何故こうも僕がやられている時に限って、そのようなことが起きるのだろうか。
まぁ、今は日常。任務中という訳ではないので問題はないのだが、もし、このようなことが任務中でも起きてしまった場合は不味いな。
僕には運というものがないのだろうか？　もちろん、悪運ではなく幸運が。

「それで、いい加減に話を戻したいのだが」

「……話を聞いてなかったのに良く言えるね、シュレン君」

「今はそのことを置いておけ。
一応、先程の説明で全てを説明したのだが、まだ疑問に思っていることがあるのか？」

僕が説明したのは、何故ティアナと口論して模擬戦をしたのか。
それに加え、あの例え話だ。
とは言え、全てを全て説明したという訳ではない。
ある程度は誤魔化して説明している。さすがに模擬戦の内容を知られてしまっては説教が確定するからな。
とは言え、なのはが模擬戦をどの程度のレベルで見ていたのか分からない。
だから、もしかしたら説教は確定しているかもしれない。

「う～ん、特に無いけど、人の過去を勝手に喋っちゃ駄目だよ？」

……どうやら、説教は無いらしい。

「言っておくが、これはある意味僕の過去でもあるんだぞ？
先程、ティアナに話した話に少年は出てこなかったが、出てきたとしたらソイツは僕、即ちシュレンということになる」

「うん、まぁ、そうなんだけどね」

勝手に人の過去を話されたことに対して文句を言われるが、これは僕の過去の話でもある。
だから、文句を言われるのは筋違い……と、言っておきたいな。

「別に知られて困るような過去でもないだろう？」

そもそもこの過去に関しては少し調べれば詳細まで詳しく知ることが出来る。だから、例え言われたとしてもあまり気にしない筈なのだが。
しかし、問題はそこではないのだろう。
問題は少女に『臆病』と付け加えたことだ。
僕は機動六課で高町なのはと再会した時、なのはが八年前とは変わっていると思えた。
確かに八年前と比べて人に頼ることは出来るようになったようだ。
昔と比べ、凛々しい姿にはなっていた。
しかし、その凛々しい姿の裏がどのようなものであるかも理解できた。
……とは言っても、八神部隊長やフェイト隊長などの親友達は、なのはの近くに居すぎて気づいていないようだが。

「……それにしてもシュレン君は優しいね」

……話を逸らされたな。
そこまで裏の自分を知られるのが怖いのだろうか。
まぁ、僕だってそうだ。僕も自分の裏の姿を知られるのは怖い。

正確には、僕は過去を知られるのが怖いのだが、対して違いはないだろう。
だから、敢えて何も言わず、なのはに話の主導権を渡す。

「ちゃんとティアナの悩みに向き合ってさ、それをすぐに解決できるシュレン君は凄いよ」

「……」

「私だって本当は気づいていたのにさ、私は何も出来なかったんだ」

にゃはは、と相変わらず変わった笑い声を出す。しかし、それはいつもの明るいものではなくて、何処か暗いもののように感じた。
……違う。

「安心しろ。君がちゃんと後輩の悩みに気づいて向き合おうとしていたのは気づいているさ。
ただ、その機会を僕が奪ったようなもので、本当の君は優しい上に強い人間だ。それは世界の誰もが否定しても僕は必ずそう思う。
……本来は僕なんかのような奴と君を比べること自体が間違ってる」

物凄いことを口走っているが、この言葉に偽りはない。
僕がなのはよりも優しくて強い？　……そんなことは有り得ないな。
僕は世界には有り得ないことなんて有り得ないと考えている一人

ではあるが、このひとつだけは例外的に僕の中では有り得ないものだと断定している。
それに、僕がしたことは結果としてティアナを前へ進ませることができただけで、下手をすれば潰れていた可能性だってあった。
そんな僕が優しい訳がない。

「それより、エースオブエースとも呼ばれているお前が自身を過小評価するな。
色々な局員、一般市民から憧れの対象となっている奴等が知ったら、幻滅されることはないだろうが……いや、寧ろ、謙虚しているだけだと勘違いして評価が上がりそうだな。
だから、お前はもっと堂々としていろ。モテるぞ？」

「いや、別に私はモテたいという訳じゃないんだけど……」

「花が無いな」

レルデ曰く、なのはぐらいの年齢になると恋の一度や二度はしていても可笑しくはないらしい。また、恋をしていない者は恋をしたいと思うらしい。
僕はまったく異性というものを意識したことはないから、よく分からないが。
……とはいえ、もしかしたら前にそれに似た感情を感じたことがあるかもしれない。

「む……そういうシュレン君はどうなの？　クールな性格だからモテそうだけど」

「残念ながら、そのような話はまったく無いな」

僕にはやるべきことがあまりにも多すぎて、そんなことは考えていない。

それにクールな性格だからモテそうだと言っているが、クールなのは周りの連中があまりにも騒がしいからそう感じているだけだ。

至って、僕は普通である。

「お主の一体どこが普通じゃ？　お主はある意味、理不尽と非常識の塊じゃろうが」

「お前の一体どこが普通だよ？　お前はある意味、理不尽と非常識の塊じゃねーか」

声のした方向を見てみると、予想通りセレンとヴィータがいた。

何というか、セレンがセルス・ローラルドとして管理局の制服を着ていることに恐ろしく違和感を感じるのは僕だけだろうか。

……そんなことより二人とも声を揃えて、理不尽と非常識の塊と言われるのは心外だな。

それにこの二人、まったく同じタイミングで同じ台詞を言ってきた。

「……二人は仲が良いらしいな」

「まぁ、な。セルスとは仲良くやってると思うぞ」

そう。何故か、この二人は仲が良い。
セレンが機動六課に来て自己紹介をしたとき以来から、この二人の関係が分からなくなった。あの時、僕はセレンとヴィータの二人きりで会話をさせる機会を与えたが、まさかそれがこうなるとは想定外だった。
あの時以来、ヴィータがセレンの後を付いて行くようになったのは。

「おはよう。セルスさん」

「ああ、お早うじゃな。高町なのは」

こちらはこちらで仲が良くなっている。別にセレンが誰と仲良くなろうが構わないが、物凄い違和感を感じる。
彼女が高町なのはをどのように思っているのかは知らないが、色々とこの状況は危険だと思える。
少なくても、互いに信用できるぐらいになるまでは。

「おっと、そうじゃったそうじゃった。シュレン」

「……何だ？」

「……何故そんなにテンションが低いのかは分からんが、まぁ、よい。
レルデから伝言を伝えるように言われておる」

セレンからの言葉で余計な考えを一旦削除する。
そう言えば、レルデがこの機動六課に来ると言っていたな。

「で、じゃ。面倒じゃろうが、高町なのはと一緒に向かいに来いとのことじゃ」

「……何を考えているんだ。あの馬鹿は」

「さぁの。本来ならば妾が行くべきなんじゃろうが、妾にはこれからやるべきことがあるから無理じゃな」

僕一人が向かいに行くのならば別に理解できる。いつものことだ。
しかし、そこに何故なのはも加える？
レルデとなのはは直接会ったことは無い筈だが。それ以前に接点すら分からないな。
全く、レルデの考えることは分からない。

「一応、既に八神には許可を取ってあるから、そのまま行っても構わんらしいぞ」

「了解。なら、出来るだけ早く行くとしよう」

許可を既に貰っているということは、訓練には参加しなくて良いということか。

まぁ、今日の訓練は恐らく早朝訓練だけで終わり、残った時間は休暇になるだろう。何故なら、今日の早朝訓練では第二段階のクリアの見極めテストだけで、間違いなく全員が合格するものだろうから。

それに伴って、デバイスリミッターを一段階解除する。

そして祝いとして早朝訓練が終わった後の時間は休みにすると隊長陣が言っていた。

だから、今日の殆どは休みになるだろうと予測できる。

だが、そんな重要な時にスターズ隊隊長と副隊長が留守していて良いのだろうか。

レルデを向かえに行くとしても。

……まぁ、どうでもいいか。

「僕は今すぐにでも出ていけるが、なのはは大丈夫か？」

「ちょっとだけ待ってて貰えるかな？　何しろ、今初めて聞いた話だからね」

「なら、僕はここで待っている。準備して来るといいが、急がなくても大丈夫だからな」

「にゃはは、ありがと」

僕は既にこのようなことには慣れているが、なのははそうではないからな。仕方がない。

……。

……。

……。

……凄く視線を感じる。

「何だ、セルス。何か言いたげな表情だが？」

「いや何、ティアナとあやつでは随分と扱いが違うと思っての」

「……自分では意識していないから分からないな。
仮に扱いの差があったとしても、ティアナの場合は仕方がないだろう？　あのようなやり方が最も良いと判断したのだから」

ティアナの場合は一度、潰してから――とは言っても、完全に潰れた訳ではないが――の方が効率よく僕の意見、考えをティアナに伝わると思っただけで日常生活などではそこまでの差はない筈だ。
……ただ、意識の差というものならば有るだろうな。
ティアナとなのはの間には。

「そんなことより、ヴィータ。
僕がこう言うのも変だと思うが、何故、セレンと行動を共にしている？」

僕は敢えて、目の前にいる彼女のことをセルスとは呼ばずにセレンと呼んだ。

「おいおい、お主。いくら此処に妾達の3人しか居ないとは言え、その名で妾を呼ぶのは駄目じゃぞ？　面倒なことになるじゃろうが」

「んー、そう言われてもな……強いて言うなら監視役と言ったところだぞ？」

……監視役か。レルデも形式上は機動六課の監視役と言っていた筈。

どうも、僕の周りの人は警戒心が強い人が多いらしい。とは言っても、レルデの場合はそれが建前であることは理解しているが。

「つまり、正確には付いて行っているのではなく、付きまとっているということか？」

「まぁ、な。アタシはまだコイツを心から信用できてる訳じゃないし、色々と聞きたいこともあるからよ」

「ヴィータが聞きたいことが気になるが、まぁ、頑張れ」

「おう。サンキュー」

ヴィータとの会話は何というか、和むな。

話している内容はいつもと対して変わらないというのに、ここまで気分の違いがあるものなのか。

最近はレルデのことやセレンが機動六課に来たこと、さらにはティアナのことと、真面目な話ばかりだった。

だから、このような他愛無い会話は僕にとって貴重だ。

「そう言えば、シグナムの奴が模擬戦をしたいってよ」

「……まったく、弱者がシグナム副隊長のような強者に勝てないことをいつになったら悟ってくれるのだろうか？」

「アイツはバトルマニアだからな……って、アタシに勝っておいて弱者はないだろ？」

ヴィータが言っているのはＦＷ陣の時に見せた最初の模擬戦のことか？

別に、アレはヴィータが冷静では無かっただけで、たまたま僕が勝ってしまっただけのことだ。

あれ以降の模擬戦はどちらかというと、ヴィータの方が勝率が高い筈だ。

……バトルマニアは強者との闘いを求めているのではないのか？

「いや、そこんところは知らね」

「そうか。

……それに僕が勝ったのはヴィータが冷静で無かったこともそうだが、子供だろ？」

補足すると、ヴィータは子供だから負けても仕方がないということである。

まぁ、そんな子供に黒星が多い僕ではあるが。

「アタシは立派な大人だ。子供じゃない！」

「うんうん、そうだね。ベルカ時代から生きているらしいから、少なくても精神は子供じゃないよね？
……でも、見た目はちょっと幼いかな？」

「うがぁーっ！　イラつく！　特にその口調、すっげーイラつくぞ！」

だろうな。
それにしても良いのか？　ヴィータに憧れている人が今のヴィータを見たとしたら尊敬というより、『可愛らしい』と思われるかもしれないぞ？
今更思ったことではあるが、僕とある程度深く関わっている者は何気にキャラ崩壊する奴が多くないか？

「お主等は一体いつまでくだらんことをいつまでも話しておるのじゃ？
そろそろ高町なのはが来る頃じゃぞ？」

「なっ！？　アタシにとってはくだらないことじゃねぇ！！」

「確かに、その通りだな。ヴィータが子供であることなど決まり切っているどうでもいいことだ」

セレンの言葉と僕の言葉を聞いて、さらにヴィータは反発するように唸っている。しかし、そんなことをすればする程、子供らしいと思われる原因になっていることには気づかないのだろうか？

……気づかないから、そうしているのだろう。

そうこう考えている内に、なのはが小走りでこちらに向かってきた。

「……お待たせ、シュレン君」

「思ったより早かったな。男性ならともかく、女性の準備は色々と長いと聞いていたが」

特命隊の奴等が言っていたが、そういうものらしい。

何でも、女性はより自分を魅力的に見せる為に色々と準備をする。その為に、時間がかかるとのこと。

何故、魅力的に見せる必要があるのだろうか。

……そう言えば、そうするのはモテたいという一種のアピールとも聞いたことだある。つまり、なのははモテたいとも思っていないということか？

先程言った通り、花が無いな。

「いや、シュレン君。さすがにその発言は失礼だよ？　女の子の準備が遅いのには色々と訳があるんだから」

「そうじゃぞ、シュレン。

いい機会じゃ。この際、妾がお主に女子心というものを教えてやろうかの？」

「……19歳で女の子？　女子心？」

女の子というのはもっと小さい子供のことを言うだろうが。女性というのなら理解できるが、残念ながら僕には女の子の基準が分からない。

それに、前にもなのはとはこのようなやり取りをした覚えがあるが、そんなになのはとセレンは自分のことを子供と見て貰いたいのだろうか？

僕はどちらかというと、凛々しい人の方が尊敬できると思う人間なんだが。

「「……むっ！」」

……いや、だから、何故そんな鋭い視線で僕を見る？

第二十話　『女子心』（後書き）

と、言うわけで第二十話でした。
今回は『自己紹介』の時とは違い、一応、四人が空気にならないように書いています。が、ちょっと無理矢理感が否めないところがありますので、そこはすみません。

次回からギャグ？　に入りたいと思うんですけど……

ぶっちゃけます。

自分、ギャグのセンスというものが決定的にありません。小説書いているのに。
……正直、次回から数話の間、寒い話になっちゃうかもしれません。だから、もし、こんな話が観たいという方がいましたら、感想かメッセージの方へお願いします。

では。

……もう少し、忙しくなくてもいいと思うのにな
→は愚痴です、気にしないでください。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　『Ｎａｎｏｈａ』（前書き）

短いですけど更新です。
明日から修学旅行の為、返信などできませんのでご了承を。

では、Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　始まります

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　『Ｎａｎｏｈａ』

Ｓｉｄｅ高町なのは

私はシュレン君と一緒に、シュレン君がいた時空管理局本局特命隊へ向かっている。
理由は特命隊の部隊長レルデ・ローラルド少将を機動六課まで案内することで、若干緊張している。
何といっても、私なんかより遥かに凄い魔導師で、超有名人だ。
セルスさんのお兄さんって聞いてるけど、どんな人なんだろう？

「馬鹿で不真面目で無茶苦茶な馬鹿だ」

「……どうして馬鹿を二回？」

「よく言うだろう？　大事なことは二回言うと」

シュレン君とはやてちゃんはレルデ少将を『無茶苦茶な人』って言ってるけど、実際にはどうなんだろう。
……それに言っておくけど、大事なことは二回言うというのはあくまでも確認の為だよ？

「でも、普通に流れてる情報だと真面目そうな人だと思うけど？」

実際に会ったことは無いけど、よくレルデ・ローラルド少将のことは聞く。そして、その聞いた話は少将が真面目な人であるという印象を持てることばかりだ。

だから、私は少将は真面目な人だと考えていた。

でも、少将をよく知るシュレン君やはやてちゃんからしてみればそうじゃないみたいで、レルデ少将のことを話題に出す度に二人はレルデ少将を無茶苦茶な人と指す。

「……昔は今よりも遥かに真面目な奴だったんだが、今ではそんな様子はまったく見られないな」

「昔は？」

「ああ。昔は確かに、なのはが思うように真面目な奴だった。それがある日途端に不真面目な性格になって、無茶苦茶な奴になった」

ある日途端に……か。何か衝撃的なことでもあったのかな？

衝撃的なこと、そうしなければいけないようなことが起きた時、人は途端に変わってしまう。

私も、途端に変わってしまった一人だから分かる。

「あの時は驚いたな。性格だけならそこまでは驚かなかっただろうが、行動までもが真逆になったから」

「そんなに変わるなら、そこまでの事があったの？」

私の時も、かなり衝撃的な出来事だったと思う。
まぁ、あの時は私が危うく死んじゃう可能性だってあったから衝撃的と言うのはちょっと違うかもしれないけど。
あれは単に、私が皆を頼らないことが招いた馬鹿な結果だし……。

「さぁ、どうだろうな？
僕は教えて貰っていないし、だからと言って知っている訳でもない。そもそも、聞こうともしていない」

「それは何で？」

「僕がわざわざ介入する必要はないからだ。
レルデが関わって欲しいというのであれば介入すると思うが、そう言わないというのは介入して欲しいとは思っていないということ。
そんな中で、その問題に関わるのは余計なお節介というものだ」

シュレン君はそう言いながら、制服のネクタイを少し緩めた。
それはまるで凄く疲れてしまった時の行動で、シュレン君の視線は何処か違う方向にへと向けられた。
何だか、駄目な私の眼を見てるようだ。何かを諦めてしまっているような、そんな瞳。
それにどうやら、私とシュレン君の行動パターンは違うみたい。

私もシュレン君も、他人の事を考えてから行動するのは同じだけど、その考え方が違う。

彼は、他人の視点から考えてから行動する。
私は、自分の考え方を伝えてから行動する。

シュレン君の言う通り、私のやり方だと『余計なお節介』と思われることも多い。対してシュレン君のやり方は周囲の人から気が利く人だと思われることが多いと思う。
それが私とシュレン君の違い。

「……とはいえ、実際はただ単に面倒なだけだからだがな」

付け足すようにそう続けたシュレン君だけど、私にとってその言葉は嘘のように感じられた。
いや、本当にシュレン君はそう思っているのかな？
だけど、シュレン君は無意識の内かどうかは知らないけど、他人のことを考えているのは間違いない。
だって、そうじゃないとシュレン君はどこまでも冷酷な人間ということになっちゃうから。
正直に言うとこれは私個人の意見だけど、そんなのは認めたくない。
私を助けてくれたシュレン君が冷酷な人間だったとしたら、私を助けてくれたのはその時の気まぐれ……
私は気まぐれでシュレン君に助けて欲しい訳じゃなかった。
とは言っても、私がシュレン君に助けて貰った事実は変わらないし、本来は助けてもらった私があーだこーだ言ってられる立場でもないんだけどね。

……でも、どうして、そう言える立場じゃないと分かってるのに

私はそんなことを思ってるんだろう？
これじゃあ、まるで……――

「……ボーッとしてるぞ？　考え事は構わないが、歩きながらそうすると危ない」

「うん、ありがと」

一瞬、自分の感情に自覚しかけたところで、私はシュレン君の声で意識を戻した。
危ない危ない。
シュレン君が声を掛けてくれなかったら、転んでいたかもしれない。どうやら、深く考えすぎちゃったみたいで、さっきと比べ真っ直ぐ歩けていなかった。
だから、少し慌ててシュレン君の隣に並ぶ。

「何を考えていたのかは知らないが、ドジは踏むなよ？」

「にゃはは、いくら私でも転ばないよ」

「……なら、いい」

多分、シュレン君が声をかけてくれなかったら転んでいたかもしれないけど、敢えて私はそう言う。
ジト目でシュレン君に見られるけど、私はそれを気にしないことにした。

……うん、やっぱり、こういう会話なんかが私にとって一番楽しい。

さっき出かけた私の思いは忘れることにする。

ちょっと前まではこんな気持ちになったことはなかったのに……。

『シュレンはお主に対して、特別な感情を持っておるぞ』

あんな言葉をセルスさんから聞いたからだ。

シュレン君が私に対して特別な感情を持っているという有り得ない事を。

その時からだ。

私がシュレン君のことばかり気にするようになったのは。

有り得ないことの筈なのにそのセルスさんにそう言われただけで、こんなにも意識してしまう。

あー、ダメダメ！　こんなことは忘れよう！

……確かに、セルスさんの言葉通り、シュレン君が私に対して特別な感情を持っていたとしても、必ずしもそれが私の喜ぶ感情という訳じゃないんだ。

それに、こんな私が想われる筈がない。

だから、忘れよう。

……だけど、心の何処かで期待してしまっている私がいる。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ『Ｎａｎｏｈａ』（後書き）

と、言うわけでＳｉｄｅ　ｓｔｏｒｙでした
今回は、前回のような他愛のない話でもなく、ちょっとだけ真面目な話でした。それに、今回は本格的に物語が動き始めるｐｒｏｌｏｇｕｅでもあります。
前回も、そうと言えばそうだったのですが、今回の方が自分的には大事かなと思っています。

第二章からは、シュレンの過去とかレルデとシュレンの関係とかを少しだけ書いていく予定です。
最も、第二章で重要なのはシュレンの過去とかになるのかな？
でも、予定では触りにする予定だし……何とも言い難い状況です

と、まぁ、そんな訳でこれからもよろしくお願いします。
では

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　『Ｓｅｌｅｎ』（前書き）

修学旅行から帰ってきました。
前回に引き続き、Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙです。
前回はなのはに対して、今回はセレンが中心です。

では、Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ　始まります。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　『　Ｓｅｌｅｎ　』

Ｓｉｄｅ――――

シュレンとなのはが時空管理局特命隊へと向かっている頃、セルス・ローラルド……いや、セレンは機動六課の食堂で一人で食事をしていた。

一人で食事をしているのは、別に他人を拒絶しているという訳ではない。

今の時間はＦＷ陣はどこかに遊びに行き、ロングアーチは書類関係の仕事に追われていたりと、色々とある。

だからこそ、セレンは一人で食事をしていた。

また、食べ物を食べるにしては、あまりにも早い時間であることも挙げられる。

「相変わらず、此処の食べ物は上手いのう」

ちなみに、何故セレンが忙しくないかと言うと、仕事を同僚である八神はやてに押し付けたからである。とはいえ、それは面倒と判断した仕事だけで大体の仕事はセレン自身の手で片付けられた。

何だかんだ言っても彼女は優秀なので、簡単な仕事ならあっという間に片付ける。

まぁ、それならば、はやてに押し付けた分の面倒な仕事もセレンが片付けろと言いたいが……

「ヴィータは訓練じゃし、八神は仕事で忙しい。ライトニング隊隊長、副隊長は出張でおらんし、暇じゃの」

このように愚痴るセレンだが、元々彼女は一人になれるこの時間を狙って食堂に来ているので、内心ではそこまで考えていない。

そんな彼女なので、彼女を寂しい人間と思う者もいる。

しかし、セレンにとって、そんな個人的に向けられる感情などどうでも良いと考えているので、何と思われようが関係ない。

あまり、彼女は他人には関心がないのだ。

「やはり、妾もシュレンと一緒に行けば良かったか？」

先程の考えを忘れ、あまりにも退屈な時間の為そう考えるが、すぐにそれを取り消す。

何と言っても、シュレンとなのはを特命隊に向かわせるのはレルデとはやてと彼女自身が考えたことなのだから。

理由は至って単純だ。

それはシュレンとなのはの休息の為である。

シュレンとなのはの二人は他の隊員と比べ、かなりハードなスケジュールを送っている。シュレン自身は特命隊の時よりはマシだと考えているが、実際は特命隊の時と対して変わらない。

特命隊ではただ、書類関係の仕事が多かっただけで、身体を動か

すようなことはあまりしなかった。
一応、特命隊でも部下に訓練をさせてシュレン自身も身体を動かしてはいたのだが、機動六課の訓練ほど具体的には教えていない。
特命隊ではどちらかというと肉弾戦を中心に訓練をしていて、機動六課の時のように魔力を使った訓練はしていない。
そして、魔力を消費するというのは本人が思っている以上に疲れるもので、酷使しすぎると疲労が溜まっていく。
それはシュレンとなのはは良く知っている。
知っているのだが、あの二人は自分のことは後にしてしまうので、その疲労を我慢してしまっている。
八年前と同じく、今度は部下の為に無茶をしてしまっているのだ。
なのははまだ過去の失敗があった為に少しは良い。
だが、問題はシュレンだ。
シュレンはティアナとの問題が起きる前から、碌に睡眠を取っていないのだ。
正確には、セレンが機動六課に来た時から睡眠を碌に取っていない。
とはいえ、睡眠を取っていない直接的な原因がセレンにあるという訳ではない。
ただ、セレンが思っていた以上に、シュレンがセレン自身となのはとヴィータの関係性を気にしていたということだ。
「……一応、高町なのはには種をまいたことじゃし、問題はないと

思うのじゃが」

セレンには気づかれないように、シュレンは八年前のことやセレンに関連することを調べていた。偶然、それに気づくことが出来たから良いものの、もし気づけていなかったとしたら危ないところだった。

そして、これを危機と感じたセレンは高町なのはに対して、種をまいた。

難しいことではない。

ただ、なのはに“シュレンがなのはに対して特別な感情を持っている”と、一言言えば良い。

その一言だけではあるが、効果は十分の筈だ。

「本来であれば、もう少し後に言うつもりじゃったのじゃが、この際は仕方なかろう」

本来であれば、もう少しシュレンとなのはの関係が深まったところで言うつもりだった。そうすれば余計な混乱は無くて済み、セレン自身の計画も順調に行動に移せた筈なのだ。

それなのに、それを早めてしまった。

それが、どのような事態を生むのか、彼女はよく知っている。

「……妾は馬鹿じゃから、難しいことを考えるのは嫌じゃと言うの

に。

まったく、これじゃから、好きな人の相手はしたくないのじゃ」

彼女はシュレンのことを異性として好きだ。

恋していると言っても良い。

しかし、彼女はそのことを可能な限り隠して生きている。とは言っても、セレンとある程度の関係がある者はその事実に気づいている。

「とっとと、あの二人には結ばれて欲しいものじゃ」

セレンは自分自身がシュレンと結ばれることを良しとしない。高町なのはとシュレンが結ばれることこそが最も良いと考えている。

自分とシュレンは結ばれてはいけないものだと、セレンは考えている。

「……そうじゃ。妾と彼は結ばれてはいけない」

結ばれていけない理由を知っているのは、セレン自身を除き、存在しない。

だから、セレンがシュレンに対して好意を抱いていることを知っているレルデはそのことを気にしている。

何故、そんな誓いを自分にしているのか。

自分の気持ちに素直になれば良いと、レルデは考えている。

しかし、セレンはレルデの言葉には従わず、自分の気持ちに素直

になろうとしない。なってはいけないのだ。

シュレンとは結ばれてはいけないのだ。

もし、結ばれてしまったとしたら、それは彼女が彼女ではなくなる。

彼女が行動に移せる事と言えば、シュレンと高町なのはができる限り早く結ばれるようにすることだけで、それ以外は何もできないと言っては過言ではない。

だからこそ彼女はこう思い、弱々しい声で独り呟いた。

「私は何時になっても、こんな駄目な自分とは決別できないのかな？」

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　『　Ｓｅｌｅｎ　』　（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。
今回は前回のサイドストーリーの裏の話と言ったところでしょうか？
設定でもあった通り、セレンはシュレンに恋してます。
しかし、結ばれてはいけないものだと考えていて、できるだけ自分の感情を隠して生きてます。セレンはシュレンとなのはの恋のキューピット的な存在になろうとしていて、色々と行動してきました。
最も、セレンのしている行動は意味があるのかは分かりませんけどね。

そして、もう一つ設定でもあったように、セレンの一人称が『私』の場合の口調はあんな感じです。
『妾』の時とは違い、少しだけ心優しい人だと思えるものです。

……ま、今はこんなもんかな？
これ以上言うと、今後の展開気づかれるかもしれないし……

この小説に対する意見などありましたら、感想の方へどうぞ。
意見でなくても、自分の考察など書いてくださっても構いませんよ？　そちらの方が、自分的にも面白いので。

では、失礼します。

第二十一話　『特命隊』（前書き）

段々と気温は冷えてきている筈なのに、何でまだ暑いと感じるのだろうか？
自分は暑いのが嫌いなのに……

では、第二十一話『特命隊』始まります。

あ、今回、中途半端な所で切っております。

第二十一話　『特命隊』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

今、僕の目の前には特命隊の隊舎がある。
少なくても、場所はここで合っている筈だ。確認の為に開いた地図の情報からも、ここが特命隊の隊舎であることに間違いはない。

「……僕の知っている隊舎ではないな」

しかし、目で見て得られる情報は、ここが特命隊の隊舎であることを否定する。
何故なら、今僕の目の前にある隊舎が模様替えをしたかのように、僕がいた頃の隊舎とはかけ離れていたからだ。
色は白を中心としていたのに、今は蒼色。
しかも、入口の近くには、前に見せられたレルデ人形をモチーフとした銅像のような物が二つ並べられていた。
……何とも、腹が立つ。

「な、何というか、変わった所だね！」

「……レルデが趣味に走った結果だ」

なのはは軽く顔を引き攣らせ、苦笑いを浮かべながら思い浮かんだ感想に対して、僕はそんな一言しか言うことができない。
というより、これ以外になんと言えば良いのか分からない。
僕がいない間に、色々と好き勝手やるな。
最も、この特命隊は僕のものではなくレルデのものなので、僕がこういうのは間違っているかもしれないが。

「まぁ、このことは後でじっくりとレルデと話せば良い。それよりも、とりあえず隊舎に入るぞ」

「うん」

「……言い忘れていたが、隊舎に入ったらドジは踏むなよ」

この言葉をどのような意味で受け取るのかは分からないが、一応、そう忠告しておく。
最も、今この場で忠告したとしても、意味をなさないことだろうが。

「大丈夫。ちゃんと分かってるよ」

なのはは何故か力強く頷きながら、僕よりも先に隊舎の入口へと向かっていった。
なのはが先行するということに少しばかり驚いたが、すぐに冷静になりなのはの後を追う。
まさかとは思うが、今の言葉をとても良い言葉として受け取った

訳ではあるまいな。
例えば、特命隊はエリート部隊と呼ばれているから、そんなところで無様な格好は見せ付けられないなど、そのような考えか？
僕はドジを踏んだら、馬鹿共が何をしてくるのか予想できないからという考えなのだが……
まぁ、先程言った通り、どちらにしても変わらないだろう。

そんな風に考えながら、僕達は特命隊の隊舎へと入った。

「……話は聞いていると思うが、古代遺失物管理部　機動六課から来たシュレン・ガルディン三等空尉だ」

入るとすぐに僕は意味の無い挨拶を割と大きな声で言う。
元々、僕はここの部隊の部隊長代理なので、新しく入った者以外は僕のことを知っている筈だ。
寧ろ、知っていなければ困る。

「同じく、古代遺失物管理部　機動六課から来ました高町なのは一等空尉です」

僕に続けて、今度は意味のある挨拶をなのはは言う。
……おい、いくらなんでも明らますぎるぞ。僕の時は仕事を続けていたというのに、何故、全員が作業を止めてこちらを見ているんだ。
何だ、差別なのか。
僕に喧嘩を売っているのか。だったら、買ってやるぞ。

「……なのは。とりあえず、部隊長室に行くぞ」

こちらを観察するように見ている隊員は無視することにして、まずはレルデに会いに行くことにする。

そして、レルデに文句を言ってやる。

知り合いの部隊に行くぐらいのことで、わざわざ忙しい僕達を呼ぶな、と。

――そんな時だった。

「ふにゃ！？」

誰かの驚き声の後に、何かが倒れたような音。その音を聞いて僕は音のした背後へと身体を向け、その方向を見る。

すると、そこにはなのはが転んでいた。

しかも、どうのように転んだのか不思議で仕方がないが、今のなのはは何故か体育座りというものをしていてスカートを履いている為、中の布が見えてしまっている。

……所謂、下着だ。

「～にゃっ！！」

その状態に気づいたのか、すぐになのはは制服のスカートを下着を隠すように伸ばした。
しかし、そんなことをしても僕に見られてしまったという事実は変わらない訳で、なのはは物凄く顔を赤くさせ、こちらを涙目で睨んできた。
幸いなのは、隊員には見られなかったということだろうか。

「……さて、とりあえず、部隊長室に行くか」

本来であればここでなのはを弄るのだろうが、さすがにそれは酷というものだ。だから、あえて何も見なかったことにして、先程の言葉を繰り返す。
だが、寧ろそうされた方が恥ずかしいと思ってしまうのか、なのはは先程よりも顔を紅潮させる。
……何か、上手い慰めはないだろうか？

「う～！」

……成程、この胸がキュンと高まるこの感覚。
これが『萌え』というやつか。中々来るじゃないか。

……と、まぁ、無駄なことを考えてみるが、なのはは一向に冷静になることができないようだ。
だが、そろそろ冷静になってもらわなければ困る。
何故なら。

「「「「「うぉおおおおおおおおっ！！！！！」」」」」

なのはのドジな行動を見て、――正確には、何も無いところで転んだのを見て――押さえ込んでいたテンションを抑えることが出来なくなり、男性隊員の数人が異常なテンションで走ってこちらへと向かって来るからだ。

現に、既に来てしまっている。

「……だから、ドジを踏むなと言ったんだ。まぁ、いい。なのははそこで少し待っているといい。僕は少しの間、この隊員の相手をしなければならないから」

……正直に言うと、ドジを踏んでも踏まなくても馬鹿達は向かって来るが、それは言わなくても良いだろう。

とりあえずは、これ以上なのはに恥をかかせない為に、少し体を動かすとしよう。

「……」

それにしても、僕はなのはがドジを踏むことは予想できていたが、それまで馬鹿達が襲いかかって来ないことに驚いたな。

いつもなら僕と目が合った瞬間から襲いかかるくせに。

それとも、今日はなのはがいるからか？

エースオブエースとも言われている奴が目の前にいて緊張でもしていたのか？

……仮にそうだったとしたら、少し苛立つことだな。

色々と問題ばかり起こしているお前等が何を緊張しているのだ。

それならいつものように好き勝手やっておけば良かっただろう、と。

「突撃ぃ！！」

「……とりあえず、倒すか」

過程がどうであれ、こうなってしまった馬鹿達は力尽くで止めるしかない。

とはいえ、これは一種の訓練でもある。ただし、魔法の使用は禁止で肉弾戦のみであることと男限定の訓練だ。

さすがに、女性を殴ることはあまりしたくない。

……ティアナの時？　あれは必要なことだったから例外だ。

「「「「「っ、しゃあああぁぁぁあぁあああっ！！」」」」」

次々と突撃してくる隊員（バカ）一人一人の位置を瞬時に確認する。

最も近づいて来ているのが二時の方向で、その次が九時の方向…

…そのように一人一人の位置によって順番を決めていく。

そして、一番近い隊員（バカ）が僕の間合いに入ってきたところで腕を掴み、向かって来ている勢いを利用し反対方向へ投げ飛ばす。

「……まずまずだな」

次に僕から見て右方向にいる者に対して足を払い、転びそうになったところを左手で思い切り押す。

要するに、人間ドミノだ。

次々に倒れていくのではあるが、それでもこの人数相手では削れたのは極少数。それに削れた者も少し時間が経てば復活する。

だが、この調子で葬っていけば、いずれは再起不能になるだろう。

そんなことを思いながらも隊員達の攻撃は続いている。

次々と襲ってくる拳や蹴りを紙一重のところで躱し、身体を捻る。その捻りをバネのように使いながら、背後から向かって来ていた者に蹴りをかます。

しかし、その蹴りは他の者に受け止められ失敗に終わった。それに、受け止められたことによって身体のバランスを崩し、倒れそうになる。

「……っ」

思わず舌打ちをしそうになりながらも、右手を軸として片手のみで前方倒立回転――ハンドスプリング――を行う。

それによって転ぶという事態は避けれたが、着地するところに数人の隊員がいた。

だから、最も近くにいた者の肩に乗った。当然、それは僕の体重が肩に乗るということで隊員のバランスが崩れる。

しかし、そこは僕の体感を生かし、その肩を足場として跳ぶ。

そして、今度は隊員がいないところへと着地して、再び向かってくる隊員に対して体を向ける。
……さて、と。ここからが本番だ。

「準備運動は終わりだ。……来い」

……少しばかり苦戦したが、今からはそうはいくまい。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

数分後、僕の目の前には男性隊員達の残骸が出来た。
この訓練に参加した隊員達は疲れきったような表情を見せ倒れている。対して、僕はそこまで疲れていない。
というのも、僕はこの訓練の時にはあまり自分から攻撃はしない。自分から攻撃をする分だけ体力を消費するというのに加え、動体視力を鍛えたいという考えの元だ。
相手からの攻撃の威力を殺さず、そのまま活かすことで余計な体力を使わない。これは一対多数、または長期戦の時の基本だ。
動体視力というのは、隊員達の拳を紙一重のところで躱すことを繰り返すことで鍛えているということだ。

「それにしても、前より苦戦したな。
……僕が機動六課に行ったことで訓練を疎かにしていると思っていたが、そうでもないらしいな」

「当たり前っすよ。俺達の目的はシュレンさんや、レルデ部隊長なんすから」

そう答えるのは……面倒だから、隊員Aで良いか。

「ひ、酷くないっすかっ!?　俺にはちゃんとした名前がありますよ?」

「まぁ、隊員Aの名前など、正直どうでもいい。
それより、僕を目標にするのは止めておいた方が良いと忠告しておこう」

「人の話を聞いてるんですか!?」

うるさい奴だな。名前を言われないぐらいのことで一々騒ぐな。
隊員Aは人と会話する時、わざわざ自分のことを名前で呼ぶのか？　他人から呼ばれる時は必ず隊員Aの名前で呼ばれているのか？
……違うだろう？　現に隊員Aは『俺』と言っているではないか。
だから、一々名前を呼ばれないぐらいのことで喚くな。正直言って、迷惑だ。

「そんな屁理屈を言って、本当は俺の名前を覚えてないだけじゃないんすか？
俺の名前って、すっげー長いっすからね」

「馬鹿にするな。こう見えても部隊長代理だ。部下のことは知っている」

隊員Ａの名前は僕の知り合いの中では最も名前が長い。しかも圧倒的に。隊員Ａ以上に名前が長い者がいたとしたら会ってみたいものだ。
そして、隊員Ａの名前は――

「――やはり、面倒だから隊員Ａで良くないか？」

「ガクッ！！」

……忘れている訳ではないが、本当に隊員Ａの名前は長すぎる。
初めて名前を聞いた時、思わず自己紹介を途中で止めてしまったぐらいだからな。
隊員Ａの本名を自己紹介するのには最低でも一分はかかる。
文字を書いて一分というのであればそこまで長くはないだろうが、言葉にして一分以上かかるというのは相当だ。

「それじゃあ本名は言わなくて良いですから、俺が皆から何て呼ばれてるか教えてくださいよ」

「エース」

「……当たりです」

いや、何故そんなに残念そうな顔をする？
というより、エースと呼ばれているのなら隊員Ａでも対して間違っていないだろう？

「いやぁ～、そんなモブキャラみたいな扱いは嫌なんすよ」

「安心しろ。お前は既にモブキャラだ。今後、お前の出番は殆ど無いに等しい」

「ちょっ！？　せめて希望ぐらいは持たせてくださいよ！！」

希望を持たせたら、余計に扱いが変わらなかった時の絶望感は大きいだろう？
それなら最初から希望なんて物を持たせない方が良いと判断した。
それに、何があっても隊員Ａがモブキャラから主要キャラになることはない
第一、　これ以上主要キャラを増やしてしまっては、主要キャラの誰かが空気になるぞ？

「メタ発言の嵐っすね」

「大丈夫、これも安心しろ。これはネタとして処理される」

「だったら、そういうことは言わない方が良いと思うんですけど……」

小さく呟く隊員Aだが、それをお前が言うか。いや、正確にはお前では無く、お前達だが。

正直、特命隊の存在そのものが危ういものにも関わらず、僕のストレスの原因になっているお前達も色々と危ういものだ。

何故、それを自覚していないのだろうか。

「……さて、今回の訓練はこれにて終了だ。訓練に参加した者、見学した者はそれぞれ自分の仕事に戻れ」

「「「うぃ～す」」」

何とも、やる気が感じられない返事だな。まぁ、別に、コイツ等にやる気のある返事など、最初から期待していないが。

それに比べ、機動六課のＦＷ陣は元気が有り余っている。

僕の言葉にも元気よく返事をしてくれ、問題のある行動は起こさない。スバルだけは僕のことを何故か兄と呼んでいるが、特命隊(ここ)での出来事に比べたら、そんなことは些細な事だ。

……それで、だ。

「にゃはは！」

……何故、なのはは隊員達と呑気にお茶を楽しんでいるのだ？

第二十一話　『特命隊』（後書き）

と、言うわけで第二十一話でした。

今回はまぁ、シュレン君が肉弾戦を繰り広げたこととモブキャラの会話がメインですかね？
ティアナとの模擬戦の時、ティアナに対して蹴りをかましたのはこの肉弾戦の成果でもあります。まぁ、それよりも以前に素手の格闘はレルデの時にも軽く？　あったと思いますが。

それと、モブキャラ隊員Ａについて。
名前については省略。取り敢えず、皆からはエースと呼ばれているモブというぐらいを頭に残していただければ、彼も本望な筈です。
彼が、主要キャラになることはありませんから（笑

最後に、なのはのパン○ラについて！
さっき、肉弾戦とモブがメインと言いましたけど、一番のメインはこれだったりしますｗ
決して、何となく書いてわけではありませんよ？

ちゃんと意味があるのです！
多分、きっと、恐らく、メイビー……（ｒｙ

次回は特命隊その２と言った所です。
この小説に関して思うことがありましたら、どんどん感想の方へお願いします。
物凄く励みになりますので！

では

第二十二話　『特命隊　2』（前書き）

特命隊編その2です。前回に比べてギャグ？　は少ないですね。
そう言えば、ＴＰＰは結局どうなってしまうのでしょうか？　気になります。

では、第二十二話『特命隊　2』始まります
あ、サブタイは（仮）です

第二十二話　『特命隊　2』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

部下達の訓練が終わり、なのはのいる方向を見ると、そこには女性隊員数人と楽しそうにお茶を飲んでいる高町なのはの姿があった。
僕には理解できないガールズトークというものをしながら、物凄く楽しそうに会話をしている。
……それが先程ドジを踏んで顔を真っ赤にしていた者の行動か？
それとも、現実から逃げるように必死に忘れるようにしているのだろうか。
まぁ、どちらにせよ、僕はなのはのところに行くことには変わりない。しかし、その途中で女性隊員が話しかけてきた。

「シュレンさん。訓練おつ～」

「言う程、疲れてはいない。
それよりこの状況は一体何だ？　何故、アレは呑気に飲み物を飲んでいる？」

僕がなのはに対して何をしていろと言っていた訳でもなく、待っていると良いと言っただけではあるが、まさかそれが女性隊員達と会話を交わしているとは思わなかった。

一方の隊員達も、客人に対して茶を出すというのは礼儀として正しいことだが。

……何というか、納得いかない。

「いつもの訓練をボーっと見てるなのはさんが暇そうだったからお茶に誘っただけですよ。隊員達が肉弾戦を繰り広げていてもつまんないじゃないですか。

……あ、シュレンさんは除きますよ？」

「何故？」

「だって、シュレンさんは可愛いじゃん」

……ここは何と言えば良いのだろうか。怒れば良いのだろうか。

それとも、礼を言えば良いのだろうか。

どっちにしろ、そんなことを言われて僕はまったく嬉しくないな。

性別が男であるにも関わらず、『可愛い』などと言われて誰が喜ぶのだ。それに、僕は少し中性的な顔をしているだけで、誰が見ても『可愛い』などとは言えない顔の筈だ。

それなのに、何故、隊員の殆どが僕のことを『可愛い』などと言う？

「えぇ～、可愛いじゃないですか！　ね、なのはさん？」

「うん。写真を見せてもらったけど、物凄く可愛かったよ」

「……」

どうやら、いつもいつも悪魔呼ばわりされていることに対しての反撃らしい。それに加え、先程下着を見られたことに対する反撃もあるのだろう。

……効果としては物凄く効くな。

君にそんなことを言われたら、色々と思い悩む。

「この寝顔の写真なんて物凄く可愛いですよ、なのはさん」

「あ、本当だ。寝顔の顔はこんなにも可愛いんだね、シュレン君？」

なのははここぞとばかりに僕を弄ろうと考えているのか、挑発的な視線を向けてくる。レルデのような苛立つ表情ではないが、なのはの表情も十分に色々と思える表情だ。

だから、僕はなのはが持っていた写真を奪い取り、それを破り捨てた。

こんな写真を見せつけられるなら、こうした方がずっと良い。

「残念でした。シュレンさんの写真のストックなら十枚以上ありますから」

隊員は胸ポケットから破り捨てた写真と同じものを取り出す。

「……お前らは僕のストーカーか何かか？」

「違いありません！　私達はシュレンさんが可愛いという同じ認識を持った集団ですから！」

取り出したアタッシュケースの中には僕が写っている写真が綺麗に並べられ、これでもかというぐらいに詰まっていた。
しかも、軽く見た感じでは、明らかに盗撮したような物まで混じっている。
……胃が痛くなってきたな。本当に。
というより、自分達がストーカーであることを少しは否定して欲しい。自覚がないストーカーより余程、質が悪い。

「それにこの写真が全て破り捨てられても、写真のデータは特命隊の全員が持っていますので問題ないです」

「……何故、そこまで大規模なんだ」

「へぇ、なら、私も後で貰って良いかな？」

「……おい」

頼むから止めてくれ。もし、その写真が機動六課の方にまで回ってしまったら面倒なことになるだろうが。
特に八神部隊長に何をされることか。
何回も会話をしたことがあるから分かるが、間違いなくあの人はレルデがいなかったら自ら騒ぎを起こすような人だ。
そんな人に知られては、一瞬でこの何十枚もの写真が機動六課に

回る。
そのような事態は出来るだけ避けておきたい道だ。

「……」

そう言えば、何故隊員達は僕の写真など集めたがるのだろう？
僕が『可愛い』からか？
……しかし、ただそれだけの理由でそこまでの苦労をする必要はないと思う。
特になのははそうだ。とは言っても、なのはの場合は僕に対しての反撃的な意味だろうが……。

「先に言っておくが、なのははその写真を八神部隊長とフェイト隊長には見せるなよ？」

「う～ん、どうしようかな？」

「……僕に出来ることなら一度だけ何でも言うことを聞くから」

写真が出回ることの代償としては物凄く大きなものだろうが、こうでもしないと色々と面倒な事態になる。
ＦＷ陣、隊長陣などに写真のことを言われ続ける。
……何て、嫌な出来事だろうか。

「シュレン君が一回だけどんなことでも聞くの？」

「ああ。聞いてやるぞ」

とはいえ、あくまで僕はしてもらいたいことを“聞く”だけだがな。

卑怯だと思う者がいるかもしれないが、人の話を注意深く聞いていないのがいけないのさ。

なのはは間違いなくという可能性でこのことに気づきまい。

「……シュレン君のことだから、話を聞くだけなんでしょ？」

「……馬鹿な」

……嘘だ。有り得る筈がない。

あの無頓着で人を疑うということを知らなくて馬鹿真っ直ぐで阿保のドジを踏む高町なのはが僕の言葉の裏の意味を見抜いただと？

……これは何かの夢だろうか。きっと、そうに違いない。

「シュレンく～ん？　まさか、図星を疲れて動揺してるのかな？

……というより、随分と酷い言い方だね」

「正直言うとな。物凄く、これは夢だろうと思えるほどに動揺しているぞ」

「……だったら、表情の一つぐらいは動かしたらどうなの？」

ジト目で僕のことを見るな。
そんなことを言われても、僕は感情そのものを感じにくい体質で僕自身も色々と困っているのだから。
笑いたい時に、ぎこちない笑みしか浮かべられないこの体質には。
それに僕は面倒事は嫌いだなどとよく言っているが、実際は何が面倒なのか完璧には理解していない。

面倒事が嫌いというのは、つまり自分にとって嫌な出来事が起きるということだろう？

しかし、僕にとっての嫌な出来事のラインというのはとても曖昧なものだ。
僕は他人とは違う価値観の持ち主である。だから、他人が嫌な出来事と言っても、僕は違うかもしれない。
そして、前にレルデに言われて知ったことなのだが、どうやら僕はそのラインというのが圧倒的に低いらしい。
……そんなことはないと思うんだけどな。
だって、僕の過去を知っている者に対してはすぐに怒ってしまうのだから。

「……シュレン君？」

「無駄ですよ、なのはさん。
シュレン部隊長代理があのようにボーッとしてる時は大抵何を言っても反応してくれませんよ。
何を考えているのかは知りませんけど、結構長いんですよね」

「……聞こえてるぞ」

……確かに僕は考え事をしてしまう時、かなり長い時間ボーッとしてしまう事が頻繁にあるが反応はするぞ。

とは言え、それは人には気づかれないかもしれないが。

まぁ、そのように言われているということは気づかれていないことなのだろう。

「……それで結局、何かして欲しいことはあるのか？　僕に叶えられることなら何でもしてやるぞ。

ただし、写真を流すことを見逃すと言った類の物は駄目だ」

「えぇ～！」

この様子から、本当にそう言うつもりだったのか。危ない危ない。

それにしても何というか、なのはが少しずつ頭が切れるようになってきているな。先程言ったように、前はもう少し人の言葉の裏を考えるようなことはしていなかったというのに……。

もしかして、これはいずれ僕となのはが心理戦、頭脳戦でも繰り広げる伏線なのだろうか。

だとしたら僕は負けたくないな。

まぁ、もう一人とは現在心理戦の真っ最中だが……

「言い忘れていたが、長く続く類のものも禁止だ」

「大丈夫だよ。ちゃんと分かってる」

そう思っているのなら、そんな残念そうな顔をするな。
……どうやらなのはは頭が切れるようになってきてはいるが、相変わらず自分の感情を隠すというのは苦手のようだ。
それを確認できて安心できた。
それならまだ、当分は僕が会話の主導権を握れる。

「でもさぁ、よく考えてよ。
私が写真を流さなくても、別の誰かが写真を流しちゃうと思うよ？」

「……残念ながら僕はなのは、君が写真を流す元にならなければ良いと考えている」

「……え？　どうして？」

「仮に誰かが写真を流したとしたら、その時はその人を潰せば収まる」

とはいえ、セレンに写真を流す元になられたら僕はどうすることも出来ないのだが……
しかし、今のセレンはそれどころでは無い筈だ。僕の考えでは色々と彼女は忙しい筈で、こんなことには付き合っていられないと思う。
そして、何故なのはが元にならなければ良いかと言うと、なのは以外に写真を流せる者はいないからだ。

現在、機動六課に所属している人で特命隊と接点がある者は僕を除くと、八神部隊長とセレンとなのは以外にはいない。つまり、特命隊に流れている写真を機動六課に流すには、必ずこの三人の内の誰かが元にならなければならない。

八神部隊長には若干の不安があるが、問題はないだろう。

だから、この三人以外で写真を流す者がいたとしたら、問答無用で潰す。

最早、ソイツは敵だ。

主に、僕の日常生活を脅かす存在として。

「……あの～、シュレン部隊長代理」

そんな時、先程の隊員が僕となのはの会話を遮って、会話に参加してきた。

しかも、どうやら会話に参加したかったのはその隊員だけではなく、他の隊員達もらしい。

……何か、気になることでもあるのだろうか？

「シュレン部隊長代理って、なのはさんのことをファーストネームで呼んでるんですか？

……しかも、呼び捨てで？」

「ああ。確かに、呼び捨てで呼んでいるが……」

やはり、他人から見てみれば無礼な奴なのだろうか。
なのはから敬語は使わなくて良いと言われているから基本的に敬語は使っていない。そして、もしそれが良くないイメージを持たれる原因となるなら敬語で話すことにしている。
しかし、別に敬語使っているかどうかなど隊員達にとっては些細な問題の筈だが……？
元々、敬語などはそこまで気にしている訳でもあるまいし。

そう考えていたのだが、どうやら隊員達は別のことを考えていたらしい。
その証拠に――

「「「「「「キャーーーーーーッ！！！」」」」」」

――という隊員達の叫び声というより、何かに興奮して出てくるような声……黄色い悲鳴とでも言えば良いのだろうか。
とにかく、この場にいた隊員達が大声を出した為、少しだけ耳が痛くなった。
一体、どこまで高い声が出たのだろうか。

『業務連絡。直ちにシュレン・ガルディン三等空尉は俺の部屋に来るように。
繰り返すのは面倒くさいから、言わないぞ～。では、終わり』

……面倒だから連絡を繰り返すことはしないとは、やはりアイツは頭が可笑しいな。

まぁ、これはさておき、呼ばれたからには向かうとしよう。あまり待たせすぎると、文句をグダグダと言われることだしな。
なのはは……放っておいて構わないか。
なのはは黄色い叫び声を出した理由をを隊員から説明されているようだし、アイツはなのはを呼ばずに僕だけを呼んだ。
それならば、僕一人が行ったとしても文句は言われないだろう。

「……僕一人で良いから、なのははもう少し会話していて構わないぞ」

返事は待たない。仮に『待って』と言われたとしても僕は行く。
特命隊の隊員と会話をすることで、その者と友達になれる可能性もあって色々と今後の行動に便利だからだ。
今後の行動に便利というのはセレンに関してで、なのはは少しでも早く彼女について理解しておいた方が良い。
そうした方が今後起きるかもしれない二人のいざこざが速やかに解決できると思う。

「ちょ、ちょっと待っ――――」

誰かの講義するような声が聞こえるが、それは恐らく幻聴だろう。
まったく、そこまで長生きはしていないが幻聴が聞こえるということは、この身体もそろそろガタが来たということだろうか。

……何て、冗談だけどな。
そもそもこの身体が不調子になるとは思えないし、不調子になっ

たとしても幻聴は聞かないだろう。

話は変わるが、今頃ＦＷ陣は何をしているのだろうか。

恐らく第二段階の合格発表でも受けているのだろうが、僕は全員が余裕で合格できると思っているので心配などはしていない。

あの四人は努力が素直に実力へと結びつく優秀な魔導師だ。飲み込みが早いと言っても良い。

もしかしたら、案外とすぐに僕なんかは超えるのではないのだろうか。

そうしたら自分の実力の低さに嘆いてしまうだろうが、自分の実力以上に成長させるというのも教導の醍醐味というものだ……と、レルデが言っていた。

でも、確かに、その考えも理解できないことはない。

とにかく、合格発表の後は休暇になる筈で、あの年頃だと何処かに遊びに行くだろう。

ティアナとスバルはお洒落する為の何かを買いたいだろうし、エリオとキャロは二人仲良く何処に出かけるかまでは分からないが、遊びに行くと思う。

何処に行くにしても、ＦＷ陣にとって良い休暇になると良いな。

第二段階の合格を受けたとしたら、訓練はよりハードなものになり油断したらすぐに潰れてしまうから。

だから、このような息抜きはとても重要なものだ。

……そう言えば、僕がＦＷ陣達の年齢の時は何をしていただろう？

第二十二話　『特命隊　2』（後書き）

と、言うわけで第二十二話でした
今回も対して話は進まず、グダグダとしたものでした。ヴィヴィオが初登場する時まではこんな感じで話を進めたいと思ってます。

今回のメインは強いて言うなら、写真となのはとの微妙なやり取りでしょうか？

にしてもシュレンが微妙に童顔であるという設定……滅茶苦茶久しぶりに使った（汗
正直、最近はシュレンが冷静な行動ばかりするので、徐々に最初の時に描いていたイメージ像とは段々と離れてきているんですよね……
まぁ、設定画をかくとしたら当分先なんで気にしないことにしますけどね。

次話はレルデのやり取りです。
いつものシュレンとレルデの会話になりそうです。

この小説に対する考えとかあったらどんどん送ってください。
テンションが上がって、意欲があがりますので。

では

第二十三話　『特命隊　3』（前書き）

更新です。最近は四日に一度の更新ですね……
できれば二日に一回ぐらい更新したいと思っているのですが、中々難しいものです。

そのぐらいの早さで更新出来る人は素直に尊敬します。
では、第二十三話『特命隊　3』始まります。

第二十三話　『特命隊　3』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

レルデに呼ばれ、今は部隊長室前にいる。
僕が特命隊所属だった時は何の緊張感も持たないで部屋に入っていたが、今の僕は機動六課所属の為、最低限のマナーとして所属を言いながら部屋に入ることにする。
とはいえ、ご存知のようにレルデはそんな一般的なマナーなど気にしない奴だ。

「時空管理局遺失物管理部機動六課所属、シュレン・ガルディン。到着しました、失礼します」

「うわー、滅茶苦茶やる気ねー入り方だとこと」

……文句を言われる筋合いは無い。
寧ろ、特命隊に呼び出した事、先程の呼び掛けの事など文句を言いたいのはこちらの方である。
それにしても。

「こうして直接会うのは久しぶりか？」

「オイオイ、ホテル・アグスタの時にも俺達は会ってるだろうが。だから、言うほど久しぶりじゃねーって」

確かに、言われてみればホテル・アグスタでレルデに似たような男と会話した記憶がある。

僕が思い出せる範囲では、知らない男が背後から声をかけてきたので思わず回し蹴りをしてしまったこと。その言い訳として、脊髄反射という言葉を使ったこと。変な男が何回も僕に向かって文句を言ってきたこと。

しかし、大した会話もしていない筈なので、記憶が曖昧だ。

「嘘つけいっ！！　殆ど覚えてるじゃねーか。何が記憶が曖昧なんだよ！？」

「……そう言えば、この様にツッコミを入れられた様な記憶もある様な無い様な」

「……様な様な様なって、わざと言ってんだろ？」

「さぁ、どうでしょう。そこは超人と言われているレルデ・ローラルド少将なら分かるのではないのですか？」

「明らかに敬意を払う気の無い敬語だな」

ああ。お前などに誰が敬意を払うか。

お前などに敬意を払うぐらいなら、もう少し部下の面倒を見るつもりだし、もう少し部下に興味を持つことだろう。

……ちなみに、特命隊の部下の話だ。

「冷たいねぇ。でも、俺はそんな君が大好きだ」

「死ねくたばれ視界から消えろ屑」

……何が喜んでこんな屑に好きだと言われなければならないのだ。
いっそのこと、レルデの口が二度と開けないように顎でも砕くか？
いや、しかし、顎を砕いてもすぐさま復活するだろう。
まったく、この最強ぶりには困ったものだ。

「相変わらずスゲェ（恐ろしい）ことを思いつくな、お前」

……凄いこと？　一体、何のことだろうか。
レルデとの会話で物凄く見当外れのことは言っていない筈だ。寧ろ、見当外れのことはレルデしか言っていないと思うが……？
いや、僕は何を考えているのだ。
普通に考えて、レルデが僕に対して凄く良いことを思いつく奴と褒めているのだろう。

何故、僕はそんなことに気づかなかった。

「やっぱ、お前スゲェ。その俺との会話の時だけに発動するポジティブモード」

「僕が前向きか？　後ろ向きなら分かるが……」

「しかも無自覚。恐ろしいことこの上ないな」

……仮に、僕がレルデの言う通り無意識で前向きな性格になっていたとしよう。だが、何故それが恐ろしいということに繋がるのだ。僕が前向きな性格になっているというのは、寧ろ喜ばしいことではないか。

「いやまぁ、確かに俺にとっても嬉しいことなんだけどよ……」

「何だ？」

「ほら、いきなり自分の知ってる奴の性格が真逆になったら不気味に思うだろ？　しかも、それが無自覚なんだぜ？」

……ああ、成程。

つまり、レルデにとって無意識で前向きになっている僕は、いつもの性格とは違うので不気味に思い、それと同時に恐ろしいと思うようになるということか。

それならば、少しは納得できるな。

僕もレルデがいきなり無意識で仕事を求めるような人間になったら、恐ろしいことこの上ない。

そんなレルデは僕の表情を見て、僕が何と思ったのか理解したのか話を逸らす。

……僕は表情というものは余り出ない筈なんだが。

「そう言えば聞いたぜ。
お前、俺が思っていた以上にあっちで部下の面倒を見てるそうじゃねーか」

「……その言葉だと、まるで部下達の面倒を見ないように思っていたようだな」

「まぁ、実際その通りだな」

特命隊の方でも部下達の面倒を見ているつもりなのにも関わらず、そう言われるのは心外だな。
第一、僕はそこまで無責任な人間でもない。基本的に最後まで面倒を見る。
……まぁ、僕が見捨てるというのならばそれは恐らく呆れたか、余程怒っているという証拠だろう。
どちらにせよ、僕はそんなイメージを持たれていて衝撃を受けた。

「えーっと、一番最近で面倒を見たのはティアナ・ランスターって言ったか？」

「……そこまで知っているのか」

大方、あの模擬戦を隠れて見ていたセレンがレルデに報告でもしたのだろうが。
一応、僕は幻術で第三者から見えないようにしていたつもりだっ

たのだが、やはりバグキャラには通用しないということか？
それ以前に、幻術はそこまで意識して使っていなかったから見ることは容易いか。

「良いなぁ。俺もこんな美少女と二人きりで汗を流してみたいものだぜ」

「お前の頭の仲は女のことしか無いのか？」

「いやだって、案外普通だぜ？
お前とか俺ぐらいの年になると異性を意識するのは普通だ。ただ、お前は珍しく異性に関して無関心な人間なだけで、他の奴は意識してるって」

「言っておくが、一応、僕も異性を意識したことはある」

……先程のなのはの下着が見えてしまった件も、一応異性を意識しているということになるだろう。
それならば、僕も異性を意識している。

「何処がだよ？　アイツの下着姿も結構多く見たんだろ？
何で、それでその感想が一言ぐらいで片付けられるんだよ。お前は絶対に異性を意識していない」

「『綺麗だ』という以外に言うことがあるのか？　無いと思ったから一言で済ましているのだが……？」

「死んでしまえ、リア充……！」

さすがに酷くないか？　ただ僕の考えを言っただけなのに死んでしまえとは。

それに僕はリア充と言われる人間でもない。もし、僕がリア充であるならば、今頃こんな所にはいないだろう。

というより、充実した生活を送っているのはレルデの方だろうに。

地上本部のオーリス・ゲイズ三佐に食事に頻繁に誘われているのを僕は知っているのだぞ？　あんな美人に食事に誘われる方が余程リア充だというものだ。

それに、色々八神部隊長からも想われているのも僕は知っている。

「……さて、何か話が面倒臭くなってきたから、とっとと話を本題に移そうぜ」

「お前がそれを言うか。というより逃げたな」

どちらかというと、今回もレルデから話を逸らして、無駄なことばかりグダグダと話していたような気がするな。とはいえ、僕もレルデとの会話を本題へ移しかったのは事実なので、これに関しては文句は言わない。

――だけど、話を逸らしたことに関しては追求したいところだ。

だが、レルデは言葉を濁すばかりで、教えてくれることはないだろう。――

……それにしても、一体レルデは何を話したいのだろうか。
レルデの会話は脈絡の無いものばかりなので、予想などするだけ無駄ということは分かっている。が、それでも僕はあらかじめ予想している。
前のレルデが機動六課に来ると知った時も、一応、ある程度の予想はしていた。だから、そこまでの驚きというのはなかった。

しかし、今この場でレルデがこれから話すことに関してはまったく予想できていない。

レルデの表情から真面目な話ではないだろう。
だから、いつもの悪ふざけだと思っているのだが、それなら機動六課に到着してからの方が色々と良いと考えている。
まぁ、レルデが僕を滅茶苦茶に引き回して僕を怒らせたいというのなら話は別だが、コイツはその辺りの一線は超えないようにしている。

だからこそ、まったく予想できない。
さらに言うならば、いつもの悪い予感はしない。それが逆に僕を不安にさせる。

「と、まぁ、いつもなら俺とお前の二人で本題に入っているんだが、今日は高町一等空尉もいるだろう？
だから、今日は彼女も混ぜて本題に入るぜ」

「理由は……聞くだけ無駄か。その為に、わざわざなのはを呼んだらしいからな」

「理解が早くて助かるぜ。とは言っても、いつものように俺のくだ

らない用事で呼んだんだけどよ」

……可哀想に。

なのははもう少ししたら僕と八神部隊長と同じく、レルデによって振り回させられる側の人間になってしまうのか。

慣れない内は……慣れていても疲れてしまうだろうが、頑張れ。

応援と同情だけはしよう。

レルデは先程僕を呼んだ時と同じように、デスクに付いているボタンを押しながら彼女のことを呼ぶ。すると、特命隊の隊舎内にあるスピーカーのような物がレルデの声を大きくして、隊舎全体に伝わる。

とは言っても、こちらから伝えた音声が隊舎全体に伝わるまでには若干のタイムロスがあり、伝わるのは数秒後だ。

『業務連絡、業務連絡です。

特命隊の隊舎内にいる高町なのは一等空尉殿は部隊長室に向かってください。しかし、初めての隊舎で分からないと思いますので、そちらにシュレンを送ります。

彼に付いてきて、部隊長室に向かってください。

……繰り返します』

「……気持ち悪いな」

僕となのはでは対応の差があるのは分かっていた。先程の部下達の態度からも理解して、分かっていたつもりだった。

しかし、この差は一体何だろうか。
まぁ、僕と彼女では階級も違い、知名度も違うので仕方がないの一言で片付けられてしまうが、幾らなんでもこれは無い。
頭が可笑しいとしか言いようが無い。

「ふぅー、慣れない敬語は疲れるなぁー」

「だったら、しなければ良いだろうに」

レルデは自分よりも階級が上の者の中でも、嫌いな者には敬語を使わない。
セレンが機動六課に来て間もない時、セレンが『敬語を使うなら、その人物が尊敬に値できるか判断してからにしろ』と言っていたが、それはレルデの言葉だ。
だから、自分の嫌いな者には敬語は使わず、逆に自分が失礼の無いようにしたい相手なら敬語を使う。
なんとも、面倒な基準だ。

「……階級としては幾つもお前の方が上なのに、何故敬語を使った？」

「何故って、そんなのエースオブエースって呼ばれている有名人をテキトーに扱えるかっての」

言っておくが、知名度でもお前の方が彼女より勝っている。

「んな、細かいこと気にすンな。
つーか、さっさと高町なのは一等空尉殿を連れてこいよ、下っ端」

……確かに、確かに僕が三人の中で最も階級が低く、最も弱い魔導師であることは認めよう。上司と部下の関係であることも間違いはなく、同じ部隊にいることも事実だ。
だが、そんな関係と言えど、お前に下っ端扱いされるというのは最悪だな。気分がこれ以上なく不機嫌になったと言っても良い。
それに、なのはに良い印象を持たれたいと思っているのならお前が行けば良いというのに。
何故、面倒な時だけ僕に押し付けるのだ。まったく。

「……レルデ、お前はいつか必ず僕が殺してやる」

「おう、そうかい。なら、そン時を楽しみに待ってるぜ？」

「ああ。いずれ殺してやるから首を洗って待っていろ」

軽口を叩き合いながら、僕は一旦部隊長室から出ていく。
出ていく際にレルデに向かって魔法弾を放つか迷ったが、どうせかき消されて通じないと思うので止めておく。
……今の僕がレルデを殺すには不意を突くぐらいしか思いつかないと言うのも理由の一つだ。
それ程までにＡＡランク魔導師とＳＳＳランク魔導士の実力差は大きい。それに、不意を突いたところで、その攻撃は無意味かもしれない。

「……やれやれ」

……正直に言うが、あのような軽口を言えるのはレルデだけで他の者には言えない。

理由はレルデ以外の者に言ったとしたらその人は本気になってしまうかもしれないし、それ以前に僕のことを嫌うだろう。

その人が敵だったら別に嫌われても構わないが、同僚だったら駄目だしな。

何だかんだ言っても、一応、僕とレルデは互いに信用し合っている。

だけど、勘違いしないで欲しい。

シュレン・ガルディンとレルデ・ローラルドは互いに信用はしているが、互いに”信頼”はしていない。

頼ることをしないのだ。少なくても、僕はレルデに対して頼らない。

レルデは仕事を僕に押し付けてきているものの、それは頼っているという訳ではない。

ただ単に押し付けられる相手に押し付けているだけにすぎないのだ。だから、レルデは僕だけにではなく八神部隊長にも苦労をかけさせている。

まぁ、何とも、迷惑な話ではあるが……。

「本当に昔は真面目な奴だったんだがな」

先程、レルデが自分の知っている人の正確が真逆になったら怖いと言っていたが、特命隊の者は全員、その恐怖を最低でも一回は味わっている。

なのはと一緒に特命隊の隊舎の時に向かっていた時、少しだけ話したが昔のレルデという人物の特徴は真面目の一言に限った。

今の僕よりも多くの仕事を一人でこなし、部下にはできる限り負担をかけさせないようにしていた。

それがあの日、突然。

『俺、これからは不真面目キャラで生きていくことにしたぜっ！』

……本当に、あの時は特命隊の殆どの者が驚いていたな。

最初、僕はドッキリでも仕掛けているのかと思ったが、次第にそうではないと理解していった。

それから、レルデを中心として無茶苦茶な部隊になっていったな。

毎日毎日馬鹿なことをしていって、僕がどれだけ苦労をしてきたことか。

「……本当に大変だったな」

今思い出してみても、まともなことがなかった。

レルデは僕よりも年齢が上のくせに僕よりも子供で、それなのに僕よりも強い魔導師だ。

何とも憎たらしいことだが、既にこんなことはどうでもいいと考

えられるようになっているので問題はないだろう。

……っと、何を僕は回想に浸っているのだ。

今の僕の優先順序はなのはを部隊長室に案内することで、このようにゆっくりと回想に浸ることではない。

どちらも両立して行うことも出来ないことはないが、早く案内しないとレルデにグダグダと文句言われてしまう。

それはできる限り勘弁したいことなので、急ぐとしよう。

それにしても、僕がこのように回想に浸るというのは珍しいことだ。

苦労していたことばかり思い出してしまうのに、何故こうも特命隊にいた時の光景がよく頭に思い浮かぶのだろうか。

今日、セレンからここに来るように言われた時から特命隊に行くことを知って、テンションが上がっているのかもしれない。

いや、それよりも前から変化していたのかもしれない。

……何というか、最近の僕は僕らしくないな。

第二十三話　『特命隊　3』（後書き）

と、言うわけで二十三話でした。
今回はシュレンとレルデの会話オンリーでした。
またかよと思う人もいるかもしれませんが、先に言っておきます。
今後、日常でシュレンとレルデの二人の会話オンリーの話はもう出てきません。
まぁ、予定なんで絶対とは言えませんが、少なくてもその予定です。
理由はその内に。
あ、今回名前だけ出てきたオーリスさん。今後、色々と出てくるかもしれません。

次話からは多分短めです。でも、更新速度は変わらないです。
すみません。

この小説に対する意見とかありましたら、感想とかの方にお願いします。
では

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ『シュレン』（前書き）

短いですけど、更新です。
長さは前回の半分で、相変わらずの思考が長いです。

では、Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ『シュレン』始まります

……あ、サブタイの“シュレン”は敢えてカタカナにしています。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　『シュレン』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

なのはを部隊長室に案内するという面倒事を押し付けられ、僕は先程隊員達と訓練をした場所に戻っていた。

やはり、なのはが隊員達と会話をしているということで連れてこなかったのが失敗だったのだろう。しかし、あれはなのはを思っての行為だったので、あの場に残したのは無駄なことではないと思いたい。

……なのはの為の面倒事なら別に構わない。

「……と、格好をつけたものは良いものの」

やはり面倒事と思っているのは変わらない訳で、結果的に過去の自分を叱りたい衝動にかけられる。そんな自分をすぐに意思が変わってしまう者と思いながら、目的の場所にたどり着く。

隊員達の中心になのはがいて、全員がまだ僕の存在には気づいていない。しかし、なのはを迎えに来ることは聞いていたらしいので、僕の存在に気づくのには数秒しかかからなかった。

「あ、シュレン君……」

最初になのはが僕のことを呼ぶ。呼ぶのだが、その声には先程のような元気はなく何処か気まずそうな雰囲気を持っていた。
それを不審に思い、彼女に聞く。

「……何だ、どうかしたのか？　さっきと比べて元気がないように見えるが」

「ううん、何でもない。気にしないで」

そう言われても、さっきと比べて本当に元気がなくなっているように感じるので、気にするなという方が難しい。
もしかして、隊員達が変なことを言ったのか？　だとしたら少しばかり話をしなければならないな。
それも説教のような話を。

「……何か、なのはに対して失礼なことを言ったのか？　言ったのなら素直に言え。
そうすれば、少しだけなら妥協してやる」

「いやいや、私達は失礼なことは言ってませんよ？
……ただ、余計なことは言ったかもしれないですけどね」

愉快に笑いながら僕の問いを曖昧に返す。
だが、僕はその曖昧な返事に対して、――余計に苛立つというのも変な話だが、――苛立った。

その余計な一言が失礼なことになるかもしれないというのに、何故そんな曖昧な返答を返すのだ。
僕が求めているのは、何故なのはの元気がなくなってしまったかというただ一つのこと。
それ以外の言葉は求めていない。必要ない、と。

「大丈夫だよ、シュレン君。ちょっと皆の言うことに付いていけなくて困っていただけだから」

「……本当か？」

「うん、本当。それより、ローラルド少将の所に行かないと行けないんでしょ？　だったら早く行こうよ」

「……君がそう言うのなら、そうしようか」

どうも腑に落ちないが、なのはがそう言うのなら一応信じてみることにしよう。
それに、隊員達の話に付いていけなくなったというのも大いに有り得る話で、それ以前に僕がなのはをよく知らない部隊に一人にしたのが間違っていた。

だから、本当は隊員達に責任はなく、僕一人にある。
だから、僕一人で苛立っているのも、間違っている。
だから、とりあえずこの場では考えるのを止めよう。

……とはいえ、なのはを部隊長室に案内している時には軽く聞いてみることにしよう。

その為に、なのはをこの場から離させることを一番に考えて、身体をなのはの方へと向け彼女の名前を呼ぶ。
いつもと同じように呼んだつもりだった。

「なのは」

「……し、シュレン君？」

しかし、何か違和感を持ったのか、なのははキョトンとした声で僕の名前を呼んだ。
とはいえ、違和感を持ったのは僕も同じだ。

何せ、僕は無意識で彼女に手を指し伸ばしていたのだから。

……何故、手を伸ばしているのだろうか。
これではまるでエスコートしますよとでも言いたげな行動ではないか。僕は紳士ではないのに、何故こんなことをしているのだ。
……ふむ。

「いや何、先程のように転ばれたら困ると思ってな」

適当な理由で誤魔化しながら、伸ばしていた手を引っ込める。
そうすることで、今の行動がからかわれていたと思われるからだ。
無意識で行なってしまった行動とは言え、誤魔化さなければ変な誤解を生む。
例えば、今この場にいる隊員のように。

しかし、結構冷静に誤魔化すことができたと思うので、そこまで大袈裟に変なことは思われないだろう。

「……ジー」

先程のように黄色い悲鳴は上げず、ジト目で今の僕の行動を見ている。

大声は上げていないが、隊員達が考えていることは予想できる。大方、何故僕がなのはに対して手を指し伸ばしていたのかとでも思っていたのだろう。

だが残念。

その疑問の明確な答えを知っているのは誰にもいない。

……まぁ、強いて言うのならば、無意識というので間違っていない筈だ。

「今の行動は気にしないでくれ。さて、部隊長室に案内する」

「う、うん」

逃げるように僕はなのはに提案して、この場から逃げることにした。

これ以上、この場にいては隊員達の質問責めが待っているだろうし、何より少しだけ恥ずかしいと思っている。

前なら恥ずかしくも思わなかっただろう。

しかし先程、レルデに異性を意識していないとか、そんなことを言われたからだ。余計なことを言われたせいで、少しとはいえ気にしてしまっている。

だが、時間が経てば忘れ、こんな想いはなくなってしまうのだろう。

……それにしても、あのように手を指し伸ばすのは随分と久しぶりことだ。

思い出せる範囲で思い出すのならば、八年前だな。あの時は今回のように呑気な理由ではなかったが、手を指し伸ばした。

まぁ、それも仕方のないことなのだろう。

あの時は彼女を救う為に手を伸ばしたのだから。

紳士さとか、綺麗さとか、そんなものはなかった。あの時はただ単に我武者羅に手を伸ばしただけ。

そして、この手は彼女を守ることができた。

それがどれだけ安心したことだったか。

僕は、あの出来事を忘れない出来事の一つとして覚えている。

そこでふと、彼女のことを見る。

僕がこの手で守ることができた彼女のことを。

「……ん、どうしたの？　シュレン君」

「……別にどうということは無い。ただ、昔のこと思い出していただけだ」

互いに同じ過去を歩んでいなくても、僕となのはは案外と性格が似ている。

別に、同じように生まれた訳でも、同じように育ってきた訳でも、同じように生きてきた訳でもないのに、僕となのはの性格は似ている。

とはいえ、それは“互いに臆病者”という共通点でしかない。

――もっと正確に言うのならばもっと多くの共通点があるが、この際は置いておく――

しかし、それでも人間の隠している性格が同じ者同士というのは何故か性格が似るものだ。

僕はこれを人間の隠している性格というのはその人間の本質であり、その人間の行動、思考などを最終的に左右するもの。故に、隠している性格が同じ者同士は性格が似るようになるという風に考えている。

僕一人という小さな存在が考えたことではあるが、意外なことにこの考え方は間違っていない。

寧ろ、このような考え方で色々と納得できる。

僕の身近の人の中に、今の考えと殆ど同じような人がいるのだ。

「……さて、着いたぞ。ここが部隊長室だ。

最低限のマナーを言いながら入ればレルデに嫌われることはない筈だから、そうするといい」

部隊長室の前で、一応そう言っておく。

何故一応かと言うと、先程のレルデの行動からレルデがなのはを

嫌いになるとは思えないし、それ以前に何故かガチガチに緊張しているなのはがいる。
僕がこんなことを言わなくても、最低限のことは言うだろう。

最も、緊張しすぎて喋れないという事態を除いて考えれば、の話ではあるが……

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　『シュレン』（後書き）

と、言うわけでサイドストーリーでした。
とりあえずはなのはを部隊長室前まで案内するところまでです。本当はここで一話分の長さ（大体、５０００文字前後）ぐらいかけたら良かったのですが、少し思いつかなかった為サイドストーリーという扱いにしました。

とはいえ、セレンのサイドストーリーと同じぐらいの重要さはないですが、それでもある程度は重要な話もありました。

例えば、なのはを救った時、シュレンが何と思っていたかなどですね。

まぁ、そんな訳で今回でした。

この小説に対する意見などありましたら、感想の方にお願いしますでは

第二十四話　『特命隊　４』（前書き）

頑張って三日に一度更新。結構、疲れる。
そろそろ定期テストの勉強をしなければいけないのに。

では、第二十四話『特命隊　４』始まります

第二十四話　『特命隊　4』

Ｓｉｄｅシュレン・ガルディン

僕となのはは部隊長室前に着くまでなのはの隣にいたが、部隊長室前ではなのはの後ろに付いていくような位置に立つ。
本来ならば、なのはを案内した僕の方が先に入るべきなのだろうが、レルデの性格から考えてもそうすることにした。恐らく、レルデは僕が先に入ったら『見たいのはお前じゃねーよ』という物凄く失礼なことを言うだろう。
なのはもこのことには若干の抵抗を見せたが、最終的には納得…
…正確には諦めた。

「じ、時空管理局遺失物管理部機動六課……た、高町なのは、入ります！」

「……同じく、シュレン・ガルディン。高町なのは一等空尉を連れてきました」

なのははガチガチに緊張しながらも最低限の事を言って、部隊長室に入りデスクに座っていたレルデに近づく。
僕もなのはに続き、レルデの傍に行こうとしたが足を止めた。
今近づいたとしたらなのはは緊張した状態のまま会話をすること

になる。
　別に、緊張したままでも会話は可能だが、少しでも緊張を解させておいた方が良いだろうという考えのもと、そうすることにした。
　だから、僕はなのはとレルデの会話を黙って聞くことにする。

「……初めまして、高町一等空尉殿。知っていると思いますが、自己紹介を。
　時空管理局本局特命隊所属レルデ・ローラルド少将です。これからよろしくお願い致します」

「は、はい！　高町なのは一等空尉です。こ、これから仲良くお願いします！」

「ははっ、そんなに緊張しなくて良いですよ。もっとリラックスして。ずっと、緊張してる状態のままだと疲れるでしょう？」

「はい……すみません」

「謝らなくても良いですよ。別にこちらは余計なこと提案してだけですので」

　……キャラが変わりすぎだな。何だコイツ。
　レルデが真面目な性格だった時でもこんな口調ではなかったというのに。
　前のレルデはどちらかというと僕のような口調で、軽い冗談を言う奴だったが、今のレルデは笑顔ばかりを浮かべている青少年という言葉が合っているだろうか。

先程の呼び出しでは笑顔を浮かべず口調だけだったので、まだそこまでの違和感――とはいえ、それでも違和感はある――は無かったが、さすがにレルデが好意的な笑みを浮かべるのは気持ち悪いと言える。

「そう言えば、妹のセルスと仲良くしてもらっているようですね。アイツは色々と抱え込む奴なんで、他人との関わりを持つのは良いことはありがたいです」

「い、いえ、セルスさんにはご迷惑ばかりをおかけしてます」

話は自己紹介から変わって、話題はセルスのことになっていた。セルスについては二人が互いに知っている話でもあるし、互いに話しやすいことなのだろう。まぁ、レルデはそれを理解した上でこの話題を振ったのだろうが。

……何とも、細かいところまで見ているものだ。

僕には気を遣うということはまったくしないのにな。

「セルスは色々と訳有りの奴で、もう少し時間が経てば我侭を言うようになると思いますが、それは仲良くなっているという証拠なので気にしないで貰えると助かります。

その証拠にセルスはそこの隅っこにいるシュレンに対しては我侭言ってますから」

「……え？」

なのはは隅っこに僕がいると聞いて、僕がこの場にいることを思い出したかのような表情をした。
そこまでレルデとの会話に対して緊張しているのか。それとも、レルデとの会話が予想以上に興味深いものだったのだろうか。
どちらにせよ、僕のことを忘れていたというのは間違っていないようだ。

「……あれって、やっぱりそういう意味だったんですか。シュレン君とセルスさんって仲良さそうに見えますし」

僕の目を見て少し居心地が悪くなったのか、なのはは会話に逃げるという手段を取った。
……ちょっと傷つくな。

というより、なのはのことで忘れていたがセルスが僕に対して迷惑をかけるのにはそんな意味があったのか？
アレは僕の疲れている表情を見て楽しむという悪意的な意味があったのではないのか？

「……はぁ」

「……む」

……何だ、何故そんな『ダメだコイツ』みたいな視線で僕見るのだ、二人とも。

「他人の感情に気づかない馬鹿の話は忘れて、そろそろ話を本題に移しましょう」

「そうですね、それが良いと思います」

扱いが理不尽だな。まぁ、これは今に始まったことではないし、気にしないでおこう。なのはもレルデとの会話にある程度慣れたようで何よりだ。

これで先程から二人に言われている僕への悪口を止めることができる。

なのははレルデによって振り回させられる人間だと思っていたのだが、どうやらレルデと一緒なら振り回すようになる人間のようだ。

「……それで、僕達にある話とは何だ？」

二人の間で繰り広げられている僕の悪口を遮って言う。

二人としてはもう少し話したかったようだが、残念ながら僕はそれを許さない。それに、僕としてはとっととレルデとの会話を終わらせたいところなのだ。

だからこそ、二人を少しだけ急かす。

「そんなに急がなくても、ちゃんと本題に移しますよ」

「……っ」

……レルデに敬語を使われて話されるのが、ここまで不気味に思うとは思わなかった。先程、なのはに対して手を伸ばしてしまった恥ずかしさとは変わって、鳥肌が立ち少し寒気がする。

レルデがどんな意図で敬語を使ってきたのは分からないが、とりあえず止めさせよう。

でなければ、僕がある意味で我慢できない。

「だが、いい加減にその敬語を止めろ。気色悪いにもほどがある」

だからこそ、僕はそう言った。

そして、先程言っていた通りレルデ自身も敬語を使って話すというのはどうにも慣れないものらしく、わざとらしく咳をした後なのはを見る。

「シュレンが止めろと言ってるから、敬語は使わなくて良いか？高町」

「はい。構いません」

……ふむ。

僕は敬語を使われなくなったことでなのはが慌てると思っていたが、寧ろ敬語を使われなくなったことでなのはが想像していたレルデと一致し、先程と比べて表情が強ばった。

しかし、それは緊張してという訳ではなく、気を引き締めた結果のようだ。

次第にこの場には何とも言えない雰囲気が出てくる。僕は過去に何度かこの雰囲気を味わったことがある。

前にレルデが呼吸を整える時の意味を言ったが、この雰囲気は意味合いが違うだけで、これにもちゃんとした理由がある。

レルデから放たれる何とも言えない雰囲気。

これは珍しく、レルデが真剣な話をする時だ。

「さて、俺が八神の先輩のような存在であることは知っているな？で、アイツから色々とお前らの部隊の話とかをよく聞くんだが、その中でも特に気になったのがお前等二人のことだ」

……だから、僕“達”をここに呼んだのだろうか。

「前置きを長く言うのは好きじゃねぇから単刀直入に聞くが、お前等二人はちゃんと身体を休めているか？」

「……生憎と、僕はこちらにいた時ほど仕事はしていないから言うほど疲れていない」

レルデが珍しくこの雰囲気の中、どんなことを聞いてくるかと思ったら案外と普通のことだった。

僕は過去に無茶をしたことがあるなのはのように、そこまでの無茶はしていない筈だ。

だから、そう言うことが当たり前だと言わんばかりにそう言った。

寧ろ、そんなことを聞くレルデに対して疑問を持った。
その質問の答えは僕よりもお前の方が分かっているくせに。
そんな風に、いつものようにレルデに対して文句を言おうとした。
――しかし。

「……何で俺の休んでいるか、という問いに対してそんな答えが返ってくるんだ？
悪いが、お前自身が疲れているかいないかという自覚はどうでも良い。とにかく、俺は休んでいるのかどうかということだけが聞きたいんだよ」

いつもの悪ふざけや先程の敬語を使って話していた時とは違い、強い口調で僕の言葉を蹴散らす。

そのことに僕は驚いた。
とはいえ、別にそれはレルデが強い口調だったからではない。

僕はレルデが他人の言葉を否定するような奴であることは理解している。とはいえ、それはレルデにとって気に入らないことだけだ。
僕の返答が気に入らなかったというのら理解できるが、だからと言ってそこまで強い口調を遣う必要はない。
それなのにどうして、ここまでの口調を……？

そう思いながらも、今度は真面目に返答を言う。

「最近は睡眠時間が三時間未満だな。

しかし、書類の仕事はこちらの時より少ないから……ある意味ではこっちにいた時より身体は休めていると思うぞ」

「それは対して休んでいないって言うんだよ、馬鹿野郎」

しかし、そのちゃんとした返答もレルデにとっては不服のようで、僕に対して文句を言うように少しだけ真剣な眼差しで僕を見る。

……何故だ？

僕の身体のことは僕自身が一番理解している筈なのに、何故お前が知っているかのように話す？

「お前は本当にちゃんと理解できてんのか？　自分の身体のことを」

「無論だな。少なくてもお前にわざわざ言われるようなことは無い」

「……と、言っているようだが、どう思う？　八年前に失敗したことがある高町からすると」

それを聞いて、なのはが口を開いた。しかし、開いたのはレルデに促されたからではない。

何故、レルデが知っているのかということだ。

「……どうして、ローラルド少将が八年前のことを知ってるんですか？」

「どうしてと言われてもな、俺は部隊長だからある程度の情報は持

っているとしか言えないな。
それに、この話は八神からも聞いたことだ」

僕もレルデが部隊長だからという理由である程度の情報を持っていることは知っているが、レルデが八年前のことをまで知っているのは予想外だ。
……いや、あの件は僕が思っていた以上に大きなものだったから予想外でもないな。八神部隊長から聞いているようだし、知っていても不思議ではない。
しかし、レルデは八年前のことをどこまで知っているのかは気になるところだ。

「まぁ、俺の情報のソースは何処からでも良い。
それで、過去に失敗談がある高町は今のコイツをどう思っているんだ？」

レルデは“失敗”という所を強調する。
……確かに、あれは第三者から見てみれば失敗談だっただろう。
だが、だからと言って失敗という所は強調して欲しくないな。
そうしてしまうと、今のなのはのように八年前のことを思い出してしまうだろうが。

あの出来事は僕が庇う前にアンノウンを破壊できたとしたら起こらなかった事だ。
だから、失敗というのなら僕にある。とはいえ、そもそもの原因がなのはにあることは間違いないのだが。
だけど、“失敗”というところを強調するな。

……少し苛立つ。

「シュレン君は真面目で、私以上にＦＷメンバーの子達を見てくれてますけど、最近は何だか無茶をしてるように思えます。

……過去の失敗してしまった私のように」

「だ、そうだぜ。

自分が平気だと思っても他人から見てみれば違うんだよ。それを理解しろよ」

……そんなことは昔から分かっているつもりだ。

でなければ、僕は八年前から何も成長していないことになる。

「自分のことを無視して他人のことばかりに気を遣うお前は他人からしてみれば立派なんだろうが、一流の魔導師とは言えないな」

「僕は、お前の言う一流の魔導師というやつは目指していないがな」

僕がどれだけ努力しても、レルデのようなのはのような一流の魔導師になれないと、既に僕は諦めてしまっている。

だが、前に言ったかもしれないが、僕は別にそこまで悲観している訳ではない。

僕はただ自分にできることをしているだけ。寧ろ、自分にできることを行えているという時点で僕にとっては充分だ。

「知るか、そんなことはどうでもいい。
とにかく、俺が言いたいのはもっと自分のことも見ろ。もし、高町の八年前のようなことを起こしてみろ。そン時はさすがにブチ切れんぞ？」

「……っ！？」

「……」

刹那。押し潰されるような強い威圧感に襲われる。
それは本当に一瞬の出来事だった。
しかし、ＳＳＳランク魔導師から放たれる威圧感というのは相当なもので、その一瞬の威圧でも少しばかり呼吸が苦しくなった。
隣にいたなのはもこの威圧を受け、驚き冷や汗を流している。呼吸も少し荒くなっている。
相変わらず、すぐに行動に移す奴だ。
……まぁ、レルデにとっては冗談のつもりだろうが。

「と、まぁ、冗談は置いておいて。とにかく、自分のことは大切にしろよ。怪我とかされたら色々と面倒だからよ。
……あ、シュレンだけな面倒と思うのは」

「……余計な一言だ」

正確には余計な二言だが、わざわざそのことを指摘するのも面倒なので適当に文句を言うだけに留める。

それにしても、一々とこうして文句を垂らすという行動を行なっている僕もどうなのだろうか。本当に面倒ならば文句を言わなければ良いだけだろうし……。

それに、僕が機動六課に来る前は文句は言わず、考えるだけに止めていたと思う。

「ふぇ？　あ、あれ……？」

僕とレルデは今の威圧が冗談の類のものであることは理解できているので、すぐに題を変えることができるが、どうやらなのはは今の威圧を本気にしたらしく、目の前でのうのうと会話をしている僕達に驚いたようだ。

なのはがそうなるのも無理はないか。

なのははまだ、レルデという男を殆ど理解できていないのだから。

レルデに慣れるということは少しは出来ているだろう。しかし、慣れると理解は全くもって違うものだ。

そんな彼女が僕達の会話にスムーズに入ることが出来る訳がない、か。

もう少し、彼女に対して配慮が必要だったな。

「すまない。レルデはこのように不真面目な奴なんだ。だから、レルデが余程深刻な状況に居ない限り、レルデのことは適当にあしらうと良いさ」

「え、えっとこれは頷いちゃダメだよね……？」

初対面で失礼なことを言うのは気が引けると思っているのだろうが、レルデは“美人”の言うことなら文句は言わないから問題ないだろう。

寧ろ、“美人”に罵られて嬉しがるかもしれない。

……いや、いくらレルデだろうとそれはないだろう。仮にそうだったとしたら僕はレルデに対して死ねと思うことだろう。

「高町とか八神とかの美少女に罵られても、それは我々の業界では御褒美です！」

……死ね、この変態野郎。

第二十四話　『特命隊　4』（後書き）

と、言うわけで第二十四話でした。
今回は少し真面目な話でした。レルデが珍しく真剣になりましたし、話題も真面目なものでした。
まぁ、それが長続きしないのは仕方がないことでしょう。

それと申し訳ありません。今回の最後の所。正直に申しますと適当に書いてます。オチが半端なく悪いです。
良い感じのが思い浮かばなかったのです（汗

さて、あと三話以内で特命隊とはさよならかな？
結構長いです。しかも、このあとに起きる出来事も入れて考えると、シュレンにとっての一日が何話で終わるものなのか……
少し焦ってます

この小説に対する意見などありましたら感想の方へどうぞ。
では

第二十五話　『特命隊　5』（前書き）

今回は前回に比べると短いです。というより、今回は最後の部分を書きたかっただけです。
次からどんな展開にしようかな？

では、第二十五話『特命隊　5』始まります

第二十五話　『特命隊　5』

Ｓｉｄｅ――――

高町なのはにとって、レルデ・ローラルドという人物は親友の先輩という認識程度の存在だった。直接会ったことがある訳でもなく、対して知らない者に抱く印象としては極普通のものだろう。

だが、それは昨日までのこと。

今は、こうして直接会ってシュレンも混ぜ会話をしている。

そして会話を初めてからある程度の時間が経つが、なのはは一向にレルデという人物を理解することができなかった。シュレンからはレルデは不真面目な奴だとだけ聞いて会話をしているが、なのははそうは思えなかった。

何というか、目の前にいるレルデは機動六課に来たばかりのシュレンと何処か似ているように感じるのだ。

そう。少し冷徹に見えたあのシュレンに。

口調や行動などではそんなふうには見えない。しかし、それはただ演じているだけだと思えてしまうのだ。

先程、レルデから放たれた威圧。

シュレンとレルデは冗談と言っていたが、なのはにとっては冗談では済まされないレベルのモノだった。

ＳＳＳランク魔導師だからという問題ではなく、アレがレルデの本当の姿であるように思えたのだ。

そして、その姿が冷徹なシュレンと似ているように思えた。

「第一にお前はくだらないことばかりしているから部下達に呆れられ、今の性格を肯定されたのだろうが」

「だけどよ、そんな性格を認めているのも部下達だぜ？」

「それは結果の話だ。今言っただろう？　部下達に呆れられて、と。だから、結果的に認められているに過ぎない」

「まぁ、でも認められているんだろ？　世界には結果オーライという言葉もあるぜ？」

「確かに、『終わり良ければ全て良し』という言葉があるが、お前の場合は現実から逃げているだけだろう」

シュレンとレルデはなのはの目の前で皮肉を言い合っている。
目で見ている限りではとても仲良さそうに見える。部隊長室に来る前に一緒に喋った隊員達もこの二人は仲が良いものだと言っていた。
確かに、目で見てる限りではその通りだろう。

しかし、なのはは先程の考えがあるように余計な事を考えている。
本当に二人は仲が良いのだろうか。ただ、二人は互いが互いのことを探り合っているだけではないだろうか、と。
もちろん、なのははそうではないと分かっている。

ただ、どうも腑に落ちないのだ。

「ほらほら、高町も遠慮しないで会話に参加しろよ？　別に俺に対しての礼儀とか対して気にしねーから」

「……お前がくだらないことばかり言うから、なのはが会話に参加できていないのだ。

それにそうでなくても、ここで会話をしなくても機動六課に到着してからでも会話は出来るだろう？

なら、なのはにとって会話がしやすい場所で会話をするというのが良いのではないか？」

「……いいよ。別に私に対して気を使わなくても」

気を使ってくれているというのは分かるが、だからと言って今日初対面の人に、ましてや階級が上の人にそう言われても中々会話に参加できないものである。

それはそうと最近、気になったことがある。

セレンにあんなことを言われて以来、なのははシュレンのことを気になるようになり少しだけ意識してシュレンのことを見ていたのだが、それから気づいたことがある。

それはシュレンが何かとなのはに対して気を使っているということだ。

例えば、先程のレルデとのやり取り。なのはにとって話しやすい場所で会話をするのが良いとシュレンは言った。それも、気を使っているということになる。

だが、それだけでは無い。思い返して見ればまだまだ沢山ある。
その中でも一番気になったのが、部隊長室に案内される前。
あのシュレンがなのはに手を指し伸ばした時のことだ。

「……レルデ、お前は僕達が今この場にいることが当たり前のように思っているだろうが、生憎と僕達はお前と違って忙しいのだ。先程、お前は身体を休めろと言っていたが、仕事を終わらせなければ身体を休めることなど出来ない」

「まぁ、そう焦んなって」

「焦ってなどはいない。とにかく僕が言いたいのはこんなところでグダグダと話すのは終わりにしたいと言っているのだ」

なのはが余計なことを考えている内にも、レルデとシュレンの会話は進む。
なのはが気づいた時にはシュレンとレルデの会話も終わりそうな雰囲気を持っていた。
時間にしては短く感じていたが備え付けられていた時計で時刻を確認すると、この部隊長室に入り、会話を始めた時からおおよそ三十分ぐらい経っているところだった。

「なぁ、シュレン。今のお前の言い方からして仕事がなければ身体を休めるんだな？」

「……ん、そのつもりだ。お前の意見に逆らうと面倒だからな」

「高町もやるべきことがなければ身体を休めるか？」

レルデはシュレンに続き、今度はなのはに対して質問をする。

なのはは、シュレンに対しては“仕事”がなければ、なのはに対しては“やるべきこと”と、若干質問の内容が変わっていることに気づいた。

理由は分からないが、シュレンとなのはの間には明確な意識の差があるのは分かった。

とはいえ、なのはとレルデは今日初めて会った訳だから、そのような差があったとしても何も不思議なことではないし、問題がある訳でもない。

寧ろ、シュレンとなのはに対しての的確な言葉だと思い、細かいところまで知ってる人という印象を与えられる。

「はい。やるべきこと……仕事がなければ一日ぐらいは身体を休めます」

なのはは“やるべきこと”という部分を自分で“仕事”という言葉に直す。

別にそうすることに大した意味はない。ただ、シュレンと違うということが少しだけ嫌だったのだ。

「僕も、一日ぐらいなら身体を休めるが？」

シュレンもなのはと同じことを言う。
別に、シュレンは八年前のなのはのように無茶をするつもりはない。
寧ろ、なのはのように無茶をするとどうなってしまうか理解していて、シュレン自身は自分なりに気を付けている。
ただ、それが一般の人と比べると、無茶をしているようにしか見えないだけで。

「ほう、それは良いことを聞いたぜ。二人とも、仕事が無ければ身体を一日中休めるんだな？」

「僕は今、まったく同じことを言ったぞ」

「私も、私も仕事が無ければ身体を休めます」

言葉ではそう言うも、仕事が無い日があることなど無いということは分かっている。
今日、仕事がないのは第二段階の合格発表を受けたＦＷメンバーだけで、他の者は色々と忙しい。
ライトニング隊の隊長陣は出張などで忙しく、スターズ隊も中々に忙しい。ライトニング隊がいない分、教導をするのがスターズ隊だからだ。今日はもう教導が無いとはいえ、今後の訓練の内容を決めておかなければならない。
シュレンという、なのはにとって優秀な魔導師がいるから少し助かっているものの、それでも忙しいものだ。

「……レルデ、言っておくが、八神部隊長や機動六課の者に仕事を押し付けて仕事を無しにするというのは駄目だぞ。そんなことをして、その者が倒れてしまっては元も子もないからな」

「安心しろ。そんなことはしねぇよ」

シュレンはもしかしてレルデは自分達を休ませる為にそんなことをするかもしれないと思い、忠告するがそれは意味が無かったようだった。

同じようなことがシュレンの過去にあったからこその忠告だった。

とはいえ、その時は部隊全体でシュレンのするべき仕事を回したので誰かが倒れるようなことはなかった。だが、決して一人でこなすような仕事の量ではなかったと、レルデは改めて思う。

「だけど、命令を一つ言うぞ。ちなみに拒否権は無しだ。なんて言ったって俺は少将だからな」

「……職権乱用だな」

「……あ、あはは」

シュレンの的確過ぎる言葉に思わずなのはは苦笑いを浮かべる。

特命隊に来る前まではどんな人だろうと思っていたが、なのはの

中では段々とレルデの人物像が出来上がっていく。
とはいえ、悪いモノだけではない。それは先程までの考えで十分に分かると思う。

「うっせ。んじゃ、命令な。今からお前ら二人――」

なのははレルデの命令が身体を休める類であることを確信していた。
そうでなければ質問の意味がなく、ただ聞いただけになってしまう。シュレンから聞いた話によると、レルデはあまり無駄なことはしたく無いとのこと。
だからこそ、なのははそう考えた。

そこで、レルデは一度言葉を区切り、呼吸を整える。

その行動の意味がどのようなものであるか　なのはには分からなかったが、そこまで大袈裟なことをする必要があるのだろうか。
呼吸を整えるのは、冷静になりたいと思う時にだけ使うなのはにとって、レルデの行動は不思議に思える。
ただ、身体を休めろといったことを言うだけでは無いのか？　と。

そんな風に呑気に考えていた時だった。
……思えばこれがなのはにとって最も苦労したことでもあり、同時に過去で最も長い一日になった。

正直に言えばこの時、シュレンの表情がどのようなものだったか見ておけばこんなことにはならなかったと思うし、何より先のレルデの質問の意味をよく考えておけば良かったかもしれない。

だが、後悔先に立たず。
起こってしまったことはどうすることもできないのである。

或いは、セレンと特命隊の隊員達に余計な事を言われなければ、特に問題は無かっただろう。
こんな一言を言われても。

「――――お前ら二人　デートしてこい」

第二十五話　『特命隊　5』（後書き）

と、言うわけで第二十五話でした。

今回は三人称でも特になのはに視点を置いて進めました。でも、何でだろう。

今回のなのはは三言と苦笑いしかしていない……。時の文が多すぎた。

さて、残りの特命隊での話もそろそろ終わりで、次からは最後にあったデート（もどき）になるんですかね？

作者自分ですけど、今後の展開は対して考えていませんので、困っています。

あ、それと、ここ一ヶ月は定期更新だったのですが、一週後から定期テストがある為、更新が遅れます。

またかよ……と思う人はすみません。

遅くても、二週間後ぐらいで、早い場合は分からないです。

まぁ、二回ぐらいは更新したいなーとは思っています。

この小説に対する意見などありましたら、感想の方にどうぞ

では

第二十六話　『特命隊　6』（前書き）

シュレンとなのはの関係性だ。
うわ、やっちまった……。二回ぐらい更新したいとか前言ったのに。
更新遅くてなって申し訳ないです。反省してます。

では、第二十六話『特命隊　6』始まります

第二十六話　『特命隊　6』

Ｓｉｄｅ――――

“デート”という言葉は人によっては様々な解釈の仕方がある。
一般的にデートというのは逢引や、恋愛関係または恋愛関係に進みつつある二人が外出し、その時間を楽しむこととして知られている。
が、人の考え方も十人十色。そうは思わない人もいる。
例えば、デートというのは異性と一緒に何処かに行くことだけでも、恋愛関係でなくても使われることもある。
とはいえ、異性と一緒に行くのならある程度は仲の良い関係と思われることが殆どなので、一般的な人からしてみれば恋愛関係があってもなくてもデートをする二人は、恋愛関係があると思われることが多い。
そんな意味のあることを今、レルデ・ローラルドという男はしてこいと言った。

「……僕はなのはと“デート”をしてくれば良いのだな？」

「……まぁ、その通りだな。ちゃんとエスコートしてこいよ」

「言われなくても分かっているぞ」

レルデのデートをしてこいという発言に対し、シュレンは淡々とした口調でレルデに確認作業をするかのような口調でレルデと話す。
一方、レルデとなのははその言葉を受けて思うことがあった。
細かいところは違うのだが二人して共通して言えることは、何故シュレンがいつもの口調なのかということ。
シュレンがここまで乗り気、いや反発してこないと言った方が良いだろうか。

「何だ？　僕は、お前のデートをしてこいという言葉に素直に従おうとしているだけなのに何故そう驚く？」

「……いや、何つーか、お前のことだから『デートをする時間があるなら、機動六課で身体を休めた方が効率が良い』とか、そんなことを言うと思ったんだよ」

「言っておくが、僕にも僕なりに考えることがある。毎回毎回、お前の意見に自分の意見を挟まないさ」

言葉を聞いて、レルデは目の前にいるシュレンが本当に本物かどうか疑った。
先程までの口調、先程までの行動から考えると、間違いなく目の前にいるシュレンが本物であることは疑いのない事実の筈なのだが、それでも疑ってしまう程の違和感をレルデは感じた。

一言で言ってしまえば、シュレンが柄にもなく上機嫌　（に見える）ということだ。

レルデはデートをしてこいという一言しか言っていないにも関わらず。
しかも、レルデが想像していたことでは、デートという言葉に少なからず文句を言ってきたりするものだと思っていた。
だが、現実は違っていた。
レルデ自身も、ここまで予想に反するリアクションをシュレンがするとは思わなかった。とはいえ、もう一人の方は想像通りのリアクションではある。

「え、え？　……えっ！？　……アレ？」

見事になのははは動揺していた。まぁ、無理もないことだ。
何といっても、デートをしてこいといきなり言われたのだから。
しかし、数日前の彼女ならここまでの動揺は無かっただろう。
何故なら、数日前までなら、なのははシュレンをそこまで意識していなかったのだから。

しかし、セレンにシュレンがなのはに対して特別な感情を持っていると言われた。
それだけでも気にするには十分な理由なのだが、先程ファーストネームの説明を隊員達からされ、さらに気にするようになってしまったのだ。
なのはがシュレンに抱いているのは恋心と決まった訳ではないが、それでも、その可能性を完全に捨てることが出来なくなった。

それに加え、もう一つ動揺している要因がある。

「僕はデートをするのは初めてだから、上手くエスコートできないかもしれないが、そこは許して欲しい」

「……うっ！」

それもシュレンのこの機嫌の良さにある。

レルデがデートをしてこいと言ってからの機嫌の上がりよう、レルデと同様になのはも不審に思うことがある。

しかし、なのはにとって“デート”という繰り返される言葉は恥ずかしいと思える言葉であり、そんなことを気にしていられないのだ。

事実として、シュレンがデートという度に顔を少しずつ紅潮させていく。

「レルデ、お前はたまにだが良いことを言う。お前に対する認識を少し改めよう」

「お、おう……？　そりゃあ、何よりだ」

「それにしても“デート”か。楽しみだ」

シュレンが何故機嫌が良いのかは分からず、レルデは原因を考える。とはいえ、原因は“デート”にあることは間違いないのだが、そのことが余計にレルデを混乱させる。

第一に、シュレンは“デート”のような一般的に楽しい、娯楽と思えることは対して知らない筈なのだ。

だから、レルデ率いる特命隊の者はシュレンに対して色々な知識を教えていた。
最も、その知識はシュレンの興味を引くものでは無く、覚えられていないと思っていたのだ。

しかし、目の前にいるシュレンはどう見てもデートをすることに対して、興味が無いという訳ではなさそうだ。それどころか、デートをすることを楽しみにしているようにも見える。
いや、実際にそうにしか見えない。

「シュレン、何でお前そんなに機嫌が良いんだ？」

何となく、そう問うレルデ。
いつもなら機嫌が良いことを否定したり、機嫌が良く見えることに対して『お前の目は節穴か？』と、暴言を言われたりするのだが……。

「……む、僕の機嫌が良いことが分かるのか。隠していたつもりだったんだが」

今回は否定されない。
それに隠していたつもりだったと言うが、全然隠せていない。いつものシュレンは本当に思っている感情が読みにくいのだが、全く隠せていない。とはいえ、それでもシュレンのことを深く知らない者は無表情と言うだろうが、今のシュレンはいつもと違って表情が柔らかい。

「お前、本当に俺の知ってるお前か？」

レルデは一度、尋ねることにした。

先程も目の前にいるシュレンが本物であると考えたばかりだが、何となくそう聞くことにした。

「レルデ。お前は少し僕という存在を知っているつもりでいるな？それだから機嫌の悪い僕に暴言を言われる。

良いか、お前は大抵のことなら知っているが、全てを知っている訳ではない。ましてや他人のことなど知っている訳がないのだ。だから、例え僕がいつもと違った行動をしたとしてもそれは僕の個性であると認めなければならない」

「……」

「つまりだ。他人がいつもと違った行動をしても対して気にする必要は無いということだ。

……まぁ、最も、その人物を疑いの目で見ているのならば、話は変わってくるがな」

……やはり、目の前のシュレンは本物だ。

そうでなければ説教のような話をこうも理論的に、言葉を並べ替えてしてくることはないだろう。しかし、いつもとは違うシュレンの行動に違和感が残っているのは仕方のないことだと思えた。

そこでふと、レルデは思った。

もしかして、前にが自分の口調や考え方を変えた時、シュレンは今の自分と同じような考えを持っていたのか、と。

（……いや、それはねぇな）

シュレンは自分とは圧倒的に違う。考え方も生き様も。

真逆と言いたい訳ではないが、それでもレルデとシュレンの考えはかなりの差がある。そんな奴と考えた結果が同じになる筈が無い。

そう考えて、レルデは自分で出した考えを否定した。

「それで、僕達は今すぐにデートに行けば良いのか？　行けと言うのであれば、僕はすぐに準備をして行くことになる」

「俺はすぐに行けと言おうとしたんだけどよ……」

レルデは視線だけでシュレンに自分が何を言いたいか理解させた。

いや、正確には理解させようとしたというのが正しい。

間違いなく、シュレンは勘違いしてその意味を受け取ると思ったからだ。

ともあれ、レルデが伝えたいこと。それは、予想以上になのはがデートという言葉に過剰に顔を紅潮させているということだ。

先程から口をパクパクと動かしているばかりで、言葉にはなっていない。本人は伝えているつもりだろうが、まったく伝わっていない。

寧ろ、顔を赤くしていて可愛いだけだ。

「高町が恥ずかしがっているから、悪いけど外で待ってて貰えるか？　俺個人としても高町には話があるからよ」

「……了解した」

そんな言葉を残してシュレンは素直に部隊長室から去っていった。

素直に行動するシュレンに対しても思うことがあるが、それよりもこちらの話の方が重要だ。

少なくても、レルデにとっては重要な話である。何といってもその為にわざわざこの特命隊に高町なのはを呼んだのだから。

シュレンは先程の話の為になのはを特命隊に連れて来させたと考えているようだったが、確かにそれも間違っていない。理由の一つである。だが、レルデにとってはあくまでもそれは普通の話でわざわざ連れて来させるような話でもない。

レルデにとって、今回の会話で重要な点は二つ。

一つ目はシュレンとなのはにデートをしてこいと言うこと。

これは先程達成した。シュレンの反応には少しばかり驚いたが、シュレンのあの様子だと、どのような“デート”になるかは分からないがデートをしてくるのは間違いないだろう。

よって、目的の一つを達成だ。

そして、二つ目。

ある意味、こちらの方が真面目な話で、実は結構前から気になっていたことだ。自分が調べてみても対した情報は手に入られず、よ

く分からない状態だったが目の前にいるなのはに聞けば分かる。
何故なら、気になっていることの当事者なのだから。だから、本人の口から聞こうと思い、ここまで足を運ばせた。
迷惑な行動だと自分でも思っているが、気になっているので仕方がない。
レルデの気になっていること。それは。

シュレンとなのはの関係性だ。

第二十六話　『特命隊　6』（後書き）

と、言うわけで第二十六話でした。
うん、前書きにもありましたが今回、やっちまいました。
ほのぼのしようとした空気を書こうとしたのですが、途中から若干の真面目モードになってしまいまして、変な文になりました。

デートになるのは後二話ぐらいかかりますね。
自分はほのぼのしたところが苦手なので、リハビリとして書く二話は変な文になるかもしれないのでご了承ください。

次話はレルデと今回も空気だったなのはさんとの会話です。
シリアスになるかもしれないですし、そうならないかもしれません。

この小説に対する意見などありましたら、感想にどうぞ。
あ、感想の規制でしたっけ？　まぁ、感想の受付を制限無にしましたので、どんどん感想ください。

では

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　８（前書き）

更新はちょっときついかなぁ？　なんて考えてます。まぁ、ゲームやってんのがいけないんですけどね！
今回は、伏線回収とさらに伏線を張るというちょっと無茶苦茶な文章です

では、Ｓｉｄｅｓｔｏｒｙ　始まります。

Side story 8

Side――――

気になっていること。それは高町なのはとシュレン・ガルディンの関係についてだ。

シュレンとレルデは少し長い付き合いではあるが、レルデはシュレンの人間関係について深く知らない。

というのも、シュレンは自ら進んで関係を作る人ではないので、シュレンが誰と関係を作っているのか分からないのだ。

「シュレン君との関係ですか？」

「ああ。お前さん達二人の仲が良さそうに見えて気になってな」

「別に、特に仲が良いって訳じゃないと思いますけど……？」

「こっちにいた時のシュレンを知ってる奴なら大抵の奴なら驚くと思うぜ？　アイツが特定の人物と仲良さそうに見えるだけでも。実際に、仲が良くなくてもな」

そう。特命隊所属だったシュレンは他人に対して良い付き合いを

持たなかった。
どれだけ自分から関係を良いものにしようとしても、シュレンはまるでそういったことに興味を見せず、文字通り最低限の付き合いとなった。
それは誰にでもそうだった。
シュレンと良い関係にしたいと思っていた者に対しても、シュレンよりも階級が上の者に対しても、シュレン自身は関係を良いものにしなかった。
それなのに。

「お前達の部隊、機動六課所属になってから少しだけアイツの性格が変わったんだよ」

前にレルデがシュレンに特命隊から機動六課に異動命令を出した時、シュレンは文句を言わなかった。不満を口に出して反抗しなかったのだ。
だが、今のシュレンはどうだろうか。
レルデの遊び半分で言った言葉に文句を言い、事あらばレルデに対して魔法弾を向ける事もある。
レルデからしてみれば、物凄い変化だ。

「で、その性格が変わった一番の原因は高町、多分お前さんだ」

「……え？」

「で、だ。勝手なことで申し訳ないんだけど、お前とシュレンの関係について調べさせてもらった。

でもよ、お前とシュレンが”初めて会ったのは機動六課”の筈なんだ。まぁ、もしかしたら別の所で会ってるかもしれねぇけど」

なのははレルデの言葉を聞いて、ある一つの疑問が思い浮かぶ。何故、自分の八年前の事を知っているというのにも関わらず、なのはとシュレンの関係について知らないのか。

自慢したい訳ではないが、当時のなのはは管理局でも比較的有名な魔導師だった。だから、レルデが八年前のことを知っていても可笑しくはない。しかし、それならば何故そこにシュレン・ガルディンという人物が出てこない？

「……シュレン君に聞けば良いんじゃないですか？　私に聞くよりも」

「ああ。俺もそう思った。だから聞いた。だが、シュレンは教えてくれなかった」

もしかしてカマを掛けられているのではと思い、こちらから質問する。しかし、どうやらレルデは本当に分からないようで、表情は少しだけ困惑したようなものだった。

それが益々余計なことを考える要因となる。

「ローラルド少将は――」

「レルデだ。レルデと呼べ。もしくはシュレンと同じくレルデか、妥協してレルデ少将だな。まぁ、とにかくそう呼んでくれ。

ファミリーネームの方で呼ばれるのはあまり好きじゃない」

質問を続けようとしてローラルド少将と呼ぶなのはだが、それは一旦レルデに遮られる。

「敬語は使っていいけど、名前だけはファーストの方で呼んでくれ。……あ、八神と同じく先輩でも良いぞ？」

「……なら、レルデ少将と」

「ふーん、そう呼ぶのか。成程、いくら親友と言えど、考えていることは違うのか」

「……え？」

「いや何、こっちの話だ。気にしなくていいぞ。それで、何だ？俺に聞きたいことがあったんじゃないのか？」

一瞬だけ先程のような真面目な表情になり、なのはの言葉に小さく呟く。

はやての場合は今の提案の中で先輩と呼ぶことを選択し、なのはの場合はレルデ少将と呼ぶことを選択した。

別に違和感のあることではない。価値観の違いの前では、その程度の差などは些細なものなのだから。

だが、特定の人物の価値観がどういうモノであるか理解した場合、その人物の性格まで理解できてしまう。

そして、レルデの中の高町なのはは余程の真面目な人か、少し臆

病な人物の二つに絞った。

「あ、はい。レルデ少将は八年前のことどこまで知っていますか？」

「どこまでって言われても、一般的に調べれば出てくる情報ぐらいしか知らねーぞ？」

何故その二つなのか、とはいえ、一つ目の理由は言わなくても分かるだろう。

敬語に加え、最低限の妥協でレルデと呼ぶことにした。それは真面目以外の何者でもないと考えることができ、生真面目な人であると考えることができる。

そしてもう一つ。

「お前が失敗して、空を二度と空を飛ぶことができなくなるかもしれないぐらいの重傷を負ったのは。

普通に考えて、よく今こうして魔導師としていられるな」

「……っ」

「そうやって恐怖を感じる程、怖い思いをしたにも関わらず魔導師なんて続けられるものだ。俺だったら魔導師なんて辞めてるかもしれねぇな。そんな恐怖を感じるくらいなら」

もう一つは、高町なのはという少女は案外と臆病に見えるということだ。

今の恐怖の件に関しても、魔導師を辞めてしまえば皆から見捨てられるのが“怖い”。だから過酷なリハビリでも、その恐怖心に勝つことができる。

そして、先程のレルデ少将という呼び方。正直に言えば、レルデは先輩と呼ばれたかった。

……これはあくまでレルデ自身の体験談の話で、なのはがそれに該当するかどうかは分からないが、それでも可能性があるだけ考えておいた方が良いだろう。

レルデはSSSランク魔導師で、管理局の中でも……いや、魔法に関わっている世界ならばレルデ・ローラルドという人物は殆どの人が知っているだろう有名人だ。

もちろん、有名になる前と有名になった後ではレルデの周りの人間関係というものが変わった。

それまで興味も無かった人物がいきなりレルデに対して興味を持つようになったり、レルデのことが嫌いだった者が急に態度を変えたり、逆にその知名度を利用としようと考える者が現れたりと、人間関係の全てが変わった。

……何もかもが、変わってしまった。

「っと、悪い悪い。今はシュレンに関しての話をしているんだったな」

「……はやてちゃんにも聞いたんですよね？　レルデ少将は」

「ああ。それも含めて一般的に調べれば手に入る情報に入る」

そして、なのはの場合は自分が嫌な風に思われるのが”怖い”だ。
実際にもレルデの周りにもそのような人がいた。
とはいえ、それは過去の話だ。今はもう、そのような者はいない。

「レルデ少々の知っての通り、私は八年前に自らの失敗で死にかけました。
だけど、本当は死にかけた所を助けられた……いや、庇ってもらったから生き延びることができたんです」

「……もしかして、それがシュレンか？」

「はい。私にとってシュレン君は生命の恩人です」

「ふーん」

適当に相槌をうつレルデだが、頭ではあることを考えていた。
高町なのはが八年前に落とされた時に流れた情報。公式情報や、調べれば出てくる情報などでは確かになのはがアンノウンに落とされたという事実は出てくるが、シュレンも怪我をしたことはおろか、シュレンの存在すら無い。
まるでそこには元からいなかったように。
しかし、その件に関わっているなのはが言うのであれば間違っていないだろう。だから、恐らく情報を操作してシュレンの存在を消したと、レルデは考えた。

「ＯＫ．　高町とシュレンの出会いは分かった」

脳裏に思い浮かぶのは、古風的な口調を持つ銀髪の少女。彼女ならば、その程度の情報操作は可能だろう。

しかし、仮に可能だったとしても可笑しな話だ。

情報を操作したとしても、その事実が表……いや、裏にも流ないというのは不可解過ぎる。

もしかしたら、この一件には思わぬ裏があるのではないかと思い始める。だとしたら、自分が知っていることもなのはに話すべきだ。

「俺がシュレンに初めて会ったのは、お前が落とされた八年前と同じ時期に俺はシュレンに初めて出会った」

レルデにとっては忘れもしない変わった出会いだった。

シュレンとセレンの二人に初めてあったのは八年前のある日のこと。

今考えても、あの時は死んでいても不思議ではないと考えられ、恐怖もした。が、それよりも自分よりも圧倒的に強い魔導師に出会ったことに対する喜びの方が大きかった。

だから、先程なのはに言ったように魔導師を辞めようとは微塵も考えなかった。

「同じ時期に？　……それは凄い偶然ですね」

八年前にシュレンと出会った偶然。

本来であれば怪しむところかもしれないが、ティアナのこともある。ティアナとシュレンが出会ったのは八年前にシュレンが姿を消

した後に起きた出来事だ。
だから、同じ八年前でもそこまで怪しむ必要はないだろうというのが、なのはの考えだ。

「ああ、俺もそう思うぜ。凄い偶然だ」

「八年前から、シュレン君って沢山の人と出会っているんですね」

「まぁ、そうだな。俺もそう思うぜ」

その代わりと言ってはなんだが、その分シュレンは関係を深い者にしない。シュレンにとって仲の良い者は少なくても、知人だけは多いのである。
知人が多ければ色々と便利であるとシュレン自身も言っていた。確かに、その考えには同意できるが、だからと言ってシュレンの場合はやりすぎだと思える。

「そんじゃ、俺の話はここらで終わりだ。シュレンとの関係を教えてくれてありがとうな」

「いえ、私もシュレン君に関しての事を教えてもらいましたし……」

情報交換。やや難しい感じの表現だが、今の二人は情報を話合ったので間違ってはいないだろう。そして、レルデにとって聞きたいことも聞いたので、この題に関しての会話は終わる。
興味を失った訳ではない。寧ろ、その逆だ。

だが、ここはなのはを待っているだろうシュレンのところになのはを向かわせようと考えた。なのはもそれに同意し、部屋から出ていく。そして、部屋から出る少しのところでこう言う。

「デート楽しんで来いよ？」

最後の言葉になのはがどのようなリアクションをしたのかどうか分からないが、先程と同じく顔を紅潮させているだろう。

意地の悪い人だ、などと思われるかもしれないが人を弄ることが楽しいので仕方がない。それに、決して意地悪と思われるだけで嫌われることはない。

嫌らしいことに、ある程度の線はちゃんと考えているのだ。だからこそ、レルデの無茶苦茶ぶりに呆れることは有っても怒ることはあまりない。

そんな風に考えている内になのははレルデの視界から消え、部隊長室の中にはレルデ一人になった。

「……生命の恩人か」

沈黙が続くこの部屋でレルデは座っていた椅子に後ろ体重になり、なのはから聞いたことを繰り返す。

特に深い意味がある訳ではない。

ただ、先程の会話と今まで思ってきたことを合わせてみると、案外と面白く感じるものがある。

例えば、先程なのはが使った“偶然”という言葉。

何の因果関係もなく、予期しないことが起きることのことを偶然と言うが、レルデはその偶然でも二つの意味があると考えている。
いや、正確には一つは偶然ではない。

「……知ってるか、高町」

何か面白い物を見ているような表情で呟く。
とはいえ、もし考えている通りならばレルデにとってもあまり良い事ではないのだが、それでも何故か面白いと感じてしまう。

「――偶然っていうのは何かしらの悪意から生じることもあるんだぜ？」

人為的な悪意が偶然を装って、そのまま現れることがある。
必然という名の偶然。偶然という名の必然。前者は中々に見ない場合ではあるが、今まで生きてきた２１年の中で数回はある。
そして、今回はどちらの方であるかと考えると、中々面白く感じてしまうのだ。

それに加え、レルデは敢えてなのはに伝えなかったことがある。
情報の重要さで言えば、かなり重要な部類に入るだろう情報だ。
何故ならば、レルデとシュレンが出会った場所。それが。

「お前達二人が世話になったあの病院だって言ったらどうする？」

ということだ。しかも、その時にお見舞いに来ていたはやてと初めて出会った場所もあの病院なのだ。だからこそ、レルデは本当にこれは偶然か？　実は仕組まれていたことではないのかと疑い始めているのだ。

今は、自分の義理の妹となっているセレンと名乗っている彼女のことを。

全てを見通しているかのような彼女がどこまで関わっているのだろう。もしかしたら、本当に偶然が重なり合って今の関係が出来ているのかもしれないし、全てが仕組まれていることなのかもしれない。

レルデはどこまでがそうなのだろうかと期待してみようと考えた。

例え、自分にとってどれだけ悪い出来事だったとしても。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　８（後書き）

というわけサイドストーリーでした。
今回は全体的にシュレンに関する伏線の話でした。Ｐｒｏｌｏｇｕｅで〈〉を使ってシュレンの考えを表していたのもこういう意味があったりなかったり……
本当はもう少し後で〈〉のことはやる予定だったんですけど。
あ、もし〈〉の意味がわからないのならば、もう一度ｐｒｏｌｏｇｕｅを読んでいただけると助かります。

それとレルデとシュレンの関係も少しずつ明かしていくのですが、正直言うと、シュレンとレルデはそこまで深い関係ではないんですよね……
どっちかというとセレンですね。まぁ、じゃないと義理の兄にはなりませんし。

レルデと言えば、今回はやてと初めてあったのが病院と書きましたが、その時点では名前を名乗ったりはしていません。
ただ、はやても有名だったので覚えていただけです。

……今回に関してはこんな感じですね。質問とかあれば、感想やメッセージにどうぞ。
では
あ、次の更新は少し遅れます。

第二十七話　『特命隊　7』（前書き）

更新が遅れました。しかも前回に比べると少し短いです。しかも、少しはっちゃけてます

では、第二十七話『特命隊　7』始まります

第二十七話　『特命隊　7』

Ｓｉｄｅ――――

部隊長室でレルデとの会話を終え、なのはは部隊長室から出た。
辺りを見渡すと、背中を壁に預け退屈そうに待っていたシュレンの姿があった。なのはが近づこうとするとシュレンもなのはの存在に気づいたのか、背中を壁から離し瞼を開く。
なのはが声をかけるよりも先に、シュレンの方から疑問を問いかけられる。

「一体、レルデと何を話していた？」

「うーん、特に気になるような話はしてないかな？　まぁ、でもシュレン君との出会いをレルデ少将に教えたよ」

「僕との出会い……？　それは八年前、君がガジェットドローンに落とされた時のことか？」

「そうだよ。というより、それ以外にないでしょ？」

シュレンの反応になのはは少しだけがっかりした。
何故なら、自分との出会いを、あれだけ衝撃的な出来事にも関わ

らずシュレンはその出来事を思い出すのに少しだけ時間かけたからだ。しかし、それが我侭であることは十分に分かっている。
自分自身もいきなり過去に関わる質問をされて即答で答える自信がないからだ。しかし、それでも答えて欲しかった。

「ああ、まったくだ。
……む、つまりレルデにそのことを話したということは八年前に僕がレルデと出会っていることも知ったということか」

「知ったというより、教えてもらったんだけどね」

「教えてもらって知ったのだろう。……まぁ、どちらでも良いか」

「どっちでもいいんだ」

「比べることに対して意味がないからな。それよりも、特命隊での僕の部屋に用事があるから待っていてくれないか？」

「う～ん、私も付いてくよ」

その言葉を聞いて、シュレンは歩き出す。恐らくシュレンの部屋に向かっているのだろうが、一言言ってから歩きだして欲しかった。というより、いつもなら一言言ってから歩きだしていたので、違和感を感じたという方が正しい。
と、そのように思っていたが、シュレンが無言のまま歩きだした理由がすぐに分かることになる。

「一応、ここが僕の部屋だ」

シュレンがそう指す部屋は部隊長室から曲がり角を一回曲がり、そのすぐ手前にある。物凄く近かった。

一言言わなかったのも、言う必要がないほどに近いからと考えれば納得できる。

「入るか？　それとも待っているか？」

突然、シュレンに提案される。

なのはとしては部屋の所まで付いてくだけでも充分だったのだが、そう提案されたことに少し困った。が、目の前にあるのは少し気になっている人の部屋。

興味は大いにある。

「え？　……は、入ろうかな？」

とはいえ、ある意味初めて異性の部屋に二人っきりに入ることになるということは中々に緊張するもの。できる限りそれを悟られないようにしながら、なのははシュレンの自室へと足を踏み込む。

「……暗いね」

……そして、部屋に入った第一印象がこれである。

「この部屋に入った者は皆そう言うが、そんなに暗いのか？　僕の部屋は」

シュレンはそう言うが、とにかく何もかもが黒く感じられた。壁などは白色なのだが、カーテンで日の光が部屋に入ってこらず部屋全体が暗く感じられた。しかし、シュレンの部屋は暗いものであると薄々感じていたので、そこまでの驚きは無い。

部屋の奥に進み、日の光を邪魔をしていた黒色のカーテンを一気に開ける。眩しい光が入り、部屋の全体の様子がくっきりと見えるようになった。

そしてなのはの視界に入ってきたのは綺麗に整理されている部屋ではなく、ゴミ屋敷のように散らかっている部屋だった。一瞬、自分は幻覚を見ているのではないかと思った。シュレンが部屋を散らかし、それを放置するなどとは思っていないからだ。

「……散らかってるね」

「この部屋に入った者は皆そう言うが、……そんなに散らかってるな、僕の部屋が」

「シュレン君って、もしかして整理整頓ができない？」

思わぬ事である。まさか、人にだらしないと思われない筈のシュレンがこんな形でなのはの中のイメージが崩れるとは、予想外にも

程がある。
どんな物が散らかっているのだろうと思い、辺りを軽く見渡してみる。床に落ちているのは小難しい本や特命隊所属の時に着ていた物で思われる制服、バラバラになった書類に女物の下着などなど沢山の物が床に落ちていた。
……女物の下着？
「え、えっと、これはー」
床に落ちている下着が男物の物ならば、まだ納得できた。まぁ、その場合は顔を赤くするだろう。しかし、それでも男物の下着ならば納得できた。なのに、今なのはの視界に写っている物は所謂ブラジャーという物。
どう考えても男物ではない。女物の下着である。
何故、男である筈のシュレンの部屋にブラジャーなんて物が落ちているのか、なのははすぐに結論を出した。
「ま、まさかシュレン君、童顔だからって女装の道に走るなんて……！」
「いやいや、何を勘違いしてる？　僕がそんな道に――……いや、だからそんな目で見るな」
「……で、でも！　シュレン君にそういう趣味があっても私は受け入れるよっ！？」
「混乱するな。物凄い事を口走っているぞ。というより、僕にそん

な趣味はない」

「べ、別に女装姿のシュレン君を見ても、私は素直に可愛いななんて思うよ。ぶっちゃけ、たまに見るシュレン君の横顔って可愛いって思っちゃうこともあるもん！」

「……人の話を聞け」

呆れ顔のままシュレンはなのはの額にデコピンをする。しかも、かなり強めで。

余程目の前にブラジャーがあるという事実が衝撃的だったのだろうか、なのははそのデコピンをクイーンヒットで受けた。

「痛っ！？」

「……僕にはなのはが考えているような趣味は持っていないし、女装を自分の意識でやろうとは思わない」

「じゃあ何でブラジャーなんて物がシュレン君の部屋にあるのっ！」

デコピンの痛みに涙目になりながらもそう訴える。我ながら何をやっているのだろうと思いながら、真実を明らかにしようとする。普段のなのはを知っているフェイトやはやてなどが見たら驚くべき光景だろう。

とはいえ、なのはの言い分も最もなものである。

「その下着はセルスのものだ。どういう訳か、僕とセルスはこの部屋を共用して使っていた。つまり、この部屋がゴミ屋敷のように散らかってるのもセルスのせいだ」

「セルスさんの？」

「そうだ。……まったく、僕が機動六課に行く前にちゃんと整理したんだがな」

シュレンが呆れながら文句を言うが、なのははそれを聞いていなかった。

何故ならば、今手に持っている下着は自分のサイズと比べて明らかに大きい為、なのははシュレンの説明を聞いていられない程にショックを受けていたのだ。

一応、なのはは平均以上はある。しかし、フェイトやシグナムと比べると些か小さい。しかも、このブラジャーのサイズから考えると彼女がもの凄く着痩せする人であることを理解できた。

「何を人の下着を見てがっかりしているのだ。一種の不審者に見えるぞ」

「う、うるさい……！」

「……ああ、そう言えば、胸の大きな人は魅力的に見えるという考えがあると聞いたが、もしかしてそれに関係しているのか？」

図星つかれ、ぎょっとするなのは。

シュレンは異性に対する知識などは対して知らないくせに、こういう人間の心理というと大袈裟ではあるが、そのような知識だけは持っている。
それが腹立たしく思った。

「安心しろ。僕は別に胸の大きさで人を判断はしない。というより、例え小さくても魅力的に見えるから大丈夫だ」

が、その一言を言われただけで何となく苛立ちが消えたように感じた。現金な奴である。
しかし、よくよく考えてみてみるとシュレンとセルスが部屋を共用で使っていることが可笑しいということに気づく。
セルスの下着があることですっかりそのことを忘れていた。
もしかしてシュレンはセルスの下着姿を見たことがあるのではないだろうかと、なのはは思い始める。

「別にあるが……どうかしたのか？」

「……へぇ、見たんだ。そうなんだ」

その事実に軽い絶望感を抱く。
先程、シュレンはああ言ってくれたが、どうしてもなのはにとって大きい人は魅力に見えるという迷信を信じているので、仮に自分の下着姿を見せてもセルスの下着姿には負ける思えたからだ。
……まぁ、彼女は彼女で、シュレンに下着姿を見せても何のリアクションもないということに悩んでいるのだが、それはなのはは知

らないことである。

「何をそんなにしょげているのかは知らないが、ここでの用事は終わったぞ」

「え？　もう？」

「元々、この部屋の散らかり具合を確認しに来ただけだ。本当はここに来なくても良かったのだが、折角だから寄ったという訳だ」

シュレンとしてはこの部屋が散らかりきっているというのは予想できていたので、わざわざ確認する必要もないと思っていたのだが、わずかな可能性を信じて部屋に来てみた。

最も、その可能性はあっけなく裏切られたが。

「ち、ちょっと待って。じゃあ、もしかして整理整頓ができないのってセルスさん？」

「そうだ。まったく、家事のスキルを除いたら何もかもが優秀なんだが……」

「意外だね。セルスさんって何もかもができる人だと思ってたけど」

「魔導師としてはレルデの義理の妹とだけあって、僕よりもかなり優秀なんだが私生活がダメダメだ」

特命隊ではセルスの私生活がダメダメであるということは常識として捉えられているので、セルスが仕事以外のことで手伝おうとすると隊員達はそれを頑なに拒否する。最初の頃は失敗は仕方がないと思われていたのだが次第にその考えもなくなり、セルスは家事関係のことは手伝うな、という決まりが出来た。

そして、意外なことにレルデ自身は家事スキルが結構高い。シュレン程とは言わないが、それでもセルスと比べるのが失礼と言えるほどに家事スキルが高い。

そのことに彼女が傷ついているのは言わなくても良いだろう。

一方のなのははセルスの弱点のような物を知って意外に思いつつ、内心で少し喜んだ。彼女でもできないことがあるのか、と。

「僕の用事はこれで終わりだ。そろそろ行くとしようか」

シュレンの言葉で思考を止める。というより、別のことを考えなければならなかった。

何故ならば、これからシュレンと恐らく言葉だけとは言え、“デート”に行くのだ。彼女に対する考え以上に衝撃的なことである。

シュレンがデートをどのような物に思っているか分からないがデートになのはと行くということは、少なくてもなのはのことは好意的に見ているということ。

それを考えるだけでも、何故か緊張してしまうものだ。

……いや、何故かというのは違うか。本当は自分でもそうではないかと疑っている。だが、それを敢えて認めない。

少なくても、確信に至るまでは。

第二十七話　『特命隊　7』（後書き）

と、言うわけで二十七話でした。
正直、今回は前書き通りはっちゃけました。それと、読者の皆さんは今回の話はいらないだろうと思うかもしれませんが、セレンに家事スキルがないということが書きたかったので許してください。はっちゃけた部分に関しては何も言いません。少し、後悔してますから。

それと、更新が遅い理由は最近、少しだけですけどオリジナルを凄く適当ですが書いているので遅れてます。また、その為に最近、書き方が少し変わってます。
ま、投稿するとしても当分先のことなので気にしなくてもいいかもしれませんが。

次話からデート編なんですけど、結構短いと思います。
どっちかというとナンバーズ登場してからの方が長くなりそうです。

この小説に対する意見などありましたら感想の方にお願いしますでは

第二八話　『私服』（前書き）

何か、中々文章が進まない。
……何て面倒な展開にしてしまったのだろうか、自分は。
第二八話『私服』始まります。

第二八話　『私服』

Ｓｉｄｅ――――

シュレンとなのはは特命隊を後にして、一旦機動六課へと戻る。
シュレンは特命隊から私服を持ってきたのでこれからどこに出かけようとも問題ないのだが、なのはは仕事として特命隊へ行っていたので私服を持ってきていない。
その為、一度機動六課に戻ることになり、ついでにレルデを機動六課に案内することになった。

「にしてもよ、シュレンの私服は地味だな」

「お前が言うな。この服を持たせたのはお前だろうが」

レルデはシュレンの着ている服の感想を地味と指すが、それをシュレンは気に入らず最近ではパターン化してきている文句を言う。
なのははそんな二人のやり取りに対して苦笑いを浮かべながら、車の運転に集中する。事故を起こしてしまったら元も子もない。
……しかし、何故だろうか。例え事故が起きてしまっても、余程の事故でない限り全員が生き残りそうなのは。

「いやまぁ、そーなんだけどな。

さすがに“バリアジャケットと同じデザイン”の服だとこれから戦闘があるのかって思っちまう訳ですよ」

なのはは最初にシュレンの私服を見た時、何処かで見たことがあると感じた。

まぁ、バリアジャケットと同じデザインということは訓練所で見ている筈なので、見たことがあるという思いは、あながち間違いではない。

そしてレルデの言い分通り、なのはは私服を着たシュレンの姿を見て戦闘があるというのは些か大袈裟だが、何かあるのだろうか程度には思った。

「ホルスのバリアジャケットはこの服を模写したものだから、似るのは当たり前だ」

「……少しは変えろよ」

「わざわざ考えるのが面倒だった。というより、管理局の制服にしなかっただけまだ良いと思え」

「それはそうだ。そんなことされたら、面倒なことになる」

何が面倒なことになるのかはイマイチ理解できなかったが、シュレンもそれに頷いているので少なくてもレルデにとって面倒な事が起きるのだろうか、と軽い気持ちでなのはは考えた。

最も、それが部隊の隊長としての立場での問題であることは深く考えなくても分かることだ。

程なくして、車は機動六課前に着く。

「なのはは私服に着替えてくると良い。僕は適当にレルデを八神部隊長のところまで連れていくから」

「分かった。それじゃあ、また後で」

軽いやり取りをして、なのははシュレンとレルデと別れる。

どのぐらいの時間でシュレンがレルデをはやてのところへと連れていくのか分からないが、そこまで時間は掛からないだろうと判断して急ぐことにした。

その為、自室に向かっていたなのはは少し急ぎ足になる。

（どんな服を着ていこうかな……？）

頭の中でどんな私服を着るか考えていくのだが、残念ながらなのはの中で良いイメージというのが思い浮かばない。頭を精一杯に使いながらも考えるのだが、イマイチ良い組み合わせというのが出ない。

結局、どんな服を着ていくか考え終わるまで自室に着いてしまった。

「……どうしよ？」

なのはの部屋は一人部屋だ。
本当なら二人部屋でフェイトと一緒に使う予定だったのだが、なのはの願望でなのはは一人部屋ということになった。
臆病な自分を見せてしまうと思ったからだ。
しかし、今だけは一人部屋になったことに後悔した。何故なら、こういう時に着ていく服がどんなものが良いのか聞くことが出来る為である。
それに加え、この自室には数多くの私服はない。まさかこんな事態になるとは思わなかったので、私服など対して準備してなかったのだ。だから、最悪フェイトの私服を借りれば何とかなるかもしれなかったのだ。
しかし、ここにフェイトはいない。はやてもいない。
今のなのはに出来ることと言えば、自分自身の考えで出来る限り可愛い組み合わせを――……？

「って、そう言えばシュレン君、凛々しい人の方が良いって言ってたっけ？」

確か、なのはが特命隊へ向かう前シュレンはそう言っていた筈だ。となると、もしかして可愛い組み合わせはシュレンにとってマイナスの印象が付いてしまうのではないだろうか。
そこまで考えると予定変更としたいところだが、悲しいことに現在なのはが持っている私服でどんな組み合わせをしても、凛々しいと言えるモノにはならない。
……結局、なのはにとって可愛いと思える組み合わせの私服にすることにした。

魔力光と同じ桜色をベースとしたファッション。
心なしかスカートは短く感じ、鏡で自分の姿を見てみるといつもより若干露出が多いような気がする。

「……よし！」

自分で完璧に納得できるようなものではなかったが、急いで決めた割には中々良い出来だろうと考え、シュレンが待っているであろう場所へと向かう。
向かっている途中で、同じ機動六課の隊員達からの視線が少し気になった。
よく考えてみると確かに、訳も分からずなのはが私服に着替えているというのは似合っているか似合っていないかに関わらず、興味を引くことだろう。
なのはは自分の姿を考えて少し恥ずかしく思えたので、逃げるように少し足を速める。

隊舎の入口付近に向かってみると、やはりシュレンが待っていた。
申し訳ないと思いながら出来るだけ平然と声をかける。

「お待たせ」

「……ん、来たか。もう少し待つかと思ったが、そうでもなかったな」

「ちょっと急いだからね」

「……まぁ、僕も丁度会話が終わったところだったから、もしかしたら僕が待たせたかもしれなかったが」

会話？　……ただ、レルデをはやての所へ連れていくだけではないのかと思ったが、会話など連れていく時にも出来るし、対して変わったことじゃないと結論付ける。

しかし、どうやら会話をしたのはレルデではないらしい。

「少し、ヴァイスと会話をしていた」

「ヴァイス君と？　……それはティアナの件で？」

なのははヴァイスと会話をしたと聞いて、少し心配した。

今朝、シュレンと話す前にシュレンとヴァイスが口喧嘩をしたということを聞いた。ヴァイスも殴りはしていないが少し手を出したらしく、現場を見てた隊員からはこれ以上なく居心地が悪かったらしい。

そんな二人が会話をするのだ。心配もする。

しかし、なのはの心配に気づいてかシュレンはいつもの淡々とした口調で言う。

「君がどこまで知ってるか知らないが、別に口喧嘩をしていた訳ではない。寧ろ、和解したところだ」

「……仲直りしたの？」

「仲直りとは少し違うような気もするが、そんなところだ」

それを聞いて安心した。

八年前、シュレンと口喧嘩のようなものをしたことがあるなのは深く事情を知らない者よりも心配していた。

シュレンの言葉には容赦がない。気の弱い者ならメッタ刺しにされ、気がまいる。

その為、それに便乗して関係がこれ以上なく悪くなってしまったら大変なことになると考えていたのだ。

「それより、こんなことを話している場合ではないだろう。そろそろ行くとしよう」

「うん、そだね」

時間は有限と考えてこそのシュレンの言葉だったが、シュレンの“こんなこと”と指す言い方が少し気になった。とはいえ、シュレンがそういう風に言うのは前から知っているので、わざわざシュレンに対して告げることもしない。

それに、会話をするにも移動しながらすればいい。

「ところで、デートをすると言うのは僕としても大いに良いのだが、具体的に何をすれば良いのだろうか」

「それは考えてなかったんだ。まぁ、デートって言っても色んなのがあるしね」

「そうなのか？　僕は仲の良い男女が共に何処かへ外出するものがデートだと思っているのだが……それは違うのか？」

「いやいや、その場所に行くのにも色んな場所があるっていうこと。例えば、ショッピングしたり、遊んだりみたいな？」

「成程。それでは、なのはは何をしたい？　僕はなのはの意見に合わせよう」

部隊長室で言っていた上手くエスコートをするというのを忘れていないのか、シュレンは今日一日なのはの意見に従うつもりでいる。とはいえ、デートに何をすれば良いのか分からないので、なのはの意見に従おうと思ったのだ。

この時点でシュレン自身、自分は上手くエスコート出来ていないと自覚している。しかし、それでもできる限りは頑張ろうと考えている。

「わ、私に任せるの？　……う～ん、どうしよっか？」

一方、シュレン行動に困るのはなのはだ。何せ、デートに対して緊張意識を持っているというのに、その行き先を任されるのだ。

しかも、なのはも初めてのデート。

ユーノ・スクライアやクロノ・ハラオウンなどと買い物などに出かけたことは何度かあるが、デートというのは一度もない。だからこそ困る。

「決められないなら、適当に歩きながら二人で考えよう。少し時間が経てば決まるだろう」

なのはの困った様子を見て、シュレンは少し後悔する。自分がデートで何をするのか決められないから彼女は困っているのだ、と。

だからこそのこの妥協案だ。こうすれば、シュレン自身も何処に行くか決めることが出来るだろうし、仮に出来なかったとしてもなのはも少しは考えてくれる。

それに加え、こうして歩くだけでも立派なデートになるのではないだろうかと思ったのだ。

「私、少しお腹が空いちゃった……なんちゃって」

対して歩かない内になのはは言った。が、すぐさま自分の意見に反対するようにそう付け足す。なのは自身が腹が空いているのは事実なのだが、どう見てもシュレンの様子はそう見えない。

もしかしたら腹が空いていてそれを隠しているのかもしれないが、いつもシュレンは昼食をかなり遅く食べているので腹が空いていないと思える。

いきなりしくじってしまったとなのはは思った。

「……ふむ、確かにそろそろ昼食の時間か。特命隊での堅苦しい話にも疲れただろうし、丁度良いな」

「え？　いいの？」

しかし、思いの外シュレンはそれに同意した。
先程言っていたなのはの意見に合わせるという考えからも同意したのだが、シュレン自身も腹が空いているのも理由の一つ。確かに、シュレンは昼食を食べる時間は遅いが、別にそれは腹が空いていないという訳ではない。
ただ少しばかり我慢しているだけだ。仕事をキリの良いところまで進めるまで。

「別に君が提案したことだろう。僕はそれを否定する理由がないし、僕も少しばかり空腹だ」

「……本当はお腹減ってないんじゃないの？」

「ここで嘘を言っても意味がないだろう。僕は僕にとって意味のある嘘は何度も言っているが、意味の無い嘘は言う必要がないと思って言っていない」

なのははシュレンが空腹を我慢しているということは知らないので、疑って再度尋ねるがシュレンに軽くあしらわれる。少々しつこいと思われるかもしれない行動ではあるが、互いに互いの事を思っていることは分かっているので、シュレン自身からは何も言わないことにした。

「とはいえ、今からそこまで遠い所で食べる訳にも行かないだろうから、近い場所で売店のような場所があれば良いのだが」

「あ、それなら新しく出来た場所知ってるよ」

「……恐らく、公園に新しく出来たクレープ店だろう？　セルスも同じ雑誌を見てたから知ってるぞ」

「なら、そこに行こうよ。前から行きたかったんだ」

「昼食で甘い物を食べるとは少し気が引けるが……まぁ、良いか」

確かに、本来であればクレープのような食べ物は昼食として食べるものではなく、間食として食べるのが合っているだろう。それに加え、公園に出来たということは休憩しながら食べることもできるということで、尚更昼食として食べるような場所ではない。しかし、シュレンは今がっつり食べたいという食欲はないので、軽い食欲を満たすのなら十分だろうと考えた。

その為になのはの意見に反対意見は言わず、従うことにした。

（……甘い物は嫌いなんだがな）

という、自分の好みを隠して。

シュレンは根からの辛党だ。甘い物は天敵と言っても良いだろう。しかし、なのはが甘い物を食べたいと言っている。

我慢するのに十分な理由だ。

幸いなことにシュレンはポーカーフェイスが得意である。例え、甘い物を食べて不味かったとしても表情に出さない自信がある。

いつもなら文句を言うだろうが、今日一日は我慢する。

何といっても、デートというものをずっと昔から楽しみにしていたのだから。

第二八話　『私服』（後書き）

と、言うわけで第二十八話でした。
今回は前回と比べると必要な話だったと思います。とはいえ、今回は繋ぎのような文章で次からはデートということになります。
どのぐらいの長さになるか分かりませんが、案外短いかと。

それと、少し原作との変更点をいくつか。
・はやてがカリムと会いに行っていない。→レルデを迎える為
・なのはが一人部屋→この作品のなのはの性格から考えて
の二つかな？　左が変更点で右が変更の理由です。違和感があるなら質問どうぞ。

それと今回、本当は三人称をシュレンに合わせてヴァイスとの会話を入れようとしたのですが、どうも違和感を感じたのでカットして、なのはが私服を選ぶシーンに変えました。
（この為、少し更新が遅れました）

自分的にはヴァイスとの会話でもよかったのですが、デート前という雰囲気ではなくなってしまうかなと思いましたので。
とはいえ、いつかは入れる予定です。

次話からデート編。ギャグとか前回のようにはっちゃける感じの文だと思います。

この小説に対する意見などありましたら、感想の方にお願いします

では

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5019u/

魔法少女リリカルなのはStrikers〜自称一般局員の少年〜

2011年12月24日08時50分発行